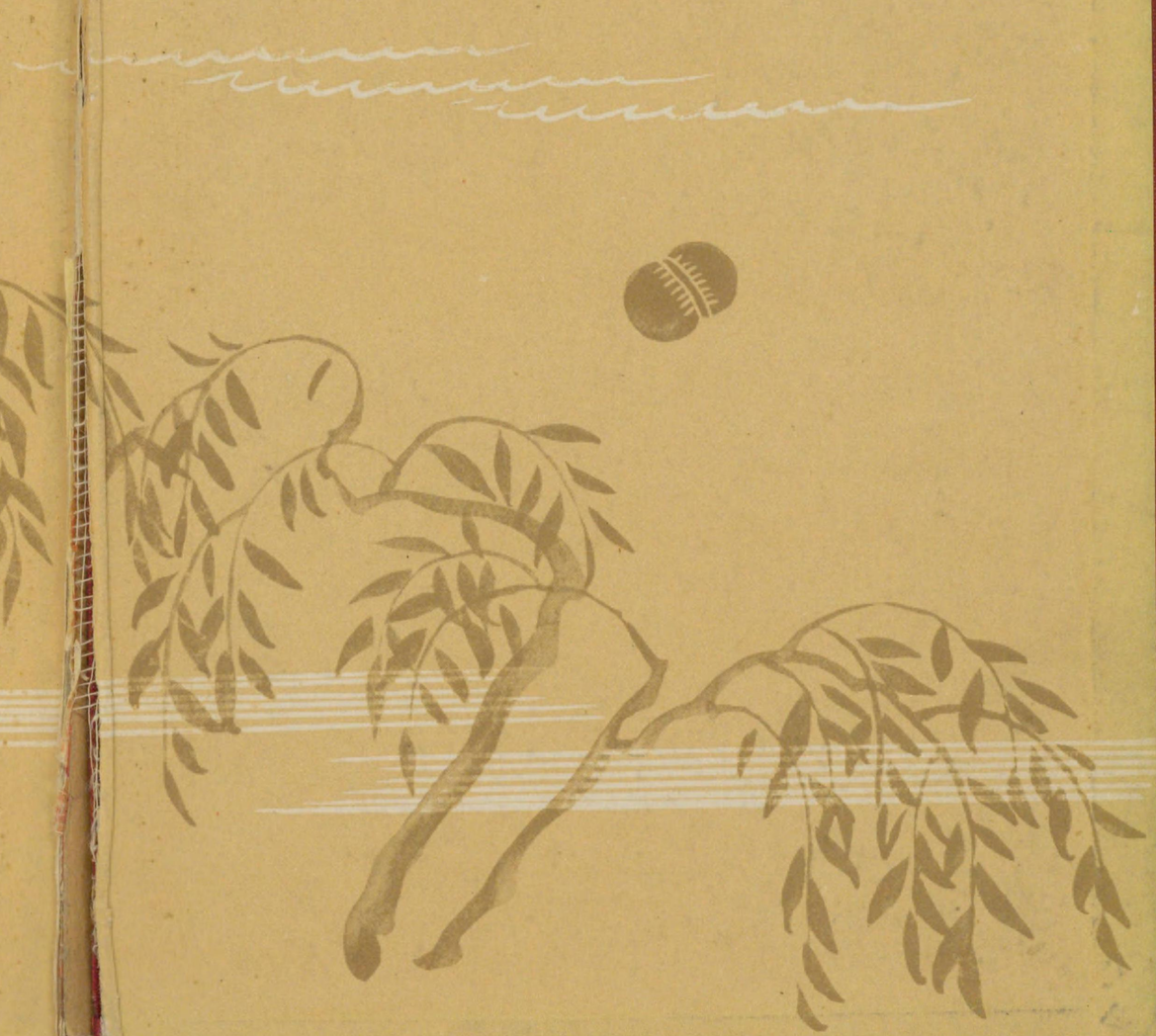
670-25
12005015750 23

Q..E



史蹟大系

蘇田葦城著

昭和十七年

平凡社版

帝國圖書館藏

670-25

日本史蹟大系　第七卷　目次

足利邸址……（足利尊氏住居の地）…二九一五
足利屋敷地圖
足利尊氏の像
足利尊氏の跡
箱根峠……（新田義貞敗戰の地）…二九一九
手越河原
伊豆國府
建長寺
箱根及足柄地圖
足柄峠
箱根峠
箱根峠の山中
竹の下
新田義貞の退路圖
大渡……（新田義貞敗戰の地）…二九四一
伏見城址の展望（其一）
伏見城址の展望（其二）
狐河の渡
淀大明神
東坂本
日吉神社
三井寺……（細川定禪敗戰の地）…二九五三

三井寺全景
表坂
觀月臺
村雲橋
金堂
東山……（新田義貞陣營の地）…二九六〇
東山
知恩院
東大谷
清水寺
神樂岡
四條大橋
豐島河原……（足利直義敗戰の地）…二九七二
豐島河原地圖
會下山
花山院圖
內山館……（小貳妙慧戰死の地）…二九七九
寶滿山
內山館址地圖
宗像神社
多々羅濱……（足利菊池會戰の地）…二九八三
香椎宮
多々良濱地圖
多々良川
多々良濱
白旗城址……（赤松圓心籠城の處）…二九九〇
書寫山

斑鳩寺
白旗山
舟坂山……（脇坂義助攻陷の地）…二九九四
船坂峠及熊山地圖
三石城址
鞆津……（足利尊氏軍議の地）…二九九九
淨土寺
鞆港
福山城址……（大江田氏經敗戰の地）…三〇〇二
福山城址地圖
六騎武者塚……（和田範長自殺の地）…三〇〇五
船坂峠阿彌陀間地圖
櫻井驛……（楠木父子訣別の處）…三〇〇七
櫻井驛址（其一）
櫻井驛址（其二）
櫻井驛址（其三）
湊川……（楠木正成戰死の地）…三〇一二
和田岬
兵庫の古圖
湊川の古戰場（其一）
湊川の古戰場（其二）
湊川の古戰場（其三）
楠公終焉の地
湊川神社（其一）
湊川神社（其二）
楠公の墓所
湊川の碑（其一）

湊川の碑（其二）
楠公の筆蹟
求女塚……（小山田高家殉節の地）…三〇二七
生田神社（其一）
生田神社（其二）
求女塚
觀心寺……（楠木正成の首及埋葬地）…三〇三二
中院
楠公の首塚
南妣庵
甘南備神社
楠公夫妻の木像
比叡山……（足利勢大敗の地）…三〇三七
比叡山の展望（其一）
比叡山の展望（其二）
比叡山延暦寺地圖
東寺……（足利尊氏據守の地）…三〇四七
七條河原
眞如堂
東寺の金堂
東寺の五重塔
名名長年の像
花山院……（後醍醐天皇幽閉の地）…三〇五六
花山院地圖
金崎城址……（尊良親王御生害の地）…三〇六一
金崎

金崎城址
杣山城址……（瓜生保勤王の地）…三〇六八
杣山城址（其一）
杣山城址（其二）
雄彦山
瓜生保の墓
金崎宮
金崎宮神殿
燈明寺畷……（新田義貞戰死の地）…三〇七九
燈明寺畷
藤島神社
野上神社
新田左中將の墓
新田左中將の首塚
實城寺址……（南朝五十餘年の皇居）…三〇九一
稻荷神社
吉野行宮址
實城寺額面
利根川……（北畠顯家戰捷の地）…三〇九五
靈山
靈山神社
利根川渡渉地地圖
杉本觀音堂……（斯波家長自殺の地）…三一〇〇
杉本寺地圖
青野原……（北畠顯家戰勝の地）…三一〇三
青野原（其一）
青野原（其二）

黑地川……(高師泰布陣の地)…三一〇七
黑血川地圖
藤古川
石津原……(北畠顯家陣歿の地)…三一一〇
阿倍野
阿倍野神社
北畠顯定の墓
八幡山……(北畠顯信據守の地)…三一一三
石清水八幡宮
安濃津……(結城宗廣漂着の地)…三一一七
結城宗廣の軍中日記
結城神社
結城宗廣の墓
結城宗廣の供養塔
安養寺……(瓊子內親王奉葬の地)…三一二四
後醍醐天皇御肖像
安養寺
瓊子內親王御墓
塔尾陵……(後醍醐天皇奉葬の地)…三一二七
塔尾陵
後醍醐天皇御靈殿
吉水院……(後村上天皇卽位の地)…三一三〇
吉水院の門前
吉水院
小田城址……(北畠親房著書の地)…三一三二
北畠親房の像

北畠親房の筆蹟
北畠親房の墓
駒城址……(藤原實寬據守の地)…三一三七
大寶湖及三城址地圖
駒城址(其一)
駒城址(其二)
關城址……(關宗祐節に殉ずる處)…三一三九
關城址
關宗祐父子の墓
大寶城址……(下妻政泰戰死の處)…三一四二
大寶城址
守永親王別宴の地
下妻政泰戰死の地
伊豫國府址……(脇屋義助終焉の地)…三一四六
脇屋義助の墓(其一)
脇屋義助の墓(其二)
鞆城址……(金谷經氏奮戰の地)…三一五〇
鞆城址
對潮樓
世田城址……(大館氏明戰死の地)…三一五六
大館氏明の塔
鷹栖城址……(畑時能據守の地)…三一五八
鷹栖城址地圖
東洞院……(土岐賴遠狼藉の地)…三一六一
五條東洞院地圖
天龍寺

四條畷……(楠木正行戰死の地)…三一六五
藤井寺
譽田の森(其一)
譽田の森(其二)
道明寺磧
住吉
天王寺
天神橋
如意輪堂
四條畷
四條畷神社
楠木正行の墓
和田源秀の墓
寶筐院
楠木正行の首塚
賀名生行宮址……(後村上天皇蒙塵の地)…三一八六
勝手明神
賀名生行宮(其一)
賀名生行宮(其二)
松岡城址……(足利尊氏敗退の地)…三一九〇
書寫山大講堂
明王院
松岡城址(其一)
松岡城址(其二)
松岡城址(其三)
小松
薩埵峠…(足利尊氏兄弟激戰の地)…三二一四
陣場山
由比の濱

薩埵峠(其一)
薩埵峠(其二)
伊豆國府
親承坊……(南北兩朝講和の地)…三二二三
上賀茂神社(其一)
上賀茂神社(其二)
上賀茂の森
住吉神社(其一)
住吉神社(其二)
武藏野…(新田足利兩軍會戰の地)…三二三六
金井原(其一)
金井原(其二)
武藏國分寺
待乳山
入間川
關戸河原
小手指原
河村城址……(新田義興籠城の地)…三二五六
河村城址
星山城址
男山……(後村上天皇駐軍の地)…三二五九
八幡山附近地圖
淀の大橋
天王山の展望
唐招提寺(其一)
唐招提寺(其二)
土御門殿址…(後光嚴天皇卽位の御所)…三二六七
妙法院

日本史蹟大系

第七卷

垂井頓宮址……(後光嚴天皇蒙塵の地)…三二七〇
賀茂川の上流
南宮神社
武佐寺……(後光嚴天皇蒙塵の地)…三二七八
武佐寺所在地圖
甘南備山……(正名師氏敗戰の地)…三二八一
甘南備山地圖
敎王護國寺……(足利直冬據守の地)…三二八七
敎王護國寺
天野行宮……(後村上天皇行在の地)…三二九三
金剛寺
等持院……(足利尊氏埋葬の地)…三二九五
等持院
足利尊氏の墓
足利尊氏の石塔
矢口渡……(新田義興戰死の地)…三二九七
六郷川
矢口の渡
新田大明神
筑後川……(菊池武光大勝の處)…三三〇八
筑後川
筑後川の鐵橋

足利邸址

足利尊氏住居の地

相模國鎌倉郡鎌倉町大字淨明寺に、足利公方屋敷と稱する處あり、鎌倉五山の第五たる淨明寺の東南に方りて、金澤街道の北手に在り、分内、廣からずと雖も、義兼以來、世々の住宅にして、尊氏、直義も、此處に居り、義詮、基氏も、亦、此處に居る、寶德元年二月、成氏、此處に、館を造りて、公方と稱せしより、公方屋敷と稱するに至りしなり。

建武二年八月、尊氏の北條時行の兵を破りて、鎌倉に入りし時も、亦、此邸に入り、愈〻謀叛の色を現はすに至り、若宮大路の將軍屋敷趾に、邸第を營み、執事高師直以下、亦、邸宅を竝べしなり。

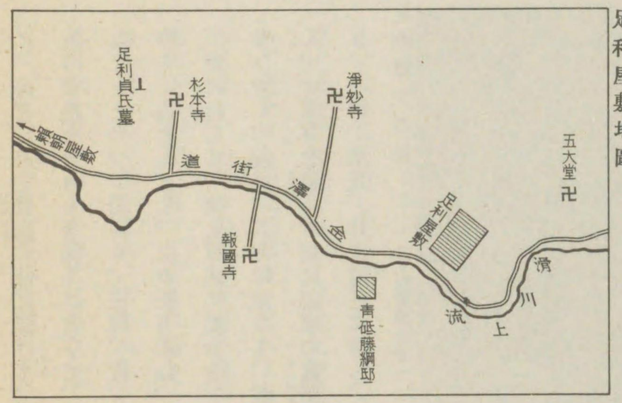
一

足利尊氏、既に北條時行を滅し、其儘、留まりて、鎌倉に在り、勢威、忽ち關東に振ふ。

事、京師に聞ゆ。

主上、乃ち中院頭中將具光を、關東に下して、尊氏を、從二位に敍し、長子義詮を、從五位下に敍して、其功を賞し給ひ、且、

足利屋敷地圖



『東國の逆徒、速に殄滅に歸すること、叡感、淺からず、將士の勳功は、京師に於て、之れを賞せん、宜しく速に歸洛すべし』

との勅旨を降し給へば、尊氏、即座に、

『勅諚の趣、畏り奉つる、早々、歸洛仕つり候はん』

と答へ奉つりて、勅使を還す、直義、徐

に尊氏に向ひ、

『功、高ければ、猜、多し、今や、君を忌むもの、朝廷に滿ち候ひぬ、何とて、再び虎口に投じ給ふことや候』

と說けば、尊氏、此れに從ひて、敢て上洛せず、

『東國、既に靜謐に歸す、勅約の上からは、何の仔細かあるべき』

自ら稱して、征夷將軍、關東管領と曰ひ、幕府を、若宮大路の故址に開き、執事高師直以下、其邸を連ぬ。

尋いで、將士を賞し、降附を納れ、新田氏の領邑、關東に在るものを奪うて、悉く諸將士に頒ち與ふ。

尊氏の叛形、今や、全く成る。

然れども、朝廷、未だ知し召されず。

二

尊氏、先づ新田義貞を除かんと欲し、是年十月、細川阿波守和氏を、京師に遣はして、義貞勁奏の狀を上つる、

『嚮に、東藩の武臣、逆威を振ひ、朝憲を蔑して、國家安からず、尊氏、不肖の身を以て、膺懲の師を作し、勝を轉瞬の間に決して、敵を帝都の外に攘ひ候ひぬ、然るに、義貞、事を窘窮の餘に擧げて、名を討賊の美に假り、臣の京畿を定むるを聞くに及びて、始めて、鎌倉を伐たんことを企つ、而かも、三戰、皆、克たず、百計、亦、將さに盡きんとす、臣の長男義詮、年甫めて三歲、兵を下野に起して、旗を東武に進むるや、東西響應し、將卒爭ひ附く、義貞、其力に藉りて、敵魁を僵し、其功を攘んで、重賞を貪る、誠に國家の蠹賊、朝廷の亂臣に候なり、今や、尊氏、外に遠征に勞し、義貞、內に讒構に力

足利尊氏の像（下野鑁阿寺藏）

む、是れ趙高、秦を專らにして、章邯、楚に降るの類に候はずや、仰ぎ願はくは、速かに、斧鉞の誅を加へて、禍亂の源を塞ぎ給はんことを』

疏入る、未だ省せられず。

義貞、早くも、此事を傳へ聞き、越後、上野、駿河、播磨の中に在る足利一族の領邑を沒して、其家人に與へ、又表を上つりて、尊氏の八罪を數ふ、

『曩日、東夷、跋扈し、聖駕、西狩あらせ給ふや、正成、南に起り、圓心、西に作り、賊を討じ、敵を拉ぐ、四方勤王の師、風を聞いて、竝び起る、是時に方り、尊氏、尙、東夷の命に遵うて、擧族、軍に從ふ、潛かに、官軍の形勢を觀て、私身の安全を冀ひ、勝敗を、兩端に窺ひて、去就を、一旦に決せず、僚軍、利を失ひ、主將、命を殞すに及びて、始めて、歸降の意を決し、鷸蚌の爭に乘じて、漁夫の利を收む、功、微にして、賞、優なるも、未だ心に慊らず、遂に匪望を懷き、不軌を企て、臣の忠義を忌みて、陷害を構ふるに至れり、抑〻臣の綸旨を奉じて、兵を上野に起せしは、五月八日にして、尊氏の六波羅を攻めたるは、其月七日なり、東西相距ること數百里、豈、一日にして、報を傳ふるを得んや、妄言、眞を亂る、其罪一なり、尊氏の長男義詮、纔に百騎を率ゐて、鎌倉に入りしは、六月三日なり、臣の百万を帥ゐて、元惡を僵せしは、五月二十二日なり、然るに、三歲の兒子、戰に臨み、功を建つると稱して、天聽を欺罔す、其罪二なり、尊氏の京師に入るや、自ら刑罰の權を握りて、濫に親王の卒伍を戮す、司に非ずして、法を行ふ、其罪三なり、天下、一に歸すと雖も、四夷、未だ服せず、乃ち武職を、親王に授けて、柳營を、東國に置かせ給ふ、然るに、尊氏、自ら僭して、其號を掠む、其罪四なり、尊氏、關東の管領と稱して、將士の賞罰を濫にし、寇を養ひ、民を害ふ、違勅悖法、之れより甚だしきはなし、其罪五なり、中興の大業、天運の循環に由ると雖も、兵部卿親王の智謀、與つて多きに居る、而して、尊氏、百方、讒を構へて、罪を誣ゆ、其罪六なり、親王の流竄、固と、其自改を冀ひ給ふの聖意に外ならず、然るに、尊氏、妄りに、私怨を以て、嚴に牢獄に拘へ奉つる、其罪七なり、

直義、鎌倉を退くの日、人を遣はして、親王を弑し奉つる、大逆無道、前古比なし、其罪八なり、凡、此八罪は、天地の容れざる所、神人の許さざる所、若し、措いて、問はせ給はずんば、綱紀、盡く解體せん、臍を噬むとも、及ぶべからず、陛下、乞ふ速かに聖斷を下し給へ』

足利尊氏の筆跡　（下野鑁阿寺藏）

主上、乃ち公卿を召し、二人の狀を示して、議せしめ給ふ、諸臣、皆、口を噤みて、言はず、參議清忠、進み出でて、

『今、兩表を按ずるに、義貞の擧げ候へる尊氏の八逆、其罪、一々、輕からず、就中、兵部卿親王を禁殺し奉つれろこと、今、始めて、上聞に達す、此一事、若し實ならば、尊氏兄弟の惡逆、遁るゝ所の候はず、但し、片言を以て、訟を斷ずべからず、姑く、實否を糺して後、罪科を定めさせ給ふべし』

と曰せば、諸卿、皆、此議を贊す。

既にして、護良親王の侍女南の方、鎌倉より、還り來りて、親王遭害の狀を愬ふ。

續いて、四國、九州より、尊氏兵を徵すの敎書數十通を獻ず。

尊氏の叛形、今や、愈々顯はる。

『彼れと曰ひ、此れと曰ひ、尊氏の叛逆、今は、疑ふべからず』

主上の逆鱗、淺からず、乃ち第一の皇子尊良親王を以て、東國の管領とし、義貞を、節度使として、尊氏を討ぜしめ給ふ。

兵亂、纔に治まりて、復た作る、天下の民、皆、眉を顰む。

箱根峠

新田義貞敗戰の地

箱根山は、相模國足柄下郡に屬し、伊豆、及び駿河との堺嶺たり、伊豆國三島驛より、東北の方塚原、市山、三谷、笹原、山中等を經て、箱根町に通ずる頂上まで、凡三里半ばかりの間を、箱根峠と云ふ、三島より一里餘、市山あたりまでを、野七里、山七里と稱し、其れより、上を岳七里と稱す、延曆十九年五月、富士山、噴火して、足柄路の梗塞せらるゝに及び、此通路を開き、二十二年五月に至りて、廢せらる、中世以後は、箱根、足柄兩路共に、行旅の往來あり、元和四年、德川氏、大路を開きて、海道と定むるに至り、足柄路は、間道となれり。

足柄山は、箱根山の北方に在りて、相模國足柄上郡に屬し、駿河との堺嶺なり、俗に、地藏峠と曰ふ、東海道線御殿場驛の東北一里半なる駿河國駿東郡足柄村字竹の下より、矢倉嶽の南麓を經て、地藏堂、矢倉澤、刈野、福泉等に通ずる道路を、足柄路と曰ふ、上古よりの通路なり。

建武二年十二月、新田義貞兄弟の鎌倉を攻めんとするや、義貞は、追手の箱根峠より進みて、足利直義と戰ひ、脇屋義助は、搦手の竹の下口より進みて、足利尊氏と戰ひ、軍敗れて、京師に還る。

一

建武二年十一月八日、左兵衛督新田義貞に、節刀を賜ひ、朝敵追討の宣旨を下させ給ふ、是れぞ、天慶の例に基づく。義貞、乃ち兵を帥ゐて、二條河原へ、打つて出で、執事舟田入道義昌を、尊氏の二條高倉の邸に遣はして、鬨を揚ぐること三度、流鏑を放つこと二矢、刀を拔きて、中門の柱を斫つて落す、是れぞ、嘉承の例に遵へるもの。

天慶三年、平將門の叛するや、參議藤原忠文に、節刀を授けて、追討せしめ給ふ、嘉承三年、源義親の出羽に於て叛するや、平正盛、命を奉じて、往きて討ず。

尊良親王、亦、五百餘騎を率ゐて、三條河原へ、打つて出で給ふ、サッと、錦旗を差し揚ぐれば、烈風、俄かに吹き起りて、日月の御紋、切れて、地に落つ、

『あな淺ましや、今度の御合戰、必定、捗々しからじ』

士卒、望み見て、心に忌む。

義貞、此日午の刻を以て、京師を發す、附き隨ふもの、一族には、弟脇屋治部大輔義助、其子式部大輔義治、堀口美濃守貞滿、里見伊賀守時成、里見大膳亮義氏、桃井遠江守尙義、細屋右馬助秀國、大井田式部大輔氏經、大島讃岐守義政、岩松民部大輔經家、金谷治部少輔經氏、世良田兵庫助滿義、一井兵部大輔貞政以下三十餘人、其勢七千餘騎。

諸將士には、千葉介貞胤、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重、大友左近將監貞戴、鹽谷判官高貞、熱田大宮司親昌以下三百餘人、總勢六萬七千餘騎。

越えて三日、彈正尹宮忠房親王、洞院左衞門督實世、持明院入道道應等、信濃より、鎌倉を伐たんと欲し、兵を率ゐて、東山道に向ひ、江田修理亮行義、大舘左京大夫氏明以下、此れに隨ふ、總勢五千餘騎。

二

官軍、既に京師を發す、飛報、早くも鎌倉に達す、直義、及び仁木左京大夫頼章、細川阿波守和氏、高武藏守師直、上杉兵庫入道憲房の面々、尊氏の前に出で、

『義貞、討手の大將として、東海、東山の二道より、馳せ下り候とぞ承はる、敵に難所を越えられては、防戰、難儀に候はん、急ぎ薩埵山、矢矧の邊に、馳せ向ひて、防がせ給ふべし』

一同、口を揃へて、說き勸む。

尊氏、默然として、暫し物をも言はず、稍ゝありて、漸やく口を開く、

『當家、源氏の統を承くるとは言へ、承久以來、北條の指圖に從ひて、家を辱しめ、名を汚がすこと、玆に百餘年、尊氏、今や、位二品に達し、征夷將軍の宿望をも遂ぐるもの、我が軍功に由るとこそ言へ、皆、天恩にあらずや、功を樹てゝ、功に誇るは、人の卑む所、恩を戴きて、恩を忘るゝは、我が爲さざる所ぞ、抑ゝ此度、君の逆鱗に觸れたるもの、一は、兵部卿親王を失ひ奉つりしと、一は、軍勢催促の敎書を、諸國に下したるにぞ由らん、去りながら、是れ、皆、尊氏の與かり知る所にあらず、具に、事の仔細を申し開かば、何どか、君の御憤りを霽らし參らせざらんや、方々は、身の進退を計り給へ、此尊氏に於ては、決して、君に對して、弓を彎き、矢を放つことあるべからず、萬一、尙も、罪科遁れがたきに於ては、假令、剃髮染衣の姿となるとも、毫も不忠を存せざる我が志の程を、子孫の爲めに殘さんずるぞ』

と言ひも終らず、突と、立ちて內に入り、其儘、ハタと、障子を閉ざす。

甲冑を着けて、來れる面々、皆、呆れて、顏を見合はす、

『扨ても、思ひの外なる始末かな』

今は、重ねて、說き勸めんやうもなく、打ち連れ立ちて、スゴ〳〵と、引き還る。

三

一日を經、二日を過ぐる程に、討手の諸軍、早、尾張近くに來れりとの報あり。

上杉兵庫入道憲房、細川阿波守和氏、佐々木判官高氏等、急ぎ直義の舘に集まりて、

『將軍の仰せも、然ることながら、今の如き公卿一統の御代にては、天下の武士は、皆、其奴僕の如くに追ひ使はれ候はん、誰かは、斯かる御政治を喜び候べき、今、若し御旗を揚げ給はゞ、諸國の武士は、皆、喜んで、馳せ參ずべく、實に當家御運の開かるべき時節にこそ候へ、長僉議して、敵に難所を越されなば、後悔するとも、及

手越河原
此れは駿河國安倍郡長田村の手越河原にして足利直義の新田義貞を邀擊せし處

ぶべからず、將軍は、鎌倉に殘し奉つりて、左馬頭殿御向ひ候へ、我等一同、御供仕つり候はん』

と說く、直義、聞いて、喜ぶこと限りなし、匆々、戰備を整へて、鎌倉を發せんとす。

吉良左兵衞尉貞義、其子參河守滿義、滿義の子參河三郎滿貞、石塔入道義房、其子中務大輔賴房、右馬頭義基、桃井修理亮直常、其弟直信、上杉兵庫入道憲房、其子民部大輔憲顯、細川阿波守和氏、其甥兵部少輔顯氏、顯氏の弟律師定禪、顯氏の子繁氏、畠山左京大夫國淸、足利尾張守高經、其弟式部大輔家兼、仁木左京大夫賴章、其弟越後守義長、今川修理亮範國、岩松禪師賴有、高武藏守師直、其弟越後守師泰、豐前守師茂、南部遠江守政行、大高伊豫守重成、竝に小山判官朝郷、佐々木判官高氏、其弟五郎左衞門尉貞滿、土岐彈正少弼賴遠、佐竹左馬頭義敦、武田甲斐守信貞、小笠原賴淸、狩野新介貞長等の諸將、先づ發す、總勢二十萬七千餘騎。

十一月二十日、鎌倉を發し、二十四日、參州矢矧に達す。敵兵、既に近づく、乃ち陣を此處に構へて、待つ。

四

十一月二十五日卯の刻、義貞、義助、進んで、矢矧川の西岸に到る。

馬を立てゝ、前岸を望み見れば、橋南橋北、三十餘町の間、陣營相接し、旌旗相聯なる、兵勢、我れに優ること數倍、義貞、乃ち長濱六郎左衞門顯寬を召して、

『此川、何處か渡り得べき、汝、委はしく見て參れ』

と命ず、顯寬は、麾下の勇士、只一騎、上流下流を、見巡り〳〵、頓て馳せ還りて、

『此川の容子を見候に、渡らるべき場所、三ヶ所あれども、向ひの岸、高くして、屛風の如く、且、敵兵、矢先を揃へて、待ち構へて候、此方より、渡り候ては、所詮、勝利を得んこと、覺束なし、少しく陣を控へて、敵を誘ひ、其河を渡るを待つて、相懸かりに懸かり給へ、勝を一戰に得んこと、疑ひも候はず』

と申せば、諸將、皆、之れを贊す

義貞、乃ち態と軍を控へて陣し、射手を、河中の洲に派し、遠矢を送りて、敵を誘ふ。

須臾にして、敵陣、俄かに動く、

『素破や、敵は懸からんずるぞ』

義貞、鞍に據りて、尙も、形勢を窺ふ。

忽ち見る、敵の右軍六千餘騎、馬を上流に乘り入れ〳〵て、渡り來るを、是れぞ、吉良左兵衞尉貞義、土岐彈正少弼賴遠、佐々木判官高氏等の一隊、

『イデ〳〵、上方勢を打ち破つて、鎌倉勢の武勇を示さん』

皆、先きを爭うて、進み來る。

待ち構へたる義貞の左軍堀口美濃守貞滿、桃井遠江守尙義、里見伊賀守時成、五千餘騎を率ゐて、猛然として、敵を擊つ、洲中の射手、亦、橫さまに、敵を射る。

奮鬪少時、貞義の兵、三百餘騎を討たれて、忽ち本陣に引き退く。

官軍、亦、死するもの、二百餘騎。

既にして、敵の左軍二万餘騎、サッと、下流より、渡り來る、之れを率ゐるものは、高武藏守師直兄弟。

斯くと見たる義貞の右軍大島讃岐守義政、岩松民部大輔經家等、七千餘騎を率ゐて、迎へ戰ふ。

世良田兵庫助滿義、大井田式部大輔氏經等、亦、數千騎を以て、橫さまに擊つ。

師直兄弟、勇を振うて、戰ふこと半時、終に五百餘騎を討たれて、退く。

伊豆の國府
伊豆國田方郡三島町は國府を置かれし處足利直義の陣營を置きし地なり此れは箱根の野七里より三島町を望めるもの

引き違へて、敵の中軍仁木左京大夫頼章、細川阿波守和氏、今川駿河守頼貞、石塔入道義房等、一萬餘騎を以て、中央より、押し渡る、

『一手切の働きにては、叶ふまじ、多數一度に、懸かつて、敵を擊ち破れや』

敵の二陣、三陣、四陣、五陣、皆、我れも〳〵と、押し寄せ來る。

義貞の麾下七千餘騎、精鋭、比なし、

『さらば、我れ、此敵に當らん』

義貞、自ら馬を陣頭に進む、

『敵、懸かるとも、妄りに懸かるべからず、敵、退くとも、妄りに追ふべからず、敵、寄せなば、切つて落せよ、中を破らんとせば、馬を寄せて、轡を竝べよ、十步、進むとも、半步も、退くべからず』

令し終りて、兵を進む。

敵軍、早、川を渡り來り、兵を開いて、包まんとすれば、義貞、此れに應じて拒ぎ、勢を集めて、衝かんとすれば、義貞、亦、此れに應じて戰ふ。

敵、寄すれば、擊つて碎き、敵、去れば、追うて破る。

敵兵、戰へども〳〵、力敵せず、人馬、俱に疲れて、暫らく呼吸を繼ぐ、義貞、

『敵は、早、疲れしぞ、懸かれ〳〵』

麾を揮うて、疾呼すれば、全軍、堂々として進む、宛から、山岳の動くが如し。

敵兵、今は、防ぎ戰はん氣勢もなく、皆、辟易して、走り退く。

義貞、三たび戰うて、三たび捷つ。

時に、日、既に暮る、將さに明日を以て、復た戰はんとす。

此夜、敵兵、急に陣を拂うて、鷲坂に退く。

義貞、乃ち軍を進めて、之れを追ふ。

會〻、宇都宮治部大輔公綱等の三千餘騎、後れて來る、

『矢矧川の合戰に、間に合はざりしこそ、遺憾なれ、此處は、某等に任せ給ふべし』

と請ひ、矢をも放たず、無二無三に、敵を衝く。

敵兵、復た守を棄てゝ、走り退く、

『所詮、中途にて、支へんこと、叶ふまじ』

濱名湖をも支へず、小夜中山、大井川の兩地をも支へず、走り〳〵て、駿河の安倍川に退く。

五

直義、會〻、二萬餘騎を率ゐて、馳せ來る、賊軍の形勢、復た振ふ、乃ち安倍川の西岸、手越河原に陣して、敵を待つ。

義貞、矢矧、鷲坂の降兵を收め、十二月五日、進んで、長田の里に達す。

馬を立てゝ、敵陣を望み見れば、兵勢、前日よりも多し、

『扨は、新手の加はりしと覺ゆるぞ、假令、何萬騎來れりとて、何程の事かあらん、我れ、嚴しく、攻め立つれば、逃足立ちたる敵兵、必ず、先づ逃げ走らん、唯、懸けて見候へ、治部殿』

義貞、屹と、義助を見返れば、

『承はり候』

義助、直に千葉介貞胤、宇都宮治部大輔公綱等の六千餘騎を率ゐて、旗を進め、ドツと、喚いて、敵陣に向ふ、賊軍、一擧して、會稽の恥を雪がんと欲し、衆を盡して、迎へ戰ふ。

建長寺
建長寺は相模國鎌倉郡小坂村大字山内の小袋坂に在り鎌倉五山の第一なり足利尊氏の髻を切つて身を寄せし處

兩軍、互ひに、火花を散らして斫り結ぶ、午より、酉に至るまで、交戰三時、合うては離れ、離れては又合ふこと、十有七度。

直義の軍、終に大に敗れ、佐々木五郎左衞門尉貞滿も死し、今川三郎入道も死し、佐々木判官高氏以下、出で降るもの多し。

時に、日、全く

昏る、義貞、命じて、戰を止め、篝火を焚きて、敵襲に備ふ。

夜、既に初更を過ぐ、新月、西に沒して、雲影、天に懸かる、四顧、暗澹として、星斗、光、自から寒し。

義貞、一隊の射手を選び、竹藪の陰に沿うて、敵軍に近づき、後陣を目蒐けて、矢を放つ。

敵兵、不意を擊たれて、驚き慌て、先きを爭うて、走り退く。

前軍、後陣の退くを見て、亦、駭く、

『扨は、敵の討手ぞ、急げや急げ』

益々馬を驅つて走る。

前軍、後陣に誘はれて、引けば、後陣は、前軍に追はれて、益々走る。

兵士、多くは、途中より、逃げ失せて、殘り留まるもの、幾何もあらず。

直義、今は、箱根の險をも支へ得ず、其儘、馳せて、鎌倉に還る。

義貞、軍を進めて、敵を追ふ。

落ち行く賊兵、甲を脫し、弦を卷きて、續々、出で降る、義貞、之れを併せ、進んで、伊豆の國府に入る。

將士、勢ひに乘じて、直ちに箱根を踰えんことを勸む、義貞、聽かず、

『敵兵の來り附くをも待ち、搦手の勢をも待ち合はさん』

空しく、軍を駐むること數日。

六

直義、馳せて、鎌倉に還り、急ぎ尊氏の館に抵れば、四門、堅く鎖されて、人もあらず、

『這は〳〵如何に』

直義、ハタと、呆れて、言葉なし、斯かる所へ、師直も來り、憲房も、亦、來る、

『誰かある、此處開けよ』

直義、焦らつて、門を敲けば、須藤左衞門、內より、門を開きて、迎へ入れ、

『將軍は、矢矧合戰の容子を聞し召すや否や、俄かに、建長寺へ入らせ給ひて候、御出家召されんと仰せ候ひしを、面々、樣々に申して、留め置き參らせぬ、御元結こそは、切らせ給ひたれ、未だ御法體には、ならせ候はず』

と語る、直義、聞いて、益々驚く、

『斯くては、軍勢共、愈々賴みを失はん、敵兵、今にも、寄せ來らば、只々、滅亡の外はあらじ』

互ひに、目と目を見合はせて、言葉もなし、

憲房の義子伊豆守重能、首を傾けて、思案に暮るゝこと暫し、

『將軍、假令、御出家あるとも、勅勘遁がれまじき事だに聞し召されなば、必定、思し召し直させ給ふべし、綸旨二三通を拵へて、將軍の御覽に入れ候はばや』

と說き勸む、直義、今は、策もなく、手段もなし、

『兎も角も、好からんやうに計ひ候へ』

百計、全く盡きて、重能に委かす、

重能、乃ち筆を執つて、綸旨十餘通を作る、文意、皆、同じけれども、唯、名宛のみ異なる、

『此上は、斯樣々々に、計らせ給へ』

重能、委細を語り示せば、直義、急ぎ馳せて、建長寺に到る。

師直、憲房以下の諸將も、亦、與に俱に赴く。

七

直義、ツカ〳〵と、尊氏の前に出づ、

『君、迚も遁れぬ御運に候ぞや、當家勅勘の事は、義貞の固く申し勸め奉つる所、此一門に於ては、假令、出家、降參すればとて、決して、恩免を被むるべき由の候はず、御覽候へ、これは、矢矧、手越に於て、討ち取りし敵の膚の守袋に入れ候へる綸旨に候なり、降參も、効なく、出家も、益なし、取るべきの道は、唯、合戰の一つのみにこそ候へ、御出家の儀は、フツと、思召し飜へさせられ、當家氏族の滅亡を救はせ給ふべし』

と說きつゝ、十餘通の綸旨を取つて、前に置く。

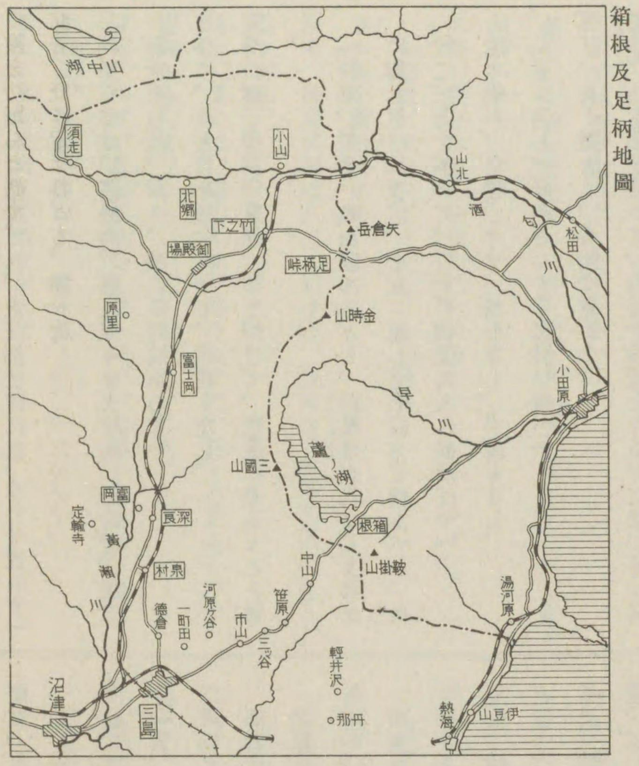
尊氏、何事をも答へず、綸旨を取つて、讀むこと二通、三通、

『足利尊氏、直義以下の一類、武威に誇り、朝憲を輕んず、罪科、最も重し、縱令、出家遁世すと雖も、刑伐を寬うすべからず、深く所在を索めて、誅戮を加ふべし、戰功あるに於ては、抽賞せらるべし、綸旨、此の如し』

直義、ヂツと、其顏を打ち守れば、見る〳〵、決心の色、其面に露はる、

『實に〳〵、一家の浮沈、此時に在り、今は、是非もなく、イデ〳〵、尊氏も、方々と倶に、弓矢を取つて、義

箱根及足柄地圖



貞と、雌雄を決し候はん、勵み候へ面々』

尊氏、忽ち道服を脫ぎ捨てゝ、錦の直垂を着す、叛逆の臍、今や、愈〻固まる。

諸將、皆、勇み立つ、

『イデ〳〵、我等も、將軍に倣ひ候はん』

匆〻、フツと、髮を切つて棄つ。

遁げんとせしものは、留まり、降らんとせしものは、止まる、武家の世を願ふもの、聞いて、續々、馳せ來り、一日の中に、其手に屬するもの、三十萬騎。

賊軍の形勢、忽ち大に振ふ。

八

尊氏、諸將を會めて、

『此勢にては、敵何十萬騎來るとも、何の恐るることやあらん、敵は、必定、二手に分れて、來るべし、左馬頭は、箱根口を防ぎ候へ、我れは、竹の下口を防ぎ候はん』

と告げ、全軍を分ちて、二となし、往きて、箱根

の險を防がんと欲す。

部署、既に定まれども、諸將士、尙、未だ發せず。

足利尾張守高經、其弟式部大輔家兼、土岐彈正少弼頼遠、赤松筑前寺貞範等、相議して、

『敵、若し箱根の難所を越えなば、一大事にこそ候へ、斯樣に、鎌倉に集まり居ては、何の甲斐も候はじ、人は兎まれ、角まれ、我等のみにても、先づ馳せ行き候はん、敵、若し味方に先んじて來らば、潔よく、一戰して、討死致し候べし』

と述べ、十一日、馳せに馳せて、竹の下に向ふ。

佐々木高氏、先きに、義貞に降り、敗兵の來り集まるを待つて、窃かに、鎌倉に遁がれ還る、是に至りて、高經等と與に、亦、馳せて、竹の下に向ふ。

行きて、竹の下に到れば、敵、未だ來らず。

山上より、前面を見渡せば、篝火、遠く連なりて、秋夜の星よりも繁し、

『扨は、敵は近づけるぞ、必定、明日は、寄せ來らん、敵は多く、味方は少なし、所詮、勝つべき軍ならず、此上は、力の續かん限り、敵を引き受けて、屍を戰場に曝らし候はん』

各〻、死を決して、敵を待つ。

天、寒くして、風、刀の如し、將士、火を焚きて、暖を取る。

夜、明くれども、敵、尙、來らず、

『敵や早き、味方や早き』

前を望み、後を顧みて、頻りに、氣を揉む。

既にして、尊氏、十八萬騎を率して、竹の下に着す、仁木左京大夫頼章、細川阿波守和氏、高武藏守師直、其弟越後守師泰、上杉兵庫入道憲房、其子民部大輔憲顯等、皆、此れに從ふ。

直義、亦、吉良參河三郎滿貞、仁木越後守義長以下、六萬餘騎を率ゐて、箱根峠に達す、

『扨は、敵は、未だ來らざりしか、此戰、必定、勝利ぞ』

諸軍、皆、勇み喜ぶ。

九

義貞、伊豆の國府に留まること數日。

十二日辰の刻を期して、追手、搦手の兩道より、兵を進めんとす。

尊良親王は、京軍を率ゐて、搦手なる竹の下に向はせ給ふ、十一日を以て、先づ發し、陣を其前方に布きて、天の明くるを待たせ給ふ、脇屋治部大輔義助、其族細屋右馬助秀國、及び大友左近將監貞戴、鹽谷判官高貞等、七千餘騎を率ゐて、之れを助く。

義貞は、一族二十餘人、並に千葉介貞胤、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重以下の將士、七萬餘騎を帥ゐて、追手なる箱根峠に向ふ。

十二日拂曉を以て、伊豆の國府を發し、野七里、山七里を經て、岳七里に進む。

羊腸の路を踏み、磊塊の坂を攀ぢて、登ること、二時ばかり。

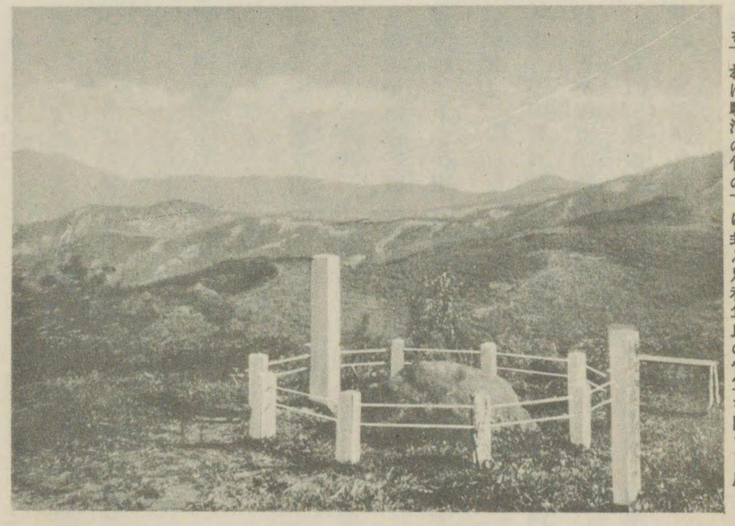
仰いで、坂上を見れば、三千餘騎の敵兵、險を扼して待つ、菊池武重、先鋒たり。

『素破や敵ぞ、アレ蹴散らせや』

手兵一千騎を分ちて、三隊となし、自ら三百餘騎を提さげて、猛進し、萬矢を冒して、敵を衝く。

敵將吉良滿貞、衆を勵まして拒ぐ。

武重、少しも怯まず、敵兵を捲くし立て、捲くし立てつゝ、馳突し、險坂を越ゆること、平地の如し。



足柄峠
足柄峠は相模國足柄上郡に在りて相模駿河の堺をなし此處を下れば駿河の竹の下に到る足利尊氏の官軍を防ぎし處

進み進んで、坂の中央に到り、楯を突き並べて、暫し呼吸を繼ぐ。

宇都宮公綱、第二陣に在り、

『菊池を助けや、進め〳〵』

忽ち部下を率ゐて、奮ひ進む、千葉貞胤も、亦、續いて進み、曳々聲して、攻め上り、押し上る。

官軍、見て、皆、振ふ。

＋

菊池武重、士卒を指揮して、益ゝ進み、忽ち擊ちて、吉良滿貞の兵を破る。

賊將仁木義長、代り拒ぐ。

武重、公綱等、復た擊ちて、之れを破る、

覺應坊祐覺の童十人、剪綵の梅花を、甲の前額に挿む、人も、亦、花の如し、祐覺、忽ち、

『進めや進め』

と呼はり、自ら眞先きに進めば、童も、亦、我れ劣らじと競ひ進む。

賊軍、望み見て、進み出づ、

『童とても、容赦はあらじ、アレ射て取れや』

各ゝ弓を取つて、亂射すれば、忽ちバタリ〳〵と仆るゝもの八人、

『イザ首を取らん』

賊兵、刀を拔き連れて、馳せ下る。

僧兵三十餘人、斯くと見るより、憤然として怒り、鋒を揃へて、突進す。

賊兵、忽ち踵を回らして退く、僧兵、勢に乘じて奮進し、追ひ詰め〳〵て、十數人を倒し、童を扶けて退く。

執事船田入道義昌、馳せ廻りて、士卒を鼓舞し、義貞、亦、高所に立ちて、戰を見る、軍氣振ふこと十倍。

義貞の麾下栗生左衞門顯友、篠塚伊賀、長濱六郎左衞門顯寛、杉原下總、高田薩摩守義遠、葦堀七郎、藤田三郎左衞門、藤田四郎左衞門、川波新左衞門、難波備前、河越參河、高山遠江、園田四郎左衞門、青木五郎左衞門、青木七郎左衞門、山上六郎左衞門、皆、剛弓を以て、名あり、軍に臨めば、常に俱に進み、俱に退く、稱して十六騎の黨と曰ふ、十六騎、機を見て蹶起す、

『イザヤ、敵を射取らん』

各〻弓を揃へて、敵を射る、腕は冴え、技は優ぐる、拔いては放ち、拔いては放つ、矢々、連なりて、糸の如し。

賊兵、甲を射られ、鎧を洞ぬかれて、仆るゝもの、數を知らず。

賊軍、恐れて、皆、披靡す、

『素破や進め』

武重、公綱、貞胤等、各〻士卒を勵まして、突進す。

賊軍、今は支へず、次第々々に、引き退く。

官軍、忽ち進んで、敵の要地を奪ふ、

時に、日、全く暮れて、人馬、亦、疲る、

『今日の軍は、是れまでぞ、明日は、進んで、鎌倉をこそ、取るべけれ』

諸將士、皆、勇み立ち、各〻營を聯ねて、天の明くるを待つ。

山風、林樹に吼えて、喊聲の如し、將士、夢を破らるゝこと幾回。

十一

搦手の官軍、竹の下に到りて、野營を張る、山上を望み見れば、篝火、其處此處に輝く、

『扨ては、敵に備へありと覺ゆるぞ』

皆、守備を嚴にして、期の到るを待つ。

既にして、天明く、北面の武士五百餘騎、皆、功名を思ふ、

『爭かで、武士の爲めに、魁けらるべきや、進めや進め』

錦旗を、陣頭に押し立てゝ進む、近づく儘に、大音聲に、

『一天の君に向ひ奉つりて、弓を彎き、矢を放つこそ、大罪なれ、天罰、爭でか、免かるべき、生命惜しくば、疾く〳〵、降人に出でよ』

と呼はれば、賊軍の先鋒足利尾張守高經、土岐彈正少弼頼遠、赤松筑前守貞範、佐々木判官高氏等、皆、望み見て、冷笑ふ、

『アノ馬の立てざま、旗の紋どころ、正しく京家の者と覺ゆるぞ、遠矢を、な射そ、只々、拔連れて、突き破れ』

聲の下より、突と進み出づる三百餘騎、サッと、鞭を加てて、坂路を馳せ下る、

『弓矢の家に生れしものは、名をこそ惜め、命をば惜まぬものぞ、嘘か、實か、これを見よや』

ドッと喚いて、京兵の眞中に突入し、無二無三に、蹴倒し、薙ぎ倒す。

京兵、此勢に、膽を破られ、忽ち馬首を回へして、走り退く。

高氏、頼遠等、益〻奮ひ進む、

『口ほどにもなき人々や、穢なし、返へせ』

馬を驅つて、追ひ立て〳〵、忽ち數十騎を斬つて落す。

仁木左京大夫頼章、細川阿波守和氏、高武藏守師直、上杉兵庫入道憲房等、二陣に在り、亦、手兵を提さげて、馳せ來る、

『先陣は、早、勝ちたるそ、此機に乘じて、敵を蹴散らせや』

會釋もなく、尊良親王の陣中に突擊す。

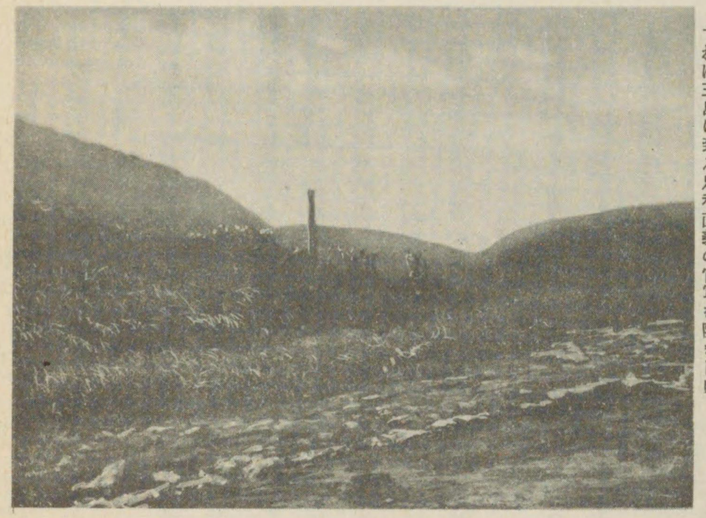
京兵、益〻慌てふためき、雪頽を打つて、崩れ走る。

十二

京兵、既に敗れて、賊軍、益〻振ふ、義助、此有様を見て、齒を切む

『扨て〳〵、言ひ甲斐なき者共かな、愬じ一陣に進んで、味方の力を失へるこそ、遺憾なれ、我れ、自から進までは、叶ふまじ』

陣を雁行に連ねて、サッと、横合ひより、進み擊つ、勝



箱根峠　箱根峠は相模國足柄下郡に屬し相模伊豆の堺をなし此處を下れば三島に到る足利直義の官軍を防ぎし處。

ち誇りたる賊軍、少しも怯まず、ドッと喚いて、競ひ掛かる。

昔は同族、今は仇敵、互ひに、名を惜み、敗を恥ぢて、奮ひ闘ふ。

一引兩の旗、二引兩の幟、或は合し、或は離れ、或は進み、或は退く。

屍は僵れ、血は流れて、馬は滑り、人は躓づく、血戰數刻、兩々相當る。

雙方、終に戰ひ疲れて、サッと、左右に分れて退く。

十三

義助の子義治、時に、年十三、從兵三騎と與に、誤つて、敵勢の中に、紛れ入る。

義治、心賢し、急ぎ笠印を切つて、投げ捨て、髪を亂して、顏に振り掛け、何氣なき狀にて、敵中に留まる。

義助、不圖、我子の居らざるに心付きて、大に驚く、

『扨ては、討たれたるか、生捕られたるか、此二つの中にこそ、勇士の戰場に功を立つるは、子孫の後榮を願へばこそ、一人の子を討たれなば、命生きて、何かはせん、イデ〳〵、我れも、與に死せん』

悲憤の涙を揮つて、唯一騎、多勢の敵中に躍り入る、

『さらば、我等も、御供せん』

義助の麾下三百餘騎、亦、轡を駢べて、サッと敵中に駈け入る。

敵軍、皆、疲る、思ひも寄らぬ再度の突擊に、打ち驚きて、皆、バッと引き退く。

義助、更に退く心なし、北ぐるを追ひつゝ、尙も、進み擊つ。

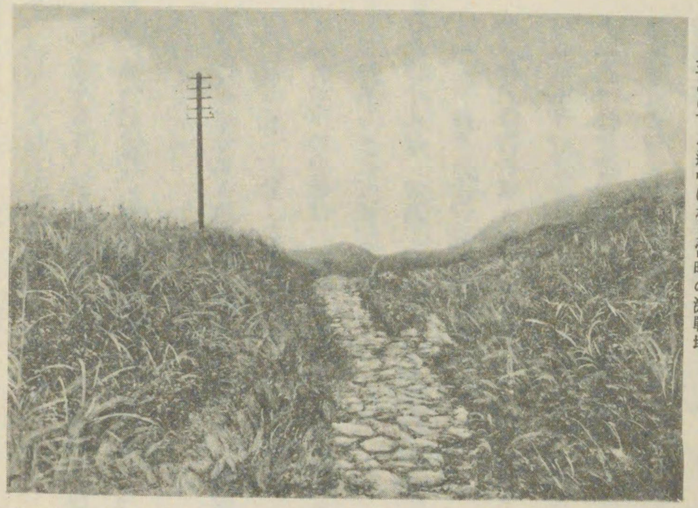
義治、我が父を見るより、從兵と與に、馬を馳せて、進み近づく。

賊兵二騎、斯くと見て、

『扨ては、敵に向ひ給ふにこそ、優さしうこそ、見參らせて候へ、イザ、御供して、討死仕つらん』

亦、馬を驅つて、隨ひ來る。

義治、突と、馳せて、父の軍中に馳せ入り、ソレと、從兵に下知して、二騎を斬る、義助、我子を見て、喜ぶこと限りなし、



箱根峠の山中

此れは伊豆國田方郡錦田村大字山中の邊にして箱根峠より三島に下る途中に在り當時の激戰地。

『さらば、暫し人馬の息を休めん』

忽ち兵を收めて、復た元の陣に還る。

十四

一陣の戰、既に終る、義助、更に、新手の兵を以て、敵を擊たんとす。

大友左近將監貞戴、鹽谷判官高貞、千餘騎を以て、後陣に在り、俄かに節を變じて、賊軍に馳せ加はり、官軍に向つて、頻りに矢を放つ、義助、斯くと見て、切齒す、

『京勢は、初度の合戰に敗れて、物の用に立たず、我が手の兵は、二度の駈けに、皆、疲かる、此二人をこそ、新手と賴みつるに、斯くなりては、叶ふまじ、敵の後を遮ぎらざる前に、追手の勢と、一所にならんこそ好けれ』

急に陣を拔きて、佐野原の方に退く。

仁木賴章、細川和氏、今川賴貞、高師直、上杉憲房等、斯くと見るより、俄に勇み立つ、

『敵は遁ぐるぞ、アレ追へや』

士卒を鼓舞して、勢鋭く、追ひ來る。

義助、且、戰ひ、且、退く。

二條少將爲冬、先づ討たれて、京兵、盡く潰え走る、義助、益〻苦戰す、麾下の兵、討たるゝもの三百騎。

官軍敗れ、敗れて、佐野原にも、堪り得ず、伊豆の府をも、支へ得ず、終に海道を、西に向うて走る。

搦手の官軍、全く敗る。

十五

追手の官軍、戰捷ちて、意氣振ふ。

十三日の拂曉、搦手の敗報、早くも、陣々の間に傳はる。降附の兵、先づ驚く、

『斯くては、叶ふまじ、疾く落ちん』

皆、幕を捨て、旗を卷きて、遁がれ去る、諸國召募の兵、亦、續々遁れて、箱根峠に連れる陣々、寂として、音もなし。

義貞の執事舟田入道義昌、第一陣に在り、敵の陣を距ること、最も近し、會〻敵の陣中、

『竹の下の合戰は、御味方の御勝利に候ぞ、敵は、皆、追ひ散らされて候ぞや』

と喧傳すれば、義昌、聞いて、眉を顰め、

『ハテ誠やらん、覺束なし』

唯一騎、味方の陣々を、巡り見れば、唯、幕のみありて、人は在らず、

『扨ては誠ぞ、斯くては、叶ふまじ』

急ぎ義貞の陣に到りて、狀を告ぐ。

義貞、思案すること暫し、

『さらば、少しく陣を引き、落ち行く勢を留めて、復た戰はん』

義昌と共に、箱根峠を下る、其勢、僅かに百騎ばかり、暫らく、馬を控へて、後を見返れば、例の十六騎の黨、馳せ來る。

忽ち北手の山に沿うて、三葉柏の旗見ゆ、

『敵か、味方か』

此方より、聲を掛くれば、

『御味方にこそ候へ』

と呼はりつゝ、馳せ來るは、熱田大宮司親昌の勢百騎ばかり、義貞、其兵を併せて、野七里に出づ。

忽ち三百餘騎の一隊、砂を蹴立てゝ、後より馳せ來る、

『扨てこそ敵なれ』

一同、屹と身構ふ。

既にして、其近づき來るを見れば、鷹の羽の旗、陣頭に飜へる、

『扨ては、菊池なりしか』

始めて、意を安んじ、又武重の兵を、併せて引き退く、會〻一僧、西より來る、忽ち義昌の前に跪づき、

『これは、何處へとて、御通り候やらん、昨日の暮れ方、脇屋殿、竹の下の合戰に、打ち負けて、落ちさせ給ひ、將軍、早、八十萬騎を以て、伊豆の國府を固めさせ給ふ、軍兵、町々に溢れて、樹の下、岩の陰、兵ならずと云ふ所候はず、此御勢ばかりにて、御通り候はんこと、努め努め、叶ふまじくこそ候へ』

と語れば、衆、聞いて、顏を見合はす。

栗生左衞門顯友、篠塚伊賀の二人、忽ち鎧踏ん張りつゝ、屹と、味方の勢を打ち見遣る、

『あはれ、兵共や、一騎當千の武者とは、此人々をこそ申すべけれ、敵八十萬騎に、味方の五百餘騎、丁度好き程の相手ぞ、イデ〳〵、我等駈け破りて、道開きせん、續けや人々』

大音聲に、呼はれば、衆、皆、奮ひ立つ。

二人、眞先きに立ちて進み、群がる敵中を、駈け拔け〳〵て、馳せ過ぐ、宛がら、無人の境を行くが如し。

伊豆の國府を過ぐれば、三千餘騎の敵兵、忽ち道を塞ぐ、これぞ、甲斐源氏の一條次郎、義貞を見るより、突如、馳せ寄りて、引つ組まんとす。

篠塚伊賀、斯くと見るより、馬を馳せて、立ち塞がり、次郎の打ち下す太刀を、左手の袖に受け留め、猿臂を伸ばして、グッと、次郎を引つ攫みさま、ヤツと、聲かけて、投げ飛ばすこと、二丈ばかり。

次郎は、大力無雙の勇士、投げられながらも、倒れず、漂ふ足を、踏み締めて、又も、義貞に走り掛からんとす。

伊賀、ヒラリと馬より、飛び下りさま、足を擧げて、ハタと蹴倒す。

次郎、尙も、刎ね起きんとす、伊賀、透さず、取つて押へて、首を掻く、其早業、目にも留まらず、次郎の部下、見て、牙を嚙む、

『アレ討ち取れや』

各〻馬より、飛び下り〳〵、左右より、打つて掛る、伊賀、少しも、驚ろく色あらず、身を開きては、蹴倒し〳〵、見る〳〵、首を取ること八九級、

『扨ても、恐ろしき勇士かな』

賊軍、舌を卷きて、驚き怖れ、忽ち左右に分れて、道を開く、

『イザヤ通らん』

義貞、悠々として、伊豆の國府を、通り過ぐれば、其處此處に隱れ居たる官軍、續々、馳せ加はり、今は、總勢二千騎ばかりに達す、

『これだけの勢あらば、假令、百重千重に、取り込めらるゝとて、何の恐るゝことかあらん』

皆、勇みて、西に向ふ。

十六

黃瀨川のあたりに到れば、一旒の旗を建てたる一隊の兵あり、其人數、二千騎ばかり。

近づくまゝに、其旗章を望み見れば、確かに、二巴、

『扨ては、小山判官にぞあらん、一騎も餘さず、打ち取れや』

里見伊豫守時成等、聲に應じて突進し、忽ち擊つて、敵を斥く。

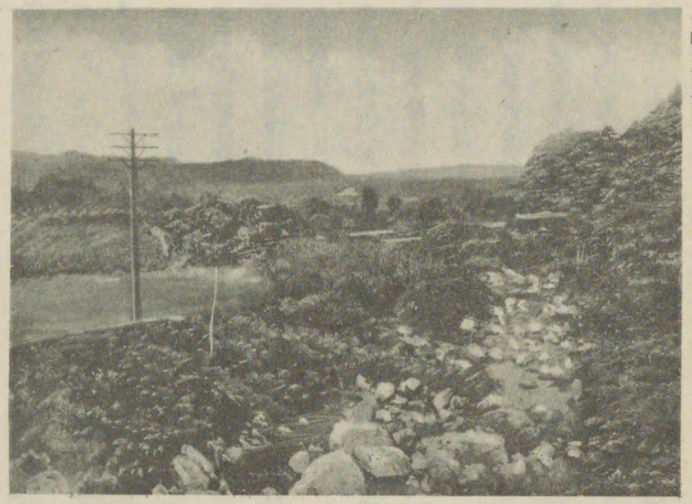
浮島ヶ原を過ぐれば、甲斐源氏の兵、五百騎ばかり、三旒の旗を建てゝ控ゆ。

義貞の兵二千騎、二手に分れて、南北より、競ひ掛かれば、忽ち旗を伏せて、降る。

義貞、乃ち此勢を、先頭に立てゝ、進む、中黑の旗を望み見て、落ち隱れたる官軍の、諸所より、馳せ來れるもの、五千餘騎。

見付に抵れば、敵兵二千騎ばかり、小山の上に在り、是れぞ、甲斐源氏の武田、小笠原の一類、

『アレ討ち取れよ』



竹の下
竹の下は駿河國駿東郡足柄村に屬し足柄峠の下に在り當時の激戰地。

義貞の兵、四方より、包み擊つ、高田薩摩守義遠、望み見て、

『大敵を餘さず、討たんとすれば、御味方をも、損じ候はん、開きてこそ、攻め給ふべけれ』

と呼はれば、由良三郎左衞門具滋、舟田入道義昌等、實にもと悟り、東の一方を開きて、他の三方より、勢ひ烈しく、攻め登る。

敵兵、驚ろき恐れて、皆、此一角より、遁がれ走る。

是れより、復た一敵なし、乃ち傷者を扶け、病者を昫はり、十二月十四日の夕暮に至りて、天龍川の東の宿に達す。

會々大雨、降り出でて、漫々たる河水、兩岸に溢る、長途に疲れたる人馬の、渡り得べくもあらず、

『さらば、橋をこそ、架くべけれ』

あたりの民家を毀ちて、浮橋を架す、人馬、皆、空しく留まりて、其成るを待つ、

『敵兵、若し追ひ來らば、所詮、遁れんこと叶ふまじ』

士卒、皆、危ぶみ懼る。

此地に留まること三日、敵兵、幸ひにして、來らず。

十七

既にして、水、漸く減じ、橋、漸く成る、

『一時に渡らば、損すべきぞ、次ぎ〳〵に、渡り候へ』

諸軍、乃ち次を逐うて渡る。

義貞、義昌の二人、最後に在り、全軍の渡り盡すを見て、

『さらば、渡らん』

徐々と橋を過ぐ、附き隨ふ麾下の兵、三十人ばかり、馬丁、馬を曳きて、先づ進む、橋板、忽ちドウと落つること、二間ばかり、人馬、俱に、水に溺れて、浮きつ、沈みつ、流れ下る、是れぞ、叛者の、人知れず、橋綱を斷てるもの、

『誰かある、アノ御馬、引き上げよ』

義昌、大聲に呼はれば、栗生左衞門顯友、聲に應じて、水中に躍り入り、馬と、馬丁とを攫みて、左右の手に差し上げ、肩を越ゆる水を冒して、歩みて、前岸に達す。

橋の斷ゆること二間、今は、渡らんやうもあらず、衆、皆、沮む色あり、義貞、獨り平然たり、

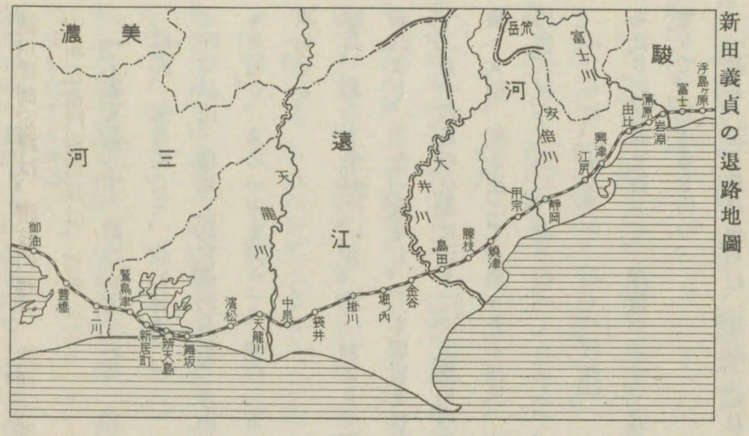
『イザヤ、渡らん』

義昌と、手を組んで、ユラリと飛べば、身は、彼方に在つ

て、輕く立つ。

從兵三十人、各〻飛ばんとしては、又躊たふ。

新田義貞の退路地圖



『イデ〳〵、渡して取らせん』

伊賀の住人名張八郎久富、鎧武者の總角を、取つては投げ、取つては投げて、渡すもの二十八人。

跡に殘れるもの、尚、二人あり、久富、左右の脇に挾みて、ユラリと飛ぶ、身輕くして、音もせず。

衆、皆、打ち驚く、

『大將と曰ひ、手の者と曰ひ、何れも、凡夫の業としも覺えず、斯くも、武勇、人に優れ給ひながら、此軍に、打ち負け給へるこそ、時の運なりけれ』

何れも、皆、嘆じ合ふ。

諸軍、盡く渡る、

『橋を壞はして、退き給はんこそ、然るべう候へ』

一人、進み出でて、說けば、義貞、首を掉つて、聞き入れず、

『我れさへ、橋を架するものを、多勢なる敵の、何どか、架け得ざらん、我れ、之れを引かば、憶したりと笑はれん、只、捨て置けや』

其儘にして、行き過ぐ。

矢矧に留まること一日、兵士、殆んど失せて、殘れるもの、唯、十の一。

今は、此處にも、敵を支ふべからず、乃ち殘兵を率ゐて、尾張に入る。

十八

賊兵、忽ち四方に蜂起す。

細川律師定禪は、讃岐に起り、飽浦三郎左衞門尉信胤、田中新左衞門尉信高は、備前に起り、久下彌三郎時重は、丹波に起り、赤松入道圓心は、播磨に起り、皆、俱に、尊氏に應ず。

主上、宸怒あらせ給ひ、天馬を、匹他九郎に賜ひて、義貞を召し還さしめ給ふ。

九郎、馳せて、近江の愛智川に到れば、天馬、忽ち病んで斃る、九郎、他馬に乘り換へ〳〵、尾張に到りて、勅旨を傳ふ、

『さらば、宇治、勢多にて、敵を支へ候はん』

義貞、乃ち兵を率ゐて、京師に還る。

大渡

新田義貞敗戰の地

淀は、山城國久世郡に屬す、桂、宇治、木津三川の會注する所にして、渡津、甚だ多し、就中、大渡、封戸渡、一口の三津、最も著はる、大渡は、淀渡、又淀大渡とも曰ふ、延元元年正月十日、新田義貞の、足利尊氏を拒ぎて、敗れし處。

山崎は、山城國乙訓郡に屬し、攝津に隣す、南に淀川あり、北に山あり、地勢險隘にして、西國街道中の一要地なり、脇屋義助、此處を扼し、細川、赤松勢と戰うて敗る。

一

箱根、竹の下の役、官軍、空しく敗れぬ。

新田左兵衞督義貞兄弟、途中、一支だもせずして、馳せて、京師に還り來れば、上下、愕然として、皆、色を失ふ。

既にして、足利尊氏、數十万の大軍を擁して、京師に攻め上る、沿道の將士、風を望んで、皆、降り、兵勢、日一日より振ふ。

時に、京師の兵、僅に三万に過ぎず、士氣、沮喪して、敵を拒がん氣力もあらず、朝廷、乃ち決斷所の壁に、

『今度の合戰に於て、勳功あらんものは、不日、恩賞に行はるべし』

と掲示して、軍氣を鼓舞す、何者の仕業なりけん、其奥に、

かくばかりたらさせ給ふ綸言の
　　汗の如くになど流るらん

とぞ、樂書しける、うたてやな、天下の人心、早くも、武人に向はんとす。

建武二年も、何時しか暮れて、延元元年となる、年は、改まれども、世は、穩しからず。

御所にては、拜賀をも、受けさせられず、節會をも、行はせられず、日夜、唯、戰備の評定にのみ忙はし。

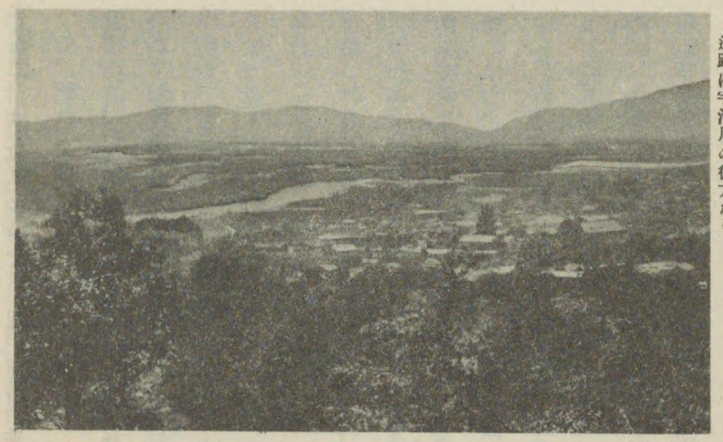
兎角する間に、賊軍、早、京師に近づき來る。

今は、踟躕すべきにあらず、正月七日、義貞、御所より退り、部署を定めて、諸將を、各地に派す。

名和伯耆守長年、結城判官親光、千種中將忠顯は、二千騎を以て、勢多を守り、綱を張り、杭を樹て、數十本の大木を、水中に横たふ。

楠木判官正成は、五千騎を以て、宇治を守り、橋板を撤し、木柵を樹て、石を、上流に疊みて、水の流を激す。

脇屋治部大輔義助は、七千餘騎を以て、山崎を守り、洞院按察大納言公泰、宇都宮美濃將監泰藤、僧文觀等、此れに屬す、堀を鑿ち、櫓を建つること、三百餘ヶ所。



伏見城址の展望其一
此れは京都市伏見區伏見城址より伏見街道及び天王山、八幡山の方面を望む光景にして足利尊氏の進路は宇治川の彼方なり。

義貞、自ら一万餘騎を率ゐて、淀の大渡を守り、千葉介貞胤、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重等、此れに屬す、橋を撤し、楯を並べ、櫓を建て、柵を搆ふ。

江田兵部大輔行義等、別に五千餘騎を以て、京師を守り、遊軍として、臨機、敵に當らんとす。

守備、忽ち成る。

二

敵は、期せずして、四方より、押し寄せ來る。

足利直義の一軍は、勢多に向ひ、足利兵衛佐和氏の一軍は、宇治に向ひ、尊氏は、自ら大軍を率ゐて、淀に向ふ。

細川律師定禪、赤松信濃守範貞は、別に二万餘騎を率ゐ來りて、攝津の芥川に達し、進んで、山崎に迫らんとす。

久下彌三郎時重、波々伯部二郎左衞門爲光、酒井六郎貞信は、亦、別に六千餘騎を以て、丹波より、山城の國境峰堂に進む。

四方の賊には、備あれども、獨り峰堂の敵には、備あらず、

『此處ぞ、遊軍の向ふべき所』

江田行義、自ら三千餘騎を率ゐて、馳せて、峰堂に向ふ。

賊軍、險所を扼して、拒ぎ戰ふ。

行義、士卒を勵まして、攻め上り、忽ち擊ちて、時重の弟五郎長重を殪す、餘衆、駭き怖れて、悉く潰え走る。

行義、乃ち捷を大渡に報ず。

三

九日辰の刻、尊氏、軍を進めて、大渡の西に到る。

水を隔てゝ、敵軍を望み見れば、中黑の旌旗、川風に飜へる、

『扨は、新田勢なるべし、橋桁をや進まん、河をや渡らん』

尚も、前方を見遣ること少時。

橋上、河上、防禦の術、俱に全く、何れを進まんやうもあらず。

『所詮、容易く、渡り得まじ』

尊氏、躊躇して、敢て進まず。

官軍の逸雄、百騎ばかり、忽ち陣中より、進み出でゝ、岸頭に立つ、

『如何に、足利殿に物申さん、賴みに思召す丹波路の御敵共は、昨日、早、討ち平げて、一人も殘さず、討ち取つてこそ候へ、御旗章を見れば、御一門の方々、大略、此陣へ、御向ひありしと覺えて候、治承には、足利又太郎忠綱、元暦には、佐々木四郎高綱、何れも、宇治川を渡して、名を後代に揚げ候ひき、此川は、宇治川よりも淺く、且、早からざるに、何とて、左樣に、猶豫し給ふ

伏見城址の展望　其二
此れは桃山城址より伏見市街を望むもの中央の流は宇治川、左方の市街は伏見にして其彼方は久我、鴨川等の戰場なり。

ぞ、疾く疾く、此處をこそ、御渡し候へ』

口々に、呼はり〳〵、艘を叩きて、ドッと笑ふ。

武藏、相模の兵、斯くと聞くより、皆、齒を切む、

『敵に打ち招かれては、如何なる早瀨とても、渡さずと云ふことやある、川深くして、沈みなば、後陣の兵ども、屍を橋として、渡れよかし』

三千餘騎の將士、早くも、馬を揃へて、乘り入らんとす。

尊氏の執事高武藏守師直、此體を見て、打ち驚く、

『這は、物にや狂へる、馬の足も立たぬ大河を、爭かで輙すく渡さるべきや、鎭りひへ〳〵、今に在家を毀ち、筏を組みて、渡さんずるぞ』

馬を馳せ付け〳〵、聲を限りに、制すれば、左しもの軍兵、漸くに、思ひ止まる。

『疾く〳〵、筏を組めや』

師直、命じて、民家を毀つこと數百戸、梁木、柱を連ねて大なる筏を作れば、

『左らば、進め』

武藏、相模の兵數百騎、先を爭うて、飛び乘り〳〵、橋の下流の方を、押し渡る。

筏、忽ち亂杭に懸りて、動かず、兵士、棹を把つて、押せども〳〵、尙、進まず。

官軍、斯くと見るより、一齊に、矢を放つこと、雨の如し。

今は、進まんこと、叶はず、退かんこと、亦、叶はず、如何にせばやと、呆れ惑ふ。

河水、筏を拍つては激し、拍つては激すること暫し、繫ひの綱、忽ちフッと斷れて、木材、皆、放れ〳〵に、流れ去る。

五百餘人の兵士、見る〳〵、溺れ死して、助かるもの、一人もあらず。

賊軍、岸に立つて、アレよ〳〵と、犇くばかり、行きて、救はん術もあらず。

官軍、又もや、楯を叩きて、ドッと笑ふ。

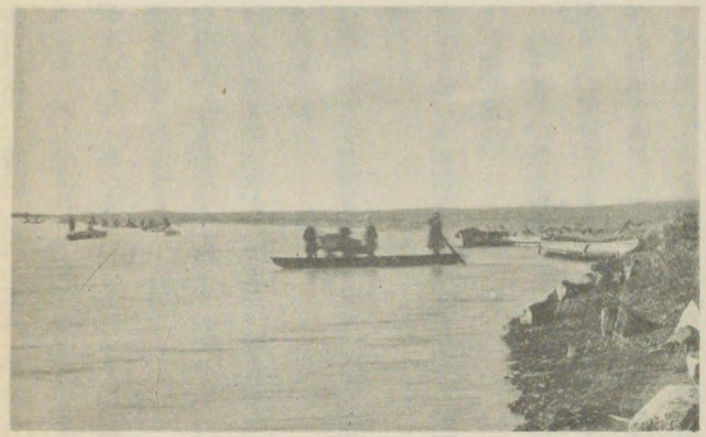
四

折りしも、官軍の武者一人、橋上の櫓の狹間を、押し開きて、ヌッと現はれ出づ、

『治承の昔、宇治の合戰には、橋板殘らず、引きて候へども、筒井淨妙、矢切但馬なんど、一條二條の大路よりも、廣げに橋桁を渡りて、合戰せしとこそ、申し傳へて候へ、此橋は、唯、搔楯の料に、所々、板を脫せしばかり、人の渡り得ぬことは、ヨモ候まじ、坂東より、遙々と攻め上り給ひしからは、川を隔てゝ、合戰のあらんずることは、豫ねて思ひ設けられてこそ候べけれ、船も、筏も、事の累ひばかりにて、何の役にも、立ちひまじ、イザ〳〵、橋の上をこそ、渡りて進ませ候へ、如何にや、如何に』

聲高々と訇りつつ、カラ〳〵と、打ち笑ふ。

師直の家臣野木



狐河の渡
山城國乙訓郡大山崎村より攝津國郡橋本に渡る淀川の渡船所を狐河の渡と云ふ往時山崎橋を架したる處赤松貞範の渡河せしは此處なるべし。

入道頼玄、今は、何をか悔えん、

『目にこそ見ざれ、何條、淨妙とやらんに、劣り候べき、渡れと言はば、何處にても、渡りて見せん』

長刀を、小脇に、掻い込み、サッと、橋桁の上を、走り進む。

官軍、櫓の上、楯の陰より、差し詰め、引き詰め、雨霰と矢を放つ。

頼玄、身を飜へすこと、飛鳥の如し、橋桁を、右に飛び、左に避けつゝ進む。

二人の勇士、亦、續いて、進み來る。

頼玄、此れに力を得て、益〻勇み進み、突と、櫓の下へ、馳せ入りて、曳や〳〵と、押し崩さんとす。

櫓、忽ちメキ〳〵と、響き搖めく。

櫓上の官兵數十人、矢庭に、飛び降り〳〵て、二の木戸の中に、引き退く。

數十万の賊軍、箙を叩いて、一度に、ドッと笑ひ返す。

悔え〳〵し賊軍、俄に、勇み立つ、

『素破や、敵は引くぞ、進めや進め』

參河、遠江、美濃、尾張の軍兵一千餘人、ヒラリ〳〵と、馬より、飛び降り〳〵、先を爭うて、橋上を、躍り進む。

脚を失して、落つるもの、矢に中りて、溺るゝもの、數を知らず。

賊軍、少しも屈せず、尙も、後より〳〵、續き進みて、ヒシと、橋桁の上に、立ち並び、櫓を崩し、楯を破りて、進まんとす。

忽然として、橋桁四五間、メキ〳〵と、中より、折れて落つ。

アナヤと、叫ぶ間もあらせず、上なる兵士、ザンブとばかり、水に落つ。

『素破や、敵の計ぞ』

慌てゝ、避けんとすれども、叶はず、後より、押され〳〵て、溺るゝもの、一千餘人、皆、浮きつ、沈みつ、流れ行く。

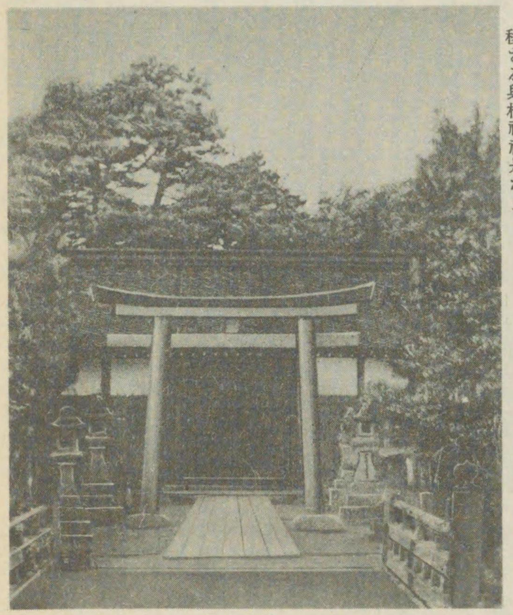
官軍、又々楯を叩きて、ドッと打ち笑ふ。

頼玄、亦、水に溺れ、流るゝ橋板に、突と乘り上り、長刀を以て、棹さし〳〵、漸く元の處に、還り來る。

川を渡らんとすれども、得ず、橋桁を進まんとすれども、又得ず、賊軍、攻めあぐんで、空しく、心のみ焦らつ。

五

赤松筑前守貞範、尊氏の軍に屬して、橋の下手に陣す、會〻兄範貞よりの使者、書狀を持ち來る、封を披きて、讀み下せば、



淀大明神

淀大明神は山城國紀伊郡淀町の宮前橋附近に在り淀川改修の時淀城址に移さる與杼神社址なり。

『我れ、將軍の敎書を奉じて、新田義貞以下の逆徒を、退治せん爲め、義兵を擧げ候ひしに、圖らずも、細川律師定禪の京師を攻め上るに、參會致し候ひぬ、因りて、元弘の佳例に任せて、範資、先陣を申し受け、今日、攝州芥川の宿に着きて候、明十日辰の刻を以て、山崎の陣へ、押し寄せん手筈に候なり、此由、將軍に執達せられ候へ』

とあり、貞範、急ぎ、尊氏の本陣に、馳せ行きて、披露に及べば、

『扨も、期せずして、一時に、京師を攻めんとせしこそ、不思議なれ』

尊氏以下、皆、手を拍つて、悅ぶ。

『左らば、某は、兄と一手になりて、敵を攻め候はん』

貞範、直に陣を拔きて、西に向ふ、

六

十日辰の刻、細川律師定禪、芥川より、軍を進めて、櫻井出の宿の東に出づ。

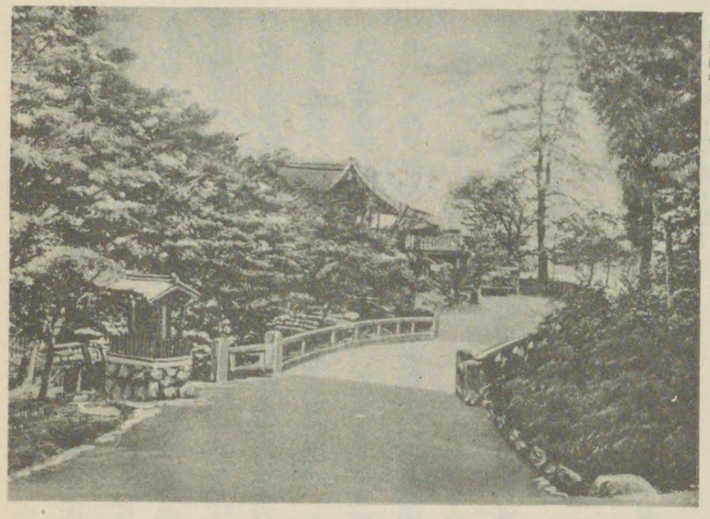
赤松信濃守範資、亦、二千餘騎を率ゐ、淀川に沿うて進む。
忽ち一隊の人馬、彼岸に來る、範資、其旗章を見て、喜ぶ、
『扨は、筑前守ぞ』
急に、手を擧げて、麾(さしま)ねく。
貞範、小船三隻に、其兵を、分ち乘せて、渡り來り、兄弟、互に手を執つて、泣いて喜ぶ。
頓て、兄弟、俱に、兵を進む。
敵陣、既に近し、範資、先づ戰を開かんと欲す、播磨の紀氏の兵六百騎、忽ち拔け駈けして、眞先に、押し寄す。
官兵五百騎、其小勢を侮り、突然、木戸を開きて、擊つて出づ。
紀氏の兵、脆くも、敗れて、散じ去る。
坂東、坂西の兵二千餘騎、櫻井の宿の北より、山に傍(そ)うて、進み攻む。
脇屋右衞門佐義助の兵、サツと、二の木戸を開きて、打つて出づれば、宇都宮美濃將監泰藤の紀清兩黨、亦、續いて、打つて出づ。
酣戰數刻、勝敗、未だ決せず。

定禪、範資、二手に分れて、押し進む。
官軍、其多勢なるを見て、畏れ、直に退きて、木戸を守る。
定禪、範資等、勢に乘じて、突進し、堀を越え、柵を拔き、矢石を冒して、進む。
官軍、忽ち色めき渡る。
但馬の人長九郎左衞門の兵三百騎、先づ降れば、京兵、僧兵、亦、續々降る。
官軍、今は、拒ぎ戰はんこと叶はず、
『左らば、淀、鳥羽の邊へ、引き退き、大渡の勢と、一所になりて、戰はん』
直に赤井に向うて、引き退く。
山崎の防禦、先づ破る。

七

左兵衞督義貞、固く大渡を守る、賊軍、一歩も、川を越ゆること叶はず。
既にして、弟義助、山崎より、敗れ還る、義貞、大に驚き、
『斯くては、敵兵、皇居に亂れ入るべきぞ、先づ、山門へ、行幸を仰ぎて後にこそ、心安く、戰ふべけれ』

亦、兵を率ゐて、俱に、京師に還る。



東坂本
近江國滋賀郡坂本村は比叡山の東麓なるを以て東坂本と稱す官幣大社日吉神社あり大宮川祠前を流れて三基の石橋此れに架せらる。

大友千代松丸、宇都宮治部大輔公綱等、忽ち降りて、賊軍に屬す。
義貞、義助、馳せて、淀の大明神の前を、引き退く。
細川定禪、兵を率ゐて、追ひ來る。
義貞の子越後守義顯、三千騎を以て、後陣に在り、相模ヶ辻に陣して、敵を支ふ。
父の皇居に參じたらん頃を計り、兵を二手に分ちて、敵中に突入し、勇を奮うて、攻め戰ふ。
千代松丸、公綱等、義顯を殪して、功を立てんと欲し、鋒を揃へて、嚴しく迫る。
義顯、夙に驍勇を以て聞ゆ、猛然として、圍を衝き破り、衝き破ること七八回、鎧の袖は斷(ちぎ)れ、甲の錏(しころ)は落ちて、身に、十數劍を被むる、鮮血、淋漓(りんり)として、朱鍾馗(しゅしょうき)の如し、終に一方の血路を破つて、京師に入る。

八

山崎、先づ敗れ、大渡、亦、守を失ふ。
京中の貴賤男女、駭然として驚き、負擔奔竄するもの、陸續絶えず。
義貞、義助、未だ還らず、主上、先づ、山門へ、行幸あらせ給はんとし、親しく、神器を奉じて、出でゝ、鳳輦に召させ給ふ。

輿丁、皆、既に遁れて、一人もあらず、禁衛の武士、鎧の儘に、舁き奉つる、供奉せるもの、唯、吉田内大臣定房以下、公卿三四人のみ。

既にして、義貞以下、追ひ付き奉つるもの、一万餘騎、鳳輦を護りて、東坂本に向ふ。

信濃の人勅使河原丹三郎直重、大渡の軍に屬す、主上の蒙塵せさせ給へる由を聞きて、慨然として嘆ず、

『危ふきを見て、命を致すは、臣たるもの〻義にあらずや、我れ、爭かで、亡朝の臣として、逆賊の前に屈すべき』

父子三騎、三條河原より、取つて返し、鳥羽の作道羅城門の邊に於て、自殺す。

九

楠木判官正成、宇治を守る、主上、山門に幸し給へりと聞きて、直に坂本に詣る。

名和伯耆守長年、勢多に在り、

『此處より、直に坂本に馳せ參ずるは、易しと雖も、今一度、内裏を拜し奉つりて後にこそ、參るべけれ』

手勢三百騎を率ゐて、馳せて、京師に入る。

日暮れなんとして、未だ暮れず、人顔、尙、辨ずべし、尊氏こそ、今日は、惡日なりとて、京師に入らざれ、四國、九國の兵、既に白川のあたりに、充滿す、帆掛船の笠印を、見るより、

『扨ては、名和の勢ぞ、アレ擊ち取れや』

皆、競うて、遮り戰ふ。

長年、更に、恐る〻色もなし、圍を打ち破り、突き崩すこと十七度、從兵、過半は、討たれて、殘り留まるもの、僅かに百騎。

長年、進んで、内裏の置石のあたりに詣り、馬を下り、甲を脫して、南庭に跪つく。

主上、山門に幸し給ひて、亂賊、宮闕を瀆し奉つる、紫宸殿の上には、聖賢の障子、倒れて、破れ損じ、弘徽殿の前には、翡翠の御簾、斷れて、落ち散りぬ。

長年、感慨、禁ずること能はず、熱涙、潸々として、鎧の袖に迸しる。

敵の喊聲、次第に、迫り來る、乃ち陽明門の前より、馬に

跨り、北白川を東へ、今路越に懸りて、東坂本に馳せ參ず。

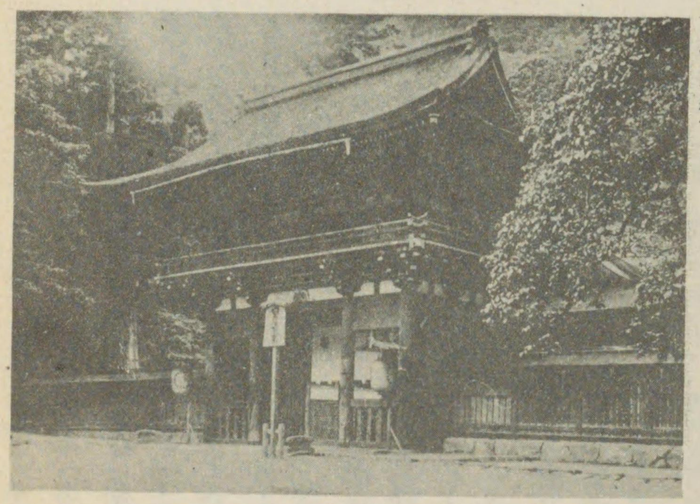
賊兵、火を諸所に放つ、猛風、忽ち吹き起りて、宮殿樓閣、悉く烏有に歸す。

十

結城判官親光も、亦、勢多より、京師に入り、家に還りて、別を妻に告ぐ。

妻、熟〻夫の姿を見て、涙を垂る、

『君、世の中の有樣を、如何に思し給ふぞ、今や、朝廷の御政、漸く弛びて、人心、皆、悲み奉つり候ひぬ、足利、此機に乘じて、旗を揚げて候へば、赤松を始めとして、朝廷に快からぬ諸國の武士、皆、爭うて、附き隨ひ候ぞかし、如何に、心を盡し、力を盡し給へばとて、所詮、敵を滅し給はんこと、思ひも寄らず、朝廷の御運も、早、傾きてこそ候なれ、君、此度、京師を退き給へば、再び見みえ候べしとも思ほえず、見受け參らすれば、御姿も、悄たれ、御影も、最と薄く見えさせ候ぞや、此身、獨り生きて、物を思はんよりは、死して、來世に待ち受け參らすべし、左らばに候』



日吉神社

官幣大社日吉神社は近江國滋賀郡坂本村に在り比叡山の東麓なるを以て此あたりを東坂と曰ふ後醍醐天皇の遷御あらせ給へる處。

と言ひも畢らず、守刀を拔くより早く、口に啣へて、俯伏しに、打ち伏す。

親光、此光景を見遣りつ〻、愁然として、涙を呑む、

『實にや、世の中は、賴み少なき有樣となりぬ、迚も死すべき命ならば、尊氏を刺して、君の

御爲め、天下の爲めに、禍の根を斷たんこそ、好けれ』
屹と心の中に、思ひ定めて、其儘、京師に留まる。
其翌十一日、尊氏、兵を率ゐて、進んで、京師に入る。
親光、乃ち相識れる禪僧に賴りて、伴りて、降を乞へば、
尊氏、
『親光の所存、ヨモ誠の降參にはあらじ、定めて、尊氏を騙かりて、討たんとの企みなるべし、兎も角も、事の樣を見ん』
命じて大友左近將監貞戴を、親光の許に遣はす。
貞戴、三百餘騎を率ゐて、直に發し、往きて、楊梅東洞院に到れば、親光主從十八騎、彼方より來る。
貞戴、思慮淺く、ソレと見るより、親光の方に、進み近つき、聲も、荒らかに、
『御邊、御降參の由、申し入れられて候へば、汝、往きて、事の由を、尋ねよとの仰せに候、降人の作法に候、物具脱ぎて、給はり候へ』
と告ぐれば、親光、早くも、
『扨は、我が心中を察して、討手に向ひしならん、要こそあれ』
と思へば、
『左らば、物具を參らせん、イザ受け取り候へ』
と言ひさま、三尺八寸の太刀を、引き拔きて、ザックと、貞戴の首に、斬り込むこと五寸。
貞戴、刀を拔くこと、一尺ばかり、ドウと馬より落ちて、息、忽ち絶ゆ。
從兵、見て大に怒り、親光主從を包んで、擊つて懸かる。
親光、勇を振うて戰へども、衆寡敵せず、從兵、討たるゝもの十四騎、身も、亦、敵刄に刺されて殪る。

十一

主上、近江の東坂本に幸し給ふ、此處ぞ、叡山の東の麓。
暫く經てども、山徒一人も、馳せ來らず、
『扨は、衆徒の心も、變りぬるにや』
と思せば、叡慮、甚だ安からず。
既にして、藤本房英憲、入り來り、御座のに向ひて、ハラハラと、涙を垂る。
主上、御簾の中より、御覽ぜられて、

『硯やある』
と仰せ給ふ、英憲、急ぎ取り寄せて、捧げ奉つれば、主上御手づから、御願文を書かせ給ひ、
『急ぎ、大宮の神殿に籠めよ』
と宣はせば、英憲、權禰宜行親を以て、早速に、納め奉つる。
斯かる所へ、圓宗院法印定宗、僧兵五百人を率ゐ來りて、御前に跪つきつゝ、
『万乘の聖主、辱けなくも、山門を御賴みあらせ給ふ、三千の衆徒、誰か忠誠の心を捧げ奉つらざらん、一山、誓うて、君を擁護奉つり候べし』
と奏し奉つり、甲を戴き、鎧を着けて、聖駕を護り、錢を運び、米を送りて、軍用に充つ。
主上、此體を覽はして、始めて、御心を安んぜさせ給ふ。

三井寺

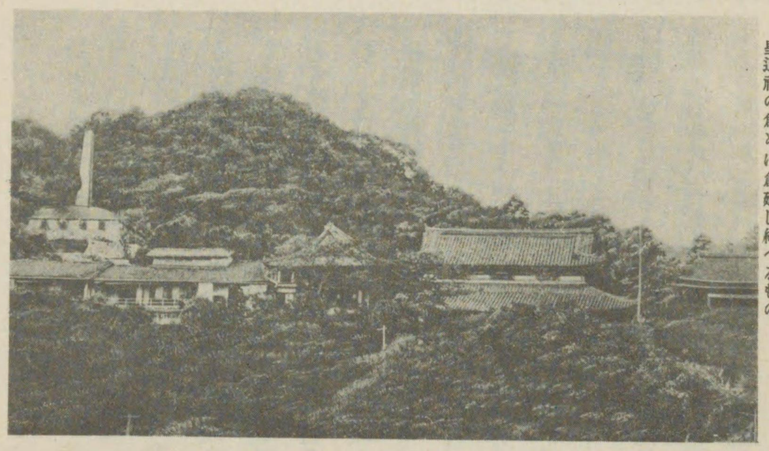
細川定禪敗戰の地

近江國大津市の西北別所に、三井と稱する地あり、天台宗の巨刹あり、園城寺と曰ふ、其地名に因みて、三井寺とも稱す、天武天皇の三年、弘文天皇の皇子大友與太王の、父帝追福の爲めに、創建あらせ給へるところ。
比叡山延曆寺と、久しく、相反目して、解けず、爲めに、焚掠を受くること、十回に及ぶ、世に、延曆寺を稱して、山門と曰ひ、其僧徒を、山法師と呼び、園城寺を稱して、寺門と曰ひ、其僧徒を、寺法師と呼びて、之れを分つ。

一

山門、勅旨を奉ずるの時、寺門、忽ち賊徒に與みす。
賊魁足利尊氏、京師に入りて、右大臣洞院公賢の第に館す、主上の東坂本に幸して、叡山を賴ませ給ふと聞くや、
『左らば、寺法師を賴みて、東坂本を攻め落さん』
と思ひ、細川律師定禪、細川刑部少輔顯氏、細川陸奥守頼

春の三將に、六万餘騎を附して、三井寺に遣はす。
園城、延曆の二寺、相和せざること、五百年、寺門の衆徒、尊氏の敎書を得て、事の順逆を顧みず、
『山門を攻め滅ぼすは、此機に在り、何條、否やのあらん』
皆、喜び勇みて、一議もなく、尊氏に應ず。
新田左兵衞督義貞以下は、東坂下に據り、定禪以下は、三井寺に陣す、兩軍、相持して、未だ戰はず、暗雲、湖上を罩めて、物悽まじ。
正月十三日、思ひ掛けなくも、陸奥の國司北畠中納言顯家の急使、東坂本に馳せ來りて、奏狀を上つる、卽ち
『臣顯家、朝命を奉じて、奥羽二國の兵を發し、行く行く、逆徒を擊ち破りて、鎌倉に入り候へば、足利兄弟、早、大軍を率ゐて、西上仕りぬと承はり及び、其跡を追うて、昨日、當國愛智河に着し候ひぬ、大舘中務大輔幸氏、其弟左馬助氏明と共に、越後、上野、下野、常陸の一族を率ゐて、中途より、來り加はり、昨日は、佐々木判官氏頼を、觀音寺城に攻めて、城を拔き、斬首五百餘級に及びて候、此儀、奏聞を給はり候へ』
との文意、讀むもの、聞くもの、孰れか、踴躍せざらん、主上、聞し召されて、感、斜めならず、
『途中に、三井寺の賊あり、船にて、渡さんこそ、好けれ』
と宣らして、命を覺應坊祐覺に下し給ふ。



三井寺
園城寺は近江國滋賀郡大津の西北三井の地に在るを以て三井寺とも云ふ弘文天皇の御子與多王の父皇追福の爲めに創建し給へるもの。

祐覺、乃ち小舟七百餘隻を率ゐ、志那濱に到りて、顯家の兵を迎ふ。
宇都宮紀清兩黨五百騎、亦、顯家の軍に從うて來る、其主公綱の賊軍に降れるを聞き、暇を乞ひ、禮を述べ、芋洗を廻りて、京師へと向ふ。
顯家の全軍五万餘騎、悉く東坂本に着す。
官軍の兵氣、頗る振ふ。

二

今は、卽ち一戰すべし。
義貞、俄に諸將を會して、戰を議す、顯家、先づ、口を開き、
『一兩日、馬の脚を休めて後にこそ、京師へ攻め寄せ候べけれ』
と言へば、大館氏明、進み出で、、
『長途に疲れたる馬を、一日も、休め候はゞ、血の下りて、四五日は、物の用に立たざるものに候、特に、此勢、坂本に着きたりとも、直ぐに攻め寄すべしとは、敵も、思ひ寄り候まじ、不意に出づるこそ、敵を拉ぐの術に候へ、今夜の中に、滋賀、唐崎の邊まで、押し寄せ、明朝未明に、四方より、攻め上り候はん、味方、勝利を得んこと、疑ひも候はず』
と說く、義貞、正成の二將、
『此儀、最も然るべし』
と贊し、直に令を諸軍に傳ふ。
千葉介貞胤は、千餘騎を率ゐて、滋賀に向ひ、氏明は、六千餘騎を率ゐて、唐崎に陣す。
山門の大衆二万餘人は、如意嶽を越えて、搦手の方に進む。
近江の兵は、小舟七百隻に乘じ、湖上に泛びて、機を待つ。

三

細川定禪、顯家の兵の湖上を渡りて、東坂本に向へるを望見し、急ぎ使を京師に遣はして、
『東國の兵、夥多しく、坂本に着きて候、明日は、打ち寄すべき聞えも候、疾く御加勢を賜はり候へ』
と請へども、尊氏、敢て意となさず、
『關東より、何の勢か、多く上るべき、宇都宮紀清兩黨の者共、上洛するとの聞えあり、定めて、其者共にこそ

あるべけれ、假令、誤つて坂本へ着きたりとも、治部大輔、此處に在りと聞かば、頓て、此方へ來るべし、何の騒ぐことやある』

使者、三反に及べども、終に援兵を送らず。

既にして、天明く。

怒濤の如き喊聲、忽ち山下に湧く。

『素破や、敵ぞ』

定禪、屹と山麓を見渡せば、數万の敵兵、滋賀、唐崎に充滿し、炎焔、大津の西の浦よりも起り、松本の宿よりも起る、

『左らば、拒げ』

一隊の兵を、南の坂口に派して、矢を放つ。

四

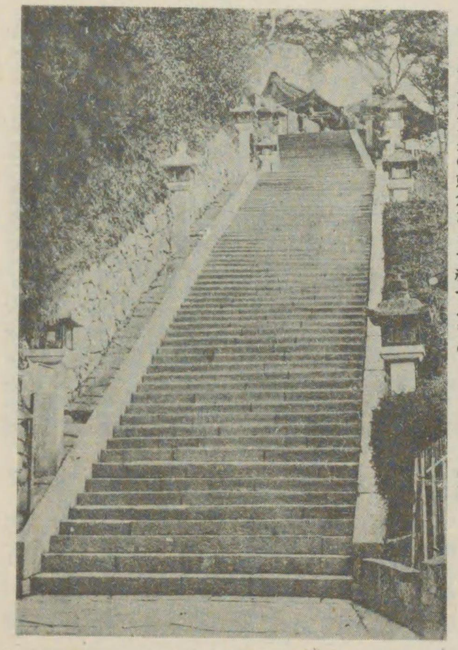
官軍の先鋒千葉介貞胤、手勢一千餘騎を率ゐて、第一番に、押し寄せ、忽ち一の木戸を破りて、奮進し、更に、二の木戸を破つて、突入し、鋒を揃へて、奮ひ戰ふ。

定禪、六千餘騎を放つて、三方より、迫り擊つ、貞胤の子新介宗胤、士卒に先だちて、奮鬪し、終に擊たれて、死すれば、其部下二百餘騎、

『イデ〳〵、主の仇を復せん』

猛然として、競ひ進み、勇戰奮鬪すること少時、終に百五十騎を討たれて、後陣に退く。

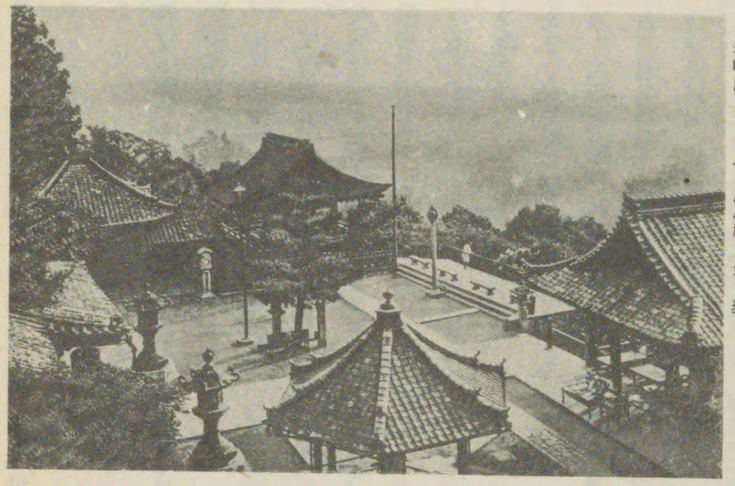
北畠中納言顯家、二万餘騎を以て、第二番に進み、入り替り、立ち替りて、戰ふこと暫し、頓て、引き退きて、人馬の足を憩ふ。



表坂

此れは三井寺の表坂にして長等神社の北側に在り石階を登れば正法寺あり後三條天皇の勅創あらせ給へるもの。

結城上野入道宗廣、伊達、信夫の兵、五千餘騎を率ゐて、第三番に進み、勢ひ烈しく、攻め戰ひ、三百餘騎を討たれて、引き退く。



觀月臺

此れは三井寺の觀月臺にして市街と湖上とを望む遠嶺近峰歷々目に入る處心神自から爽

官軍、三たび進んで、三たび退く。

賊軍六万餘騎、勝に乘じて、驀然として、下り擊つ。

左兵衞督義貞、三万餘騎を以て、四番目に備ふ、斯くと見るより、忽ち憤然として、

『アレ擊てや』

大聲疾呼、士卒を勵まし〳〵、脇目も觸らずに、奮ひ戰ふ。

東には、大湖あり、南には、大津あたりの民家、燒け熾る。

定禪、大兵を擁すれども、動かすこと能はず。

湖上の官兵、舟を近づけて、横合より、矢を放つ。

賊軍、二方より、敵を受けて、忽ち色めく。

義貞、勢に乘じて、士卒を勵ましつゝ、突き入り〳〵、見る〳〵、五百餘騎を、斬つて落す。

定禪、今は、叶はず、

『ソレ引けや』

急に兵を收めて、三井寺に、引き退く。

大館左馬助氏明、江田兵部大輔行義、堀口美濃守貞滿等の七百餘騎、北ぐるを追うて、攻め登る。

三井寺の衆徒五百餘人、關の口を塞ぎて、必死に、拒き戰ふ。

官軍、討たれて死するもの、百餘人、餘衆、逡巡して、進まず。

衆徒、其間に、木戸を下し、橋を引く。

官兵、今は、進み入ること能はず、空しく、城を望んで、惘然として立つ。

五

脇屋右衛門佐義助、一万五千餘騎を率ゐて、其後に在り、此有様を見るより、忽ち憤然として、

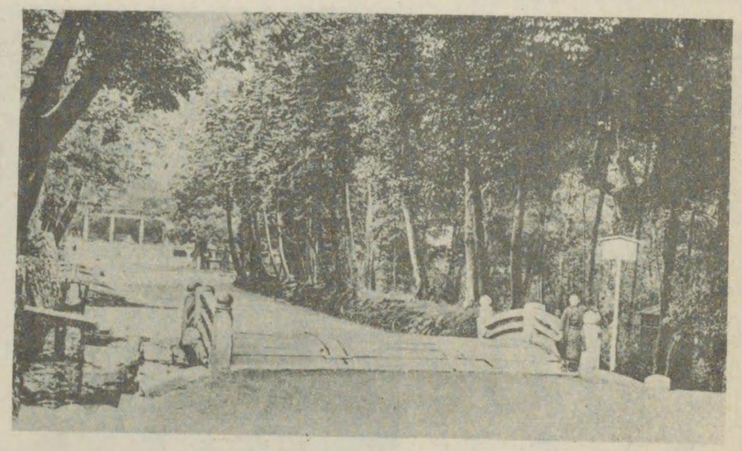
『言ひ甲斐もなき者共の作法かな、僅かの木戸一つに、支へられて、斯ばかりの小城を、攻め落されざることやある、栗生はなきか、篠塚は居らぬか、疾く彼の木戸を押し破れや、畑、亘理は、何處に居るぞ、透さず、切り入れや』

と呼はる、四士、皆、驍勇無比、ハツと答へて、ヒラリと、馬より飛び降る。

栗生左衛門顯友、篠塚伊賀の二人、眞先に、馳せ出づれば、塀の前に、堀あり、廣さ二丈餘り、兩岸、削るが如く、橋は、既に引かれて、渡らんに、由もあらず。

左右を見廻はせば、傍に、塚あり、塚の上に、長さ五六丈ばかりの卒土婆、二基あり、

『扨ても、屈竟なる橋板こそあれ、イザヤ、引き抜きて、



村雲橋
村雲橋は三井寺の山内に在り此れを渡りて進めば奥の院の金堂に到る。

渡さん』

二人、齊しく馳せ寄り、各〻小脇に抱へて、グツと引けば、あたりの土二三尺、ボカリと崩れて、卒土婆は、苦もなく、抜けぬ。

二人、輕々と提さげて、堀端に、突つ立つ、

『異國の樊噲、我朝の朝夷奈三郎と雖も、爭かで、我等に及ぶべきや、見よや、城中の人々』

二基の卒土婆を、向ふの岸に架せば、畑六郎左衛門時能、亘理新左衛門忠景の二人、見て、莞爾と笑む、

『御邊等は、橋を架すの判官ぞ、我等は、橋を渡りて、戰はん』

と言ひも終らず、一散に、橋を馳せ渡り、堀際の逆茂木を取つて、抜き棄て〳〵、進んで、木戸の下に迫る。

敵兵、三方の矢間より、槍、長刀を、繰り出し〳〵て、突かんとす。

忠景、手を伸ばしては、引つ奪り〳〵、苦もなく、取つて棄つること、十六本。

時能、突と忠景を押し退けて、進み出で、足を擧げて、ドツシ〳〵と、木戸を、蹴上ぐること三度。

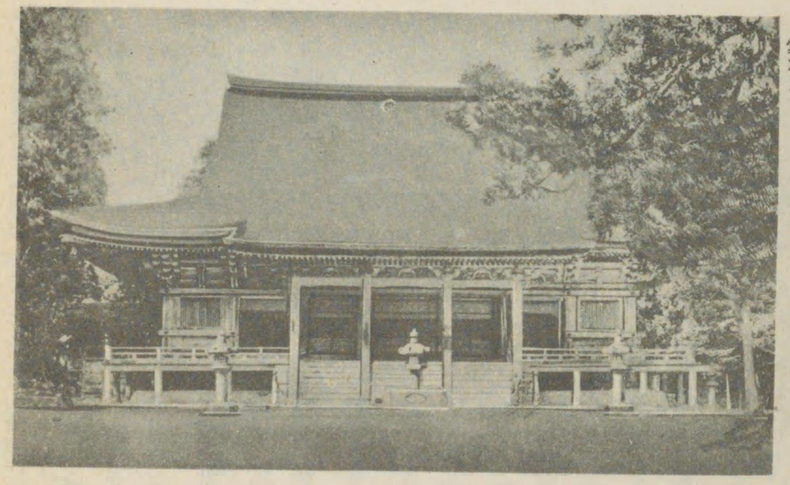
門、忽ち中より折れぬ、扉も、柱も、ハタと倒れぬ。

『ソレ入れや』

時能、透さず、突入すれば、忠景も、突進し、顯友、伊賀の二人も、亦、奮進す、鋭氣、當るべからず。

木戸を守れる敵兵五百人、膽、先づ落つ、

『ソレ引けや、叶はじ』



金堂
三井寺の奥の院金堂は中院の中央に在り實に一山の本堂たり。

バツと、四方に、逃げ散ずれば、義助、衆を率ゐて、突入し、義貞も、亦、續いて突入し、火を放つて、堂宇を燒き拂ふ。

黑煙、忽ち半天に渦卷き騰る。

搦手に廻はれる山門の大衆、遙に望み見て、勇み立ち、

『追手は、早、敗れし

ぞ、進めや進め』

先を爭うて、攻め登り、院々谷々に、亂れ入りて、火を放つ。

火のなき方には、敵あり、敵なき方には、火あり、賊兵、皆、遽てふためく、

『所詮、逃れぬ所ぞ、捕へられて、恥を莫搔きそ』

火に投じ、腹を切つて、死するもの、七千三百餘人。

定禪等、今は、防ぎ戰はんやうもあらず、辛くも、一方の血路を開きて、山科の方へと、走り退く。

塔影、盡くる處、雲影、自から迷ひ、磬聲、絕ゆる處、風聲、自から咽ぶ、靈區福地、哀れ一片の焦火と化し去りぬ。

東山

新田義貞陣營の地

京都の東方、卽ち洛東の地を、東山、又は、白河と稱すれども、概して、其北部を、白河と謂ひ、南部を、東山と稱するもの丶如し。

花頂山は、東山の一嶺にして、圓山公園、及び東大谷の東に在り、中世、其北麓に、華頂院ありしが故に、此名あり。

將軍塚は、華頂山の南に連なり、靈山は、將軍塚の南に接す、其背後は、東國街道にして、三條筋に通ず、之れを粟田口と謂ふ、京都の東の入口なり。

新田義貞は、此東國街道より、花頂山に登り、脇屋義助は、將軍塚に登り、京都の市街に臨みて、陣營を張りたるなり。

一

官軍、一擧して、三井寺の敵を攘ふ。

北畠中納言顯家、遠征に次ぐに、激戰を以てし、兵疲れ、馬勞る丶の故を以て、軍を拔きて、東坂本に還る。

新田左兵衞督義貞、亦、師を收めて、續いて、歸らんとす、突と進んで、其馬を控へたる舟田長門守經政、

『戰の利は、勝に乘ずるに在りとこそ申し候へ、北ぐるを追うて、京中に押し寄せ、火を放ちて、敵勢を搔き亂し、出沒變幻、前に現はれ、後に顯はれ、縱橫奮戰、右を突き、左を擊ち候はゞ、敵兵、幾十萬ありとも、恐るるに足り候はず、運好くば、足利兄弟に近づきて、勝負を決する機會も候はん、唯、逐はせ給へ、敵も、未だ遠くは、遁げ候まじ』

と勸むれば、

『いしくも申しけるかな、我れも、さこそ、思へる所ぞ、さらば、逐へ』

義貞、決然として、令を下し、其儘、馬を進めて、逃げ行く敵を逐ふ、總勢三萬餘騎、由良、長濱、吉江、高橋の諸勇士、其先頭に在り。

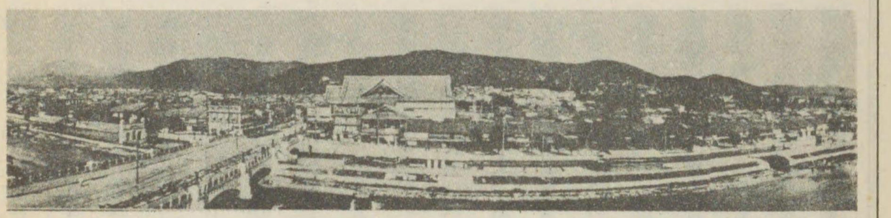
走るもの遲く、逐ふもの速く、見る〳〵、敵の背後に迫る。

『敵は多く、味方は少なし、返し戰はゞ、不利ぞ』

敵の廣場に在る間は、矢を放ち、鬨を作りて、緩く逐ひ、難處に懸かると見れば、馬を飛ばし、劍を揮うて、急に迫る。

敵兵、益〻狼狽し、死者を踏み越え、傷者を突き退け、甲冑、武器を委棄して走る。

走るもの、逐ふもの、相續いで、京師に入る。



東山　此れは賀茂川を隔て丶東山を望むの光景にして中央より稍〻左なる大橋を四條大橋とし橋の正面より稍〻左方なる兩山の間を粟田口となす。

二

足利尊氏、京師に在り、官軍、三井寺を攻むると聞けども、敢て驚かず、自若として、捷報の至るを待つ。

既にして、一道の黑煙、如意嶽の南より、渦卷き騰りて、見る見る、半天に充ち蔓る、此れぞ、正しく、三井寺の方位、

『扨ては、味方敗北せしと覺ゆるぞ、急ぎ加勢を遣はせや』

尊氏、俄に命を下して、援兵を派遣せんとし、其身も、亦、三條河原に出で丶、急に、人馬を召し集む。

忽ち見る、一陣の砂塵、天を捲くと見る間に、多數の軍勢、粟田口より、雲を吐くが如く、簇々

として、現はれ來る、

『這は、何者の手やらん』

尊氏、屹と、不審の眼を睜はれば、人は、創を負ひ、馬は、矢を負ふ、此れぞ、三井寺に遣はしたる四國、九國の軍勢、

『扨ては、早、後れたるか』

尊氏、今は、悔ゆれども、及ばず。

此間にも、敗兵は、千人、二千人、三千人、續々遁げ還り、走り還る。

最後の一隊は、二千騎ばかり、旗章もなく、笠驗もなく、法勝寺の前より、眞如堂の後より、二條河原に出でゝ、合圖と覺しき煙を揚げ、其儘、五十騎、六十騎に分れて、京兵の中に、紛れ入る、此れぞ、官軍の選りすぐりたる逞兵なりとは、誰か知るべき。

三

官軍は、二手に分れて、續いて、京師に入り、一手は、華頂山に陣し、一手は、將軍塚に陣す、中黑の旌旗、翻飜として、高く東山の巓に、鳴りはためく。

義貞は、華頂山に在り、高處より、敵陣を見渡せば、上は糺の森より、下は、七條河原に至るまで、人馬、充ち滿ちて、鎧色、日に輝き、旗影、風に閃く、

義貞の上より、下を見下す比、尊氏は、恰も、下より、上を見上げつゝあり、

『新田は、常に、平場の懸けをこそ、好むと聞け、斯くも、山を後に當てゝ、懸け出さゞるもの、一定、小勢の程を、敵に見せじとの用意にこそあるべけれ、疾く、馳せ向ひて、あれなる敵を、追ひ散らせ』

高越後守師泰を召して、ソレと命ずれば、

『承はり候』

と言ひも敢へず、相模、武藏の兵二萬餘騎を率ゐて、双林寺より、靈山より、二手に分れて、將軍塚に馳せ向ふ。

四

將軍塚には、脇屋右衞門佐義助、堀口美濃守貞滿、大館左馬助氏明、結城上野入道宗廣等、三千餘騎を率ゐて陣す。

賊軍押し寄すると見るより、屈竟の射手六百餘人を選つて樹陰に伏せ置き、其近づくを待つて、之れを射さしむ。

坂路、急なる處、馬蹄、自から緩し、射手、得たりと、鏃を揃へ、覘を定めて、差詰め、引詰め、透間もなく、射立つれば、千矢、萬箭、横さまに、飛び來つて、甲を貫き、鎧を洞き、馬腹に突つ立つ。

武藏、相模の兵、見る〳〵、馬上より射落され、跳ね落されて、此れはとばかりに、立ち竦む。

機は、今ぞ。

『アレ蹴散らせや』

三千餘騎の官軍、暴風怒濤の如く、驀然に山上より、馳せ下りて、無二無三に、突き立て、驅り立つれば、師泰の兵、寸時をも支へ得ず、忽ちサッと崩れて、五條河原に引き退く。

杉本判官高包、曾我二郎左衞門以下、討たれ死するもの若干。

官軍、敢て尾擊せず、其儘、留まりて、東山の麓に陣す。

戰端、忽ち搦手より開く。

華頂山の官軍二萬餘騎、轡を並べ、蹄を揃へ、颯と馳せ下りて、雲霞の如き敵の群中に、突き入り、突き進み、見る見る、一角を突き崩して、又忽ち颯と引き揚ぐ、進退駈引、臂の指を使ふが如し。

尊氏、諸軍を指揮して、此れに當る。

賊軍、兵衆く、尾大にして、振はず、皆、思ひ〳〵に進み、手に〳〵に退く、號令、普く徹せず、意氣、自から合せず。

官軍、攻めては、又去り、寄せては、又返すこと數度。

賊軍の陣中陣後、俄然として、動搖し、混亂すると齊しく、咄喊の聲、劍戟の響、其處にも湧き、彼處にも起りて、波瀾は、外へ〳〵と擴がり、渦紋は、中へ〳〵と卷き行く。

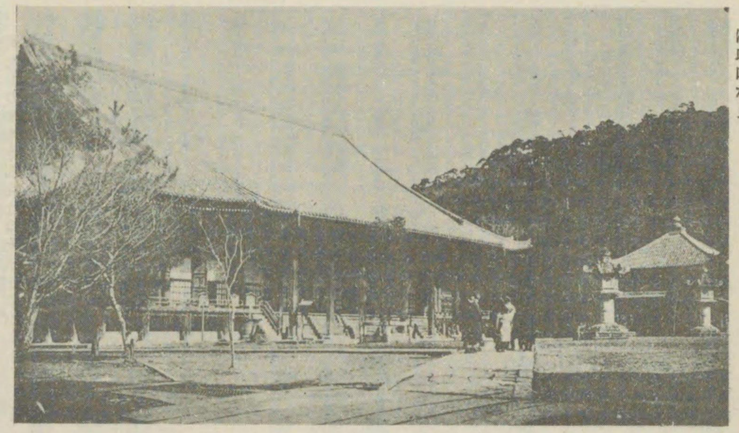
此れぞ、賊中に紛れ入りたる官兵、機を見て、一齊に、蹶起せるもの。

一團、二團、互に呼應し、大群、小群、各〻奮起して、東西南北、前後左右、當るに任せて、斫り立て、薙ぎ立つれば、諸軍、錯愕狼狽、爲すべき術をも知らず、尊氏兄弟、

『扨ては、味方に、裏切者の出でしと覺ゆるぞ、油斷なせそ』

と呼ばり〳〵、眼を配りて、警戒すれば、諸將、互に疑ひ、迭に惑ひて、今は、敵を防ぐの心もあらず。

義貞、義助、ソレと見るより、猛然として、敵中に殺到し、



知恩院
智恩院は京都市東山區林下町に在り其上方の山を華頂山と曰ふ東山の一部なり新田義貞の陣したるは此山なり。

勢に乘じて、東より西、北より南と、縱横無礙に、突破すること、六十餘度。

高、上杉の面々、先づ山崎の方に走れば、吉良、石塔、仁木、細川の面々、亦、丹波の方に引き退く。

賊軍、終に總崩れに、崩れ走れば、尊氏兄弟、亦、丹波路を指して、落ち行く、

官軍の將士、意氣、虹の如し。

『足利逃すな、尊氏擊ち取れ』

兵を縱つて、追ひ擊つこと、頗る急なり、尊氏、勢窮まりて、自刄せんとすること、凡て三たび。

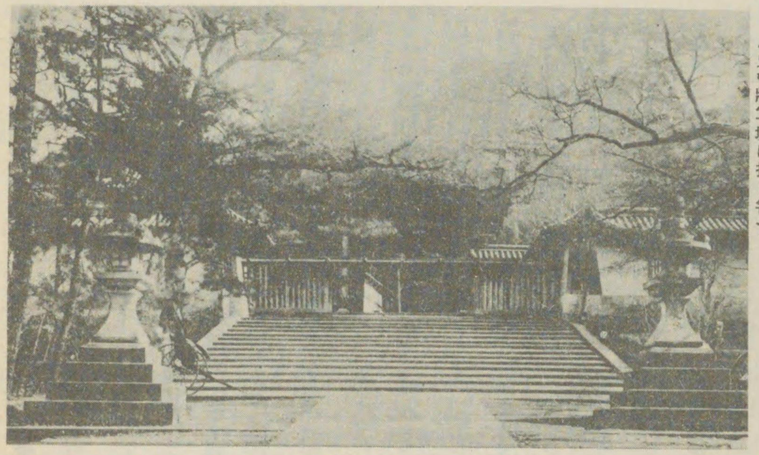
日、全く暮るれば、官軍、追うて、桂河に到りて、兵を班へす。

尊氏、纔に虎口を免かれて、松尾、葉室の間に、軍を駐む。

六

京師の敗戰は、三井寺の敗戰に基づく、細川律師定禪、其率ゆる四國の兵に向ひ、

『勝敗は、兵家の常のみ、何の意に介することやある、去りながら、今日の敗戰は、三井寺の合戰より、事起れば、諸將の非難も、世間の誹謗も、皆、定禪の一身に集まらん、されば、花々しき一戰を遂げて、天下の人口を、塞がんとこそ、思ふなれ、新田の軍勢は、終日の合戰に疲れて、自在の懸引もなるまじく、其餘の敵兵は、民家の財寶に、目を眩れて、一所に在るべしとも思はれず、イザヤ人々、蓮臺野より、北白河へ出で、下松に控ゆる赤松筑前守の兵と、一手となりて、新田の勢に、一當て



東大谷
東大谷の本願寺別院は京都市下京區圓山町に在りて將軍塚の西双林寺の東に位す高師泰の一塚は此方面よりも將軍塚に押し寄す。

當て、見ん』

と言へば、部下、皆、勇んで、此議を贊す、定禪、乃ち伊豫、讃岐の兵の中より、三百餘騎を選りすぐつて、自ら之れを提さげ、北野の後より、上賀茂を經て、北白河に出で、糺の森に到りて、兵を分ち、下松、藪里、靜原、松崎、中賀茂等の民家三十餘ヶ所に、火を放ちて、擬兵を張り、一條二條の間に到りて、哄と、鯨波を揚ぐること三度。

官軍、果して、四散し、其營に在るもの、甚だ少なし、義貞、義助、一戰にも及ばず、匆々、坂本に引き揚ぐれば、處々の散兵、亦、慌てゝ、引き還る。

定禪、乃ち北白河、粟田口の邊に要擊して、船田入道義昌、大館左近藏人、由良三郎左衞門尉、高田七郎左衞門以下の勇士を討ち取ること數百騎。

會稽の恥辱、今や、忽ち雪ぎ得たりぬ。

定禪、乃ち急騎を飛ばして、勝を報ずれば、尊氏兄弟、復た京師に入る。

賊軍、一戰先づ敗る。

七

官軍、一たび、勝ちしも、又忽ち敗れて、未だ志を得ず。

嚮に、大智院宮、彈正尹宮を奉じて、東山道より、鎌倉に向へる洞院左衞門督實世、堀川中納言光繼等、兵二萬餘騎を率ゐ、正月二十日の夕刻を以て、東坂本に還り來れば、官軍の士氣、復た大に振ふ。

二十一日、官軍、急に、兵を進めて、京師を攻めんと議せしも、惡日打ち續くを以て、之れを見合はせ、期するに、二十七日を以てす。

諸軍、皆、前夜を以て、東坂本を發す。

楠木判官正成、結城上野入道宗廣、名和伯耆守長年は、三千餘騎を率ゐ、西坂を下りて、下松に陣す。

北畠中納言顯家は、三萬餘騎を率ゐ、大津を經て、山科に陣す。

洞院左衞門督實世は、二萬餘騎を率ゐて、赤山に陣す。

山徒一萬餘騎は、龍華越を廻りて、鹿谷に陣す。

新田左兵衞督義貞兄弟は、二萬餘騎を率ゐ、今道より進んで、北白河に陣す。

大手、搦手の總勢十萬三千餘騎、敵の覺るを虞れて、皆、篝火を焚かず。

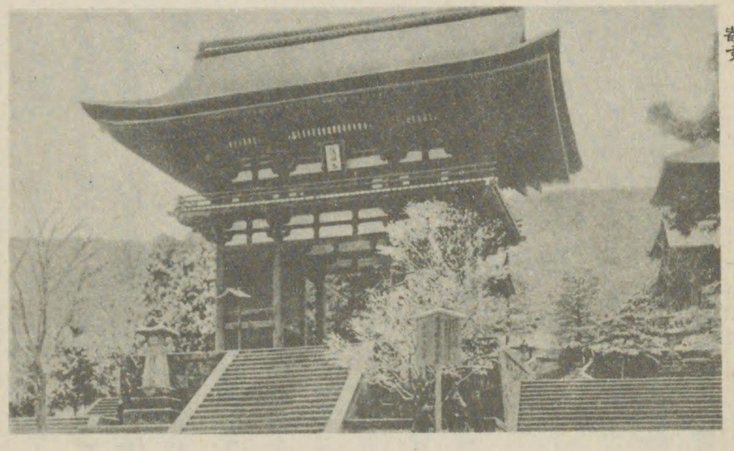
諸軍、二十七日の辰の刻を期して、一齊に、攻擊を開かんとす。

八

宇都宮治部大輔公綱、紀清兩黨を率ゐて、神樂岡を保つ、濠を鑿ち、樓を構へ、木戸を設けて、嚴しく、之れを守る。

山徒、皆、血氣に逸りて、功名を貪り、卯の刻を以て、早くも、神樂岡の木戸口に押し寄せ、哄とばかりに、鯨波を揚ぐ。

其先に進みたる助註記祐覺の三百餘人、樓上より、木石を投げ懸けられ、浴せ懸けられて、忽ち走り退けば、南岸圓宗院の五百餘人、入り替りて、攻め寄せ、押し寄す。



清水寺
清水寺は京都市東山區松原通清水に在りて靈山の南に當る高師泰の一隊は此方面より將軍塚に押し寄す。

賊軍、事ともせず、鏃を揃へて、雨の如く、霰の如くに、注ぎ懸くれば、僧兵、持楯の陰に隱れて、頭をも擡げ得ず、

『新手、來り替れや』

と麾ねく、忽ち應と答へて、現はれ出でしは、三塔第一の荒僧全村、切岸に、突つ立ちつゝ、

『如何に、城中の人々、此矢一つ進らせん、受けて御覽候へ、斯く申すは、妙觀院高因幡全村にこそ候なれ』

と言ひさま、背に負へる上差一筋を、拔き取り、樓の矢間を、目蒐けて、サッと、投げ付くれば、正鵠違ばず、其陰に立ちたる鎧武者に、ハッシと、突つ立ち、前より、後に、拔け通ること、二寸ばかり、アッとも言はず、樓の上より、轉げ落ちて、其儘、息絶ゆ。

賊軍、驚き怖れて、色めき立つれば、禪智房、護聖院以下一千餘人の僧兵、哄と喚きて、無二無三に突き入り、公綱の兵を、追ひ拂うて、代り陣す、是れより、全村を稱して、手撞の因幡と謂ふ。

戰端、先づ神樂岡より開く。

尊氏、聞きて、援軍を派遣すれども、既に及ばず。

九

楠木正成、結城宗廣、名和長年等の一軍は、下松より、糺の森の前を過ぎ、出雲路の邊に到りて、火を民家に放つ、尊氏、黑煙を望み見て、

『扨ては、神樂岡の山法師共とこそ覺ゆれ、急ぎ馳せ向つて、驅け散らせや』

と命ずれば、上杉伊豆守重能、畠山修理大夫國清、足利尾張守高經等、五萬餘騎を率ゐて、馳せ向ふ。

正成、智謀あり、豫め連楯數百枚を造りて、陣中に備ふ、開闔、意の如し、敵來れば、並べ立てゝ、其馳突を妨げ、敵去れば、折り疊みて、我れの進路を開き、逞兵五百餘騎を縱つて、突擊を加ふ。

賊軍百倍の大兵を以て、正成の小勢に突き立てられて、遠く五條河原の方に引き退く。

此時、北畠顯家の二萬餘騎、亦、粟田口より、押し寄せ來り、火を車大路の民家に放てば、尊氏、望み見て、

『あれこそ、北畠殿と覺ゆれ、尊氏、向はでは、叶ふま

神樂岡
神樂岡は京都市上京區吉田町の吉田山に在り官幣中社吉田神社の在る處是れなり後土御門天皇大元宮の勅額を賜ふ。

じ』

自ら數十萬の大兵を率ゐて、四條、五條の河原に馳せ向ひ、追ッつ、追はれつ、寄せつ、寄せされつ、入り替り、立ち替り、互に、死力を盡して、奮ひ戰ふ。

賊軍は、兵多しと雖も、戰ふもの少なく、官軍は、戰ふもの多しと雖も、兵少なく、交戰數刻、將も疲れ、馬も勞れて、各〻睨み合ひつ〻、暫し、人馬の息を繼ぐ。

折りもこそあれ、双林寺より、將軍塚より、法勝寺の前より、三隊の人馬、各〻中黑の旌旗を飜へしつ〻、二條河原に控へたる賊軍の眞横を、突き切つて　其背後に出でんとす、此れぞ、新田義貞、脇屋義助、及び堀口貞滿、大館氏明の三萬餘騎、

『素破や、中黑よ』

白河、鴨川、京中に、充ち滿ちたる賊軍、ソレと見るより愕然として駭き、皆、弓を棄て、矢を棄て、我れ先きにと、四方八方に、逃げ散ずれば、今は、誰一人、留まり戰はんとするものもなく、頽雪を打つて、ドウと、潰え走る、喚聲、叫聲、山河に轟きて、暴風、野を捲くかと思はるゝばかり。

義貞、俄に鎧を變へ、馬を替へて、唯一騎、敵中に懸け入り〳〵、尊氏を覓めて、彼方此方を馳せ廻はれど、終にソレと覺しきものも、見當らず、早、日も昏れんとすれば、

切齒しつ〻、空しく、引き返す。

官軍、一呼して、大敵を擊破し、意氣、昂然として、天を衝く、正成、義貞の前に出で〻、

『今日の一戰に、八萬の大敵を、逐ひ拂はせ給へりとは申せ、さして、討たれたる敵もなく、落ちたる敵の行衞も、知れ候はず、味方、僅かの小勢を以て、京中に留まり、特には、其財寶を目蒐けて、四散したる虛に乘じ、敵、又前の如くに、取つて返す程ならば、味方、忽ち敗れて、再び敵に氣勢を添へんは、必定に候、今日は、此儘、引き返して、一日、人馬の足を休めさせ給ひ、明後日あたり、更に、押し寄せて、嚴しく、攻め立て候はゞ、敵を十里、二十里の外に、逐ひ卻けんこと、何の難くや候はん』

と說く、前鑑、遠からず、近く數日の前に在れば、義貞、之れを然りとして、輕く軍を東坂本に引き揚ぐ。

尊氏、丹波路に退かんと欲し、往きて、寺戸の邊に在り、官軍悉く引き去ると聞きて、復た京師に入る。

賊軍、再戰又敗る。

寺戸は、山城國乙訓郡向日町に屬し、大字雞冠井の北、物集女の南に在りて、久世村の西に位し、京都よりは西南、伏見よりは西方に當る、古時、長岡寺の在りし地なるを以て、寺所と云ひしに、後、寺戸と書するに至りしものなるべし。

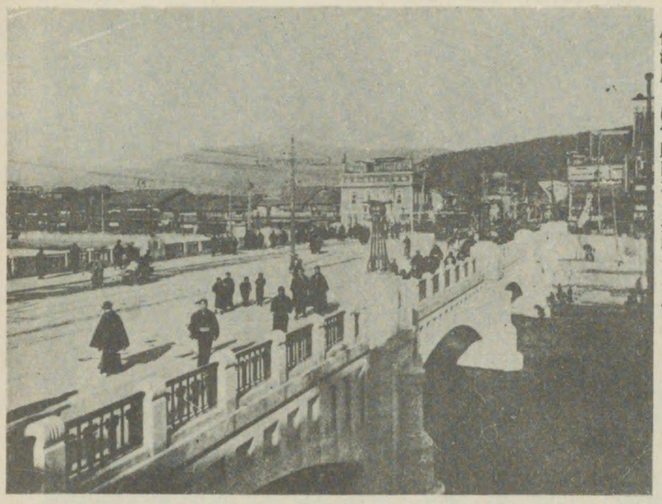
寺戸は、京都より、山崎に至る途にして、丹波に通ずる路にはあらず、京都より、丹波の篠村に至るには、西七條より、桂河を渡りて、老坂に出づべきに、足利尊氏の遁れて、寺戸に到りしと云ふを見れば、西八條の邊より、頽れ落つる敗兵に押されて、此地に來りしものにして、此處より、更に、丹波に落つる積りなりしなるべし。

＋

今日は、正月二十八日。

戰後の春は、風の音も腥く、瀨の聲にも哀みあり、二三十人の律僧、洛中洛外、其處此處と、歷巡りて、彼れか、此れかと、將士の屍骸を搜し索むる體、尋常事とも覺えず、京兵、怪みて、故を問へば、律僧、泫然として、涙を垂れつ〻、

『昨日の合戰に、新田殿、北畠殿、楠木殿を始め、宗徒の人々、七人まで、討たれさせ給ひければ、供養の爲めに、御屍骸を搜し候ものぞ』



四條大橋
四條大橋は京都市四條通の賀茂川に架せらる此河原と五條河原とは官賊兩軍の交戰せる處。

と答ふれば、此事、其れより、其れに傳はりて、早くも、足利尊氏の耳に入る、

『敵は、勝利を得ながら、匆々に、引き揚げけるこそ、不思議なれと存じたるに、扨は、然る仔細ありけるか、何處にか、其屍骸あらん、探し覓めて、獄門に梟けよ』

と命ずれば、賊軍の將士、俄に勇み立ち、手を分ちて、敵味方の屍骸を、選り分け〳〵、其れか、此れかと、檢べ見れども、終に其れぞと覺しきものも、見當らず、終に面影の似たる二つの首を、搜し索めて、獄門に懸け、一つには、

『新田左兵衛督義貞之首』

一つには、

『楠木河内判官正成之首』

と書きたる木札を、張り付く、緣日物の骨董ならねど、眞贋正否、一目にして、瞭然たれば、何者の戲なりけん、其札の側に、

『是はにた首なり、まさしげにも書ける虛事かな』

と書き添ふ、市民の集まり見るもの、之れを讀みて、皆、抱腹せざるはなし。

其夜の三更の比、二三千とも覺しき炬火の光、連々として、珠を聯ぬる如く、小原、鞍馬の方に、下り行く、京兵、遙に望み見て、

『扨ては、山門の敵共、大將を討たれて、力を落し、夜に紛れて、落ち行くにこそ』

と言ひ傳へ、語り傳へて、又忽ち、尊氏の耳に入る。

『さらば、人數を差し向けて、口々を塞げよ』

と命じて、鞍馬路へは、三千餘騎、小原口へは、五千餘騎、勢多へは、一萬餘騎、宇治へは、三千餘騎を遣はし、其他、嵯峨、仁和寺以下の各地へも、一千騎、二千騎と分泒して、京中に留まるもの、何程もあらず、其れさへ、今は、心を縱して、些の警戒をも加へず。

何ぞ知らん、是れ　皆、敵を紿かん爲めの楠木正成の奇計ならんとは。

十一

賊軍は、冉々として、京師より、各地へ移動しつゝある間に、官軍は、徐々として、西坂より、京師に進軍しつゝあり。

其夜の中、八瀨、藪里、鷺森、下松に着したる諸將、二十九日の卯の刻、皆、一手となりて、二條河原に押し寄せ、在々處々に、火を放ちて、哄と鯨波を揚ぐ、喊聲、山に響き、黑煙、天を掩ふ。

『素破や、敵ぞ』

賊軍、不意を打たれて、錯愕狼狽、措く所を知らず、今は、防禦の事をも忘れて、皆、思ひ〳〵に、落ち行く。

西に走るもあり、南に逃ぐるもあり、姿を變じて、竄るもあり、尊氏は、復た丹波路を指して奔る。

官軍、好き程に、追ひ捨てゝ、引き返へせば、前者は、後者を見て、追兵なりと思ひ、後者は、又後者を見て、追兵なりと思ひ、走り〳〵て、止まる所を知らず、勢窮まりて自殺するもの、數を知らず、父子、思ひ〳〵に奔り、主從、離れ〳〵に遁れて、互に、生死をも知らず、行衛をも知らず。

賊軍、三戰又々敗る。

十二

此日、尊氏は、丹波の篠村にも留まらず、曾地の內藤三郎左衞門入道道勝の館に入りて、馬を駐むること二日。

兵庫の湊川に落ち集ひたる諸將、尊氏の尾宅宿を過ぎたることを聞きて、意を安んじ、急使を馳せて、

『疾く〳〵、此れへ渡らせ給へ、頓て、人數を集めて、京師へ攻め上り候はん』

と促せば、尊氏、二月二日を以て、曾地を發し、其日、播磨の三草山に着す。

尊氏の侍僮藥師丸は、熊野山別當の子なり、隨うて、此地に來る、尊氏、乃ち其前に召し近づけて、密に、

『這度、京師の戰に於て、味方、常に、大兵を以て、敵の寡兵に敗るゝもの、是れ決して、戰の罪にあらず、唯、師に名なく、陣に旗なきに由るのみ、尊氏、亦、宣旨を奉じ、錦旗を揭げて、進まば、師に名あり、陣に旗あり、復た何をか畏れ、何をか憚からん、前代滅亡の後は、持明院殿の叡慮、定めて、御快よくも在はし候まじ、我れ、如何にもして、持明院殿の院宣を、申し賜はり、天下を、君と君との御爭となさんと思ふなり、汝は、日野中納言殿に、由緣ありと聞き及べば、是れより、京師に還りて、我が爲めに、院宣を請ひ奉つれ』

と告げて、藥師丸を還へし、三日、播磨の印南野を過ぎて、攝津の兵庫に抵る。

曾地は、丹波國多紀郡日置村に在りて、篠山町の東方二里ばかりの地點なりとす。

三草山は、播磨國加東郡上福田村大字三草に在り、加東、多可の郡界に當る。

印南野は、播磨國明石郡と、加古郡とに跨る原野にして、方三里に亘る。

以上の地理に據りて、考ふれば、足利尊氏は、京都西七條より、桂河を渡り、老坂を西に下りて、篠村をも過ぎ、龜岡をも過ぎて、曾地まで、落ち延び、其れより、篠山古市を經て、三草山に至り、更に、印南野より、明石を迂回して、兵庫に達したるものにして、京都より、兵庫までを、弓とすれば、尊氏は、滿月の如くに張りたる其弦の方を回りて、兵庫に到りしなり。

豐島河原

足利直義敗戰の地

攝津國豐能郡北豐島村は、西宮市より、山崎を經て、京都に通ずる西國街道に沿へる地にして、池田町の南、箕面村の西に位す、此地に、下河原と云へる處あり、豐島河原とは、卽ち此あたりを謂ふものなるべし。

西宮市の東北三里ばかり、芥川の西南五里ばかりの處に在り、延元元年二月、足利直義の官軍と戰うて、敗走せし處。

一

足利尊氏、遁れて、攝津の兵庫に來る。

赤松圓心入道は、朝廷を怨むの心深く、夙に尊氏に屬して、其軍を援く、此時、摩耶城より、來り謁し、

『當所は、要害の地に候はず、軍勢は、當所に置き給ひて、兩大將は、圓心の摩耶城に遷らせ給ふべし、摩耶と、當所とは、五十町に過ぎ候はず、緩急相應ずること、難くは候まじ』

と說く、座に一人あり、

『入道の意見、其理なきにあらずと雖も、唯、當所に關する利害に過ぎ候はず、去年以來、天下、二つに分れて、雌雄を爭へども、勝敗、未だ決せず、向背、未だ定まらず、將士、多くは形勢を觀望するの時に候、此場合に當り、唯、一夜にても、城に籠らせ給ふと聞え候はゞ、大勢、忽ち敵方に歸し候べし、眼前の事より、始終の利こそ、大切に候へ、摩耶御動座の儀、某に於ては、然るべしとも存じ候はず』

と說けば、圓心、ハタと、膝を拍ちつゝ、

『當所は、要害の地に候はぬが故に、唯、愚意の在る所を陳じたるに過ぎず、如何さま、天下の形勢、人心の向背を考へ候はゞ、今は、假令、城に在はすとも、御出陣あるべき時にこそ候へ』

と述べて、其議を贊す、尊氏、乃ち兵庫の湊河に留まりて、兵を徵す。

敗兵來り集まるもの、忽ちにして、二十萬騎に達す、賊軍の兵勢、復た振ふ＝此に摩耶城とあるは、赤松城の事と知るべし＝

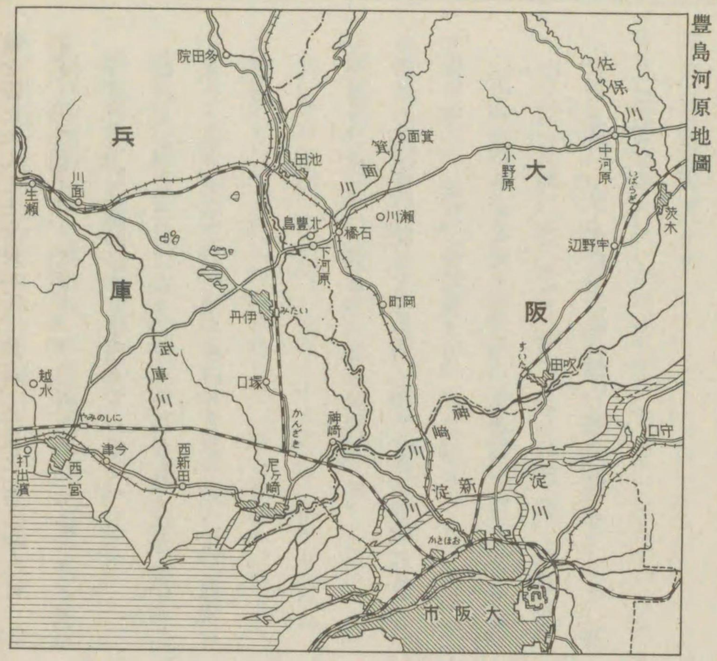
二

尊氏の兵庫に在るを聞くや、新田義貞、北畠顯家、進んで、之れを討たんと欲し、二月五日、兵十萬餘騎を率ゐて、京

師を發し、其日、攝津の芥川に達す。

事、兵庫に聞ゆ、尊氏、

『然らば、行き向つて、逐ひ拂へや』



豐島河原地圖

弟直義に命じて、迎へ撃たしむ。

直義、乃ち兵十六萬餘騎を率ゐて發し、六日己の刻、豐島河原に到りて、兩軍、ハタと行き逢ふ、

『素破や、敵ぞ』

双方、互に陣を張り、隊を整ふ。

北畠顯家、眞先に進んで、戰を開き、喚き叫んで、奮ひ鬪ふこと數尅、忽ち敗れて、引き退く。

宇都宮公綱、新に降りて、官軍に屬す、手兵を率ゐて、代り戰ひ、二百餘騎を討たれて、亦、引き退く。

脇屋義助、二千餘騎を率ゐて、代り戰ふ、賊將仁木、細川、高、畠山の面々、前日の敗を雪がんと欲し、身を挺んで、奮鬪すれば、官軍の江田、大館、里見、鳥見の諸將、亦、命を棄てゝ、進み撃つ。

劍戟相摩し、甲鎧相觸れ、兩々相當りて、相下らず、日暮るれども、勝敗、尙、決せず、終に相引きに、引き退く。

楠木正成、後れ馳せに、馳せ來り、手勢七百餘騎を率ゐて、神尾の北の山より、敵營を襲ふ。

直義、人馬、皆、疲れて、意氣、復た振はず、且、敵に背

後を斷たれんことを畏れて、倉皇、兵庫に走り退く。

義貞、乃ち追うて、西宮に到りて陣す。

太平記には、楠木正成、神崎より、打ち廻りて、濱の南より寄せしとあれど、豐島河原は、海濱近き地にあらず、故に、濱の南より寄せしと云ふは、地利に合はず、又西源院本には、神崎を、神尾とすれども、豐島河原附近には、神尾と云へる地名は、見當らず、恐らく、此れは、神崎、鳴尾の誤なるべし。

按ふに、足利直義は、此時、豐島河原より退きて、西宮に、陣を取り居たるものなるべし。

新田義貞等は、軍を山崎街道より進めたれども、正成は、道を尼ヶ崎街道に取りて進み、少しく後れて、神崎、鳴尾に達し、濱の南より、西宮の陣を襲撃したれば、直義は、其退路を斷たれんことを恐れて、倉皇、兵庫に退き、義貞は、進んで、其跡の西宮に陣せしものなるべし。

此の如く、正成の直義を襲撃したるは、豐島河原にあらずして、西宮なりとすれば、此に始めて、太平記の「神崎より、打ち廻りて、濱の南より寄せし」と云ふの事實

會下山

會下山は神戸市夢野の南方を蔽へる高陵にして湊川の上流其東を流る、足利尊氏の陣せる魚御堂は逆瀬川の邊に在りとし稱せらるれども此會下山に在りしものならんと推想せらる。

に適合するにあらずや、梅松論に、尊氏と正成と、西宮濱に於て、戰へりとあるは、此時の事なるべきを信ず。

三

七日の朝、大船五百餘隻、舳艫相啣んで、西より、駛り來る。

『這は、

何處に來る船ぞ』

衆、皆、目を屬すれば、二百餘隻は、船首を轉じて、兵庫に入り、他の三百餘隻は、尚も、航行を續けて、西宮に着す。

西宮に着けるは、伊豫の土居通增、得能通繩、兵庫に入れるは、周防の大内豐前守、長門の厚東入道、前者は、官軍に屬し、後者は、賊軍に應ずるもの。

兩軍、新手の兵を得て、士氣、忽ち振ふ。

尊氏、乃ち大内、厚東の兵三千餘騎を、先鋒として、來り迫れば、義貞、亦、土居、得能の兵二千騎を、前線に備へて、迎へ擊つ。

兩軍、越水に於て、行き逢ひ、各々鯨波を合せて、進み戰ふ、土居、得能の兵は、義氣、金鐵の如し、

『今日の一戰に、勝利を失はゞ、河野の名折れぞ、進めや進め』

各々鋒を揃へ、刄を聯ねて、疾風の如くに、突き進む、鋭氣、當るべからず、賊兵、サッと、左右に開けば、側目も觸らず、ドッと、其中央を懸け拔く。

直義、時に、來りて、打出の宿の西端に在り、通增、通繩、

『葉武者共には、目をな懸けそ、唯、大將に組めや組め』

と呼はり〳〵、眞一文字に、直義を目蒐けて、突き入り、突き進む。

賊軍、押し隔て、押し隔てゝ、遮り戰ふ、官兵、事ともせず、尙も、突き破り、突き破りて、競ひ進む。

『這は叶はじ』

直義、馬を驅つて、遁げ奔れば、賊軍、今は、留まり戰ふものもなく、皆、先を爭うて、兵庫に遁げ還る。

四

尊氏、兵庫の魚見堂に在り、大兵を擁すと雖も、常に寡兵の爲めに破られて、意氣、特に振はず、今や、二たび戰うて、二たび敗れ、諸軍、倉皇として、奔り還れば、尊氏、愕然として、色を失ひ、復た策の出づる所を知らず。

官軍、若し長驅して、追ひ來らば、何を以てか、能く防ぐべき、今川五郎範國、側に在り、突と膝を進めて、

『今は、是非も候はず、此れにて、御腹召され候べし』

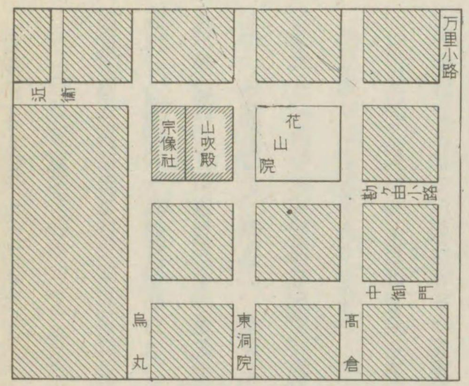
と勸むれば、諸將、亦、此れを贊して、切腹の着到を付く、

細川律師定禪、獨り之れを非として、

『此儀、然るべしとも存ぜず、疾く〳〵、九州に下りて、再擧を計らせ給ふべし』

と說き勸め、尊氏を扶けて、大友左近將監貞宗の船に乘らしむ。

時に、兵庫の津頭には、三百餘隻の兵船あり、將士、之れを聞くや、皆、我れも〳〵と、船に飛び乘り、飛び入る。



花山院地圖

兵は多く、船は少なし、後るれば、終に乘るべからず、士卒、他を突き退け、突き飛ばし、各々先を爭うて、殺到する狀、物悽きばかり。

一隻の大船、浪搖れ、舷傾きて、見る間に、ガブリと覆沒し、爲めに、魚腹に葬らるるもの、二千人。

『前車の覆へるは、後車の戒とは、正しく、此處ぞ』

眼前に、此光景を見たる他の諸船、急に沖合に、漕ぎ出だせば、乘り後れたる士卒、大に驚き、各々海中に飛び込み飛び込み、泳ぎて、舷に取り付く。

船中の人々、太刀を揮うて、容赦もなく、切り立て、薙ぎ立つれば、手は、船中に落ちて、身は、海中に落つ。

岸には、岸にて、自殺するもあり、耕刺するもあり、悲劇、慘劇、海にも起り、陸にも起る。

太平記に據れば、二月六日、豐島河原に於て戰ひ、七日、越水に於て戰ひ、八日、尊氏、船に乘じて、西奔せることになり居れども、梅松論には、尊氏、十日、正成と、西宮に戰ひ、十一日、義貞と、箕面村の瀨川に戰ひ、十二日を以て、西奔せしことになり居り、場所も、時日も、少しづゝ、相違すれども、彼此、同一の事實なることは、疑ふべからず、現に、太平記にも、

「矢種は、皆、打出、瀨川の合戰に射盡し……」

とあるを見れば、豐島河原の合戰は、瀨川と、下河原と

の間にて、行はれたるものなることを知らるゝなり。

五

尊氏、既に西に奔る。

義貞、乃ち降人一萬餘騎を率ゐて、京師に凱旋す、降人、皆、笠驗に、二引兩を附す、是に至り、其中間を、塗り潰して、中墨となす、墨色に、濃淡あり、塗抹の痕跡、歴々、辨ずべし、次の日、五條の辻に、高札を建て、

二筋の中の白みをぬりかくし
にた〳〵しげな笠じるし哉

との狂歌を書して、嘲けるものあり、二引兩は、足利氏の紋章にして、中黑は、新田氏の紋章なり。

正月晦日、官軍の賊徒を擊破して、京師を回復するや、主上、二月二日を以て、山門より、還幸あらせ給ふ。

二條の皇居は、賊軍、之れを燒燬せしを以て、花山院を、皇居に充てさせ給ふ。

是に於て、臨時の除目を行はせ給ひ、義貞を、左近衛中將に任じ、義助を、右衛門佐に任ぜらる。

天下、今や、小康を得たりぬ、此月二十五日、元を改めて、延元と號し給ふ。

六

尊氏の西に奔るや、正成、之れを追擊するの利を說く、

『機は、獲がたくして、失ひ易し、今、連捷の勢に乘じて、嚴しく、窮追すれば、賊首を得んこと、敢て難しとせず、若し、逗撓の間、賊勢、再び聚らば、大事、忽ちに去り候はん、臍を噬むとも、復た及び候まじ』

辭を盡し、理を盡して、百方、慫慂すれども、義貞、躊躇して、決せず。

世尊寺頭大夫行房の妹、殊色あり、宮中に入りて、勾當內侍となる、一夜、月に對して、箏を彈ず、流麗の聲は、鶯兒の花に謳ふが如く、玲瓏の曲は、明珠の盤に轉ずるが如し。

義貞、此夜、宮中に直し、私に偷み見て、思慕、措くこと能はず、主上、聞きて、憐ませ給ひ、車駕、京に還るに及び、義貞を召して、內侍を賜ふ。

義貞の感喜、如何ばかりぞ、伉儷、甚だ厚く、膠漆、離れがたく、終に正成の議に從はず。

吳竹の節は、勁きも、淡雪の力に撓み、項羽の心は、剛きも、虞氏の涙に挫く、義貞の逗撓、機を失するもの、時人、深く憾みとす。

內山館

少貳妙慧戰死の地

內山館は、筑前國筑紫郡太宰府町大字內山に在り、太宰府市街の東北、竈門山西南の山腹に位置す、少貳氏累代の居城にして、一に有智山とも書す、今、九重原と呼び、堀二重、土手二重あり、里人、今も、御館と稱す。

水城の渡は、筑前國朝倉郡蜷城村に在り、佐田川、桂川の二水、東北より來りて、千年川に入る、是れ卽ち筑後川の一名にして、村は、其北邊に在り、舊は、長田村と謂ふ、蜷城は、水城の轉訛なり。

宗像神社は、筑前國宗像郡田島村に在り、天照大神の御女三柱の神を齋き祀る、今、官幣大社なり。

芦屋は、筑前國遠賀郡遠賀川の河口に在り、今、芦屋町と曰ふ。

一

足利尊氏、海に航して、備前の兒島に抵る、從ひ來る船三百隻、兵七千騎。

石橋左衛門佐和義を、三石に留めて、京兵を支へしめ、細川律師定禪を、讃岐に遣はして、四國を徇へしめ、佐竹刑部大輔義敦を、常陸に遣はして、東國を計らしめ、高、上杉、仁木、畠山、吉良、石塔の諸將を率ゐて、西下す。

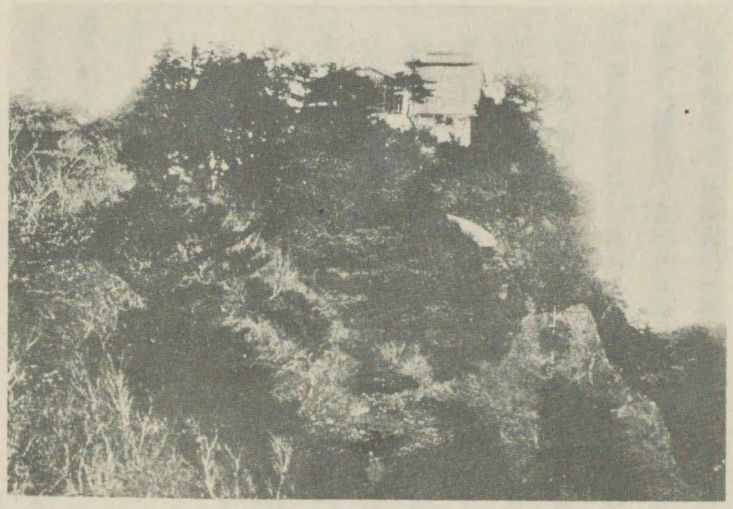
備後の鞆に達せし時、三寶院僧正賢俊、持明院の院宣を奉じて、下り著く、一軍、踴躍せざるはなし、尊氏、

『今は、朝敵の畏れあるべからず、皆、錦旗を揚げよ』

と告げ、使を馳せて、諸國の將士に知らしめ、尾道の淨土寺に到りて、兵を募り、二月十日、長門の赤間關に着し、南遠江守宗繼、豐田彌三郎光顯の二人を、筑前の太宰府に遣はして、少貳入道妙慧の援助を求む。

妙慧は、嚮に、菊池入道寂阿を賣りたる反覆の小人貞經なり、二使に對して、

『妙慧が一命のあらん限りは、粉骨候べし、御心易く思



竈門山
竈門山は筑前國筑紫郡御笠村に在り一名を寶滿山と謂ふ少貳覺惠の內山館は其西南の山腹に在りて地は太宰府町大字內山に屬す。

で、筑前の水城の渡に到る。

菊池入道寂阿の子掃部助武敏、尊氏を討たんと欲して、兵を募る、之れを聞くや、俄に三千餘騎を率ゐて、追うて、水城の渡に到れば、賴尙は、既に千年川を渡りて、彼岸に在り、畦籠豐前守の一手のみ、尙、此方に居る。

武敏、乃ち三方より、迫りて、河中に追ひ落さんとす、豐前守、今は、遁れぬ所と思ひ定め、兵百五十騎を率ゐて、敵中に突入し、縱橫奮戰して、皆、悉く斃る。

賴尙、船なくして、援うに由なく、空しく、切齒しつゝ、馳せ去る。

二

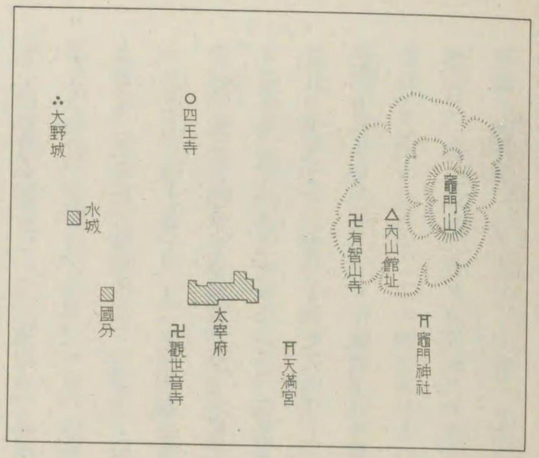
武敏、一擧して、敵を殲す、終に河を濟りて、進んで、少貳入道妙慧を、太宰府に攻め、火を縱ちて、之れを燒く。

妙慧、尊氏に贈らんと欲して、多く兵器糧仗を貯ふ、是に至りて、皆、灰燼に歸す。

妙慧、力、支へず、退いて、內山城を保つ、武敏、亦、追うて、之れを攻む。

城兵、纔に三百に過ぎずと雖も、城險にして、守堅し、武敏、新手を入り替へ〳〵、晝となく、夜となく、攻め立て、

內山館址地圖



攻め立て、少しの猶豫も與へず。

妙慧の女婿原田對馬守、城中に在り、二月晦日、俄に心を變じて、詰の城に引き上げ、使者を、妙慧の許に遣はして、

『我等、聊か所存の候へば、今より、宮方へ參り候なり、御同心あるべきにや』

と告げて、中黑の旗を押し立つ、外には、強敵あり、中には、反徒あり、今は、早、落城の外あるべからず、妙慧、

『老後の存命、無益ぞ、イザヤ、腹、切らん』

其儘、持佛堂に、走り入りて、腹を屠れば、一族郎等百餘人、堂の大牀に並びて、一齊に、腹を搔き切る。

妙慧の季子、僧となりて、宗應と號す、薪を積み、火を點じて、父の遺骸を、荼毘に附し、我身も、亦、火中に投じて死す。

此日、尊氏兄弟以下、船に乘じて、赤間關より、筑前の芦屋に渡り、妙慧入道の戰死を聞きて、皆、愕然として駭く、

『這は、抑も如何に』

今は、殆ど策の出づる所を知らず、斯かる折柄、筑前宗像の大宮司義俊、使者を以て、

『御座の邊は、分內、狹隘にして、軍勢の宿も候まじ、此れへ、御渡候て、勢をも召され候べし』

と申し入るれば、尊氏、大に喜び、三月朔日、賴尙を以て、先陣となし、進んで、義俊の宗像の館に入る。

足利尊氏の九州落の事實に就きては、諸書に記す所、同じからず、太平記には、赤間關より、筑前の多々羅濱に着し、其れより、宗像に到りて、使者を、少貳妙慧の許に遣はしたる爲め、太郎賴尙を、差遣はせる事になり居り、梅松論には、少貳賴尙は、二月二十五日、迎ひの爲め、赤間關に赴き、二十九日、此地を出發、內海の行程

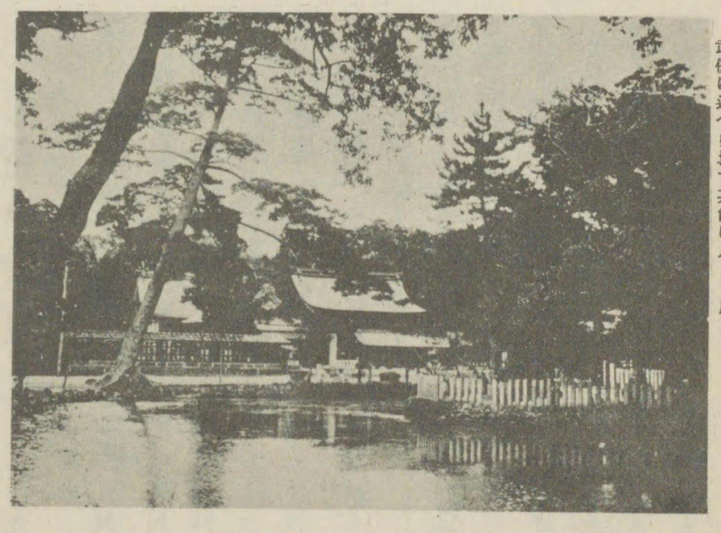
一日にして、筑前の芦屋に着し、此處にて、妙慧の自害せしことを聞き、其翌三月朔日、賴尙を、先陣として、宗像に赴ける事になり居れり。

菊池武敏は、賴尙を、水城の渡に破り、進んで、內山館を攻めたるものなれば、其賴尙を破れるは、二十五日以前の事ならざるべからず。

以上の事實を湊合し、且、地理と、時日とを參酌して、考ふる時は、尊氏は、二月二十日、赤間關に着するや、使者を、太宰府に遣はして、援助を、妙慧に求めたるものにして、是れは、二十二日頃の事なるべし、當時、賴尙は、筑後に在りしが故に、使を遣はして、尊氏を迎へんことを命じたるものなるべく、菊池武敏は、早くも、之れを聞きて、其途中を討たんと欲し、追うて、水城の渡に及べるものなるべく、地理上より推して、然らざるを得ざる所、此れが、二十四日頃なるべし。

賴尙は、其れより、直に赤間關に向ひ、二十五日を以て、其地に達す。

武敏は、又直に太宰府に押し寄せて、之れを燒き、更に、妙慧を、內山館に攻めたるものにして、此れが二十四日か、二十五日の頃なるべし、此れより包圍攻擊すること數日、妙慧の術盡きて、自殺せしは、晦日の朝の事にして、尊氏は、其日の夕方、筑前に着せしなり。



宗像神社
筑前國宗像郡田島村に在り官幣中社たり足利尊氏の大宮司武俊に迎へられて其館に入りし處。

尊氏の着津は、多々羅濱にあらずして、芦屋なるべし、芦屋は、赤間關にも近く、宗像にも近し、大宮司義俊の逸早く、使者を遣はして、自館に招きしも、是れが爲めなるべし。

是等の理由より推して、尊氏の九州落の事實は、大體に於て、本文の如くなるべしと考ふ。

內山館は、竈門山の西南の山腹に在りて、其西方に、有智山寺あり、梅松論には、妙慧が、宰府の館を退き、且

『疾く宰府の近き所、內山といふ山寺に馳せ籠りて、最後の合戰を、數刻致して、腹をぞ切つたりける』

とあれども、妙慧の居館は、卽ち內山の館にして、其奮戰したるは、此館なり、其自殺したる處が、山寺にして、卽ち有智山寺なり、太平記に、

『持佛堂へ走入り、腹かき切つて、伏しにけり』

とある持佛堂も、卽ち有智山寺なり、宗應は、此寺の住僧なりしなるべし。

多々羅濱

足利菊池會戰の地

多々羅濱は、筑前國粕屋郡に在りて、香椎宮以南、粕屋川以北の海濱を謂ふ、今、名島、津屋、八田、土井等を合せて、多々羅村と曰ふ、或は、鞴濱とも書す、博多灣に枕める地にして、福岡市より、北方に當る。

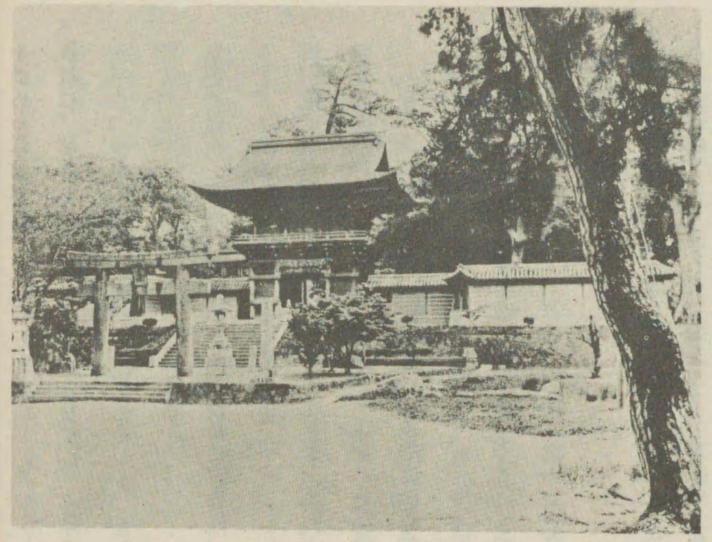
一

菊池武敏、既に少貳妙慧を攻めて、之れを滅し、兵勢、今や、益々振ふ。

賊魁足利尊氏、來りて、宗像に在りと聞き、直に兵を進めて、博多に到り、尙も、進んで、多々羅濱に向ふ。

尊氏、自ら迎へ戰はんと欲し、直ちに兵を率ゐて發す、少貳太郎賴尙、先鋒たり、進んで、香椎宮に到りて、前方を望めば、敵は、小川を越え、松原を負うて、北に向つて控ゆ、兵氣、黑み渡りて、四五萬騎もあらんかと思はるゝばかり。

顧みて、味方を見れば、僅かに千騎にも足らず、三面六臂ありとて、爭でか、能く敵せん、尊氏、意氣、頓に沮みて、復た鬪志なし、



香椎宮
官幣大社香椎宮は筑前國粕屋郡香椎村に鎮座ましまし多々羅濱の北方に在り足利尊氏の陣を置きし處。

『所詮、勝つべき見込もあらぬに、懇じ戰を開きて、雜兵共の手に懸からんより、潔よく、此れにて、自殺せんこそ、好けれ』

忽ち刀を拔きて、腹に立てんとすれば、

『ヤレ待たせ給へ』

矢庭に、其手を抑へたる直義、

『戰の勝敗は、勢の多少には由るべからず、漢高祖の滎陽の圍を出でし時は、纔に二十八騎に過ぎざりしも、終に項羽の強敵を滅ぼし、鎌倉右大將の杉山の圍を出で給へる時は、唯の七騎に過ぎざりしも、亦、平家の大敵を亡ぼして、天下を保ち給ひしに候はずや、況してや、此れは、千騎に近く、殊更、死生存亡を俱にせんと欲する一人當千の勇士に候、敵勢多しと雖も、何の畏るゝ所か候はん、唯、戰はせ給へ、直義先陣を賜はり候はん』

言葉を盡して、進戰の利を說けば、賴尙、亦、

『敵は、多勢に候へども、皆、御方へ參るべき者共にこそ候へ、御手に立つものとては、唯、菊池の手の者三百騎には過ぐべからず、賴尙、御前にて、命を棄て候へば、敵は、風前の塵の如くに、吹き拂はれ候べし、急ぎ御陣を進められ候べし』

と說けば、諸將、皆、此議を贊す、尊氏、屹と首を擧ぐ、

『さらば、戰はん、去りながら、我等、皆、死すれば、誰か志を繼ぐべき、先陣、利を失はゝ、尊氏、麾下の兵を以て、此れに續かん、イザさらば、左馬殿、先づ進み候へ』

と告げて、愈〻戰意を決す、此れぞ、士氣を勵まさん苦肉の策にやあらん。

二

事、此に決す。

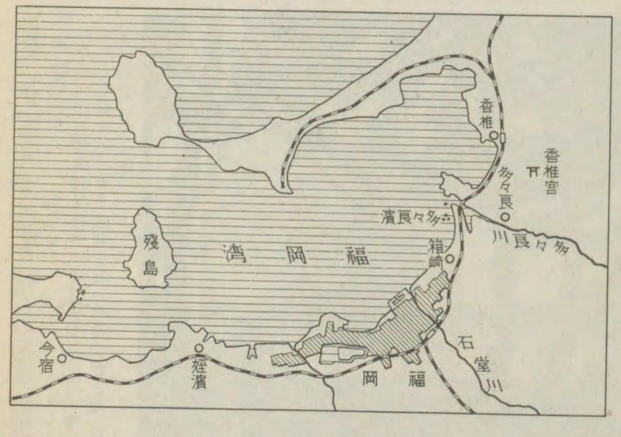
直義、先づ馬を進むれば、仁木右馬助義長、細川陸奧守顯氏、山名伊豆守時氏、高豐前守師重、南遠江守宗繼、上杉伊豆守重能、畠山阿波守國淸以下、附き隨ふもの、二百五十餘騎。

進んで、敵陣に近づけば、武敏の先鋒三千餘騎、海濱より、馳せ來り、先づ鏑矢を拔きて、兵と發つ。

戰端、此に開く。

されども、直義は、一矢をも送らず、馬を控へ、鳴を靜めて、動かず、松風、梢を拂ふの處、海波、岸を拍つては引く。

一騎あり、サッと、官軍の陣中より、跳り出で、砂塵を蹴立てゝ、驀地に、馳せ來れば、三士あり、突と、賊軍の陣中より、走り出でて、立ち向ふ。



多々良濱地圖

此れぞ、曾我左衞門、白石彥太郎、八木岡五郎と云へる面面、皆、鎧をも着せず、馬をも有せず。彥太郎、眞先に馳せて、手元に飛び込みさま、突と、足を捉へて、引き落さんとす、馬上の武士は、太刀を投げ棄て、一

反り反りて、腰刀を拔かんとする途端、ドウと、馬より落つ。

彦太郎、透さず、取つて押へて、首を掻けば、左衞門、其間に走り寄り、馬を取つて、ゆらりと、打ち跨がる、五郎、亦、逸早く、鎧を剝ぎて、肩に投げ掛け、三人、共に進んで、敵中に突き入る。

『味方討たすな、續けや者共』

仁木義長、馬を驅つて、馳せ進み、刀を揮うて、近づく敵兵五騎を倒し、六騎を傷つく、細川顯氏、山名時氏以下、

『味方討たすな、續け〳〵』

と呼はり〳〵、馬を驅つて、群がる敵中に馳せ入り、右に走り、左に奔り、縱横無礙に、奮ひ戰ふ、一以て百に當る。

會〻北風、俄に起りて、濛々たる砂塵、天地を掩ふ、旗は飛びぬ、竿は折れぬ、人馬、面を向くべくもあらず。

武敏の兵は、風下にあり、直義の兵は、風上にあり。

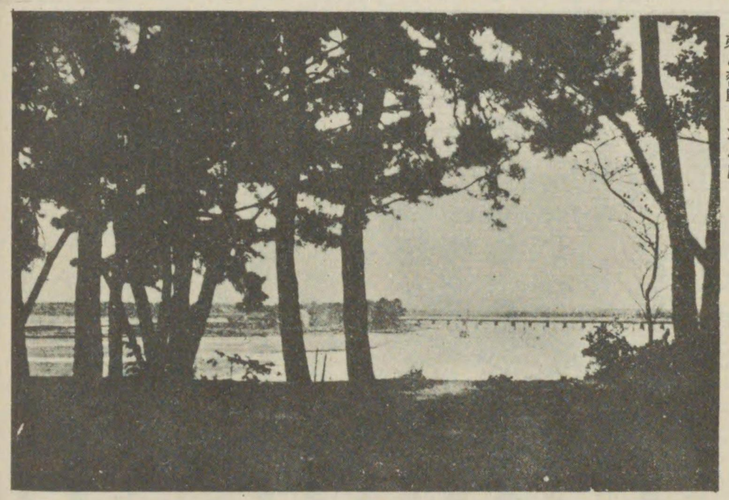
直義の兵、機に乘じて、突貫し來り、當るに任せて、縱横に、切り捲くる。

武敏、後陣に在り、人馬、雜然として、進むべからず。

風勢、益〻荒れて、岸を拍つの怒濤、韃靼として、千軍萬馬の寄するが如し、松浦黨、大に怖れ、忽ち甲を脫ぎて、賊に降る。

苦戰數刻、武敏の兵、終に敗れて、多々羅濱の干潟を、南に、走り退くこと、二十餘町。

直義、追うて、博多の洲濱に抵る。



多々羅川

多々羅川は筑前國粕屋郡多々羅村に至りて博多灣に注ぐ此川の南北の地を多々羅濱と曰ふ菊池武敏と足利尊氏兄弟と奮戰したる處。

勝敗の決は、此一擧に在り。

武敏、手勢を提さげ、猛然として、返し戰ふ、奮進突擊、生死を顧みず、當るに任せて、突き立て、薙ぎ立つ、鋭鋒、當るべからず、勝敗、忽ち地を易ふ。

直義、終に敗れ退き、松原の東の端を、二手となりて奔る、直義、使者を尊氏の陣に馳せて、

『直義は、此處にて、防ぎ戰ひ、御命に代り候べければ、其隙に、周防、長門の方に、御開きあつて、徐に後圖を運らされ候へ、此れは、直義が筐に候』

と告げ、錦の直垂の片袖を、扯き斷つて、贈れば、將士、皆、見て、涙を灑ぎつゝ、

『然らば、死せん』

慨然として、死を決す、時に官軍、三百騎ばかり、古びたる錦旗を揭げて、松原の北の端より、現はれ出で、進んで、小川を渡らんとす、此れぞ、卽ち武敏の一陣。

尊氏、乃ち迎へ戰はんとし、鯨波を作つて、馳せ進む。

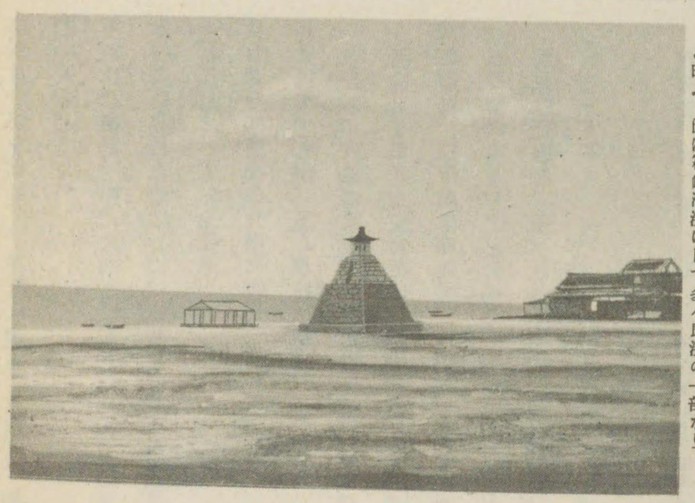
賴尙、先陣に在り、斯くと見るより、直義の前に進みて、

『今こそ、大將軍、御懸り候へ』

と呼はれば、直義、サツと、劍を拔きて、馳せ向ふ、義長以下、皆、奮然として、突進すれば、賴尙の老臣饗庭彈正左衞門尉、

『此處は、主公の御討死あるべき所に候はん、イザ、某こそ、御先を仕り候べけれ』

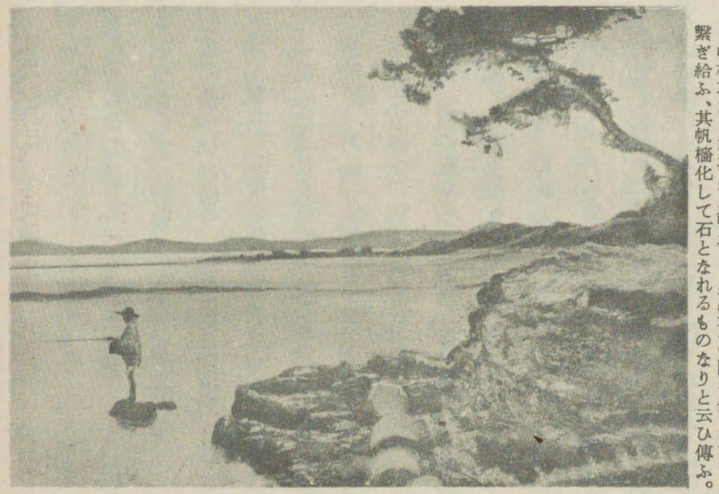
と言ひも終らず、父子、馬を驅つて、敵中に馳せ入り、死物狂ひに奮ひ



多々良濱　其一

筑前國粕屋郡多々良村に多々良川あり其南北を多々良濱と曰ふ、圖は箱崎海濱にして多々良濱の一部なり。

戰ふ、滿身、創を蒙りて、鮮血淋漓、湧くが如し。



多々良濱　其二
名島は多々良川の北に在り亦多々良濱の一部なり、海濱に帆柱石あり神功皇后韓土より御凱旋の際御船を此處に繫ぎ給ふ、其帆檣化して石となれるものなりと云ひ傳ふ。

直義の士卒、續いて進み、尊氏の士卒も、亦、進み、双方入り亂れて、追ひつ、追はれつ、喚き叫んで戰ふ。

武敏、後軍續かず、終に敗れて、筑後の黑木城に引き退く、時に酉の刻。

尊氏は、馬を進めて、箱崎に次し、直義は、進んで、太宰府に入る。

次の日、尊氏、亦、太宰府に入り、一色太郎入道道猷、仁木右馬助義長を遣はして、武敏を、黑木城を攻めしめ、唯、一日にして、之れを陷る。

武敏、乃ち豐後の日田に奔る。

是に於て、九州、悉く尊氏に屬す。

諸書に、武敏の兵を、四五萬騎とし、尊氏の兵を、三百騎にも足らずと記せるは、信ずべからず。す

武敏は、三千騎を率ゐて、內山館を攻め、館中の兵は、三百騎にも足らずと云へり、特に、數日に亘る城攻にて、双方の死傷も、多かるべければ、城陷りて、降兵を併せたりとするも、尙、三千騎の上を、多く越ゆることあるべからず。

戰勝後、來り屬するもの、多かりしとするも、二月晦日に、城陷り、三月朔日、二日に、早、四五萬騎に達したりと云ふは、事實に於て、有り得べからざることゝ思はる。

尊氏の兵は、赤間關に着したる時、五百騎ありしと云ふ、此れは、尊氏と離るべからざる一門、宗徒の者共なるべし。

賴尙は、尊氏を迎へん爲め、五百騎を率ゐて、赤間關に向へりと云へば、途中、水城の渡に於て、百五十騎を失へりとするも、尙、三百五十騎はあるべき筈なり。

さすれば、尊氏の兵と、賴尙の兵とを合せたる丈けにても、既に八百五十騎に達するにあらずや、此れに、宗像大宮司、其他の兵などを加ふれば、彼是、千騎にも達すべし。

太平記には、武敏の一陣を、三千騎となせる所あり、恐らく、此れが、其總勢なるべし。

されば、多々羅濱の戰爭は、武敏の三千騎と、尊氏の一千騎との對峙なるべく、決して、諸書に記せる如く、彼我の兵數に、格段の懸隔ありしものにはあらずと信ず。

白旗城址

赤松圓心籠城の處

白旗城址は、播磨國赤穗郡赤松村大字赤松の東嶺白旗山上に在り、峰巒、峨々として峙ち、老樹、欝々として聳え、千種川、淙々として、其麓を環流する處、今、尚、壘壁の跡を存す、延元元年、赤松圓心入道則村の叛旗を飜へして、足利尊氏に應じたる處。

赤松氏は、村上源氏なり、具平親王四世の孫季房、初めて、赤松庄に住して、赤松と稱す、其子季則、白旗山に築きて、此處に移り、其孫則景、佐用郡長谷高山城に移り住す、則村は、卽ち其五世の孫なり、其祖先季則の築きたる城郭は、既に頽廢に歸せしを以て、則村は、更に、再築せしものなるべし。

一

蛇を擊たば、其首を碎くべく、賊を討たば、其魁を斃すべし。

新田左中將義貞、足利直義の兵を討つて、之れを破りしと雖も、敢て窮追せずして、直に軍を班す。

尊氏兄弟は、終に筑紫に奔りて、捲土重來の計を運らし、其黨與は、亦、各處に據りて、東西響應の策を立てんとす。

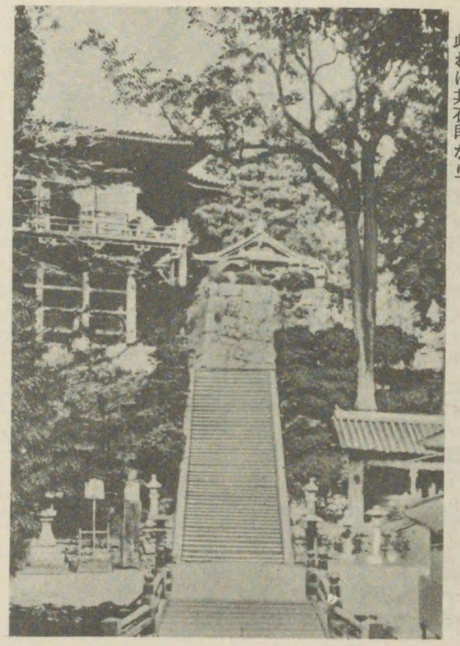
赤松入道圓心は、播磨の白旗山に、城郭を構へて、官軍の通路を塞ぎ、石橋左衞門佐和義は、備前の三石、甲斐河に、城砦を設けて、海陸の通路を斷ち、仁木左京大夫頼章は、丹波の賊兵に推されて、高山寺城に據り、美作の賊徒は、菩提寺城を築きて、此れに據り、備中の賊徒は、勢山を塞ぎて、東西の通路を斷つ。

備中以西の諸州は、言ふに及ばず、四國、九州の各地も、亦、自から半身不隨の狀態に陷りて、賊軍に應ずるものも、應ぜざるものも、勢、尊氏の旗風に靡くの外なき有樣とはなれり。

此事、頻々として、京師へ聞ゆれば、朝廷の驚愕、言はん方なく、

『此上、東國を敵となしては、叶ふべからず』

俄に義良親王を、陸奥太守に任じ、北畠中納言顯家を、鎭



書寫山
播磨國飾磨郡曾左村大字書寫にあり山上に天台宗圓敎寺あるを以て名高し此れは其石段なり。

守府將軍となして、奥州に下らしめ給ひ、新田左中將義貞を、山陰山陽十六箇國の管領となして、尊氏を追討せしめ給ふ。

是に於て、義貞、大軍を率ゐて、西下せんとす、會〻瘡病に罹りて、程に上ること能はず、先づ江田兵部大輔行義、大館左馬助氏明の二人に命じて、赤松圓心を討ぜしむ。

二人、乃ち兵二千騎を率ゐ、三月四日を以て、京師を發し、六日を以て、播磨の書寫山下に達す。

圓心、白旗城に在り、官軍の西下すると聞くや、急に播磨、備前兩國の兵を率ゐて、押し寄せ來る。

行義、氏明の二人、乃ち進んで、室山に迎へ擊ち、交戰數刻、終に、大に之れを破る、官軍の兵威、遠邇に振ふ。

二

播磨の捷報、京師に達す。

義貞、時に、疾、既に癒ゆ、乃ち兵五萬餘騎を率ゐて、西下し、播磨の加古川に次して、後軍の來るを俟つこと數日、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重等、三千餘騎を率ゐて、來り會し、攝津、播磨、丹波、丹後等の兵、來り屬するもの多く、終に、六萬餘騎に達す。

『然らば、赤松の城を攻め落さん』

義貞、乃ち白旗城を攻めんと欲し、兵を進めて、斑鳩に次す、圓心の使者小寺藤兵衞尉なるもの、來りて、義貞に謁し、

『元弘の初、圓心、不肖の身を以て、強大の敵に當り、萬死を冒して、京師を復し候へるもの、恐らく、無比の

勇戰、第一の忠節とこそ、存ずるにて候へ、然るに、其賞、其勞に値ひせず、却て、反覆不義の輩よりも、輕く、且、低きは、圓心の心私に慚憤に堪へざる所、終に積日忠戰の功を拋つて、一朝叛逆の弓を彎き候へるも、寔に運命の是非なき所にこそ候へ、去りながら、兵部宮卿の御恩は、生を換へ、世を替ふるも、忘じがたき所、爭でか、君に叛き、朝に背くを、心に快きと存じ候べき、若し綸旨に、御辭狀を副へて、當國の守護職を下し賜はらば、必ず、復た舊の如くに、忠節を勵み候はん』

と愬ふ、其申すところ、虛僞あるべしとも思はれず、義貞、乃ち

『其儀に於ては、仔細あらじ』

と告げて、藤兵衞尉を遣り還し、急使を馳せて、守護職補任の綸旨を請ひ奉つる、使者往復の間、十餘日に涉る。

此間、白旗城の工事、全く成る、今は、何どか、白旗を揭げて降らん、圓心、忽ち傲然として、

『當國の守護は、既に將軍よりこそ、賜はりて候へ、反覆の綸旨を得候へばとて、何かは仕り候べき』

斑鳩寺
斑鳩寺は播磨國揖保郡斑鳩村に在り此れは其三重塔なり此地は赤松圓心の使者を遣はして新田義貞を欺きし處。

と答へ、拒みて、受けず、虎狼の徒の下には、此狐狸の輩あり、義貞、勃然として怒り、

『君に事へて、君恩を忘れ、天を戴きて、天命を欺くもの、天人、爭でか、許さん、好し、其儀ならば、彼の城を踏み潰せ、幾日、幾月を要するとも、厭はじ』

即時に、令を全軍に下して、城を圍むこと數重、日となく、夜となく、矢石を飛ばし、鯨波を發して、攻め立て、揉み

立つること、五十餘日。

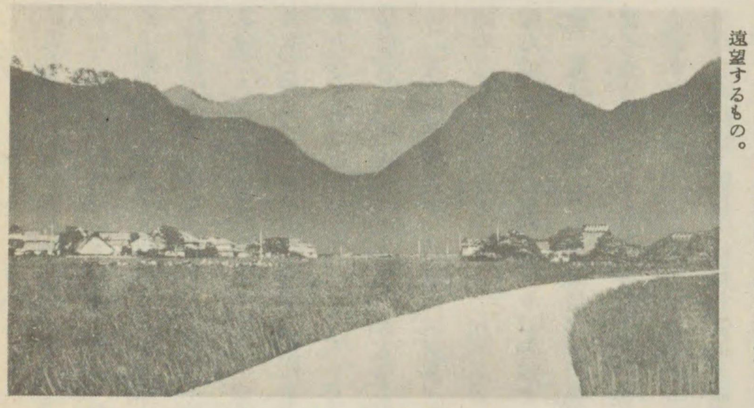
城險にして、兵勇み、糧給りて、水も、亦、乏しからず、將士、皆、殊死して、拒ぎ守れば、未だ城の一角をも、破ること能はず、脇屋右衞門佐義助、徐に義貞に向ひ、

『阿兄、彼の金剛山攻擊の事を見させ給はずや、相模入道、天下の勢を盡し、海內の力を合せて、孤城を攻むること數月、城郭、未だ陷らず、天下、早くも、既に覆り候はずや、曠日彌久は、徒に味方の力を勞らして、敵の勢を添ふるに過ぎ候はず、且や、尊氏、既に九州を平げて、不日、上洛するとの聞えも候、此處には、少しの勢を殘して、城を抑へ、其餘の勢を遣はして、船坂を拔き、備前、備中を略して、更に、備後、安藝、長門を徇へ給はんこそ、肝要に候へ』

と說けば、義貞、頻に頷く、

『此議、最も然るべし』

義助に、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武寅以下、兵二萬騎を附し、往きて、船坂山の敵を討たしめ、其身は、留まりて、白旗山の敵に當る。



白旗城址
白旗城址は播磨國赤穗郡赤松村大字赤松の白旗山上に在り壘壁の跡尙存す此れは白旗山を遠望するもの。

太平記には、宇都宮公綱と與に、加古川に來り、又船坂山に向へるものを、菊池次郎武季とすれども、菊池家譜には、武季の名なし、或は、武季の誤にして、武敏の事かと思はるるも、武敏は、當時、筑紫に在りて、尊氏と戰ひたる人なれば、京師に在らん筈なし。肥後守武重は、箱根に於て、公綱と先陣を爭ひたることも

あり、同時に、勇戰奮鬪して、公綱を感ぜしめたることもあれば、此れは、必ず、武重の誤なるべし、

舟坂峠

脇坂義助攻陷の地

舟坂峠は、播磨國赤穗郡船坂村大字梨原より、備前國和氣郡三石村に通ずる山道にして、山陽道第一の要害なりと稱せる、山陽鐵道の三石隧道は、其山腹を貫通せるものにして、其長六百間あり、如何に險要の地になるかは、之れを以ても、察すべし。

三石城址は、舟坂峠の西麓に位し、備前國和氣郡三石村大字三石に在り、伊東大和次郎の築く處、石橋左衞門佐和義の據りて、以て新田軍を喰ひ留めたる處。

熊山は、備前國和氣郡熊山村に在り、本莊村大字衣笠の西南に峙てる高嶺にして、和氣川、其西北を繞る、東は、伊里村の伊里山、三石村の八木山、及び播磨國赤穗郡鹽屋村の帆坂峠に連り、山勢崢嶸、五六里に餘る。

一

船坂山は、播磨、備前の國境に在りて、山陽道第一の險路なり、兩山、巍峨として聳え、一徑、羊腸として通ず、幽峽、雲湧き、霧起りて、膚、自から寒く、深谿、苔蒸し、石滑かにして、足も、定まらず。

坂路二十餘町の間は、賊軍、岩石を穿ちて、細橋を架し、大木を倒して、逆茂木を樹つ、實にや、一夫、途に當れば、萬夫も、進むを得ざる所。

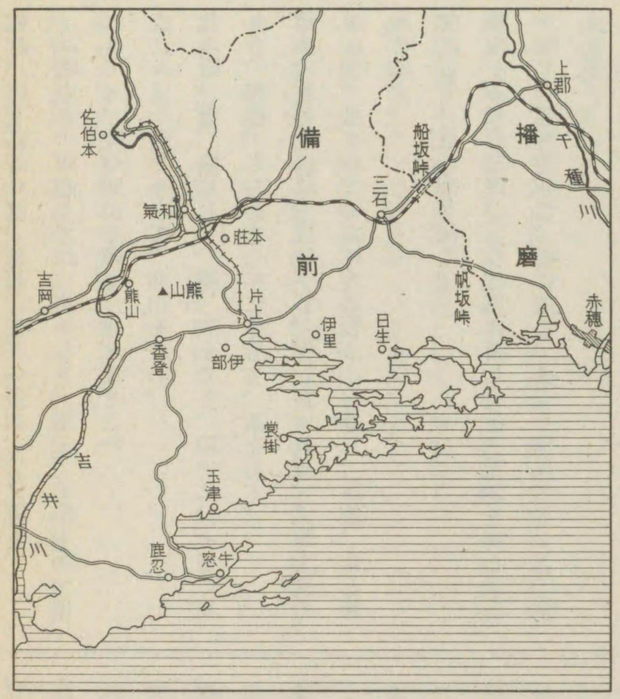
脇屋右衞門佐義助、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重、兵二萬餘騎を率ゐて、船坂山に向ふ、伊東大和守、頓宮六郎の二人、嚮導たり。

進んで、船坂山の東麓に抵り、仰いで、山上を望めば、秦嶺、雲は横らねども、家も見えず、藍關、雪は擁がねども、馬も前まず、左しもの勇將猛士も、毎日、唯、山を見上ぐるばかり、空しく、日又日を送る。

兒島三郎高德、備前に在り、去年、飽浦三郎右衞門尉信胤、田井新左衞門信尉高等の徒、峰起して、賊軍に應ずるや、高德、孤軍奮鬪すれども、兵少なく、勢續かず、終に敗れて、山中に匿れ、隱忍して、時機を待つ。

今や、官軍來りて、船坂山を攻むると聞きて、忽ち奮然として起つ、

『左らば、力を官軍に合はさん』



船坂峠及熊山地圖

急使を、義貞の陣に遣はして、

『船坂は、險峻の地にして、容易に、攻め落さんこと、叶ふべからず、高德、義兵を、當國熊山城に擧げて、敵兵を、此方へ分たせ候べし、其機を脫さず、御勢を、二手に分ち給ひて、一手は、船坂山に押し寄すべき勢を示し、一手は、三石山の南手の樵徑を經て、三石驛の西手へ出で給ふべし、敵は、前後を包まれて、進退度を失はんこと、必定に候、船坂の城だに陷らば、西國の軍勢、皆、御味方に、馳せ參じ候べし』

と告ぐ、義貞、大に悅びて、此れに從ひ、期するに、四月十八日を以てして、使者を遣り還へす。

是に於て、四月十七日の夜半、高德、俄に火を居館に縱ちて、義旗を揚ぐ。

事、急にして、遠地の一族に、報ずるの遑あらず、唯、傍近の同族のみ、馳せ來る、

『左らば、進めよ』

父備後守範長と與に、兵二百餘騎を率ゐて、熊山に登る。

強敵、脚下に起れば、船坂、三石の賊兵、大に驚き、

『國中に、敵起りては、由々しき大事ぞ、何事を扨て置きても、先づ熊山の敵を、攻め落せよ』

急に兵三千騎を分ちて、熊山を攻む。

熊山は、麓、險にして、嶺、平かなり、四方に、七條の道あり、高德、乃ち兵を七手に分ちて、敵を拒ぐ。

敵兵、攻め上れば、追ひ下し、押し寄すれば、又擊ち郤く。追ひつ、追はれつ、互に攻め戰ふこと終日、高德、熊と時刻を移す。

既にして、更、漸く闌く。

敵の士石戸彦三郎、山の地理に精し、兵二百騎を率ゐ、石を攀ぢ、谷を登りて、巔に達し、近づく儘に、ドツと、鯨波を發す。

高德、兵を諸方に分ちて、左右に、殘り留まるもの、纔に十四五騎、

『素破や敵ぞ、アレ追ひ散らせや』

各〻鋒を聯ねて、猛然として、敵を衝く。

森々たる樹影、月を礙へて、夜色、自から暗し。

高德、厲聲叱咤、士卒を鼓舞して、奮ひ戰ふ、一刄、暗中に閃くと見る中、忽ちグサと、內兜を突かれて、眞逆樣に、馬上より落つ。

敵の二騎、突と馳せ來り、刄を揮り上げて、首を斬らんとす。

高德の運命、今や、窮まる。

二

高德の二姪松崎彦四郎範家、和田四郎範氏の二人、見て、アナヤと驚き、奮然、馳せ進んで、忽ち敵を追ひ郤け、高德を馬上に、扶け乘せて、本堂に引き退く。

高德、頭部の創重く、且、胸部を、馬に踏まれて、目も眩れ、息も絕え、正體もなく、椽の上に橫はる、父の範長、突と枕邊に寄り進む、

『やよ三郎、斯ばかりの小疵一つに、怯むことやある、鎌倉權五郎景政は、左の眼を、射拔かれながら、三日三夜まで、其矢を拔かで、當の敵を、射殺したりとこそ、言ひ傳ふれ、此一大事を思ひ立てる身の、餘りと申せば、言ひ甲斐なきぞ』

聲荒らかに、言ひ懲らせば、高德、忽ちカツと、目を見開く、

『疾く馬に舁き乘せよ、イデ〳〵、敵を追ひ拂はん』

凜然たる語氣、垂死の人とも覺えず、範長、聞きて、悅ぶこと、限りなし、

『斯くては、大丈夫ぞ、イザヤ殿原、敵を蹴散らさん』

範家、範氏、及び今木太郎範秀、其弟次郎範仲、中西四郎範顯以下十六騎と與に、驀然として、敵を衝く。

夜、暗うして、人の多少も、見え分かず、

『扨ては、敵は多勢ぞ、疾く引けや』

石戸彦三郎、深く驚き怖れ、慌てゝ、南手の坂を、馳せ下りて、福岡に、引き退く。

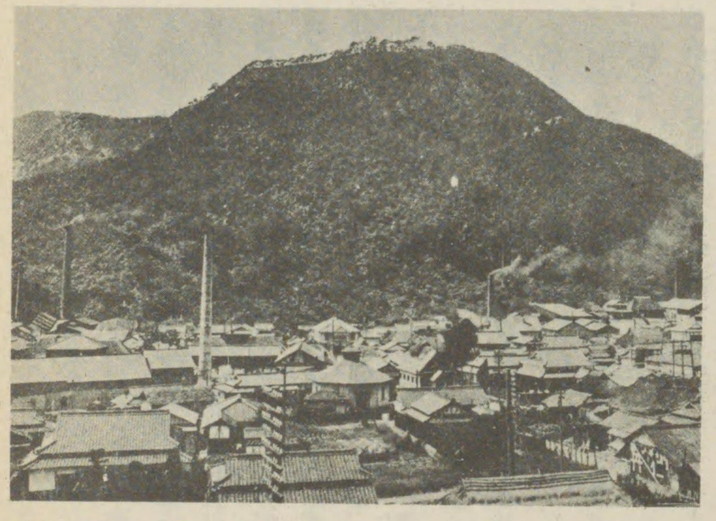
山上、山下、相持して、復た戰はず。

三

義助の軍は、播磨の梨原坂に在り。

期に至れば、二萬餘騎の兵を、三手に分ちて、三道より進む。

一軍は、江田兵部大輔行義、之れを率ゐて、帆坂に向ふ、其兵二千餘騎。一軍は、大江田式部大輔氏經、之れを率ゐて、船坂に向ふ、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重等、此れに屬す、其兵五千餘騎。一軍は、



三石城址　三石城址は備前國和氣郡三石村大字三石の山中上に在り地は舟坂山の西麓に位す此れは三石の市街を隔てゝ城址を望むもの。

畑六郎左衛門時能、由良新左衛門具滋、頓宮六郎、小寺六郎等の逞兵三百餘騎、三石山の西方に向ふ。

諸軍、各〻曉氣を冐して進む、此處は、官道も、間道の如く、間道は、鹿徑の如し。

時能、具滋等は、伊東大和次郎を嚮導として、道にもあらぬ道を、辿り〳〵て、三石山の南より進む、此れぞ、高德の敎へたる秘密の徑路、人は、旗を卷き、馬は、舌を縛す。

船坂城の賊兵、遙に望み見れども、怪まず、

『定めて、熊山の寄手の立ち歸るにこそ』

誰一人、官兵なりと思ふもの〻あらず。

時能等の一隊、難なく、進んで、三石驛の東端、夷社前に到り、旗を建て、鬨を揚げ、火を民家に縱ちて、兵勢を張る。

船坂城の兵、多くは、熊山に向ひて、殘り留まるもの、幾許もあらず、斯くと見るより、愕然として騷ぐ。

『扨ては、敵ぞ、這は〳〵如何に』

前後に、敵を受けて、策の出づる所を知らず、皆、馬を捨て、武具を捨て〻、復た誰一人、出で〻戰はんと思ふものもあらず。

『今は、心安し、疾く攻め寄せや』

時能、具滋等、追手、搦手より、攻め入れば、逃げ後れたる城兵、此處に隱れ、彼處に潛みて、捕へらる〻もの五十餘人、勢窮まりて、自殺するもの、亦、百餘人。

美濃權介助重、備前の一宮より、來りて、城中に在り、亦、自殺せんと欲して、俄に思ひ止まり、馬に乘じて、播磨に馳せ向へば、官軍、早、犇々と馳せ來る、助重、

『これは、搦手の案內者に候、合戰の樣を、委く大將に申入れんとするものにこそ候へ』

と言ひつ〻、官兵の間を、駈け拔けて、義助の侍大將長濱六郎左衛門顯寬の前に到り、

『これは、備前國の住人美濃權介助重と申すもの、船坂城より、降人に參つて候』

と申せば、顯寬、

『神妙候』

と告げて、著到第一に附く。

義助、乃ち進んで、三石城を攻め、行義は、美作を徇へ、

氏經は、備中に入りて、福山城を保つ。

福山城は、備中國窪屋郡山手村大字西郡に在り、後、幸山城と曰ひ、高山城とも書す、備後の福山城と同じからず。

備後の福山城は、元和五年、水野日向守勝成の此地に封ぜらる〻に及びて、築造せるものにして、此れを福山壽海の句に取る、初より、斯る地名ありしにあらず。

鞆津

足利尊氏軍議の地

鞆津は、備後國沼隈郡の東南偏に在りて、單に、鞆とも曰ふ、今の鞆町、是れなり、後に、丘陵を負ひ、前に、仙醉、玉津、皇后等の諸島を控へ、風波恬靜にして、夙に、風光明媚を以て著はる、上世より、南海、上國に通ずる要津にして、東西航通の船舶、多く輻湊す、神功皇后征韓の歸途、御船を繫ぎ給へる處、玉津、皇后等の島名は、此に基づく、福山市の東南三里の地に在り。

延元元年五月、足利尊氏の、筑紫より、海路、東上の途中、此處に寄航し、大に軍議を凝らしたる結果、軍を二手に分ちて、海陸兩道より、東進するに決したる處。

爾來、屢〻戰場となる。

一

足利尊氏、筑紫の太宰府に在り、旬月にして、九國、悉く其威風に靡く。

然れども、中國、未だ全く服せず、東國、亦、多く從はず、加ふるに、屢〻大軍を以て、寡兵に敗れたる苦き經驗あれば、急に京師に攻め上らんことは、兵も望まず、將も、亦、欲せず、

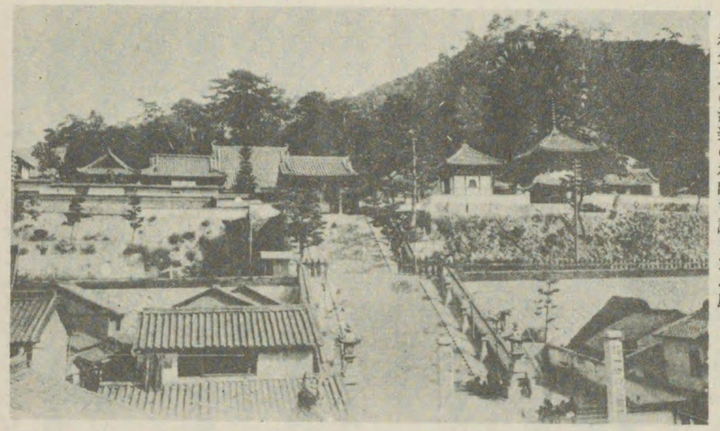
會〻赤松圓心の子律師則祐、及び其一族得平因幡守秀元の二人、圓心の命を受けて、播磨より、下り來り、

『新田左中將、大軍を率ゐて、播磨に馳せ下り、兵を分けて、白旗、船坂の諸城を攻め候へども、未だ一城をも落し得ず、兵は疲れ、糧は盡きたる折節にこそ候へ、此際、將軍大兵を以て、御上洛ひとだに承はり候はんには、一たまりも候まじ、若し御進發延引候て、白旗落城候は

ば、中國、四國は、悉く敵の手に落ち候はん、假令、何百萬の大軍を以てするもの、所詮、御上洛は、叶ふまじく候、疾く疾く、思召し立たせ給へ』

と陳べて、其進發を輙がす、石橋左兵衛佐和義、亦、備前より、使者を送りて、上落を促すあり、尊氏の意、愈〻決す。

『左らば、夜を日に繼いで、上洛せん』



浄土寺
浄土寺は備後國尾ノ道市の東端尾崎町に在り足利尊氏の法樂の和歌を詠じたる處。

仁木越後守義長に、少貳、大友の二人を副へて、留まりて、九州を鎭めしめ、四月二十六日を以て、太宰府を發し、二十八日、博多より、諸船、齊しく、纜を解く。

風位、順にして、船脚、疾く、五月一日を以て、安藝の嚴島に達す、山陰、山陽の兵士、馳せ來るもの、六千餘騎、中國、四國の兵船、來り屬するもの、五百餘隻、兵勢、益〻振ふ。

尊氏、乃ち嚴島を發して、備後國尾の道に航し、直に上陸して、復た淨土寺に宿す、寺は、轉法輪山大乘律院と號し、聖德太子の草創に係ると稱せらる、尊氏兄弟、其寺僧道謙、及び將士と興に、普門品會彼偈の句を分ちて、題となし、法樂の和歌三十三首を詠念ず、尊氏兄弟の作は、左の如し、

弘誓深如海　　尊氏
わたつみの深きちかひのあまねさに
　　頼みをかくる法の船かな

火坑變成池
定まれる姿の物になき故に　　直義

やすくや火をも水となすらむ

尊氏、乃ち自ら筆を執りて、之れを淨寫し、佛前に捧げて、武運を祈る、此眞蹟、今、尚、寺に藏す。

二

五月五日の夕、又進んで、備後の鞆に達す。

時に、新田左中將義貞の兵、播磨より、備前、備中、美作に入りて、諸城を攻むるとの聞えあり、尊氏兄弟、乃ち上陸して、軍議を開く、

『兩將共、此儘、海上より、此上洛あらせ給ふべし』

と言ふものあり、或は、

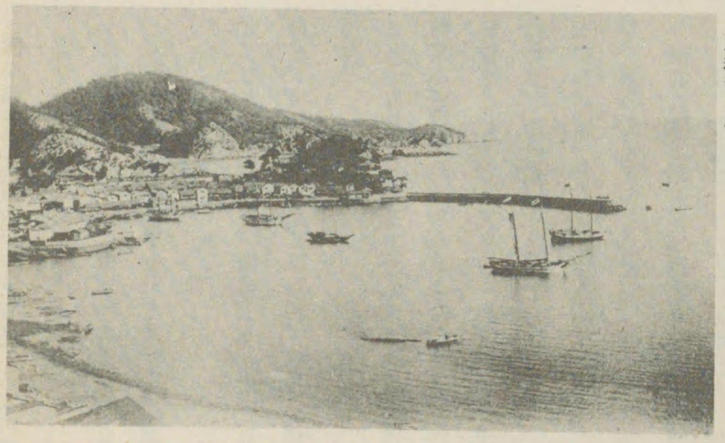
『兩將共、陸路より、御進發あらせ給はんこそ、然るべけれ』

と言ふものあり、或は、

『兩將は、海路より、御進發あらせ給ひ、四國、中國の勢は、陸路を押し上らんは、如何候ぞ』

と言ふもありて、議、未だ決せず、得平因幡守秀光、此時、膝を進めて、

『新田の軍勢、備前、備中、播磨、美作に充滿して、道道を塞ぎ、城々を攻め候からは、先づ以て、是等を御退治あらせ給はずんば、御方の不利に陷り候べし、且や、兩將一つに、海路御上洛の儀は、然るべしとも存じ奉つらず、將軍、海路より、御上洛あらせ給はば、頭殿は、陸路より、御進發あらせ給はんこそ、然るべけれ』



鞆港
鞆港は備後國沼隈郡鞆津に屬し尾ノ道と共に古來著名の港津なり足利尊氏兄弟の海陸二軍に分れて東進せる處。

と說けば、尊氏、

『此議、最も然るべし』

と述べて、此說に從ひ、左馬頭直義を、陸路の大將となし、高越後守師泰、及び九州、中國の兵、二十萬騎を率ゐて、進發せしむ。

九月十日を以て、海陸兩軍、俱に鞆を發す、船は、纜を解きて、東に向へば、馬は、轡と双べて、北に駛す。

十五日、尊氏は、進んで、備前の兒島に達し、直義は、備中の福山城に達す、互に烽火を揚げて、海陸の聯絡を取りつゝ進む。

福山城址

大江田氏經敗戰の地

福山城址は、備中國都窪郡山手村大字西郡に在り、中國街道の南方にして、倉敷市の北方に當る、輕部山、西に聳え、淺原峠、南に連なりて、險要の地を占む、後世、幸山城と稱し、高山城とも書す。

備中國吉備郡眞金村の板倉は、其東に在り、備前國御津郡一宮村の辛川、又其東に在り。

延元元年五月、大江田式部大輔氏經、此城を據守し、足利左馬頭直義の大軍を引き受けて、奮戰したる處。

一

大江田式部大輔氏經、備前より、備中に進みて、福山城に據る、城壁、未だ全く成らず、城兵、纔に千五百餘騎に過ぎず。

五月十五日、足利左馬頭直義、大軍を率ゐて、來り迫る、數里の廣原、兵ならぬはなく、旗ならぬはなく、茫々として動き、駸々として進む、白雲、峰を出づるが如く、怒濤、野を捲くが如し。

夜に入れば、篝火、數百ヶ所に起りて、遠きもの、近きもの、夏の夕の螢よりも多く、秋の夜の星よりも繁し。

『これは如何に、城は堅からず、勢は多からざるに、爭でか、此大軍に當り得べき』

城中の士率、此光景を望み見て、皆、呆れ驚く、氏經、

『戰の勝敗は、兵の多少に依らずとこそは言へ、此小勢を以て、大軍の敵に當らんに、千に一つも、勝たん理あるべからず、去りながら、氏經、足利の大軍を支へん爲めに、第一線に立ちつゝ、一戰をも交へずして、引き退かんと云ふは、如何あるべき、死を輕んじ、名を重んずるものをこそ、眞の武士と申せ、各〻屍を原野に棄てゝ、譽を子孫に貽さんとこそ、思ひ定められ候へ』

辭色、決然として、說き示せば、初より、一死を期して、官軍に屬したる勇士、皆、

『申すにや及び候』

言葉涼しく答へて、誰一人、城を落ちんとするものもあらず。

二

此處は、備前の兒島を距ること、三里に過ぎず、直義、乃ち使者を、尊氏の許に馳せて、

『播磨の赤松、備前の三石は、唯今、合戰最中の由、其聞えの候、福山の城には、大江田式部、大將として、立て籠り候へば、今夜、手分けの上、明日の拂曉、追ひ落して、火を揚げ候べし、彼の城と、御陣とは、其距離、遠からず候、御用心の爲めに、一使をこそ、參らせて候へ』

と報ず、直義の心に期する所は、

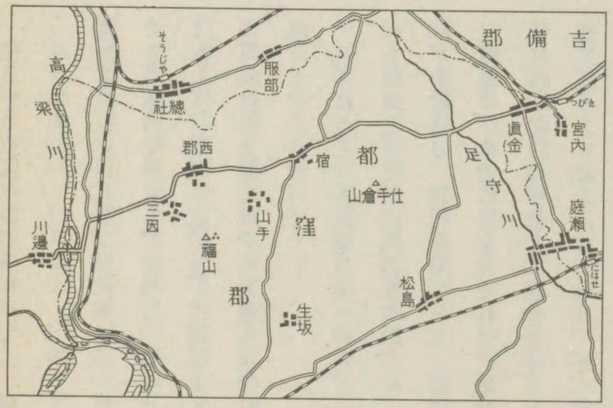
『此大軍を見なば、如何なる天魔鬼神と雖も、ヨモ、今夜の中に、落ちざることはあらじ』

と云ふに在り、天明けて、城上を望めば、篝火、既に絕えて、烟氣、颯からず、旗影、空く閃きて、人聲、として起らず、

『扨てこそ、敵は、落ち失せけれ』

備前、備中の兵三千餘騎、淺原峠より、犇々と押し寄

福山城址地圖



せて、楯を叩き、鬨を作ること三聲、各〻我れ先きに、塀を攀ぢんとす。

忽然として、鼓々たる鼓聲、東西の城門より起ると齊しく、喊聲、此れに和して、山に響き、谷に應ふ。

『素破や』

と驚く間もあらせず、矢石、雨の如くに、頭上より、降り懸かれば、寄手の兵、思はず、ドウと引き退く。

『左もこそあらんずれ、源氏の大將の籠りたらん城の、如何に小勢なればとて、ヨモ、聞き逃げはすまじと思ひけるが、果して、今に堪え居けるぞ、侮りて、過ちすな』

寄手の諸將、互に相戒めて、輕々しく進まず、城の四方を圍みて、諸軍一齊に、押し寄す。

待ち設けたる城兵、少しも驚かず、鏃を揃へて、引いては發ち、引いては發つ、萬矢、皆、敵に突つ立ちて、仇矢の過ぎん隙とてもあらず。

敵は、一矢をも放たざれば、城中、未だ一兵をも損せず、氏經、

『敵は、矢種を盡させん計略と覺ゆるぞ、左のみ精力の盡きざる前に、左馬頭の陣を、一散らし懸け散らさん、イザヤ來れ』

徒歩の兵五百餘人は、城に留めて、騎馬の兵千餘人を率ゐ、サッと城門を開きて、北嶺に、駈け登り、簇り集ふ敵中に、突入して、谷間に、駈け落し、蹴落すもの二萬餘人。

東の山の尾を望めば、二引兩の旗を立てたる一隊あり、氏經、

『あれこそ、左馬頭なるべけれ、イザヤ懸かれ』

忽ち猛然として、二萬餘騎の敵中に、突き入り、縱横無礙に、駈け崩し、駈け散らせども、終に其れと覺しきものも、見當らず、味方の勢を見遣れば、過半は、既に討たれて、餘す所、纔に四百餘騎に過ぎず。

遙に城の方を顧みれば、敵兵、早、乘り入りしと覺しく、櫓より、樓より、黑焔、高く渦卷き騰る、氏經、

『最早、合戰も、是れまでぞ、イザや、一方を打ち破つて、備前に歸り、三石、播磨の勢と、一つにならん』

殘兵を集めて、一團となし、板倉橋を渡りて、東へと落ち行く。

敵兵二千騎、三千騎、此處に遮り、彼處に支ふ、氏經、駈け散らし、突き崩し、板倉川より、辛川に至るまで、敵中を突破すること、十餘度。

十七日早曉、終に三石に達す。

直義、既に福山城を拔き、辛川宿に到りて、生虜、死首の實檢を行ひ、使者を馳せて、捷を兒島に報ず。

十八日、直義、辛川を發すれば、尊氏も、亦、兒島を發す。

三

脇屋右衞門佐義助、三石城を、圍み攻むること數日、城、未だ陷らず。

氏經、福山城より、敗れ還れば、義助、急使を、播磨に馳せて、狀を報ず、義貞、書を見て、沈思すること少時、

『敵は、水陸兩道より進む、我れ、此處に在りて、陸上の敵を防ぐ間に、水上の敵、進んで、京師を侵さば、由由しき大事なり、若かじ、陣を兵庫に引きて、水陸の敵を、併せ防がんには』

思慮、此に決すれば、其使者に託して、義助の退却を促がし、別に、急使を、美作に遣はして、江田兵部大輔行義の退陣を命ず。

是に於て、義貞、義助等、皆、退いて、攝津の兵庫に陣す。

六騎武者塚

和田範長自殺の地

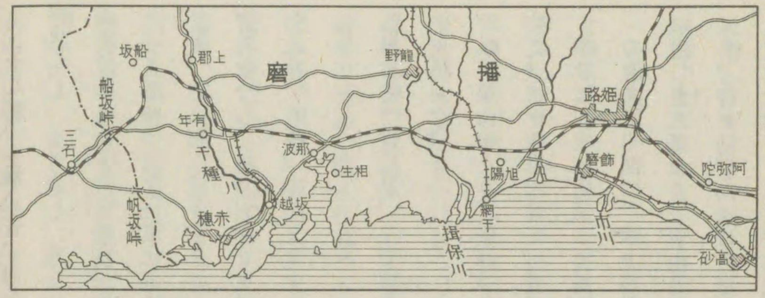
西川尻は、備前國岡山市の東部を流れて、兒島水道に入る旭川の西の川尻を謂ふ、卽ち御津郡福濱村の邊にして、大字濱野に、甲斐川城址あり、旭川は、一名を、西大川と曰ふ、甲斐川とは、其古名なるべし。

坂越浦は、播磨國赤穗郡坂越村大字坂越の海濱にして、相生浦の西隣に在り。

那波庄は、赤穗郡東端にある大邑にして、南に淺灣あり、相生浦の裏海にして、小艇の來往に便するに過ぎず、今、山陽鐵道の一驛となる。

阿彌陀宿は、印南郡阿彌陀村なり、古より、村に阿彌陀堂あるが故に、此名あり、此村の豆塚に、六騎武者塚なるものあり、俗に喧嘩塚と呼ぶ、此れを和田備後守範長

の古跡なりと稱す、範長の自殺したるは、卽ち此處なり。



船坂峠阿彌陀間地圖

足利尊氏の備前國兒島に次するや、飽浦三郎左衛門尉信胤、其一黨を率ゐ、船より上りて、三石城を援けんとす。和田備後守範長、兒島三郎高德の父子、之れを聞き、進んで、西川尻に陣して、此れに備ふ、會〻福山城の敗報を聞き、急に陣を撤して、三石に退けば、脇屋右衞門佐義助等、既に去つて、在らず。

『斯くては、船坂を通らんこと、叶ふまじ』

範長父子、三石山南方の樵徑を、辿り〳〵、夜を冒して、播磨の坂越浦に出づ。

高德、山野を馳驅して、創、

益〻劇し、範長、乃ち相識れる僧等に託して、發す。

天、既に明く。

赤松圓心の兵三百餘騎、出でゝ那波庄に在り、範長の過ぐるを見て、

『落人と見るは誰ぞ、命惜くば、弓を外し、物具を脫ぎて、降參せよ』

と呼ばはれば、範長、忽ちカラ〳〵と笑ふ、

『尊氏の、百方、我れを招けるさへ、其書を裂きて、火に燻べたるものを、何條、御邊達に降るべきや、物具欲しくば、取らさんずるぞ』

現兵八十三騎と與に、ドツと敵の正中を、突擊し、見る見る、十二騎を斬つて落し、二十三騎に、手を負はせ、圍を突き破つて、濱路を、東へ走る。

赤松勢、地理に精し、前へ〳〵と、馳せ拔けて、

『落人の過ぐるぞ、討ち止めや、物具剝げや』

と呼ばりつゝ、觸れ廻はれば、近鄕近在の土兵二三千、忽ち其處此處に、現はれ出でゝ、矢を放つ。

那波より、阿彌陀が宿のあたりまで、範長主從、返し戰ふ

こと十八度、士卒、皆、討たれて、殘り留まるもの、唯六騎。

範長、且ある辻堂の前に、馬を控ゆ、

『一族共を、打ち連れなば、播磨の國中を、蹴散らして、通らんものを、諸方に引き割かれて、一所に居らざりしこそ、遺憾なれ、今は、我が死すべき時ぞ、暫し敵を防ぎ候へ』

急ぎ馬より下りて、辻堂の中に入り、本尊に向ひて、念佛を唱ふること、二三百遍、頓て、腹一文字に、搔き切り、刀を銜んで、カツバと打ち伏す。

今木太郎範秀、和田五郎範氏等從士四騎、亦、續いて、自殺す、和田彦四郎範家、亦、自殺せんとして、忽ち思ひ返す、

『空しく死せんよりは、赤松の一族共の來るを待つて、刺し違へん』

刀を、逆手に、持ちつゝ、其場に、打ち伏して、自殺せし體に裝ふ。

斯かる所へ、手勢五十騎を率ゐて、馳せ來れるは、那波城主宇野孫左衞門次郎重氏、矢庭に、辻堂の中に、躍り入りて、敵の首を搔かんとし、其笠印を見て、打ち驚く、

『あら淺ましや、誰やらんと思へば、皆、親族の方々なりしぞ、斯くと知りなば、命に替へても、助けんものを』

拔ける刀を、投げ棄てゝ、涙を垂る、

『四郎、これに在り』

範家、忽ちガバと跳ね上れば、

『這は如何に、御邊は、四郎殿か』

重氏、其顏を見て、喜び、範家を助け、範長の屍を、荼毘に附して、遺骨を、故鄕に送る。

八十三騎の中、不思議の命助かるもの、唯一人。

櫻井驛

楠木父子訣別の處

櫻井驛は、攝津國三島郡島本村の大字にして、山崎よりは西南、芥川よりは東北に當る、山崎街道、卽ち西國街道の一驛にして、往時、京都より、兵庫に下るには、必

ず、通過すべき地點なりとす。

此地は、延元元年五月、楠木正成の兵庫に向はんとする時、父子訣別したる千古墮涙の史蹟なり、明治九年、有志相謀り、碑を建てゝ、之れを表し、時の大阪府權知事渡邊昇、「楠公訣兒之處」と題す。

大正二年、新に地域を廣めて、一大碑を建て、陸軍大將乃木希典の筆に係る「楠公父子訣別之所」の八大字を勒し、元帥載仁親王臺臨、手づから、楠樹を栽ゑさせ給ふ。

一

今や、賊の兇焰、西天を掩ふ。

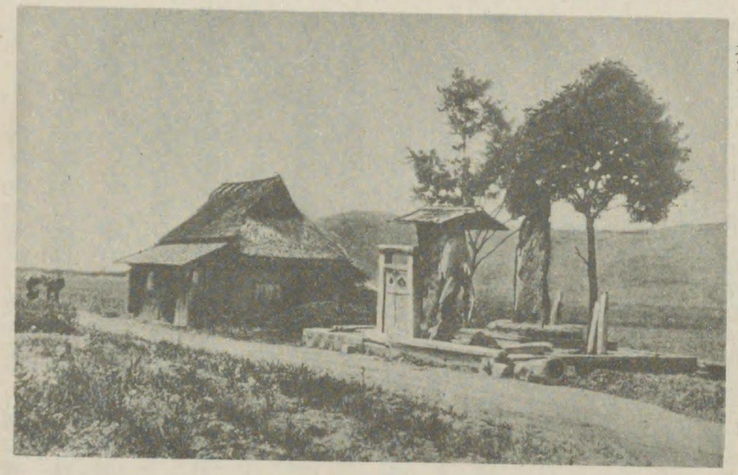
足利尊氏兄弟、既に九國を定め、大軍を率ゐて、海陸二道より東に上る。

新田義貞、播磨に在り、兵庫に退きて、海陸の勢を、併せ拒がんと欲す、五月二十三日、兵を率ゐて、引き退く、士卒、途より遁がれて、殘り留まるもの、僅かに三萬餘騎。直ちに輕騎を飛ばして、急を京師に報ずれば、主上、大に驚かせ給ひ、急ぎ楠木判官正成を召されて、

『疾く兵庫に馳せ下り、義貞に、力を併せて、朝敵を拒げよ』

と命じ給ふ、正成、胸中の韜略、機に觸れて發す、階下に、平伏しつゝ、

『尊氏、九國の兵を率して、上洛候はゞ、定めて、雲霞の如き大勢にてぞ候はん、疲れたる小勢を以て、機に乘れる大敵に



櫻井驛址　其一
楠木正成父子の訣別したる櫻井驛は攝津國三島郡島本村大字櫻井にして東海道鐵道櫻井驛より二十町の處に在り此れは明治九年石碑を建設したる時代の光景なり。

當り候はんには、味方の敗軍、必定にこそ候へ、宜しく、義貞を、京師へ召し寄せ給ひて、聖駕、再び山門へ行幸あらせ給ふべし、正成は、河内に下り、畿内の兵を以て、糧道を斷ち候はんには、敵の勢は、次第に散じ、味方の軍は、次第に加はり候はん、其時、義貞は、山門より押し寄せ、正成は、搦手より、攻め上り候はんには、朝敵を、唯一戰に、滅ぼさんこと、何の難くや候はん、義貞も、定めて、さこそ存じ候はめ、唯一戰をもせで、立ち還り候はんは、人の思はんずることも如何やと、心ならずも、兵庫に留まり候にこそ、兎角、合戰の道は、始終の勝こそ、肝要に候へ、能く〳〵、御思慮あらせて、必勝の策を、立てさせ給ふべし』

と奏す、名將の期する所は、終局の勝に在り、一時の恥は、顧みる所にあらず、諸公卿、皆、

『軍旅の事は、武將の計らひにこそ、由らせ給ふべけれ』

と述べて、正成の議に、從はんとす、參議清忠、忽ち出でて、

『正成の申すところ、其理なきにしも候はず、去りながら、朝敵追討の總督、未だ一戰にも及ばずして、引き退かんこと、武威の薄きに似たり、且や、一年の内に、二度までも、山門へ行幸あらせ給はんこと、亦、天威の輕きに似たり、尊氏、縱令、九國の勢を擧つて、上り候とも、ヨモ、去年、東國の兵を率ゐて上りし程にも候まじ、官軍の、常に小勢を以て、

櫻井驛址　其二
此れは大正二年更に石碑を建立したる以後の光景なり前方の碑は大坂府權知事渡邊昇の筆、後方の碑は陸軍大將乃木希典の筆に係る。

大敵を破り候もの、強ち武略の宜しきを得たるに由るにはあらず、偏に聖運の天に應ずるに由り候なり、戰を帝都の外に決して、敵を斧鉞の下に誅せんこと、何の難くや候はん、疾く正成に仰せて、馳せ下らせ給ふべし』

と奏す、名分の論は、人を動かし易し、主上、終に清忠の議に從はせ給へば、正成、今は、勅諚を返し奉つらんやうもあらず、

『さらば、粉骨碎身、朝敵に當り候はん』

と述べ、拜辭して、徐々と、立ち出づ。

必勝の策、既に行はれず、爭かで、優勢の大敵を破り得べき、流石、智謀の名將も、今は、敵に捷つべき見込みとてもあらず、今日を限りと、心に思へば、內裏の方を、振り返り〳〵つゝ、宿所へと、立ち還る。

二

一死、國に殉ずるは武人の習ひ、今更、何の躊躇する所かあらん。

正成、我が策行はれざればとて、露ばかりも、不平不滿の心を懷かず、五月二十四日、手勢七百餘騎を率ゐて、馳せて、兵庫へと向ふ、其子正行年十一、會〻京師に在りて隨ひ來る。

櫻井驛に抵りて、暫し、人馬の脚を憩ふ、正成の斯行、固より、生還を期せず、正行を、膝近く召し寄せて、

『やよ正行、汝、幼年とは申せ、既に十歲を越えつるぞ、父の申さんずること、能く〳〵、耳に留めて、聞き候へ』

と告ぐ、常にも似ぬ言葉の節々、何どか故なからん、正行、聞くより、疑と、襟を正す、正成、更に、言葉を續け、

『抑〻今度の合戰こそ、實に天下安危の分かるゝところ、今生に於て、汝の顏を見んこと、これを限りと思ふなれ、我れ、若し討死しなば、天下は、必定、足利の代とならんずるにこそ、吳れ〳〵も、身命を惜みて、忠義の心を失ふべからず、利慾に迷ひて、父の素志を棄つべからず、若し、一族郎等、一人にても、生き殘らば、俱に金剛山の要害を守りて、天晴、天敵を攻滅ぼさんことを、力めよ、玉は、碎くるとも、其光を失はず、竹は、燒くるとも、其節を損はずとこそ申すなれ、事、成らず、志、遂げずんば、潔よく、一身を捧げて、君に奉つれ、是れ汝

が第一の孝行ぞや、返す〳〵も、父が今申すところを、忘れまじきぞ』

と諭す、身は、死するとも、志は、死せず、更に、子孫を留めて、朝家の御爲めに盡さしめんと欲す、左右に在るもの、皆、聞いて、感激せざるはなし。

正行、默然として、父の言葉を聞き、其終るを待ちて、疑と、顏を擧げつゝ、

『父上の討死せんと仰せ給ふものを、正行、何とて、獨り憶面々〻と、河內へ還られ候べき、あはれ、戰場へ伴ひ給へ、俱に、討死仕つり候べし』

櫻井驛址 其三
此れは後方に建てたる石碑にして卽ち伯爵乃木希典の筆したるもの。

と乞ふ、勇將の子は、自から勇まし、身も、亦、父と與に、屍を戰場に曝さんと欲す、正成、首を掉りて、聞き入れず、

『いや〳〵、汝の申すところは、父子の私情ぞ、我が諭すところは、君臣の大義にこそあれ、疾く〳〵、此處より、河內へ還り候へ、さばかりの道理を、知らぬ年にもあるまじ』

口にこそ、強くは言へ、聲には、自から曇を帶ぶ、正行、今は、強して、請ふべき由もあらず、

『此上は、是非も候はず、これより、河內へ還り候べし、唯今の仰せは、死すとも、忘れ候まじ』

これも、潔よく、言ひ放てど、兩眼の淚は、袖に餘りて、包みがたし、起たんとしては躊たふ正行、

『時刻移りては、叶ふまじ、疾く〳〵』

と急き立てられて、

『さらばに候、父上』

悄々と起ちて、河內へと向ふ、足の運びも、捗行かず、

『實にや、是れぞ、今生の見納めなる』
見送る父の眼にも涙、見返る子の眼にも涙、それと見たる
將士の眼よりも、皆、涙湧く。
黄梅の時節、雲色暗澹、天にも、千縷萬縷の涙あり。

湊川

楠木正成戰死の地

湊川は、攝津國神戸市兵庫に在り、其水源、二あり、一を鳥原川と曰ひ、一を天王谷川と曰ふ、二水、共に山田村より發し、再度山の麓を繞りて、湊村に至り、平野、夢野の間に於て、相合し、川崎に至りて、海に注ぐ、近年、其川筋を變更し、舊湊川は、之れを埋めて、市街地となし、其一部を、市の遊園地となす、延元元年五月二十五日、楠木正成の血戰十六度に及べるは、實に、其堤上の喬松亂立せる所なり。

湊川神社は、神戸市兵庫多聞通三丁目に在りて、湊川の北に位す、神戸停車場を出て、北行すれば、一町半にして達す、正成の石碑は、境内の東南隅に在り、昔は、塚印として、梅松の二樹あり、尼崎城主青山氏の植うるところ、元祿四年、水戸光圀、其荒廢を慨して、碑石を立つ、其高さ十尺、碑面に『嗚呼忠臣楠子之墓』の八字を題し、碑陰に、明の徵士朱之瑜の贊辭を勒す。

一

忠臣は、身後の忠を忘れず。

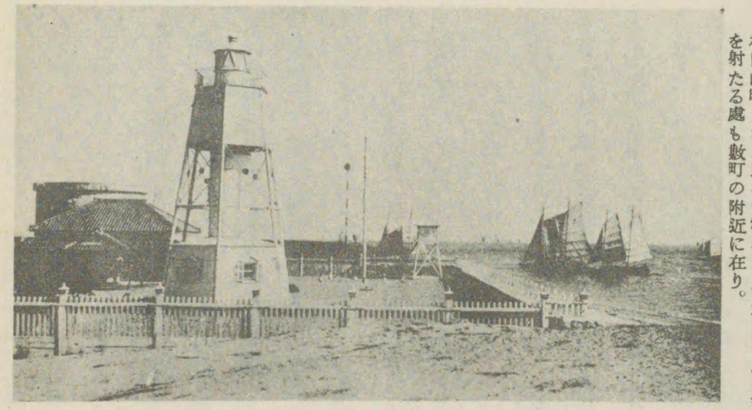
楠木判官正成、既に、其子正行を、河内へ遣り還しぬ、我が志を繼ぐもの、其人あり、身、死するとも、復た憾なし、乃ち櫻井驛を發して、兵庫へと向ふ。

左中將新田義貞、既に、播州より還りて、兵庫に在り、正成を迎へて朝議の模樣を問ふ、正成、

『小勢を以て、新鋭の大敵を、此處に拒ぎ候はんこと、決して、必勝の策と申すべからず、御邊も、さこそ、思し給ふべけれ、因りて、御邊は、聖駕を護して、叡山に入り給ひ、正成は、河内に退き、敵の京師に入るを待ちて、挾み擊たんとの軍略を、上つりたれども、終に御用ひなく、急ぎ兵庫へ下りて、御邊を援けよとの仰せを蒙りて候へば、斯くは、出陣に及びてこそ候へ』

と語れば、義貞、撫然として、

『如何にも、小勢を以て、機に乘れる大敵を防ぐの不利なることは、義貞も、存じてこそは候へ、唯、去年、箱根に於て敗れ候へる時、途中に於て、支へ候はざりしこと、既に、人の嘲を免かれ候はず、今又、西國へ下りて、一城をも落し得ず、敵の大軍、押し上ると聞きて、其儘、馳せ還り候はんには、餘りに言ひ甲斐なしと、人々に蔑まれ候はん、それ故にこそ、此地に於て、拒ぎ戰はんとは、存じ立て候なれ、成敗は、顧みる所に候はず、此上は、唯、義を一戰に勵まんと存ずるにこそ』



和田岬
和田岬は攝津國兵庫に在り今は神戸市に入りて和田崎町となる此れは燈臺にして本間資氏の禽を射たる處も數町の附近に在り。

と語る、義貞の辭色、亦、決す、正成、早くも、それと察して、言葉、穩やかに、

『庸人の褒貶は、何の榮辱にか係はり候はん、戰ふべきを見て進み、叶はざるを知つて、退くをこそ、良將の作法とは申し候なれ、元弘の初には、相摸入道を、一戰に滅ぼし給ひ、今年の春には、尊氏を、一擊に破り給へること、聖運とは申せ、偏に御邊の御武威に由り候なり、合戰の道に於ては、誰か御邊を蔑すむものゝ候べき、此上とも、軍慮を運らして、朝敵を滅ぼし給へ、天下の安危は、御邊の御身に繫かり候なり』

と說き慰め、其功を稱へて、其志を勵ませば、義貞、色、漸く解く、これより、兩將、盃を把つて、俱に、快談する

こと終宵、これぞ、暗に、永訣の意を表せんと欲する正成の心。

二

五月二十五日、尊氏は、水軍を帥ゐ、直義は、陸軍を率ゐて、西より來る、海には桅檣、林の如く、陸には、旌旗、雲の如し、義貞、急ぎ正成に對面して、

『敵は、海陸共に、思の外なる大軍にて候、御一所に防がんこと、如何にて候なり、千葉、菊池、宇都宮を、御手に附け候はん、海陸、何れなりとも、一方を引き受け給ふべし』

と告ぐ、正成、眼中に、敵なし、

『イヤ〳〵、御加勢を受くる程の敵にも候はじ、某の一手を以て、陸なる敵に向ひ候べし』

と答へ、直ちに手兵七百餘騎を率ゐて、進んで、湊川の西に陣す。

義貞、乃ち三萬騎を以て、水軍を扞ぐ、軍を分つこと三、脇屋右衛門佐義助は、經島に陣し、大舘左馬助氏明は、燈爐堂の南の濱に陣し、義貞は、和田岬に陣して、軍を督す。

菊池肥後守武重、正成の小勢なるを見て、唯一騎、馳せて、陣中に來り、

『御勢、餘りに、御手薄う見えて候、某も、御陣に加はり候はん、手の者、御勢よりも、多く候なり、急ぎ、これへ召し寄せ候べし』

と語る、誠實の心、肺腑より出づ、正成、好意を謝すれども、敢て從はず、

『御志の程、辱けなうこそ、覺えて候へ、去りながら、

兵庫の古圖

直義は、大軍とは申せ、固と、烏合の勢なれば、さまで、恐るゝには足り候はず、新田殿の御陣こそ、心元なう候なれ、能く〳〵、力を戮はせて、尊氏を防ぎ給ふべし』

と答ふ、決死の身には、目に餘る敵の大軍を蠅の群ほどにも思はず。

武重、心に危ぶめども、強ふべきやうもあらず、是非なく、其儘、引き還へす。

三

既にして、尊氏の水軍、海を掩うて、來り近づく、皷聲、喊聲、山に轟き、海に震ふ。

武者一騎あり、忽ち義助の陣中より、躍り出で、沖なる船を望み見つゝ、大音に呼はる、

『筑紫よりの御上洛にて候へば、定めて、鞆、尾道の傾城共、多く召具せられて候はん、イデ〳〵、珍らしき御下物、一つ進らせ候べし、暫く、御待ち候へ』

鏑矢一つ拔き取りて、矼と、海上を打ち見遣る、折柄、一羽の鵠、空中を舞ひ下り、舞ひ上がる、忽ち疾風の如くに、サッと、飛び下り、魚を攫んで、又高く飛び上がる。

待ち設けたる武者、忽ち馬を乘り出だして、鵠の影を追ふ、

『扨ては、アレを射らんずるぞ、射外したらんには、無上の耻辱、射中てたらんには、稀代の名譽ぞ』

敵も、味方も、皆、眼を注ぐ、武者は、早くも、矢を番ふ、キリ〳〵と、引き絞つて、ヒョウと放てば、

湊川古戰場　共一

此れは湊川の遊園地にして當年千軍萬馬の馳驅せし處。

『素破こそ』
と諸人、屹と、鵠の方を見遣る。
鵠の片羽、忽ちハツと、斷ぎれて、ヒラリ〳〵と飜へる、矢は、美事、片羽を射切つて、大内介弘世の船の檣に、ハツシと立つ。
鵠、殘る片羽を煽ること、二たび、三たび、忽ち魚を攫める儘に、ドツと、大友左近將監貞宗の船の屋形の上に、落つれば、
『射たりや〳〵』
敵兵は、鉉を叩き、味方は、簇を鳴らして、一齊に、囃し立つ、喚聲囂々、宛がら、耳も聾するばかり。

四

尊氏、此光景を見て、ほゝゑみつゝ、
『敵は、弓勢を見せんとて、射つらん、此方の船に、鳥の落ちしは、味方の吉事ぞ、射手は、誰やらん、名字を聞き候へ』
と告ぐ、小早川七郎、急ぎ艫に突つ立ちて、
『扨ても、美事なる御手並に候ものかな、御名字は、何

湊川古戰場　其二
此れも湊川の遊園地にして亦た屍山血海の慘劇を演出したる處。

と申させ候ぞ、御名乘り候へかし』
と呼はる、此方の武者は、斯くと聞くより、弓杖つきつゝ、
『名乘り申せばとて、知らせ給ふことも候まじ、去りながら、弓矢取りては、阪東八ヶ國の兵の中には、名を知れる人も候はん、矢一

つ參らせんに、それにて、名字を御覽候へ』
と答へ、十五束の矢を拔きて、引いて放てば、八丁餘を越えて、尊氏の船に並べる佐々木筑前守顯信の船の一射士を殪す、
『扨ても、恐ろしき弓勢かな』
尊氏、舌を卷きて、打ち驚き、其矢を拔かせて、取つて見れば、
『相摸國住人本間孫四郎資氏』
との十二字を彫り付く、尊氏、默然として、獨り心に思ふ所あるが如し、
『扨ては、本間孫四郎にてありけるか、さもこそあるべけれ』
諸人、傳へ見て、皆、感嘆す、資氏、サツと、扇を開きて、麾ねき、
『合戰の最中にて候へば、一筋の矢も、惜まれて候ぞや、こなたへ、射返へし給ふべし』
と呼はる、尊氏、左右を顧みて、
『誰にか、射返へさすべき』

湊川古戰場　其三
此れも湊川遊園地にして亦た是れ當年龍變雲蒸の地、謖々たる松風語る所何事ぞ。

と曰へば、高師直、武藏守進み出でゝ、
『此矢を射返へし候はんもの、佐々木筑前守の外には候まじ、西國一の剛弓とこそ申されて候へ』
と答ふ、尊氏、乃ち顯信を召して、
『此矢、本の矢所へ射返へし候へ』
と告げ、資氏の矢を取つて、

イザとて渡す、これぞ、戰場にての曠の業、

『所詮、某には叶ひ候まじ』

顯信、再三固辭すれども、聽されず、

『此上は、是非も候はず』

矢を受けて、起ちて、己が船に立ち還り、將さに弓を把つて、射返へさんとす、キリ〻と、弓を引き絞ること、滿月の如し、放たんと欲して、未だ放たず、忽ち讃岐勢の中より、一人、船頭に進み出で、

『此矢、一つ受けて、弓勢の程を、御覽ぜよ』

と聲高らかに、呼はりつゝ、鏑矢を取つて、放てば、のろのろと飛んで、海の中に落つ、魚や、驚きて、遁げつらめ、

『射たりや〳〵』

陸兵、ドッと、嘲り笑へば、顯信、

『今は、射ても由なし』

其儘、弓を閣く。

讃岐勢、深く恥ぢけん、二百餘人の士卒、船を飛ばして、岸に押し寄せ、飛び上り〳〵て、進み戰ふ、義助の兵、三方より、斫り立て〳〵、瞬く間に、擊ちて殲くす。

人は、皆、殪れぬ、唯、船のみ、空しく、岸邊に横はる。

五

尊氏の先鋒細川律師定禪、斯くと見るより、憤然たり、屹と、船頭に突つ立ちつゝ、

『疾く〳〵、足場好からん所へ、船を進めて、押し上がれよ』

と呼はれば、四國の兵船數百隻、忽ち進んで、西の宮に向ふ、義貞、望み見て、

『敵は、東に進めるぞ、陸に、な上げそ』

と令し、咄嗟に軍を抜きて、汀に傍うて馳す、疾驅、矢よりも疾し。

陸なるものは、走るが如く、海なるものは、追ふに似たり。

和田岬には、復た隻騎なし、尊氏の全軍、乃ち此處に上陸す。

六

正成の陣は、湊川の畔に在り、前には、直義の兵あり、後には、尊氏の軍あり、今は、腹背より、敵を受く。

前の敵をや擊たん、後の敵をや衝かん、正成、徐かに、弟

帶刀正季を顧みて、

『前後に、敵を受けては、所詮、遁れぬところぞ、イデヤ、先づ前なる敵を破つて後、後の敵に當らん』

と告ぐ、正成の計畫、忽ちに決す、軍を、二手に分ちて、兄弟、各〻一陣、

楠公終焉の地

此れは楠公自刄の地にして七生賊を滅せんことを誓へるは此處なり廣澤寺を以て終焉の地に擬するも信ぜられず。

を提ぐ、正季、前に在り、正成、後に在り、

『イザ懸かれ』

颯と風を立てつゝ、目に餘る敵の大軍中に、殺到す、直義、小丘の上に在り、菊水の旗を望み見て、

『扨ては、楠木の手なるぞ、あれ、擊ち崩せや』

と呼はれば、大軍嵩に懸つて、進み來る、宛ら、怒濤の寄するに似たり。

正成兄弟、兵を使ふこと、鬼神の如し、蹄を攢めて、サッと駈け、鋒を聯ねて、ドッと衝き捲くる、七百騎の兵、唯一人の如し、東より、西に駈け拔け、南より、北に切り崩す。

向ふ所、前なし、先づ敵の先陣赤松筑前守貞範の兵を擊破し、勢ひに乘じて、更に、第二陣を衝く。

第二陣も、亦、忽ちに敗れて退く、續いて、三陣、四陣、五陣を擊つて、又、皆、之を破る。

正成、正季、各〻勇を振うて、益〻進み、七たび遭うては、七たび離る、偏へに、直義に逢うて、雌雄を決せんと欲す。

兵鋒、鋭更に鋭、抗ふものは、皆、破り、觸るゝものは、

皆、碎く、宛がら、無人の郷を行くが如し。

直義の大軍、見る〳〵、斫り崩され、追ひ捲くられ、頽れを打つて、ドッと、須磨の方へ、潰え走る、

『止まれや、返へせや』

直義、頻りに、呼はれども、及ばず、これも、亦馬を驅つて、走り退く、馬、忽ち矢鏃を踏んで、蹄を傷つけ、其儘、立ちすくんで、一歩も進まず。

味方は、益々走り、敵は、益〻近づく、直義、心焦らつ、鞭を揚げて、策てども〳〵、馬、尙、動かず、正成の兵、それと見るより、勇み立ち、

『あれこそ、敵の大將なれ、ソレ擊ち取れや、遁がすな』

鋒を聯ねて、猛然として、突進す、

彼我の距離、早、近づく、直義、遁がれんとすれども、能はず、勢ひ、今や、窮まる、

『今は、是れまでぞ』

死を決して、敵を待つ、藥師寺十郎次郎、此體を望み見て、打ち驚き、双鐙を煽りつゝ、疾驅し來り、

『イサ、此馬に召され候へ』

ヒラリと、飛び降りて、直義に進む。

湊川神社 其一
別格官幣社湊川神社は神戸市兵庫多聞通三丁目に在り楠木正成を祀る此れは其正門なり。

正成の兵、早、眼前に迫る、十郎次郎、二尺五寸の小長刀を把つて、躍り出で、矢庭に、七八騎を斫つて落す、直義、此隙に、馬に飛び乘り、鞭を加て〳〵、遁がれ走る。

正成の兵、忽ち十郎次郎を斬つて倒し、更に、直義を追ふ。

追ふもの疾し、追はるゝもの、更に疾し、見る〳〵、相距ること數十歩。

長蛇、手に落ちんとして、又逸す。

七

尊氏、既に、和田岬に上陸す、遙に、直義の敗れ退くを望み見て、大に驚き、

『直義討たすな、アレ援へや』

厲聲疾呼すれば、武藏守高師直、吉良參河守滿貞等等、皆、奮然として起ち、

『來れや面々』

六千餘騎を率ゐて、馳せて、正成の背後を襲ふ、正成、斯くと見るより、號令一下、忽ち陣を向け直し、

『イザヤ、此新手の勢を、追ひ拂はん』

殘兵六百餘騎を提さげて、猛進し來る、行動、極めて敏し、師直、先陣に在り、此光景を望み見て、

『今日は、楠木が、最後の軍とこそ覺ゆれ、近く寄せては、百萬の勢を以て、戰ふとも、叶ふまじきぞ、射て取れや者共』

と令し、弓手を、前に備へて、一齊に射る。

正成兄弟、馬を驅ること、疾風の如し、近づく儘に、ドッと、喚いて、師直の陣中に突入し、前後左右に追ひ散らし、蒐け散らす、猛烈、當るべからず。

師直の兵、見る〳〵、崩れ立ちて、志度路、茂度路に遁げ走る、吉良參河守滿貞、石塔入道義房、上杉民部大輔憲顯等の諸軍、四方より、突進して、包み擊つ。

正成兄弟、縱横に、馬を驅り、東西に、敵を擊つ、向ふ所、皆、摧く。

辰の刻より、未の刻に至るまで、交戰三時、會戰十六度、敵を殪すこと、算を知らず、將士、勇と雖も、身、鐵石にあらず、一戰毎に、士卒、次第に倒れて、生き殘れるもの、唯、七十三騎、正成、

『軍も、是れまでぞ、イザヤ來れ』

其儘、馳せて、湊川の北なる民家に入る。

八

正成、鎧を釋きて、見れば、身に、十一創を蒙むる、正季以下七十二人、亦、皆、大小數ヶ所の創を受けざるはなし。

一族十三人、士卒六十人、列を正して、ズラリと、二行に居並ぶ、斯かる所へ、須賀壹岐守、尊氏の命を以て、馳せ來り、

湊川神社　其二
此れは湊川神社の拜殿にして其墓所は境内に在り。

『楠木殿の、毎々、小勢を以て、我が大軍を撃ち崩し給ひしこと、誠に驚き入りてこそ候へ、珍らしからぬこととは申せ、別して、今日の御働き、和漢古今に、其例も候はず、尊氏、舊友の情誼、淺からず候へば、情なくも、討ち參らせん心の候はず、此上は、軍勢を纒めて、御歸國然るべう候はん、直義も、同様に申してこそ候へ』

と述べ、敢て道を開きて、還へさんとす。

正成、聞いて、呵々と笑ふ、頓て、取次を以て、

『足利殿の芳志、祝着にこそ候へ、去りながら、大丈夫、功成れば、名を竹帛に垂れ、成らざれば、屍を馬革に裹まんこそ、本志に候へ、今や、軍敗れ、兵疲れ候ひぬ、一死、天恩に報ゐ奉つらんこと、今日に在り、何とて、生を偷み、命を惜しむの心候はんや、但し、童一人を、舊里へ還へさんと存じ候ひぬ、途中、無事なるを得ば、此上なき御厚意にこそ候なれ』

と答へ、家人竹童丸に向ひて、

『如何に竹童、汝、手を負ふとは云へ、唯、薄手一箇所に過ぎず、これより、河内へ立ち還りて、今日の合戰、並に我が討死の模様を、殘る者共へ、委はしく語り聞かせ候へ』

と告ぐ、思ひ掛けなき主の一言、竹童丸、ハタと、當惑の色を呈はす。

九

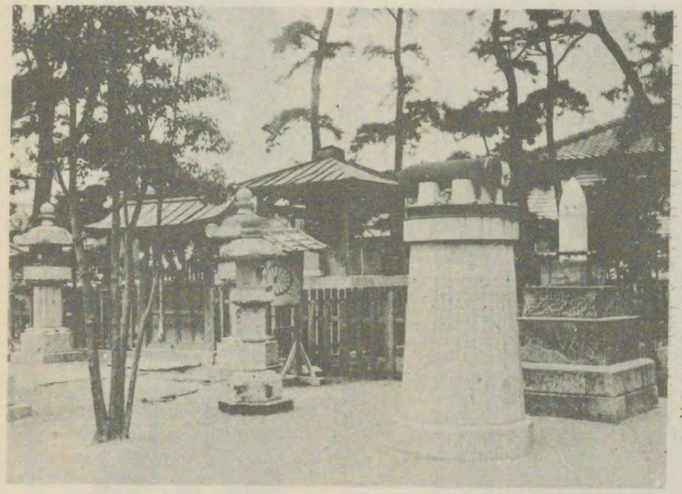
死して、黄泉に隨はんとこそ思へ、爭かで、生きて、故山に還るの心あらん、竹童丸、頓て、手を突きつゝ、

『餘の時に候はゞ、爭かでか、御諚に背き奉らん、唯、今日ばかりは、餘人に仰せ下させ給ふべし、某、物心覺え候頃より、親しく、御側に仕へ奉つりて、君の御恩を蒙むること、山よりも高く、海よりも深し、冥土までも、御供申して、御奉公をこそ仕つるべけれ、何條、君の御最期を見捨てゝ、故郷へ還り申すべきや』

と述ぶ、義氣、金鐵よりも堅し、正成、言葉靜かに

『志の程は、感ずるに餘りあり、されども、自餘のものは、皆、深手、薄手、數多負ひたれば、河内へは、還しがたく、假し、還へせばとて、正行に仕へんこと、叶ひ難し、汝、故郷に還りて、一つには、正成の旨を傳へ、又一つには、正行に仕へて、忠戰を勵めよかし、死するばかりが、忠義の道にはあらざるぞ』

と諭し、鎧の引合より、取り出だす一卷の卷絹、



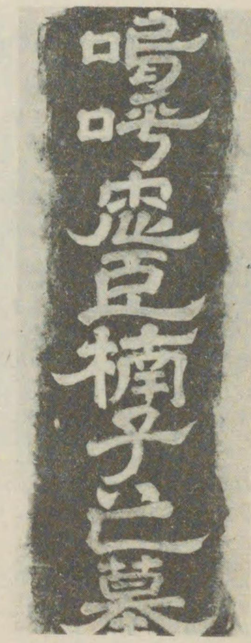
楠公の墓所
此れは楠木正成の墓所にして湊川神社境内に在り。

『これは、此度、出陣の砌、上より下し賜はりし御品、大切に仕つるべしとて、渡し候へ、又これなる鎧は、先祖より傳へて、今日まで着用せし

もの、汝、着て還り、長筐にとて、正行に渡し候へ』
と告げ、卷絹と、鎧とを取つて、渡せば、今は、辭まんにも辭みがたし、
『此上は、仰せに從ひ奉つり候べし』
竹童丸、詮方なく〳〵、壹岐守に從ひて、此處を立ち出づ。

十

今は、心に懸かることもあらず、正成、心閑かに、自害せんとし、正季に向ひて、
『如何に、最期に臨んで、何をか願ひ候ぞ』
と問へば、正季、呵々と打ち笑ひ、
『七生までも、同じ人間に生れて、朝敵を滅ぼさんとこそ存じて候へ』
と答ふ、正成、聞いて、莞爾として、ほゝゑみ、
『罪業深きこととは申せ、我れも、さこそは、思ふなれ、イザ、さらば、同じく生を替へて、本懷を達せばや』
兄弟、各〻刀を把つて刺し違へ、一つ時、一つ所に、打ち殪る、正成、時に、年四十三、正季、三十三、
『イデ〳〵御供せん』



湊川の碑　其一
此れは楠公湊川の碑にして水戸黄門光圀の建つる所題字の句法蓋し嗚呼延陵季子墓より來る。

宇佐美河内守正安、神宮寺太郎兵衛正師以下、皆、我れ後れじと、腹を切る。
橋本八郎正員、和田五郎正隆の二人、正成兄弟の首を、尊氏の許に送り、火を民家に放ちて、炎中に躍り入る。
菊池七郎武吉、兄武重の命を受けて、來つて、湊川の戰況を視る、正成主從の死せんとするを見て、獨り還り去るに忍びず、
『イデ〳〵、我れも、御同道申さん』
手早く、鎧を脫ぎ捨てゝ、腹搔き切り、亦、跳つて、火中に投ず、
屍は、灰とこそ作れ、丹心、何どか、烟となりて失すべき。

尊氏、正成兄弟の首を見て、ハラ〳〵と、涙を垂れ、
『生前に於て、今一度、對面しなば、如何ばかりか、本懷なりしならん』
暫しが程は、言葉もなし、直義も、亦、嘆息すること數多度、
『實に、古今に稀れなる名將を失へるこそ、口惜しけれ』
と言へば、諸將士、亦、黯然として、涙を呑む。
忠臣の最後期、當の敵さへ、皆、悼み悲しむ。

十一

主命、背かんに由もなし、
『切めて、重手一つ負はゞ、斯かる仰せは、受けまじきものを』
竹童丸、今は、身の傷輕きを悔みつゝ、唯一人、河内へ還り來り、正行母子に逢ひて、具さに、湊川の戰況を物語り、
『これは、御筐にて候へ』
と述べて、身に着けたる鎧を脫ぎて渡し、又卷絹を取つて捧ぐ、老臣以下、皆、來りて、座に在り、
『あゝ是非もなきことかな』

湊川の碑　其二
此れは楠公湊川の碑にして明の徵士朱舜水の贊文なり。

忠孝著乎天下日月麗乎天天地無日月則暗蒙否塞人心廢忠孝尊乾坤反覆余聞楠公諱正成者忠勇節烈國士無雙寃其行事不抵公之用兵審強弱之勢於幾先決成敗之機於呼吸知人善任體以謀無不中而戰無不克誓心天地金石不渝不爲利回不爲害怵王室還於舊都諺云前門拒狼後門進虎廟謨不減元兇接寇構殺鎮撫功垂成而震主策難善而弗庸自古未有元帥妒前庸臣專斷立功於外者辛之以身計國之死靡佗觀其臨終訓子從容就義託不及私自非精忠貫日能如是整而暇乎父子兄弟世篤忠貞節孝盛矣哉至今王公大人以及里巷之士交口而誦說之不衰其必有恒乎哉筆者無所考信不能發揚其盛美大德耳
右敕河橋泉三州守贈正三位近衛中將楠公贊明徵士舜水贊與之所撰勅代碑文以垂不朽

皆、愁然として、涙を呑む。
使命、既に果てぬ、竹童丸、頓て、正行母子に向ひて、
『某、故殿の仰せ、默止しがたくして、罷り還りてこそ候へ、一命は、故殿に捧げ奉つらん日頃の覺悟に候なり、既に、御使の役目を果たし候からは、最早、世に存へん用事とても候はず、イザ、御暇を賜はり候へ』
と言ひざま、スラリと、一刀を拔き放ちて、アワヤ、自殺せんとす、
『ヤレ待ち給へ、逸まるべからず』

居合はす面々、右より、左より、緊かと、其手を押へ、
『如何なれば、物の道理に迷ひ給へる、大殿の御邊を還
し給へるは、唯、御遺命を傳へ給はんが爲めばかりには候はず、一つには、若殿へ、御奉公申させんが爲めなること、今も、御邊の口より、申されし所に候はずや、御邊一つの御用をこそ果たせ、今一つの御用は、

楠公の筆蹟　（河内觀心寺藏）

是れより、勤め申すべきを、何とて、早、忘れ給へるぞ、御年幼なき若殿に仕へて、忠勤を勵まんこそ、大殿の御供にも、遙か優れる御奉公に候はずや』
と言葉を盡して、說き諭せば、竹童丸、今は、詮方なく、澁々、刀を鞘に收む、
『扨ては、納得し給ひしか、斯くてこそ、言ひ甲斐ありけれ』
人々、始めて、心を安んず、
何ぞ計らん、勇士、一たび、思ひ定めては、復た其志を飜へさず、其夜、更闌け、人靜まるを待ちて、美事、腹一文字に、搔さばいて、死ぬらんとは。
習くる朝、斯くと知りたる正行母子、且は感じ、且は憐れみ、
『扨ても、殊勝なる志かな、厚く葬むりて取らせよかし』
と命じて、懇ろに其屍を葬むる。

十二

尊氏の京師に入るや、命じて、正成の首を、六條河原に梟く、市民、集まり見るもの、群をなす、
『去る春にも、あらぬ首を梟しぬ、これも、亦、さる類にこそあらめ』
人々、何れも、疑ひて信ぜず、誰の業にやありけん、
疑ひは人によりてぞ殘りける
まさしげなるは楠が首
てふ狂歌を札に書きて、建てしものさへありき。
日を經るまゝに、正成兄弟戰死の事、一般に知れ渡りて、今は、更に、疑ふべき節もあらず、
『あゝ惜しき大將を失ひぬ、御運も、早、末とこそなりつれ』
上下貴賤、何れも、涙を垂れて、嘆き悲しまざるはあらず。
實にや、建武中興の大業も、こゝに至りて、挫けぬ、尊氏、別に、新主を擁立してより、南北、朝を分ち、正閏、統を爭ふこと若干年、南風、終に競はず、北威、日に張れることそ、是非なけれ。

求女塚

小山田高家殉節の地

求女塚は、攝津國武庫郡に在り、又處女塚と曰ふ、往昔、茅渟の信太男と、攝津の菟原男の二人、芦屋處女の美を愛でゝ、之れを爭ふ、處女、窮して、水に投じて死す、二人の男、悲しみて、亦、水に投ず、其父母、憐みて、之れを葬むる、其墓、

住吉村字御田　信太男の墓
御影町大字東明　芦屋處女の墓
都賀野村大字味泥　菟原男の墓

の三ヶ所に分かる、周囲、各〻八十餘歩にして、相距ること十餘町、此内、御田の塚は、阪神電車鐵道敷設の際、其土砂を掘取られ、殘部は、農作物の干場と化し、唯、東方田圃の中に、石碑の存するを見る。
延元元年五月二十五日、新田義貞の、足利尊氏兄弟と、生田の森の前面に於て戰ひ、敗れて、丹波路に走り、馬

を傷つけて、求女塚に上り、追ひ來れる敵を拒ぐ、小山田太郎高家、其馬を進めて、遁がれしめ、終に節に死す、これ東明の塚にして、高家の墓、其上に在り、塚の形狀、瓢簞の如く、南北に長くして、東西に短し。

一

湊川の戰、既に終りぬ。

足利尊氏、今や、楠木正成兄弟を斃して、勢、益〻振ふ、其弟直義と、一手に合して、新田義貞に迫る。

義貞、細川律師定禪の船を追うて、馳せて、西の宮のあたりに抵る、忽ち馬塵高く、背後の天に颺がる、義貞、其旗幟を望み見て、呼はる、

『西の宮より上がる敵は、末々のものぞ、湊川より掛かる勢こそ、尊氏、直義の兄弟と覺ゆれ、イデ〳〵、此れと雌雄を決せん』

直ちに取つて返へして、生田の森の前面に、陣を列ぬ。

敵軍、既に近づく。

第一番に、大館左馬助氏明、江田兵部大輔行義の二人、兵を提さげて、進み出づれば、賊將仁木左京大夫頼章、細川陸奥守顯氏の二人、迎へ戰ふ。

生田神社　其一
官幣中社生田神社は神戸市下山手通一丁目に在り稚日女尊を祀る此れは其正門なり。

敵も、味方も、皆、勇悍、兩々、火花を散らして、戰ふこと數刻、兵疲れ、馬勞れて、サッと、双方に引き退く。

第二番に、中院中將定平、大江田式部大輔氏經、里見伊賀守時成、鳥山修理亮氏頼等、進み出づれば、高武藏守師直、上杉民部大輔憲顯の二將、邀へ戰ひ、突き進み、寄り返へし、勇を振うて、奮鬪すること、半餉ばかり。

勝敗、容易に決せず、亦、疲れて、相引きに引退く。

第三番に脇屋右衞門佐義助、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重、土居二郎通益、得能孫三郎通繩の諸將、代り進む、直義、及び吉良參河守滿貞、石塔入道義房の諸將、出で〻、此れに當る。

双方共に、副將と副將、互に、一歩も引かじと奮ひ戰ふ、寄せては返し、返しては又寄す、兵は死し、馬は斃れて、混々たる鮮血、原野に溢る。

奮戰數刻、サッと、左右に分かれて、交綏すれば、義貞、見て呼はる、

『新手の兵、既に盡きて、軍の勝負、未だ決せず、今は、我れ、自ら當るべき所ぞ』

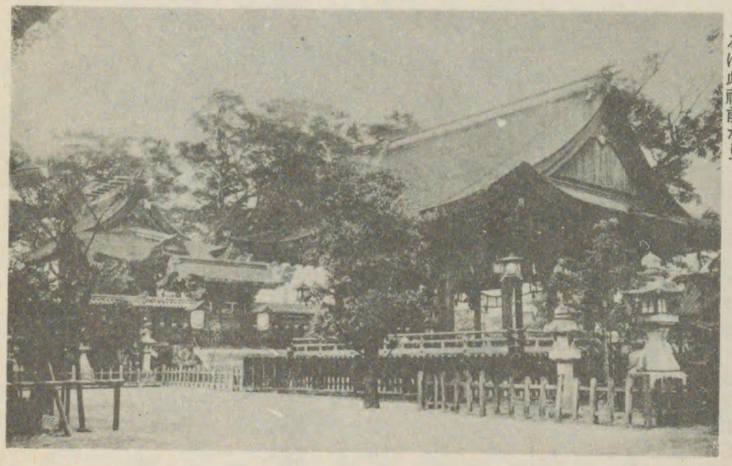
麾下の兵一萬餘騎を、左右に備へて、悠然として、進み出づ、中黑の旌旗、南風に煽られて、翩翻たり。

尊氏、望み見て、奮ふ、

『素破や、義貞ぞ、イデ〳〵、尊氏、此れに當らん』

自ら馬を打たせて、進めば、附き隨ふ軍勢、雲霞の如し。

主將と主將、麾下と麾下との血戰、勝敗の決、繫つて、此一擧に在り。



生田神社　其二
此れは生田神社の神殿なり新田足利兩軍の交戰したるは此祠前なり。

義貞、軍を督して、突進すれば、尊氏、亦、兵を勵まして、奮進す。

兩軍の尖頭、忽ち相接す、ドッと起る鯨波の聲と齊しく、互に、突き入り、突き進み、會うては組み、組んでは落ち、今日を曠れ、此處を先途と、挑み鬪ひ、命

を捨つること、土芥の如し。

中黒の旗、二引兩の幟、東に靡きては、又西に靡き、敵の人馬、味方の軍勢、右へ寄せては、又左へ寄す、搖られ搖られ、揉まれ〳〵て、暫しも、定まらず。

戰鬪、刻一刻より激し、砂烟、天地を掩うて、喊聲、山岳を撼かす。

義貞、叱咤號令、頻りに、軍を勵ます、士卒勇奮、一以て千に當る、敵を殪すこと、算なし。

されども、寡は衆に敵せず、入り代り、立ち代る新手の敵に、迫られて、倒れ死するもの、既に大半。

士氣、漸く沮みて、或は遁れ、或は降り、殘り留まるもの、纔に五千餘騎、

『軍も、是れまでぞ』

義貞、兵を收めて、生田の森の東より、丹波路に、走り退く。

二

官軍、終に敗れぬ。

尊氏、見て勇み立つ、

『あれ追へや』

兵を縱つて、急に追ふ、義貞、後殿に在り、

『イデヤ、味方を、無事に引かせん』

自ら返し合はせ〳〵て、戰ふ。

其乘馬、七矢を負ひ、終に膝を折りて、前に斃る、義貞、求女塚の上に立ちて、副馬を待つ。

副馬、待てども、來らず、敵兵、早、次第に近づく。

義貞、射て、一敵を殪す、敵兵、逡巡、敢て迫らず、遠く環りて、矢を放つこと、雨より繁し。

義貞、鬼切、鬼丸の二刀を、左右の手に把つて防ぎ、飛び來る矢を、斫つて落すこと、十六筋。

飛矢、斫れども、盡きず、力、先づ盡きて、勢、今や、窮まる。

忽ち一士あり、馬を煽り煽つて、驀地に、駈け來り、近づく儘に、ヒラリと、地上に降り立つ、

『イザ〳〵、此れに召されて、退き給へ、某、敵を拒ぎ候はん』

自ら進んで、敵に當る。

義貞、此隙に、馬に飛び乘り、疾驅して、味方の陣中に入る。

一士、多勢の敵と戰ふこと多時、刀折れ、力盡きて、終に亂刄の下に、殪れ死す、是れぞ小山田太郎高家。

三

高家、如何なれば、斯くは、義の爲めに死せる。

去年、義貞の播磨に下るや、兵、多くして、糧、少なし、義貞、兵士の抄掠せんことを虞れて、榜を諸所に建つ、

『作物を掠むるものは、誅罰を加へん』

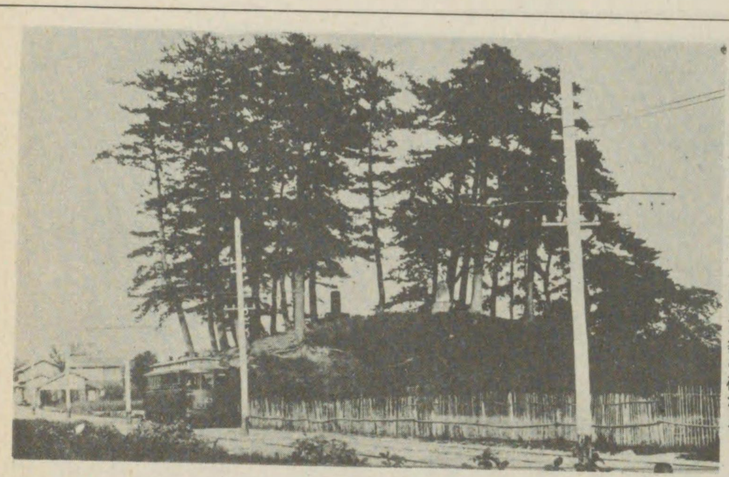
會〻高家、敵の陣地近くに到りて、青麥を刈り來る、軍監長濱六郎左衞門顯寛、斯くと見るより、捨て置かれず、軍令に從うて、誅罰を加へんとす、義貞、聞いて、訝かる、

『爭かで、故なく、青麥を以て、身命に替ふるものゝあるべき、敵陣なれば、妨げなしと思へるか、さらずば、糧盡きて、法の重きを忘れしならん』

人を、高家の陣中に遣りて、檢すれば、兵器、儼として、備はれども、一粒の糧食さへ、有らず。

使者、還り報ずれば、義貞、愧色あり、

『これ我れの罪ぞ、爭かで、猥りに、勇士を罪すべきや』



求女塚
攝津國武庫郡御影町の東明に在り中央に在るは求女塚にして左方に在るは小山田高家の碑なり。

畑主に、其着たる小袖を脫ぎ與へて、價を贖ひ、高家には、糧食十石を頒ちて、犒ひ還へす。

高家、感喜措かず、是に至りて、其命にこそ、代りつれ。

義貞の情、高家の義、俱に、千古の美事。

義貞辛くも、虎口の難を免かる、丹波路より、遁れて、京師に還

れば、上下、愕然として、色を失ふ。

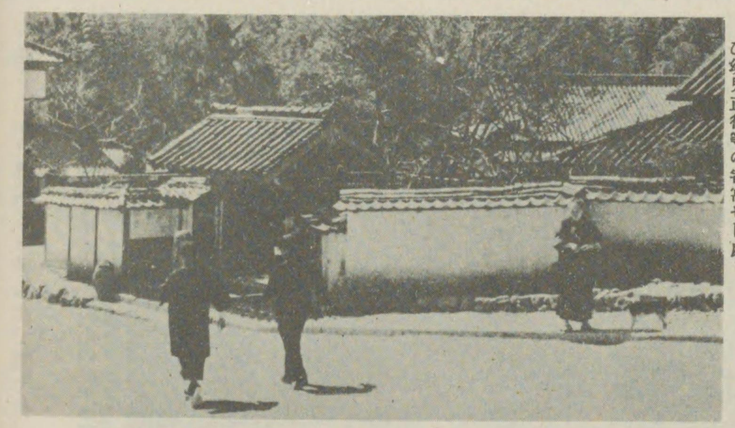
今は、京師にも、留まりがたし、主上、其月の二十九日、復たも叡山に幸し給ふ。

尊氏、乃ち代りて、京師に入る、二引兩の旌旗、又洛中に飜へる。

觀心寺

楠木正成の首級埋葬地

觀心寺は、河内國南河内郡川上村大字寺元に在り、大寶年中、役の小角の創建せる所、初め、雲心寺と曰ふ、弘仁年中、空海、改めて、觀心寺と爲す、嵯峨天皇以後、歷朝の勅願所たり、就中、南朝諸帝の叡信、最も厚く、正平十四年に至り、後村上天皇の行在所となる、天皇、崩じ給ひて、本堂の後峰に葬り奉つり、檜尾山觀心寺陵と申す、寺中に、中院と稱するあり、文永年中、楠木正成の祖父正晴の建設して、其父成氏の冥福を修せしもの、爾後、楠木氏の香華院たり、正成の軍旅の間に在るや、



中院
河内國南河内郡川上村大字寺元の觀心寺は楠木氏の菩提寺なり此れは其中院にして楠公夫人及び幼兒正行等の寄寓せし處。

常に、其妻孥を、中院に託して、敵の刼掠を防ぐ、正行の父の首級を見て、自殺せんとせしも、中院に在りし時の事なりと云ふ。

寺中に、正成の首塚あり、建武三年六月五日、之れを建設す、明治十四年に至り、時の堺縣令稅所篤、更に、修理を加ふ、塚前に碑あり、篠崎小竹、其文を譔ぶ。

寺に、正成父子の肖像、武具、書翰等を藏す。

一

忠誠の士は、敵と雖も、之れを重んず。

尊氏、一たび、正成の首を、六條河原に梟けしと雖も、其舊好を思ひて、河内に送るに決す。

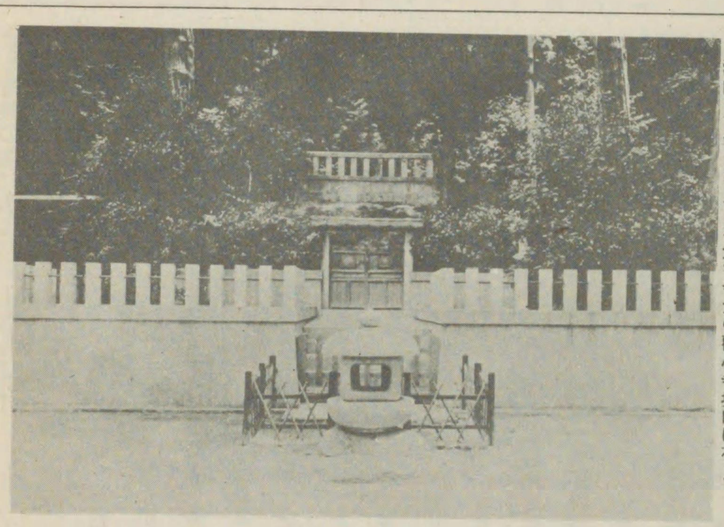
『故郷には、妻子あらん、空しき貌をも、さこそ、見たく思ふらめ、疾く送り遣はさんこそ、好けれ』

世瀨川有隣を召して、旨を告ぐ。

有隣、乃ち正成の首を携へて、千早城に抵れば、安間七郎、生池兵衞の二人、城外に出でゝ、對面す。

有隣、容を正して、尊氏の口上を述ぶ、

『尊氏、此度、判官殿を討ち取り候へること、敢て私の宿意あるには候はず、戰陣の習ひ、是非もなき次第にこそ候へ、尊氏の歎き、切なるに付けても、妻子方の悲み、さこそと存じ、形身として、送り參らす、後の御供養、懇に營み給ふべし、正行殿、假令、味方に參り給はずと雖も、御家より、仇し給ふにあらずんば、此方より、和泉、河内へ、軍勢を差し向くることあるべからず、此儀、能く〳〵、傳へよと申されて候』



楠公の首塚
河内國南河内郡川上村大字寺元の觀心寺境内に在り。

七郎、兵衞の二人、亦、慇懃に答ふ、

『足利殿の御厚志、只々、感謝の外は候はず、貴命の如く、正成に於ては、朝家に仕へて、聊か臣節を盡し候まで、貴家に對して、

何の宿志をか挾み候はん、正行の進退に至りては、一に朝命に從ひ奉つり候もの、敢て私に擇ぶべきには候はず、若し、向後、御合戰の事候はゞ、正行、亦、戰陣に馳せ參じて、今日の芳志を謝し奉つり候べし』

正成の首を、受け取りて、有隣を還へす。

二

正成の後室、其三子正行、正時、正儀と與に、觀心寺に在り。

夫戰死の報を聞きてより、悲嘆の涙、乾く隙とてもあらず、

『合戰の事、始まりてよりは、同じ國に在りながらも、別の所に、分れ住みて、朝夕、見みえ奉つらんやうもなく、それさへ、最と懷かしう思ひつるものを、斯くも、永き訣となりぬるこそ、返す〳〵も、本意なけれ、切めて、御亡骸にても、一目、見奉つらばや』

と搔き口說く折りも折り、思ひ掛けなくも、七郎、兵衞の二人、夫の首を、千早より、護り來る。

嬉しくも、又悲しく、急ぎ函を啓きて、出だし見れば、目は塞がりぬ、色は變りぬ、貌を見れば、其れながら、在ませし當時の狀に似るべくもあらず、

『扨ても、變り果てたる御有樣よな』

南妣庵
南妣庵は河內國南河內郡東條村大字甘南備の峰條に在り楠公夫人の草庵を結びて其夫其子の爲めに冥福を修せし處。

悲痛の心、胸に迫りて、後室も泣き、三子も泣き、居合はす人々も、亦、皆、泣き崩る。

正行、突と、立ち上がり、涙を掩うて、持佛堂の方へと行く、其狀、常ならず。後室、見て怪しみ、妻戸の方より、行きて、

窺ひ見れば、正行、父の筐の一刀を拔き持ちて、アワヤ、自殺せんとす。後室、アナヤと驚き、轉ぶばかりに、駈け入りて、葬と刀持つ手に、取り縋る、

『ヤ、、何たる眞似ぞや』

ヂッと、其顏を見詰めて、ハラ〳〵と、涙を垂る、

『栴檀は、嫩芽より馨ばしとこそ申さめ、汝、幼少ながらも、父君の子なるものを、何とて、斯ばかりの道理に惑ふことやある、故判官殿の、兵庫に向ひ給へる時、汝を、櫻井の宿より、還へし給へるは、何の爲めなりしぞ、亡き跡を弔へよとの御意なりしか、腹を切れよとの御心なりしか』

一語は、一語よりも酷し、

『其時、汝は、還りて、何と母に申せしぞ、父君には「我れ、若し、討死しなば、天下は、必定、足利の代となりなん、一賊、郎等、一人にても、生き殘らば、與に金剛山を守りて、天晴れ、朝敵を攻め滅ぼさんことを力めよ」と申させ給ひしと、此母に告げしにあらずや、其言葉、尙、耳に殘れるに、何時の程にか忘れ果てけるぞ、口惜しやな、斯くては、父君の名をも汚がさん、朝廷の御用にも立つまじきぞ』

甘南備神社
甘南備神社は河內國河內郡東條村大字甘南備に在り楠公夫人を祀る。

諫めては泣き、泣きては又諫む、

正行、答へんに、言葉もなし。

後室、忽ち刀を奪ひ取れば、正行、搔とばかりに、禮盤

の上より、泣き倒る。

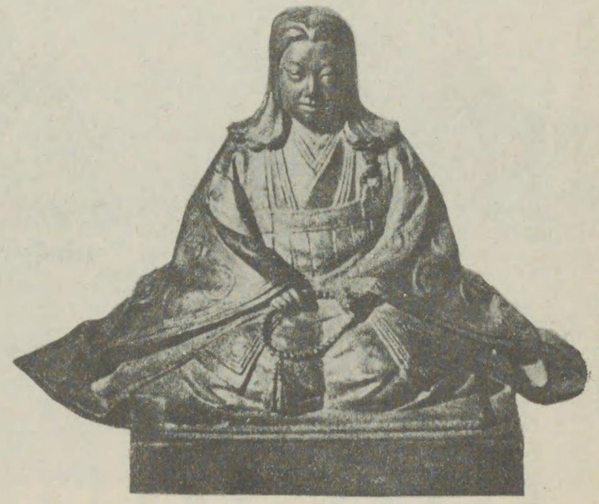
三

泣けばとて、死したる人の、復た蘇へらんやうもあらず。

後室、亡夫の師瀧覺房に乞ひて、懇に供養を營み、終りて、寺中に葬むる。

正行、父の墓前に詣でゝは、其遺訓を想ひ、母の膝下に侍

楠木正成公木像　（河内觀心寺藏）



楠木正成夫人木像　（河内觀心寺藏）

しては、其教誨を思ふ、

『何ど、父の志を繼がでやは』

終に慨然として、志を決す。

是れより、日々に、衆兒を聚めて、戰爭の遊戯を事とす、麾を把つて、敵を追ふの狀をなしては、

『ソレ足利を追へや』

刀を揮うて、首を斬るの樣をなしては、

『我れ、尊氏の首を取れるぞ』

と呼はり、寢ても、寤めても、國賊追討の事を、心に忘れず。

舊臣、聞いて、望みを屬し、母氏、見て、心に喜ぶ。

後室、名は久子、一に　子とも曰ふ、南江備前守正忠の妹なり、正行戰歿して後、薙髮して、尼となり、其領内甘南備鄕に、草庵を結びて、一族の冥福を祈る、時人、名づけて、南妣庵と號す、正平十九年七月十八日を以て歿す、法名を、玉山蒲團尼と曰ふ、庵址、今、尙、存す。

比叡山

足利勢大敗の地

比叡山は、山城、近江の國境に在りて、近江國滋賀郡坂本村に屬す、延曆寺の所在地にして、近江より登るには、東坂本よりし、山城より登るには、一は、愛宕郡修學院の東、雲母坂よりし、一は、同郡八瀨よりするもの、其絕頂を、大嶽と曰ひ、又四明嶽とも稱す、高さ八百四十八米突あり。

延元元年六月、後醍醐天皇の行宮を置かせられし當時、足利尊氏の大擧來り侵すや、一手は、東坂本よりし、一手は、八瀨よりし、一手は、雲母坂より、東西北の三道より、進擊し、包圍十有五日の長きに及びしも、終に官軍の爲めに擊退せられて、京師に遁げ還る。

一

寺門、賊軍に與みするの時、山門、偏に王室を援け奉つる。

延元元年五月二十七日、官軍、兵庫より、敗れ還れば、京師、震駭せざるはなし、主上、俄に三種の神器を奉じて、比叡山延曆寺に幸し給へば、近衞左大臣經忠、洞院右大臣公賢、吉田内大臣定房、萬里小路大納言宣房、竹林院大納言公重、御子左大納言爲定、四條中納言隆資、坊城中納言經顯、洞院左衞門督實世、千種宰相中將忠顯、葉室中納言長光、中御門宰相宣光以下、多く從ひ奉つる。

新田左中將義貞、其子越後守義顯、脇屋右衞門佐義助、其子式部大輔義治、堀口美濃守貞滿、大館左馬助氏明、江田兵部大輔行義、額田掃部助正忠、大江田式部大輔氏經、岩

松兵衛藏人經家、鳥山修理亮氏賴、羽川越中守時房、桃井兵庫助顯氏、里見大膳亮義益、田中修理亮氏政、千葉介貞胤、宇都宮治部大輔公綱、宇都宮左近將監泰藤、狩野將監貞綱、熱田大宮司昌能、河野備後守通增、得能備中守通繩、武田甲斐守盛正、小笠原藏人政道、仁科信濃守氏重、春日部治部少輔時賢、名和伯耆守長年、菊池肥後守武重等、各各士を率卒ゐて、鳳輦の前後を護り奉つる、其總勢六萬餘騎。

月卿雲客、袖を聯ねて、山は、天寰の居の如く、猛將勇士、踵を接して、谷は、武林の姿を呈はす、叡山三千の衆徒、心を協はせ、力を戮はせて、王事に勤む。

二

持明院殿には、花園法皇、光嚴上皇の在はします、主上、洞院大納言公泰を、勅使として、遣はし給ひ、

『山門に、御幸然るべう』

と促がし給へば、後伏見法皇崩御あらせて、日淺く、尙、御喪中に在はすと雖も、事、止むべきにあらず、乃ち

『是非に及ばせられず』

との旨を宣らし給ふ、大田判官全職、路次を警固し奉つり、御輿に召されて、出御あらせ給ふ、北白河の邊に至り、光嚴上皇、俄に御惱み起りて、聖體、最と御苦しげに拜し奉つれば、其儘、御輿を、法勝寺塔前に、舁き据ゑて、御惱の鎭まるを待ち奉つる。

兎角する內、賊軍の先鋒、早、洛中に亂入しけん、兵火、西に南に起りて、喊聲、遠く邇く聞ゆ、全職、

『御違例を強して、險阻を越えさせ給はんには、御病勢增進の虞も候べし、去りとて、逆徒、既に洛中に亂入するからは、空しく、御平癒の時を待ち奉つるべきにも候はず、敵に、路次を塞がれ候ては、一大事に候、全職は、先づ山門に馳せ參じ候べし、御違例、少しにても、緩らせ給はゞ、急ぎ山門へ供奉せられ候へ』

供奉の人々に、其れと申し置き、花園法皇のみを奉じて、叡山に馳せ向ふ。

光嚴上皇は、前日、足利尊氏の請ひに依りて、院宣を下させ給ふ所あり、山門に行幸あらせ給はんことは、固より、望ませ給ふ所にあらず、さればこそ、御不豫に言寄せて、

全職をば、先づ遣らせ給ひけるなめれ。

斯かる所へ、尊氏の軍兵、砂塵を蹴立てゝ、馳せ來り、御輿を拜し奉つりて、馬より、飛び降りさま、ハッと平伏す、

『これは、足利宰相よりの使者に候、御所へ參候候所に、早、山門へと承はりて、此れまで、御後を慕ひ奉つりてこそ候へ』

と言上すれば、上皇、大に叡感あらせ給ひ、供奉に候ふ日野中納言入道資名、三條中將實繼も、亦、喜色を湛ふ。

頓て、六條の長講堂を、御所として、入れ奉つり、其儘、留まりて、護衛し奉つる。

此れぞ、南北兩朝に分かるゝ第一歩なりける。

三

勝ち誇りたる賊軍、丹波路より、西國街道より、續々、京師に押し入る。

仁木左京大夫頼章、今川駿河守頼貞は、丹後、但馬の兵數千騎を率ゐ、錦旗を、陣頭に押し立てゝ、丹波路より、眞先に、京師に入る。

尊氏兄弟は、八幡の山上に、陣を駐め、五月晦日を以て、京師に入り、東寺に、城郭を構へて、此處を、一時の根據と定む。

是に於て、尊氏、諸將を會して、軍議を開き、奥羽、北國の敵兵、未だ來り着かざるに先だちて、叡山を攻撃するに決し、期するに、六月六日の拂曉を以てす。

軍を三手に分ち、吉良、石塔、澁川、畠山の諸將は、五萬餘騎を率ゐて、追手に向ひ、仁木、細川、今川、荒川の諸將は、八萬餘騎を率ゐて、搦手に向ひ、高、大高、岩松、桃井の諸將は、七萬餘騎を率ゐて、西坂本に向ふ、總勢二十萬騎。

部署、既に定まる、追手、搦手の兵は、前夜を以て、程に上り、西坂本の手は、當日の曉天を以て、押し寄す。

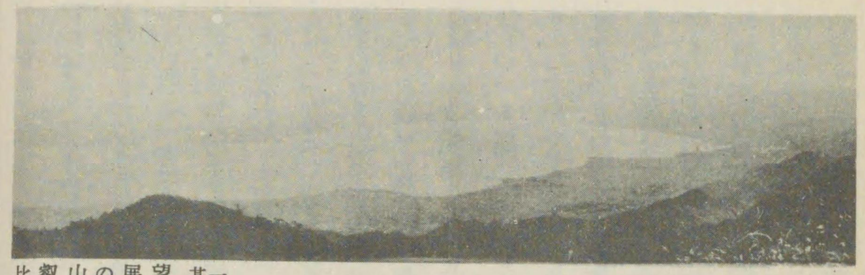
蒼茫たる曉靄、俄に搖らぎ、殷々たる喊聲、山の西よりも起り、東よりも起る。

素破や敵ぞ。

四

賊軍逆寄せに寄せ來らんとは、官軍の豫期せざりしところ。

東坂本には、新田義貞、脇屋義助を始めとして、千葉、宇



比叡山の展望　其一

四明岳は比叡山第一の高峰にして大嶽と謂ふ標高八百八十八米立ちて東方を望めば琵琶湖一碧天より澄む。

都宮、土居、得能の諸將あり、西坂本には、千種中將忠顯、坊城少將正忠等の京兵、護王院、禪智坊、道場坊等の僧兵あり、湖上には、五百餘隻の水軍、船を並べ、搔楯を連ねて、横矢を射んと、待ち擣ふ。

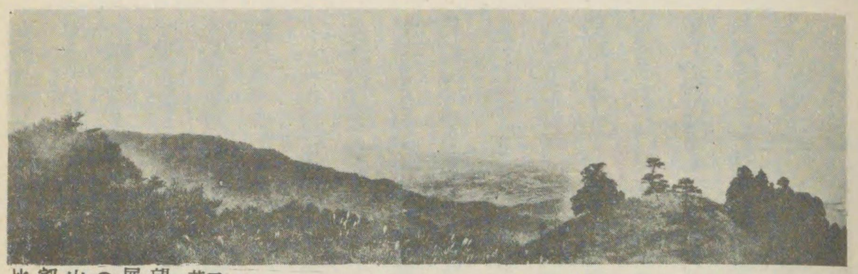
唐崎、滋賀、錦織、三井寺、大津、松本等の湖西に充ち滿ちたる追手の賊軍、此れに氣を呑まれて、敢て迫り近つかず、吉良左兵衞入道滿義、急騎を、高豐前守師重の陣に馳せて、

『敵の陣營を望み見候へるに、新田、宇都宮、千葉、河野を始め、重なる武士、皆、東坂本を固め候とこそ、覺え候へ、西坂本は、險阻を恃みて、公家の人々、扨は、山法師共の少しばかり、固め居れるに過ぎ候まじ、一軍手痛く、攻め寄せ給はゞ、捗々しき防戰をも、得こそ致すまじく候へ、思ふ圖に、大嶽の敵を、追ひ落して、大講堂、文殊樓の邊に、火を揚げられ候はゞ、當手よりも、攻め合ひて、東坂本の敵を、一人も餘さず、湖水へ、追ひ落し候はん』

と申し入るれば、師重、何とて、遲疑せん、諸軍に向うて、

『進んで戰ふものは、破格の重賞あらん、退いて助からんものには、過大の嚴罰を加へん、一身の高名を思うて、拔け懸けすること勿れ、傍輩の手柄を猜みて、見殺しになすべからず、山上に攻め登らば、堂舍佛閣に、火を放つて、一宇も殘すべからず、僧兵山徒は、悉く首を斬つて、一人も免すべからず、各〻忠戰奮鬪して、將軍の御感に預かり候へ』

と令し終りて、三石、松尾、水飲の三方より、曳々應々、聲を揃へて、驀地に馳せ登る。



比叡山の展望　其二

比叡山は山城近江の國境に聳えて近江國滋賀郡坂本村に屬す山上に延曆寺あり此れは其最高峰四明岳より東方の琵琶湖を望むもの。

千種忠顯、坊門正忠等、前線に在り、其れと見るより、三百餘騎を率ゐて、防ぎ戰ふ、奮鬪、頗る力む。

松尾より、攻め上れる賊軍、其背後より、來り迫る、忠顯、正忠等、寡兵を以て、大軍の爲に、挾擊せられて、一人も殘らず、皆、悉く討たる。

其後方に控へたる僧兵、之れを見て、且、戰ひ、且、退く、賊軍、勝に乘じて、追ひ立て〳〵、雲母坂、蛇ヶ池を、左手に見つゝ、ヂリ〳〵と、攻め登る、目を擧ぐれば、四明千仭の峰は、近く目睫の間に在り。

『西坂は、早、破れしぞ、疾く防げや』

鏗錚たる鐘聲、忽ち院々谷々に、響き渡れば、一山の勇僧、先を爭うて、馳せ來り、死力を盡して、奮ひ戰ふ。

宇都宮公綱、篠峰を固めんと欲して、横川に向ふ、西谷の急を聞くより、五百餘騎を率ゐて、一散に馳せ來る。

新田義貞、亦、六千餘騎を率ゐて、東坂本より、馳せ來り、四明の巓上に、旗を建てゝ、諸兵を指揮す、粟生顯友、篠塚伊賀は、左に在り、由良具滋、長濱顯寛は、右に在り、喧啞叱咤、猛然として、馳せ下り、勢に任せて、水飲の谷に、擠し落せば、後軍、此勢に怖れて、ドウと逃げ走る。

義貞、一擧して、賊軍を追ひ郤け、其儘、留まりて、大嶽に陣す。

五

賊將高豐前守師重、既に敗れ退く、其翌七日、使者を、追手の賊軍の營に馳せて、

『昨日の一戰に、重なる敵兵は、大嶽の方へ、向ひたるげに候、急に東坂本に押し寄せて、敵を山上に追ひ登せ、

東西兩塔の間に進んで、煙を擧げられ候はゞ、大嶽の敵共、必ず、進退、度を失ひ候はん、其時、當手よりも、攻め登りて、雌雄を、一擧に決せんとこそ、存ずるにて候へ』

との牒狀を送れば、吉良、石塔、仁木、細川の諸將、何とて、異議あらん、

『左らば、懸かれ』

五萬餘騎の兵を分つて、三方より、押し寄す。

脇屋右衞門佐義助、義貞に代りて、此處を守る、渡櫓、高櫓には、屈竟の射手を配し、白鳥岡には、名和、土居、得能、仁科、春日部の諸軍二萬餘騎を置き、和仁、堅田には、兵船五百餘隻を艤して、待ち設く。

賊軍、犇々と、濠の前に押し寄せ、埋草を投げ入れ、燒草を積み重ね、濠を埋め、柵を燒きて、突き入らんとすれば、待ち設けたる官軍、一齊に、矢を番へて、サッと發つ。

敵は多く、距離は近し、矢々、虛發なく、金甲鐵鎧、一として、貫かざるはなく、アッと云ふ間に、バタ〳〵と、倒れ伏すもの、三千餘人。

賊軍、此れに驚きて、俄に色めき立つれば、脇屋、堀口、江田、大館の諸將、六千餘騎を率ゐて、サッと、三の城戸を開きて、驀地に、敵中に突き入る。

名和、土居、得能、仁科、春日部の諸將、亦、ドッと喚きて、白鳥岡より、駈け下り、横さまに、賊兵を懸け立つ。

賊軍、一支へも、支へ得ず、ドウと、湖岸に走り退けば、五百餘隻の兵船、一齊に、矢を發つ。

賊軍、陸上の兵には、懸け立てられ、湖上の兵には、射立てられ、死者、傷者を棄てゝ、大津の陣營に、逃げ還る。

賊軍、昨日も、敗れ、今日も、亦、敗る、是れより、復た來り迫らず。

六

爾來、兩軍、相對峙すること旬日。

十六日、紀伊熊野八庄司の兵五百餘騎、西坂本の賊營に來る、此賊、深山重嶺の間に、成長して、險阻を跋涉すること、平地の如く、手製の堅甲は、劍も入る能はず、矢も洞く能はずと自負す。

師重、乃ち十七日辰の刻、熊野八庄司の兵を、尖頭に立て

て、松尾坂の尾崎より、馳せ登る、士卒、皆、黑甲黑鎧を着す、遠く望めは、烏群の如し。

本間孫四郎資氏、相馬四郎左衞門忠重、綿貫五郎左衞門秋兼、池田五郎晴年の四士、義貞に屬して、大嶽に在り、此れぞ、數萬の官軍より、選りに選りたる剛弓絶倫の士。

時に、秋兼、晴年の二人は、東坂本に行きて、資氏、忠重の二人のみ、義貞の前に在り、賊軍の肉薄し來るを瞰下しつつ、忽ち哄然として笑ふ、

『今日の合戰、味方の兵には、太刀をも、拔かせまじ候、矢一つをも、射させ候まじ、我等二人、馳せ向つて、一矢仕り、奴原に、膽をば潰させ候はん』

と言ひ放ち、意氣、昂然として、座を起つ、敵の大軍を視ること、螻蟻の群の如し。

資氏、鎧を脫ぎて、脇楯のみとなる、此れぞ、一段強く弓を彎かんとの用意、普通よりは、二尺有餘も長き白木の弓を把り、白鳥の羽にて矧きたる十五束三伏の矢、唯二本を携へ、そゞろ歌を謠ひつゝ、悠々として、降り行く。

忠重も、亦、普通の弓の四五張も合はせたらんが如き剛弓を携へ、同く十四束三伏の矢二筋を取つて、後より續き、一叢茂き松樹の陰に入り、弓杖つきつゝ、泰然として、敵の近づき來るを待つ。

其れとも知らぬ敵の一人、忽然として、眞先に躍り出づ、左の手には、長さ九尺ばかりの樫の棒を提さげ、右の肩には、刄渡り一尺ばかりの大鉞を擔ひ、山上を見上げつゝ、驀地に、馳せ登る、其狀、金剛力士の如し。

忽ちにして、二町ばかりの距離に近づく。

此時、突と松樹の陰より、立ち現はれたる資氏、弓を忘るるばかりに、引き絞り、正鵠を定めて、ヒョウと發つ。

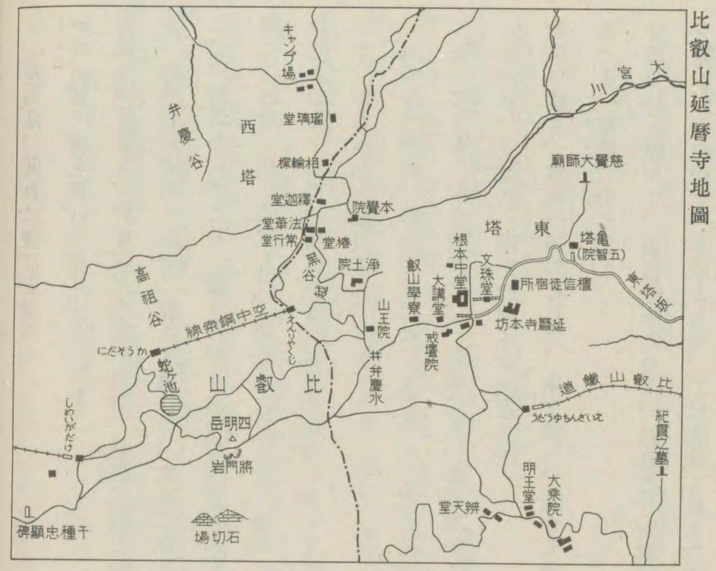
弓は勁弓、箭は神箭、人は李廣以上の達人、思ふ壺を、少しも違へず、鎧の弦走より、總角附の板まで、裏表五重を、射洞して、矢先三寸ばかり、肉を捉んで、ズバと拔け出づ。

アッと魂ぎる一聲、谺に響くと齊しく、其儘、ドウと、小篠の上に、打ち伏す、宛ら巨木の倒るゝかと思はるゝばかり。

賊軍、これはと驚く間もあらせず、又一人、猛然として躍り出づ、手には、六尺有餘の長刀を握り、腰には、四尺あ

まりの太刀を佩く、容貌魁偉、仁王の如し。
射向けの袖を翳しつゝ、山上を見遣り、又後を見返りて、
何事かを告ぐるや、其儘、奮然として、馳せ上る。

比叡山延暦寺地圖



それと見たる忠重、突と樹陰より、立ち出づ、五人張りの弓に、十四束の矢を番へつゝ、屹と、敵の方を見遣る、早、射界に入り來れば、

『矢頃は、今ぞ』

キリゝと、弓を滿月の如くに、引き絞つて、ヒョウと發てば、弦音、高く、皷膜を劈く。

アッと叫べる一聲、敵は、眉間を射られて、簇、後方に拔け出づること一二寸、身は、倒れて、谷底、深く轉び落つ。

『扨も、恐ろしき弓勢や』

五百餘人の烏群、前へも進めず、後へも退かれず、皆、背を屈めて、立ち竦む。

七

一箭の威力、忽ち數百の賊軍を壓す。

資氏、忠重の二人、敵を尻目に懸けつゝ、クルりと、味方の陣を振り返り見て、

『例にも似ず、敵共の働き候は、軍の候はんずるやらん、腕ならしに、一つづゝ、射て見候はん、何にても、的に立てさせ給へ』

と呼はる、

『左らば、此れに遊ばし候へ』

紅の地に、月を畫ける扇を、矢先に挾みて、立つ。

資氏は、前に立ち、忠重は、後に立つ、資氏、

『月を射なば、天の恐れもありなん、御邊は、左の緣を射給へ、我れは、右の緣を射候はん』

と言へば、忠重、

『我れも、左こそは存ずれ、イザ〳〵』

と答へて、各〻矢を番ふ、其距離、二町ばかり。

資氏、先づハタと射れば、忠重も、亦、ハタと射る、矢所、少しも違はず、月を中に挾んで、其左右を貫く。

諸兵、皆、アッとばかりに驚く。

資氏、忠重の二人、各〻百矢二腰を、取り寄せ來り、屹と、敵の方に向つて、弓を素引すること、二たび、三たび、

『相模國の住人本間孫四郎資氏、下總國の住人相馬四郎左衞門尉忠重の二人、此陣を固めて候ぞ、矢、少々受けて、物具の札の堅否を試めされ候へ』

と高らかに呼はる、勇名は、既に聞きつ、手並も、亦、見つ、

『這は叶はじ、引けや引け』

後に控へし師重の十餘萬騎、誰逐ふとしもなく、皆、我れ先きにと、雪頽を打つて、本の陣地に、引き退く。

二人の驍名、益〻敵味方の間に轟く。

八

山徒金輪院律師光澄なるもの、密に異圖を蓄ふ、十八日、今木少納言隆賢を使僧として、師重の陣に遣はし、

『新田殿の支へられ候四明山下は、北嶺第一の難所に候、輙すく攻め破らんこと、叶び候まじ、屈竟の人數四五百人を、此隆賢に副へられ候て、無動寺の方より、忍び入り、文殊樓、四王院の邊に於て、鬨の聲を揚げられ候はば、光澄、亦、一味の衆徒を率ゐて、東西兩塔の間に、旗を揚げ、鬨を合はせて、瞬く隙に、山門を攻め落し候はん』

と告ぐ、師重は、心窃に、山徒の內應を望める所、之れを聞きて、大に喜び、中國勢の中より、夜襲に慣れたる兵、五百餘人を選びて、隆賢に附す。

隆賢、乃ち之れを導き、夜に乘じて、密に叡山に還る、地

理は、固より、隆賢の諳んずる所、眼を閉るも、路に惑はざるべきに、如何にやしけん、四明山麓の路を、南に、北に、踏み迷ひて、同じ處を、歷巡ること終宵、天は、何時しか、ほの〴〵と明く。

『敵共、忍び入りしぞ、ソレ討ち取れや』

早くも、發見したる紀清兩黨、前より、後より、無二無三に、攻め立て、、百餘人を討ち取り、其餘の敵は、悉く谷底に逐ひ落す。

隆賢、數ヶ所の創を負うて、自殺せんとする所を、取つて、押へて、繩を掛く、頓て、義貞の本營に送れば、義貞、山徒の故を以て、誅を加へず、其一族の許に送り遣はして、

『殺されんも、活け置かれんも、心の儘たるべし』

と告ぐ、今木中務丞範顯、

『畏つてこそ候へ』

と答へも敢へず、使者の面前に於て、其首を刎ぬ。

元兇光澄は、其子の爲めに殺され、其子は、又其弟英澄の爲めに殺さる。

山門の叛徒、忽ち平ぐ。

九

賊軍、西坂本を侵さば、本院の鐘を撞き、東坂本を侵さば、生源寺の鐘を撞きて、急を報ぜんとは、官軍の豫て定むる所。會〻賊將足利尾張守高經、北陸道の兵を率ゐて、仰木より、横川に侵入せんとするの噂あり、官軍、聞きて、警戒を加ふ。二十日の曉天、忽ち鏘々たる鐘聲、生源寺より起りて、東西兩塔に響き渡る、此れぞ、山猿の群り來りて、戲れに打ち鳴らせるもの、

『素破や、敵は、追手に押し寄せたるぞ』

それとも知らぬ東坂本の官軍、各〻持場々々の守備を固むれば、西坂本の官軍、亦、要所々々の陣地を守りて、一山の空氣は、俄然として、緊張を加へ來る。

『扨は、山より、逆寄せすると覺ゆるぞ、油斷なせそ』

東は、志賀、唐崎、大津、松本、西は、水飲、今路、八瀨藪里の各地に據れる賊軍、楯よ、物具よと、皆、一齊に、犇めき立つ。

官軍、敵の動搖するを察して、機は今ぞと、東西一時に、城門を開きて、サツとばかりに、下り擊つ、賊軍の諸將、

『敵は小勢ぞ、引くな〳〵』

と呼はり〳〵、士卒を鼓舞して、支へ戰ふ、脇屋右衞門佐義助、五千餘騎を提げて、志賀の闍魔堂に在りし敵砦を燒き立て〳〵、喚き叫んで、突進すれば、山東の賊は、忽ち此一角より、崩れ始めて、終に總崩れに、崩れ走る。

大嶽、三石嶽、篠峰の官軍、亦、皆、猛然として、下り擊ち、逃げ惑ふ賊兵を、谷底へ、逐ひ落し〳〵、北ぐるを追うて、蹴散らし、懸け散らす。

賊將高豐前守師重、我が太刀に、我が太股を突き貫きて、遁げ後れたる所を、舟田長門守經政の兵に、生擒せられ、山西の賊軍、亦、總崩れに崩れ走る。

師重は、賊軍一方の將にして、佛敵神敵の最たり、平重衡の南都東大寺を燒きたる例に依りて、山門の大衆、之れを請ひ受け、唐崎に引き出だして、其首を斬る。

足利左馬頭直義、來りて、赤山に在り、終に軍を引きて、京師に還る。

群猿、警を報じて、一擧、賊を攘ふ、人、以て山王の神助となす。

東寺

足利尊氏據守の地

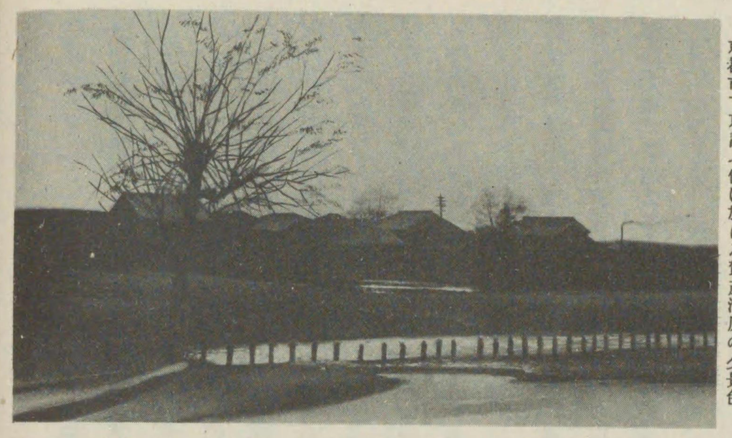
東寺は京都市下京區九條町に在り、之は眞言宗東寺派の總本山敎王護國寺、是れなり、桓武天皇の奠都後二年、平安京の南門、卽ち羅城門の左右に、鴻臚館を建て、、外賓の接待場に充てらる、嵯峨天皇の御宇、東鴻臚館を、弘法大師に、西鴻臚館を、守敏僧都に賜うて、寺院となさしめ給ふ、守敏の寺を、西寺と呼べるに對して、此れを、東寺とは稱せしなり。

南は、九條大路、北は、八條大路、東は、大宮大路、西は、朱雀大路にして、四方に、塀を繞らして、此れに、門を設く、南大門は、一山の總門にして、九條大路に面す、東大門は、不開門と稱して、大宮大路に面す、此れは、延元元年、新田義貞の、足利尊氏を攻めたる時、閉鎖したる儘、再び開門せざるを以て、此名ありと云ふ。

此に掲ぐるは、當時の戰況なり。

一

新田在中將義貞、戰鬪に長じて、追擊に拙なり。



七條河原　京都市下京區七條に於ける賀茂河原の夕景色。

賊軍の比叡山より、敗れ還るや、他の賊兵、亦、驚き怖れて、俱に四方に、逃げ散ずるもの、頗る多く、足を洛中に、留むるもの、甚だ少なし。

官軍、若し勢に乘じて、長驅窮追すれば、再び賊徒を掃蕩して、京師を回復せんこと、亦、難きにあらず。

然るに、山門に、異議ありて、軍議、容易に決せず、空しく、數日を經過する間に、賊兵、續々還り來りて、官軍の愈〻京師攻擊に決したる頃には、賊軍の勢力、復た以前と異なる所もあらず。

六月晦日、官軍、兵十万餘騎を分つて、二手となし、一軍は、今路より進み、一軍は、西坂本より進みて、京師に向ふ。

足利尊氏、早くも、之れを知りて、防禦の策を運らし、東寺を、根據として、經の小路、緯の小路に、諸軍を派して、守備を固め、故らに、小勢を、河原に遣はして、官軍の來るを待つ。

既にして、千葉、宇都宮、土居、得能、仁科、高梨の諸軍歩武堂々として、進み來る、待ち設けたる賊兵、一矢を發つて、戰端を開けば、官軍、何かは、遲疑せん、忽ち馬首を揃へて、サッとばかりに、馳せ來る。

賊兵、一支へも、支へず、倉皇、逃げ走れば、官軍、勢に乘じて、追擊すること數町。

賊軍、前より、後より、右より、左より、續々、馳せ來つて、四方より、包み擊てば、官軍、見る〳〵、討たれ死するもの、五百餘人。諸軍、皆、敗れて、西坂本に引き揚ぐ。

二

七月五日、二條大納言師基、敷地、上木、山岸、瓜生、深町、河島以下の兵三千餘騎を率ゐて、北國より、東坂本に還り着く。

官軍の士氣、忽ち振ひ、大擧して、再び京師を襲擊せんと欲す、官軍、前敗に懲りて、方略を變じ、一軍は、二條より、河原を下り、一軍は、內野より、大宮通を下り、火を民家に放ちて、東西兩道より、進んで、東寺を攻めんとし、期するに、十八日を以てす。

秘密は、早くも、賊軍に泄る。

尊氏、乃ち全軍を分ちて、三となし、一軍は、東山と、七條河原との間に置きて、河原の敵に備へ、一軍は、船岡山の麓、神祇官の南に伏せて、內野の敵に備へ、一軍は、西八條、東寺の邊に置きて、豫備軍とす、每軍、各〻二十万と號す。

官軍、之れを知らず、十八日卯の刻、八瀨、藪里、下松、修學院の前に至りて、陣を東西の二に分つ。

西軍は、新田の一門、五万餘騎を率ゐて、紫野より、內野に向ひ、東軍は、二條師基、及び千葉、宇都宮、仁科、高梨の諸將、之れを率ゐ、眞如堂を、西に過ぎて、河原を馳せ下り、士卒を、諸方に馳せて、火を放つこと、數十ヶ所、紅炎、天に冲し、黑煙、地を捲く。

戰端は、早くも、五條河原より起りて、建仁寺、得長壽院の西方に及び、人馬、南北に、馳せ違ひ、旌旗、左右に、入り亂れて、追ひつ、追はれつ、奮ひ戰ふ。

內野にも、亦、衝突、忽ち起りて、右近馬場、神祇官の南北、矢石飛び、劍戟閃きて、喊聲、呼聲、風雷よりも急なり。

五條河原の官軍、終に敗れ走れば、賊軍、悉く內野に集まり、官軍を、十重、廿重に包んで、嚴しく攻め立つ。

義貞兄弟、兵を行ること、臂の指を使ふが如し、奮戰突擊、終に一方の血路を開きて、西坂本に引き揚ぐ。

官軍、二たび京師を攻めて、二たび敗る。

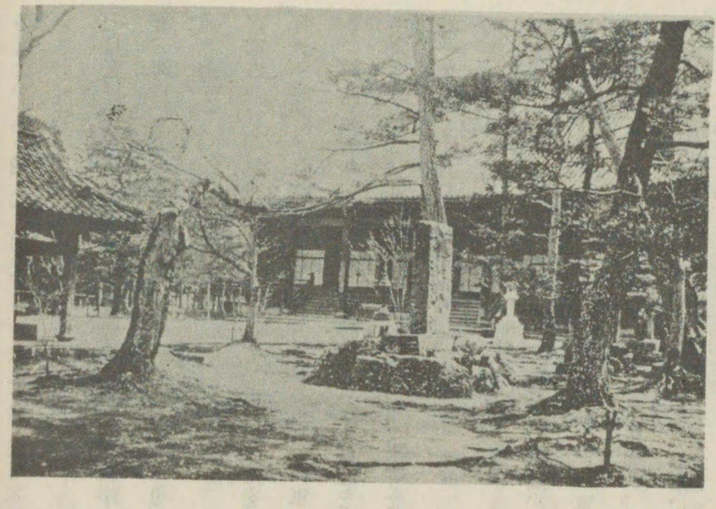
三

官軍の意氣、今や、消沈せんとす。

是に於て、三千の衆徒、大講堂の大庭に、會合して、大評定を凝らし、南都興福寺に、牒狀を送りて、其合體を求むるに決す。文筆は、其最も得意とする所、直に筆を援きて、草を起す、中に、

『尊氏、直義等、邊鄙の酋長より起りて、飽まで超涯の皇澤に浴し、未だ君臣の道を知らず、忽ち豺狼の心あり』

の句あり、之れを讀むもの、誰か公憤を發せざらん、興福寺の衆徒、此牒狀を得て、異議なく、同心を表し、直に返牒を送りて、官軍を援く。



眞如堂
眞如堂は鈴置山眞正極樂寺と曰ひ京都市上京區淨土寺町字小山に在りて神樂岡の南黑谷の北に位す。

此事、早くも、遠近に傳はるや、畿內、近國の兵にして、形勢を觀望するもの、漸く心を官軍に寄するに至る。

是に於て、四條中納言隆資を、大渡に、中院中將定平を、宇治に、定房親王、及び額田左馬助爲綱を、長坂に、其他の諸軍を、勢多、鞍馬等の各地に遣はして、賊軍の糧道を斷つ、京師の七道中、其塞がざるもの、唯、唐櫃越の一道のみ。

賊軍、兵は多く、食は少なく、饑餓、日に迫りて、士卒、皆、窘み、戎器を賣り、甲冑を鬻ぎて、食料を求め、四出して、民家を抄掠す。

諸民の兵火を免かるゝものは、兵匪の侵す所となり、出でて、食を道路に乞ふに至り、慘狀、言ふべからず。

四

官軍の計略、其圖に中りて、賊軍の窮狀、其極に達す。諸國の兵士、之れを聞きて、來りて、官軍に投ずるもの日日に多く、阿波、淡路の士卒三千餘騎、亦、來り屬す。

官軍の形勢、復た振へば、諸卿、此機に乘じて、速かに京師を回復せんことを促がす、義貞、乃ち七月十三日を以て、京師を攻擊せんと欲し、先づ四國の兵を、阿彌陀峰に遣はし、爛んに篝火を焚きて、賊勢を脅威せしむ。

期に至れば、義貞、一族四十三人を率ゐ、行宮に馳せ參じて、拜辭し奉つる、主上、高く御簾を褰げて、諸將を御覽ぜさせ給ひ、

『今日の一戰、各自、克く忠戰を盡せよ』

と勵まし給ば、義貞、

『合戰の雌雄は、時の運とこそ申し候へ、其勝敗は、逆め定むべきには候はず、去りながら、今日の一戰に於ては、尊氏の籠り候東寺の中へ、箭一つ、射込み候はでは、再び此れへ還り候まじ』

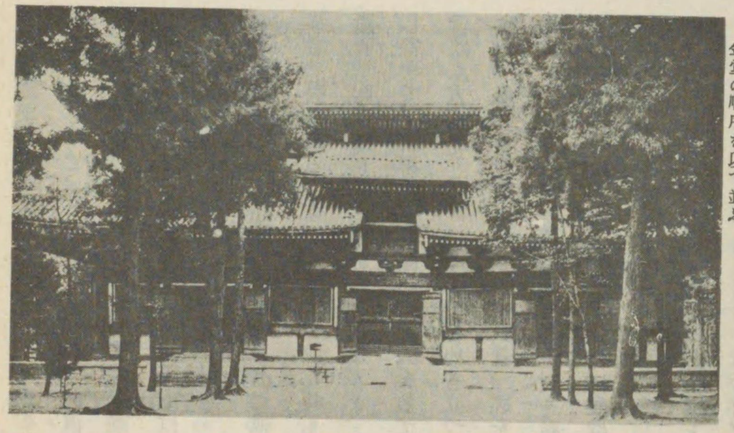
と答へ奉つる、斷乎たる決意、辭色に呈はる、主上、叡感、淺からず、紅の御袴を脫がせ給ひ、三寸つゝに切りて、將士に賜ひ、

『笠章にせよ』

と宣らせ給へば、諸將、何れも、皆、感激せざるはなし。

是に於て、諸將、各〻兵を率ゐて發す、名和伯耆守長年、少しく下りて、白鳥の前を過ぐ、見物の少女、側の人に向ひて、

『此れは、三木一草と稱へられたる名譽の大將にこそ、在はしませ、三人は、



東寺の金堂
京都市下京區九條町に敎王護國寺あり東寺を以て稱せらる北大門と南大門との間に食堂、講堂、金堂の順序を以て並ぶ。

討死して、今は、此人一人のみ殘られて候ぞや』

と物語る、長年、チラリと、耳に挾みて、

『扨は、我れの討死せざるを、人、皆、言甲斐なしとこそ、沙汰すらめ、好し〳〵、今日の一戰に、味方、敗軍しなば、一人なりとも、踏み留まりて、討死せん』

と固く思ひ定む、三木とは、楠木、結城、伯耆の三將を謂ひ、一草とは、千種忠顯を謂ふ、三人は、既に死して、今は、唯、長年のみ在り。

五

開戰の期は、十三日巳の刻なり。

官軍の諸將、兵を關山、今路の邊に留めて、時刻の來るを待つ、偶〻北白河の民家、燒亡して、黑煙、高く半天に冲る。

四條中納言隆資、三千餘騎を率ゐて、八幡に陣す、遙に炎焰の騰るを見て、

『素破や、山門より、押し寄せて、火を京中に懸けしと覺ゆるぞ、今日の合戰に漏れなば、何の面目かあるべき、急げや急げ』

士卒を勵まして、馳せ付け〳〵、鳥羽の作道より、東寺の南大門に進んで、ドッとばかりに、鯨波を揚ぐ。

賊軍、擧つて、河合、北白河の邊に、馳せ向ひ、東寺に殘り留まるものは、少數なる公卿、若くは、老若の輩に過ぎず。

高武藏守師直、五百騎を率ゐて、出で戰ひ、忽ち射竦められて、引き還る、今は、代り戰はん兵もあらず。

隆資、勝に乘じて、楯を突き寄せ〳〵、西南の一角に、押し寄せて、出塀の上の高櫓に、火を放てば、寺內の騷擾、言はん方なく、皆、口々に、犇めき立つ。

尊氏、鎭守の寶前に在りて、只管、經を讀む、土岐伯耆入道存考、其側に侍す、信濃入道道大を顧みて、

『あはれ、惡源太にして、此れに候はば、輙すく、敵を逐ひ拂はせ候はんものを』

と言ひも畢らず、土岐惡源太賴直、突と入り來る、

『三條河原まで、罷り向ひつる折柄、當寺の坤に當りて、煙氣の見えて候へば、急ぎ取つて返して候、シテ〳〵、合戰の御用意は、何と候ぞ』

と問へば、師直、其座に在り、

『櫓の燒かるゝ上は、將軍の御大事、此時に在り、唯一騎なりとも、打つて出でて、此敵を、逐ひ拂はれ候へ』

と命ず、賴直

『承はり候』

と齊しく、早、起ち上がれば、

東寺の五重塔

東寺の五重塔は金堂の左に在り寛永十八年德川家光の建立に係る方三間高さ百八十三尺本邦最高最大の構造と稱せらる。

『ヤレ待て』

尊氏、常に佩ぶる太刀を取つて、授くれば、賴直、拜謝して、走り出で、北の小門より、羅城門の西に廻りて、敵を射る。

師直、千餘騎を率ゐて、續いて、馳せ出で、其弟師泰、及び上杉、石塔、畠山の諸將、亦、來り援へば、隆資、終に敗れて、八幡に走り退く。

六

官軍の大將義貞、戰鬪の既に開かれしとも知らず、豫定の時刻、愈〻來れば、兵を三手に分つて、京師に向ふ。

東軍は、二條大納言師基、洞院左衞門督實世、之を率ゐて、河原より進む、兵五千餘騎。

中軍は、名和、土居、得能、仁科、高梨、春日部の諸將、之れを率ゐて、猪熊通より進む、兵五千餘騎。

西軍は、義貞、義助、及び江田、大館、千葉、宇都宮の諸將、之れを率ゐて、大宮通より進む、兵一万餘騎。

會稽の恥を雪ぐも、今日に在り、多年の憤を霽らすも、今日に在り、義貞の意氣、鐵よりも堅く、猛然として、兵を

進む。

進んで、六條に到れば、賊軍、雲霞の如くに、遮り戰ふ、一隊、二隊、三隊、四隊、隊々、相聯なりて、果を知らず。義貞、奮然として、敵軍を突き破り、突き崩し、仁木、細川、今川、荒川、土岐、佐々木、逸見、武田、小笠原の諸將を、追ひ立て、追ひ散らしつゝ、一氣に、東寺の小門の前に、押し寄せて、ドッと、鯨波を揚ぐ、此れぞ、君に盡し、國に盡さん忠勇義烈の叫聲。

今朝しも、君前に誓ひ奉つれる一言を果すは、今此時、弓杖つきつゝ、屹と、敵の城中を睨まへたる義貞、

『如何に尊氏、承はれ、天下擾亂、生民塗炭に苦むこと、日久し、是れ歸する所は、我と汝との爭ひなるぞ、一身の功名を樹てんが爲めに、万民の窮苦を顧みざるは、人道の許さゞる所ぞ、我、今、汝と親しく雌雄を決せんが爲めに、此軍門に向へり、イザ然らば、矢一つ、受けて見候へ』

と聲高らかに呼ばり、二人張の弓に、十三束二伏の矢を番へて、キリ〳〵と、引き絞り、絃音高く、切つて放せば、

其矢、二重にかいたる櫓を越えて、本堂の艮の柱に、ハッシと突つ立つ、此處ぞ、賊魁尊氏の帷幕、

『我れの兵を擧げしは、君を傾け奉つらんが爲めにあらず、偏に義貞に逢うて、憤りを散ぜんが爲めぞ、單身、雌雄を決するは、我れの望む所、イザ門を開け、打つて出でん』

名和長年の肖像

尊氏憤然として、蹶起せんとすれば、

『ヤレ待たせ給へ、義貞浮か〳〵、深入して、引かんに由なく、此れまで參つて、ふて言申し候ものぞ、其儘に、輕々しく、出でさせ給はんこと、思ひも寄らぬことにこそ候へ』

上杉伊豆守重能、鎧の袖を控へて、諫むれば、尊氏、此れを機會に、座に着く。

七

此時、五條大宮に於て、二條師基、洞院實世の兵を擊破したる土岐禪正少弼頼遠、手勢三百餘騎を率ゐて、義貞の陣後に、攻め寄す。

神祇官に陣したる仁木、細川、吉良、石塔の諸將、亦、二万餘騎を率ゐて、朱雀大路西八條の方より、押し寄すれば、少貳、大友、厚東、大内の諸將、亦、三万餘騎を率ゐて、七條河原より、針唐橋を迂回して、押し寄せ來る。

左右も、皆、敵、前後も、亦、敵。

義貞、勝敗を、今日の一擧に期す、賊軍、時々刻々に加はれども、意とならず、號令一下、咄嗟に、一万餘騎の兵を、立て直して、八條、九條の敵を、突き立て、突き破り、右に左に、逐ひ散らして、三條河原に、馬を立つ。

諸將、思ひ〳〵に、敵を逐うて、離れ〳〵に、引き分れ、仁科、高梨、春日部、丹、兒玉の諸將は、三千餘騎を率ゐて、鷺の森の方に、引き退く。

名和伯耆守長年、手勢二百餘騎を提さげ、敵を逐うて、大宮に到る、敵、復た集まれば、長年、

『此處こそ、我が死所なれ』

中國の兵七千餘騎の中に、駈け入り〳〵、一騎も殘らず、皆、悉く奮鬪して、死す。

諸方の賊軍、今や、皆、義貞の周圍に集り、十重、廿重に包みて、嚴しく、攻め立つれば、義貞、鎧を搖り上げ、帶を絞め直して、屹と馬首を、西に押し向く、決死の意氣、凄然として、人に逼る。

忽然として、恩賜の御衣を、笠に着けたる兵士、其馬前に駈け集まるもの、二千餘騎、鋒を揃へ、蹄を攢めて、懸け立て、突き立つ、一條二郎、

『天下の安危は、今日の一戰に由るべからず、事に臨ん

で懼れ、謀を好んで成すをこそ、良將と申し候へ、早、引かせ給へ』

義貞の馬首を取つて、引き返せば、脇屋、江田、大館の諸將、群がる敵を逐ひ散らして、西坂本に、引き退く。

官軍、四たび京師を攻めて、復た敗る。

花山院

後醍醐天皇幽閉の地

花山院は、京都近衞の南、東洞院の東一町にして、今の下立賣の北、高倉の西に當る、一名を、東一條と曰ふ、攝政藤原忠平の第にして、其子右大臣師輔に傳ふ、四面の築垣の上に、瞿表を栽う、花時には、紅白、妍を競ひ、錦繡、山を掩ふの觀あるを以て、花山院と稱す。

冷泉天皇、皇太子に坐します時、東宮御所となる、花山天皇、退位の後、亦、此處に坐します。

延元元年十月、後醍醐天皇の山門より、還御あらせ給ふや、足利尊氏、此處に幽し奉つる、十二月、天皇、夜に紛れて、吉野に潛幸あらせ給ひ、終に南北兩朝に分る。

一

今や、官軍の形勢、日に非なり。

是より先き、光嚴上皇、六條の長講堂に在はします、足利尊氏、京師の再び兵廢に侵されんことを虞れ、六月三日、上皇を、八幡に遷し奉つる。

此間、東寺の灌頂堂を修めて、行宮に充て奉つる、是に於て、上皇、十四日を以て、長講堂に還御あらせ給ひ、其翌十五日を以て、東寺に遷御あらせ給ふ。

持明院派の公卿、皆、爭うて、東寺に候す。

爾來、官軍、屢〻京師を回復せんと欲すれども、每戰、皆、捷たず。

尊氏、初より、新主を擁立して、賊名を免かれんと欲するの志あり、是に於て、八月十五日、二條權大納言良基の押小路烏丸の亭に於て、後伏見天皇第二の皇子豐仁親王を奉じて、帝位に卽け奉つる、之れを光明天皇となす、實に光嚴上皇の同母弟に坐します。

此月二十二日、新帝、東寺に遷らせ給ひ、建武三年の號を用ひ給ふ、是れより、南北、兩元に分かる。

二

新帝、位に卽かせ給ふと雖も、三種の神器は、後醍醐天皇の許に在り、正關の別、自から定まるあり。

尊氏、乃ち謀りて、之れを獲んと欲す。

此年十月、密使を、山門に進らせて、降服を請ひ奉つる、

『尊氏、犬馬の勞を盡して、斧鉞の誅を賜はらんとするもの、事、皆、讒口に由る、臣の兵を率ゐて、京師に入るもの、何ぞ弓を彎きて、天闕を侵すの意に候はんや、唯、讒人を誅して、後患を絕たんとするの意に外ならず、天鑒、誠を照して、聖恩、誅を免させ給はば、願はくは、鳳輦を、九重の雲に回へして、龍澤を、四海の民に垂れさせ給はんことを、從駕の公卿、守護の武臣は、本領の安堵、舊の如く、天下の成敗、一に公卿に任せ奉つらん』

此一篇の奏狀に、大師勸請の誓書を副へて、上つれば、主上、篤と御覽ぜさせ給ひて、

『斯く告文を進らする上は、ヨモ、僞言は申さじ』

と思させ給ひ、左右にも諮らせ給はず、卽て還幸あらせ給ふべき旨を、勅答あらせ給へば尊氏、

『扨も、思ひの外に、安かりき。』

獨り自ら北叟笑む、好計、早、成りぬと思へば、密に緣故緣故を辿りて、官軍の將士を誘ふ。

京都還幸は、十月九日と定めさせ給ふ、左れども、供奉の諸員の外には、秘して、知らしめ給はず。

三

新田左中將義貞、大嶽の牙營に在り、獨り、士氣の沮むを憂ふるも、未だ和議の成れるを知らず、洞院左衞門督實世、使を馳せて、

『主上、唯今、京都へ還御あらせ給はんとて、供奉の人を召され候、御存知候やらん』

と報ずれば、義貞、

『爭かで、然ることあるべき、使の者の、聞き誤りにこそあるべけれ』

冷然として、意に介する色もあらず、堀口美濃守貞滿、座に在り、

『江田兵部、大館左馬の兩人、此曉、中堂に參るとて、

登山候へるを、何の用かと、怪しく存じ候へるに、扨こそ、然る仔細の候なれ、貞滿、先づ內裏に參つて、事の樣を見候はん』

と言ふかと思へば、身は、早、馬上に在り、鎧を取つて、肩に投げ懸けつゝ、一散に、東塔へと、馳せ行く。

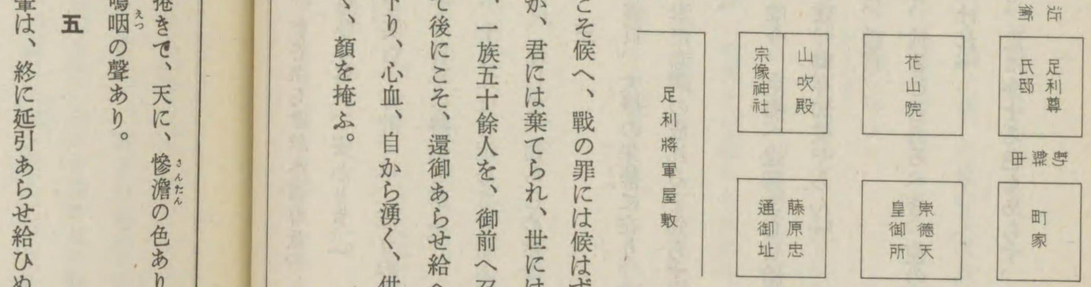
行きて、皇居間近に到れば、馬を下り、甲を脫して進む、屹と、前方を見遣れば、月卿雲客、左右に侍し、虎將豹士、前後に控へて、還幸の駕、早、搖がんとす。

貞滿、扨こそと驚きつゝも、恭しく、敬禮を捧げて、鳳輦の前に、進み近づき、御轅に取り縋りて、ハラハラと、涙を垂る、

『義貞、夢にも存じ候はぬに、貞滿、現に見奉つるこそ、哀しけれ、義貞、何の不臣不逞の候てか、大逆無道の尊氏に、思召し換へられ候やらん、義貞、不肖の身にこそ候へ、日夜、朝恩を忘れ奉つらず、元弘の初には、一擧して、元兇を、關東に誅し、延元の春には、一呼して、賊魁を、西海に奔らす、其忠膽、古人にも遜らず、其義氣、何どか、今人に劣り候べき、一族、命を鋒鏑に殞すもの、百三十二人、郎徒、屍を山野に曝すもの、八千餘人、羽翼、日に殺がれ、爪牙、月に失はるゝも、曾て其節、其操を變じ候はず、爾かも、聖運、未だ回らず、京師、未だ復さざるもの、是れ、唯、時の運にこそ候へ、戰の罪には候はず、嗚呼、義貞、何の科候てか、君には棄てられ、世には背かれ候やらん、願はくは、一族五十餘人を、御前へ召させ給ひ、其首を刎ねさせて後にこそ、還御あらせ給へ』

聲涙、俱に下り、心血、自から湧く、供奉の諸臣、亦、皆、首を低れつゝ、顏を掩ふ。

花山院地圖



四

忽ち見る、三千餘騎の兵士、肅々として、進み來りて、大庭に跪づく、色溫にして、禮恭し、此れぞ、義貞、及び義顯、義助の三將、死も亦、天恩と思へば、何どか、怨望の心を聽くべき。

主上、命じて、御前近くに、召させ給ふ、

『闔外の重任を荷うて、海內の禍亂を鎭むるもの、一に、汝一門の力に待つ、唯、天運、未だ回らず、賊燄、益〻熾んなれば、姑く、時機を待たんが爲めに、權りに、和議を許せるものぞ、貞滿の言、謂はれなきにあらずと雖も、亦、朕の意、未だ通ぜざるの致す所ぞ、然れども、朕にして、京師に還らば、汝、恐らくは、賊名を蒙むらん、特に、太子を以て、汝に附す、宜しく、朕と思うて、力を致すべし、越前には、歸順するもの多し、汝、先づ、北陸を徇へて、恢復を圖れよ、朕、既に汝の爲めに、勾踐の恥を忍ぶ、汝、亦、朕の爲めに、克く范蠡の力を盡せよ』

天顏、涙あり、並み居る將士、誰かは、聲を呑まざらん。

非風、雲を捲きて、天に、慘澹の色あり、幽溪、巖を撲つて、水に、鳴咽の聲あり。

五

今日の御發輦は、終に延引あらせ給ひぬ。

翌くれば、十月十日巳の刻。

主上、還幸の儀を備へて、今路を西へと進ませ給ふ、供奉の諸員は、吉田內大臣定房、萬里小路大納言宣房、御子左中納言爲定、勸修寺中納言經顯、坊門宰相淸忠以下の人々にして、江田兵部大輔行義、大舘左馬助氏明、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重、仁科信濃守重貞、春日部左近藏人家繩、南部甲斐守爲重、伊達藏人家貞、江戶民部丞景氏、本間孫四郎資氏以下、七百餘騎を率ゐて、乘輿の前後を、守護し奉つる。

車駕、進んで、法勝寺の邊に到らせ給へば、足利左馬頭直義、五百餘騎を率ゐて、出で迎へ、導きて、花山院へ入れ奉つり、四門を閉ざして、嚴重に、警固し奉つる。

供奉の公卿は、悉く官職を停め、武臣は、夫々諸將に預けて、待つに、降人の法を以てす、諸將士、皆、忿恨すれど

も、及ばず。

菊池武重は、警固の油斷に乘じ、遁れて、本國に還り、宇都宮公綱は、削髮して、出家の體となる、本間資氏は、和田岬にても、神技を顯はし、雲母坂にても、妙技を現はす、尊氏、

『彼を助けたりとて、我が用をなすべきものにあらず』

命じて、六條河原に、引き出して、其首を刎ねしむ。

尊氏の好計、今や、愈〻明白となる、十一月二日、

『三種の神器は、當今の御方へ、渡させ給ふやう』

と迫り奉つれば、主上、乃ち僞器を取りて、授け給ふ、尊氏、降服の眞意は、實に、三種の神器を獲んとするに在り。橘詐の術、陰險の策、天を欺き、地を欺き、神を欺き、佛を欺く、本朝今古の姦惡、此賊を以て、最とす。

金崎城址

尊良親王御生害の地

金崎は、越前國敦賀郡敦賀町の東北、泉村の小岬なり、前は、敦賀灣に臨み、後は、天筒山を負ふ、金崎城は、其中腹に在り、延元元年、新田義貞、皇太子を奉じて、此に據る、翌年に至りて、城陷いり、尊良親王、終に自刄し給ふ。

明治二十三年、祠を、金崎城址に建て、尊良親王の靈を祀る、特に、宮號を賜ひ、官幣中社に列せらる。

一

新田左中將義貞、今や、東宮を奉じ、叡山を辭して、北陸に向はんとす、天下の興敗も、此秋に在り、一身の浮沈も此時に在り。

其夜、更闌けて、義貞、大日吉權現に詣で〻、恭しく、寶前に額づく、此れぞ、地主の神、守護の神として、一山崇敬の集まる所、

『義貞、不肖の身を以て、辱なくも、聖明の託を蒙り、四海の禍亂を鎭めて、萬民の塗炭を拯はんとす、是れ報效の誠に出づる所、敢て一身の私に候はず、神明、願はくは、天法擁護の御眦を垂れて、朝敵誅戮の御力を副へさせ給へ、祈念、冥慮に違はず、赤誠、幸に照鑒を蒙むらば、縱令、存生の間に、本意を遂げず候とも、必ず、子孫の中に、宿望を達せしめ給へ』

一身の赤誠を傾けて、畢生の祈願を籠め、累代の重寶たる鬼切の名劍を、社壇に獻げて、本營に歸る。

翌くれば、十月十日巳の刻、皇太子成良親王、及び一品尊良親王を奉じて、越前に向ふ、洞院左衞門督實世、其子少將定世、三條侍從泰季、御子左少將爲次、世尊寺頭大夫行房、其子少將行尹、武人には、義貞の子越後守義顯、脇屋右衞門佐義助、其子式部大輔義治、堀口美濃守貞滿、一井兵部大輔義時、額田左馬助爲綱、里見大膳亮義益、大江田式部大輔氏經、鳥山修理亮義俊、桃井駿河守義繁、山名兵庫助忠家、千葉介貞胤、宇都宮美濃將監泰藤、其子狩野將監貞綱、土居備後守通增、得能備中守通綱、土岐出羽守頼

直、一條駿河守爲治以下、從ひ奉つる、總勢七千餘。行きて、鹽津に至り、賊の大兵、途を塞げりと聞き、轉じて、木芽嶺より進む。

大雪、山谷を埋め、寒氣、身骨に徹して、士卒、皆、凍ゆ、乃ち其携ふる所の弓箭を焚きて、僅に煖を取る。

艱苦を凌ぎつゝ、漸く敦賀に至り、河島左近藏人維頼、氣比彌三郎大夫氏治に、迎へられて、金崎城に入る。

二

義貞、兵を休むること一日、

『一同、此城に、立て籠らんは、利にあらず、國々の勢を附けて、金崎の後詰となさんこそ、得策なれ』

弟右衞門佐義助には、一千餘騎を率ゐて、當國杣山城に向はしめ、嫡男越後守義顯には、二千餘騎を率ゐて、越後に向はしむ。

二將、俱に、風を冒し、雪を衝きて、進むこと十里、鯖波の宿に到る、宿は、杣山城下に在り。

城主瓜生判官保、夙に、勤王の志、厚し、其二弟彈正左衞門照、兵庫助重と與に、酒饌を携へて、鯖波に抵り、瓜生寺に請じて、將士を饗す。

義助、大に悅びて、杯を賜ひ、且、紺糸の鎧一領を賜ふ。保、喜ぶこと、限りなし、城に還りて後、小袖二十重を、義助、義顯の二將に贈り、尙、小袖を裁して、士卒に頒たんとす。

賊將足利尾張守高經、越中の守護として、國府に在り、此日、密使を、杣山城に遣はして、

『新田一族は、朝敵に候、朝廷に、忠勤を、抽んでんと存ぜられなば、將軍の御手にこそ、屬き給ふべけれ、其證據、此れに候』

と告げ、且、主上の下し給へる綸旨の寫を示す、樸直一圖の保、見て驚く、

『扨は、勅勘、武敵の人々に候ひけるか、此上は、爭かで、加擔候べき』

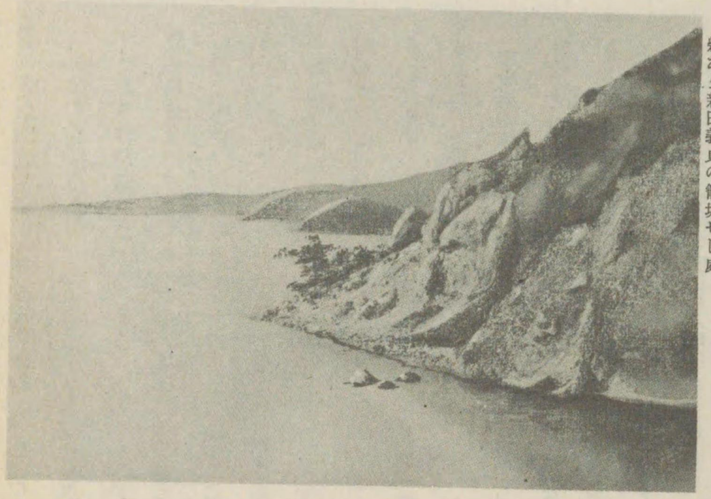
急に、關を鎖して、城を守る。

瓜生寺の住僧義鑑は、保の弟なり、斯くと聞くより、二將の前に出で、

『兄にて候保は、誠に愚直の性質にて候、足利殿の強いて申し請ひたる綸旨を、誠と存じて、忽ち違反の志を起せしこそ、口惜う候へ、拙僧、弓矢取る身に候はゞ、刺し違へて、相果て候はんも、今の身の上にては、其れも、思ふに任せ候はず、保とても、事の樣を、聞き知り候はば、直に御味方仕つらんこと、申すまでも候はず、願はくは、公達一人、此れへ、留め置かせ給へ、拙僧、身に換へて、守り立て奉つり、時機を得候はゞ、直に義旗を揚げて、金崎への後詰を仕つり候はん』

涙と與に、說き出づれば、義時、少しも、疑ふ心あらず、

『主上、坂本を出でさせ給ふ御時、尊氏、若し、強いて申すことあらば、止むを得ずして、義貞追討の綸旨を、下すこともあらん、されど、假りにも、朝敵の名を、取らんことあるべからず、因りて、春宮を以て、汝に附せん、股肱の力を盡して、王業恢復の功を樹てよと、勅諚あらせ給ひぬ、假令、義貞追討の綸旨を下し給へばとて、君の御本意にあらざること、申すまでもなし、されど、判官、此是非に迷ひぬる上は、餘儀もなし、此上は、急ぎ兵を引きて、金崎へ還るべし、汝一人、忠義を思はるること、感じ入りて候へ、息男義治を、預け置くべければ、生涯の事、兎も角も、計らひ候へ』



金崎
金崎は越前國敦賀郡敦賀町東北の一岬にして其山上に城砦あり新田義貞の籠城せし處。

十四歳の愛兒義治を留めて、義鑑に託す。

三

天、明くれば、義助は、金崎に還り、義顯は、越後に向はんとす。

士卒、保の心變りせるを聞きて、何時の間にか、落ち失

せ、殘り留まるもの、纔に、二百十餘騎。

『此小勢にて、爭かで、遙々、越後に下らるべきや』

義顯も、亦、金崎へ還るに決し、義助と與に、鯖波の宿を發す。

今庄入道淨慶、野武士を、驅り集め、柵を今庄に建て、、道を塞ぐ、義助、左右を顧みつ、、

『今庄淨慶入道とは、法眼久經と申すもの、一族にてもあらんか、久經は、當手に屬きて、坂本までも、從ひしもの、ヨモ、舊功を忘るゝことあらじ、誰にても、行き向ひて、事の様を見よ』

と告ぐ、由良越前守光氏、聲の下より、唯一騎、馬を驅つて、馳せ向ふ、近づく儘に、大音聲を、張り上げつ、、

『これは、脇屋右衞門佐殿、合戰評定の爲めに、杣山より、金崎へ向はせ給ふところぞ、存ぜざればこそ、道をも塞がれ候なれ、斯く名乘り候からは、疾く〳〵、弓を伏せ、甲を脱ぎて、通し申され候へ、若し、一矢にても、射候ものならば、罪科遁れ候まじきぞ』

と呼はり、返答如何にと、屹と、待ち搏ふ。

淨慶、斯くと聞くより、忽ち馬より、飛び下り、

『親にて候法眼久經、御手に屬して、武恩を蒙りしこそ、辱けなう存じ奉つれ、但、淨慶は、父と別れて、尾張守殿＝高經＝に屬きしもの、若し、道を避きて、通し奉つらば、罪科、遁れがたく、餘儀なく、斯くこそ、支へ奉つりて候へ、あはれ、御供の中にて、然りぬべき人々、一兩人を賜はり候へ、其首を取りて、合戰仕つりたる申開きに、供へ候べし』

と答ふ、光氏、馳せ歸りて、報ずれば、義助、默然として、言葉なし、義顯、屹と、光氏を見遣りつ、、

『淨慶の申す所、其理なきにあらず、されども、今まで、附き隨へる士卒の志は、親子よりも重し、我れ、假令、士卒の命に代るとも、士卒を以て、我等の命に換へがたし、今一度、行き向ひて、此旨を申して見よ、尙、聞き入れざれば、是非もなし、我れも、士卒と、此處にて、討死すべきぞ』

と命ず、光氏、深く感じ、又も馳せ向ひて、此由を告ぐれど、淨慶、敢て從はん氣色もあらず。

光氏、今は、思ひ極む、

『大將の御身を以てさへ、軍勢の命に代らんと仰せられ候ものを、我等、何とて、主の御命に代り奉つらざるべき』

忽ち、馬より、飛び下りて、刀を拔きつ、、

『さらば、力なし、由良越前守の首を、進らせ候はん』

鎧の上帶を、切り捨てゝ、腹に突き立てんとす、淨慶、見て、感じ入り、突と、馳せ寄りて、光氏の手に取り縋がる、

『大將の仰せ、御邊の御志、皆、道理に覺えて候、此上は、淨慶こそ、罪科に當てられ候べけれ、情なき振舞は、仕つり候まじ、イザ〳〵、御通り候へ』

柵を去り、弓を伏せ、涙を垂れつ、、路傍に跪づく、義助、深く感ず、

『我等、假令、戰場の露と消ゆるとも、若し、一家の中に、世を有つものゝ出で來らば、之れを證據に、今日の忠義を顯し候へ』

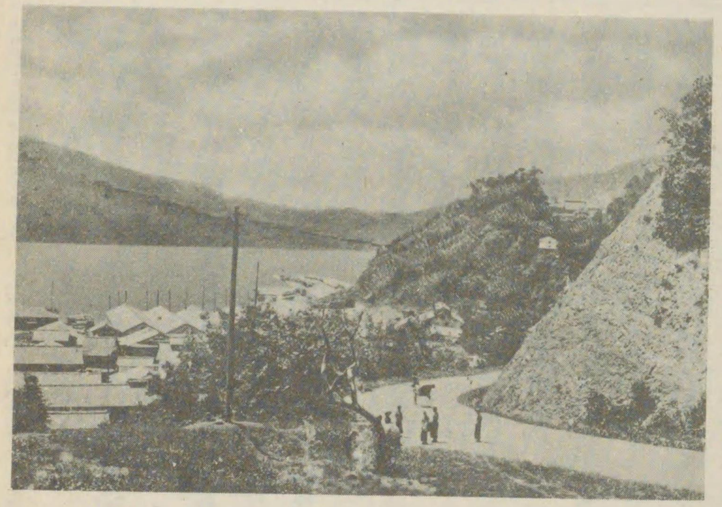
黃金作の太刀を與へて、其儘、行き過ぐ。

四

事、六づかしと思ひてや、此問答の間に、士卒、殆ど、遁げ去りて、跡に留まるもの、唯、十六騎。

馬蹄、雪を蹴つて、深山寺の邊に到れば、天、漸く昏る、樵夫に逢うて、金崎の容子を問へば、

『昨日、國々の勢、二三萬騎が程、押



金崎城址

金崎城址は越前國敦賀郡敦賀町の金崎に在り今金崎宮の在る所是れなり左手に見ゆる海面は亘理忠景の泳ぎ渡れるところ。

し寄せ、十重二十重に、城を取り卷きて候』

と言ひ捨てゝ、立ち去る、

『扨こそ、大事なれ』

一同、顔見合せて、言葉なし。

前も敵、後も敵なり、進まんか、退かんか、一人、進み出でゝ、

『此上は、東山道より、忍びて、越後へ下り候はん』

と言へば、一人、又進み出でゝ、

『イヤ〳〵、此處にて、潔ぎよく、腹を切り候はん』

と述ぶ、事、未だ決せず、栗生左衞門顯友、突と進み出で、

『何れの道を取ればとて、遙々、越後へ落させ給はんこと、叶ふべくも候はず、さればとて、此處にて、腹を切らんも、輕忽に候はん、某、此處に一策あり、今夜は、此山中に、隱れ忍び、明朝、黎明の頃に、敵中に、駈け入り、杣山の城より、後詰するぞと呼はつて、戰ひ候はん、敵、慌てゝ、攻口を引き退かば、引き違へて、城へ入り候べし、若し、又遮り鬪ひ候はゞ、思ふさまに働きて、討死仕つらん、是れぞ、武士たるものゝ面目にこそ候べけれ』

と說けば、義助、義顯、實にもと頷づく、

『此議、最も然るべし、なれども、此小勢にては、覺束なし、先づ疑兵を張つて、敵を欺かんこそ、好けれ』

十六騎、各〻上帶、鉢卷を解きて、青竹の末に結ひ付け、樹の枝、岩の角に、建て並ぶ、遠く望めば、白旗の如し。

小勢は、忍ぶに便好し、一同、小路々々に隱れて、時刻の來るを待つ。

既にして、雞聲、先づ耳に入る、目を開けば、東天、早、白けなんとす、

『時分は、好きぞ』

十六騎、各〻進んで、敵の背後に迫る。

武田五郎、眞先に在り、右手の指を傷つけて、尙、癒えず、木刀を、右手に、結ひ付けて、進む。

顯友、副刀を失ふ、一丈餘の樹木を伐つて、小脇に挾さむ。

近づく儘に、サッと、中黑の旗を、押し立てゝ、呼はる、

『瓜生、富樫、野尻、井口、並に平泉寺の衆等、二萬餘騎にて、後攻仕つり候ぞ、城中の人々、出で向ひて、先陣の者共の剛腹を御覽候へ』

ドッと、鬨を揚ぐると齊しく、無二無三に、敵陣に突き掛かる。

賊軍、深山寺の方を見れば、大小の旌旗、樹々の間に飜へる、

『扨は、敵は、大軍なるぞ』

若狹、越前の勢、先づ動き、楯を捨て、弓矢を忘れて、走り退く。

城兵八百騎、忽ち城門を開きて、突出し、勢烈しく、敵を擊つ。

賊軍、益〻驚き、皆、先を爭うて、走る。

先なるもの、後なるを見て、敵と誤まり、馬首を回へして戰ふ。

同志討、其處にも、此處にも起りて、人馬、押し合ひ、揉み合ふ。

城兵、益〻勇み奮うて、鬪ふ。

賊の全軍、終に潰え走ること二三里、刀槍、弓矢、雜然として、途に充つ。

十六騎、其虛に乘じて、難なく、城中に入る。

五

金崎の敗報、京師に達するや、足利尊氏、大に忿りて、急に、大兵を派す。

足利尾張守高經は、當國蕪木より、仁木左京大夫頼章は、江州鹽津より、今川駿河守頼貞は、若州小濱より、細川刑部大輔春は、東近江より、高越後守師泰は、江州の國境有乳山より、鹽谷判官高貞は、海路雲州より、與に、金崎に向ふ、總勢六萬餘騎。

山には、木柵を設け、海には、兵船を泛べ、隙間もなく、城の四面を圍む、

『新田の一類、皆、此處に在り、一人殘らず、討ち取れや』

賊軍、鋭を悉し、衆を盡して、城を攻め、一擧して、敵の諸魁を殲さんとす。

城兵、亦、善く鬪ふ、矢を放ち、石を投じ、日々に、敵を殪すこと、千餘人。

賊軍、攻むれども〳〵、捷たず、柵を樹て、櫓を搆へて、

長圍の計を施す。

城兵、未だ屈せず、寄手、先づ倦む。

六

攻圍數旬、何時しか、年も暮れて、延元二年の春は來る。時しも、正月二日、春とは云へども、北地は、雪、尙、深く、風、尙、寒し。

金崎の城兵、見るともなく、海上を、見れば、一人あり、彼方の岸より、漫々たる灣中の波濤を凌ぎて、此方の岸に、泅ぎ來る、

『海士か、舟子か、此寒中、波を越え來るは、何者ぞ』

皆、驚きて、屹と、見遣れば、何ぞ計らん、這は、是れ義貞の勇士、瓦理新左衞門忠景ならんとは。

急ぎ城中に迎へ入るれば、忠景、恭しく、髻中に藏めし詔書を出だして、義貞に捧ぐ。

義貞、乃ち口を漱ぎ、手を淨めて、拜讀すれば、速に、京師を回復せよとの綸旨、今や、始めて、主上の吉野に潛幸あらせ給へることを知りて、城中の歡喜、言ふばかりもあらず。

積雪、山野に滿つるの時、春風、先づ城中に、動くの想あり。

杣山城址

瓜生保勤王の地

杣山城址は、越前國南條郡南杣山村大字飽和に在り、元弘年間、判官瓜生保の、築きて、以て王事に勤めたる處、同村字城戸口は、其正門の在りし所にして、南杣山の麓より、北杣山に至るの間に、城壘塹壕の跡あり、今は、殆ど、開墾せられて、其一部を存するのみ。

杣山城址の西一里に、鯖波あり、日野川の西岸に在り、亦、南杣山村に屬す、保、關を設けて、賊軍を禦ぎ、又瓜生寺を建てゝ、其次弟義鑑房懷運を置く。

保の墓は、敦賀郡樫曲村の雄彥山上に在り、延元二年正月十二日、金崎城救援の途中、樫曲村に於て、賊軍と衝突し、戰、敗れて、此れに死す、明治三十四年八月、其後裔瓜生寅、墓石を建つ。

一

杣山城主瓜生保、足利尾張守高經に屬して、金崎を攻む、其三弟、義鑑、照、重の三人、留まりて、杣山城を守る。義鑑、金崎の形勢を聞くより、雄心、抑ふべからず、義治を推し立てゝ、義兵を擧げんと欲し、其二弟と與に、戰備を修む。

事、忽ち保の耳に入る。

主上、時に、吉野に蒙塵あらせ給ひて、新田、足利の官賊、全く分かる、保、屹と、心に思ひ定む、

『此上は、諸弟に、力を戮はせて、生死を俱にせばや』

密かに、同志の士を求め、與に、陣を拔きて、還らんとす。

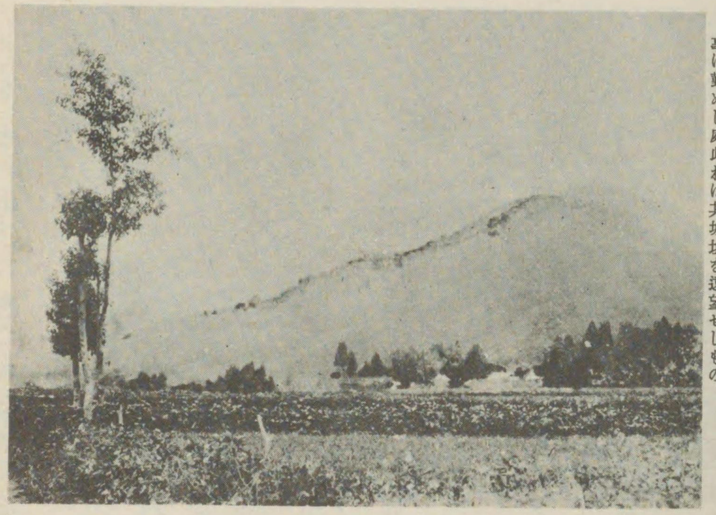
隣營に、宇都宮美濃將監泰藤、天野民部大輔政貞の二人あり、一日、相會して、閑談す、談、偶〻諸家の紋章の事に涉るや、一人、卒然として、

『如何に、二引兩と、中黑と、孰れか優り候べきか』

と問ふ、二引兩とは、足利氏の徽號、中黑とは、新田氏の徽號なり、泰藤、徐かに、

『紋の優劣は、姑く措き、事の吉凶を申せば、中黑ほど目出たきは候まじ、見候へ、三鱗の紋北條亡びて、今は、二引兩の世となり候ひぬ、二引兩に代らんものは、必ず、一引兩中黑にてぞ候はん』

と言へば、政貞も、亦、



杣山城址　其一

杣山は越前國南條郡南杣村大字飽和に在り瓜生判官保の王事に勤めし處此れは其城址を遠望せしもの。

『そは勿論にこそ候べけれ、周易にも、一文字を「かたきなし」と讀みて候、一引兩こそ、必ず、天下を治めて、五畿七道、悉く敵なき世となし給ふべけれ』

と說く、一座、聞きて、實にもと頷づく、保、心に喜ぶ、

『扨は、此人々も、新田殿に、心を寄するとこそ、覺ゆれ』

爾來、酒を送り、茶を進めて、親しみ交はる、

二人の言動、今は、疑ふべき節もなし。

『さらば、我が志を、打ち明かさん』

保、從容として、大義を說き出づれば、泰藤、政貞の二人、皆、異議なし、

『さらば、杣山こそ、堅固に候へ、立ち還りて、旗を揚げ候はん』

終に、俱に固く誓ふ。

時に、諸陣の士卒、密かに拔け還るもの、少なからず、高越後守師泰、四方の口々を固めて、妄に、人の通行するを許さず、所用あるものには、師泰の通券を與ふ。

保、計りて、關を越えんと欲し、師泰の前に出でて、

『御馬の大豆を、取り寄せん爲め、人夫百五十人を、杣山へ差し遣はし候べし、關所の御札を賜はり候へ』

杣山城址 其二
此れは杣山城址本丸跡なり。

と請へば、師泰、乃ち杉板にて、作れる通券を與ふ、受けて見れば、

『此人夫百五十人、通す可し』

と書して、下に印を捺す、保、

印を殘して、文字を削り去り、

『上下三百人、通す可し』

と書き改め、泰藤、政貞と與に、無事に、深山寺の關所を遥りて、杣山に還れば、三弟、大に喜びて、迎へ入る。

二

正月八日、保等、義治を推して、主將となし、中黑の旗を、飽和神社の祠前に建てゝ、義兵を擧ぐ。

義兵、集るもの、千餘騎。

保、其半を、湯尾山に分派して、北路を杜ぎ、又燧城東南の險要に築きて、糧食七千石を儲ふ、

『萬一、軍敗れなば、此處に、立て籠り候はん』

攻守の計、今や、全く成る、師泰、聞いて、驚くこと、一方ならず、

『若し、平泉寺の衆徒等と、合體すれば、由々しき大事ぞ、先づ、杣山の城を落して、心安く、金崎の城を攻めん』

能登、加賀、越中の兵、六千餘騎を分ちて、杣山の城に派す。

保、乃ち火を新道、今庄、葉原、宅良、三尾、河内の民家に縱ちて、野を掃ひ、故らに、湯尾の宿のみを殘して、敵を待つ。

十一月二十三日、賊軍三千餘騎、先づ、進み來る。

白雪、四野を掩うて、宿するに家なし、進み進んで、湯尾に到れば、天、既に昏れて、人馬、皆、疲かる、乃ち民家を索めて、分ち宿す、

『城攻めは、明日の事にこそ』

甲を釋き、火を燒きて、寢ね、復た敢て備へを設けず。

夜半に至りて、大に雪ふる。

保、乃ち泰藤等と與に、輕兵七百餘騎を率ゐて、急に圍み攻め、火を家々に縱ちて、ドッと、鯨波を揚ぐれば、賊軍、大に慌て駭き、甲を捨て、刀を忘れて、戸外に走り出づ。

深雪、乳を沒して、走ること能はず、人馬、皆、雪中に蠢めく。

保、勢ひに乘じて、奮ひ擊つ、斬獲、算なし。

三

高經、金崎に在り、杣山の敗報を聞いて、大いに驚く、

『北國の道、塞がりては、叶ふまじ、今の内に、立ち還りて、柚山の敵に備ふべし』

二十八日、兵三千餘騎を率ゐ、蕪木より、國府に還らんと欲し、馳せて、新善光寺城に入る、斯くと聞ける保、

『敵に、足を立てさせては、惡しからんぞ』

二十九日、自ら三千餘騎を率ゐて、新善光寺城を圍み攻む、奮擊一晝夜、終に、之れを拔く。

斬首三百級、捕虜百三十人、保、盡く其首を斬つて、帆山河原に梟す。

四

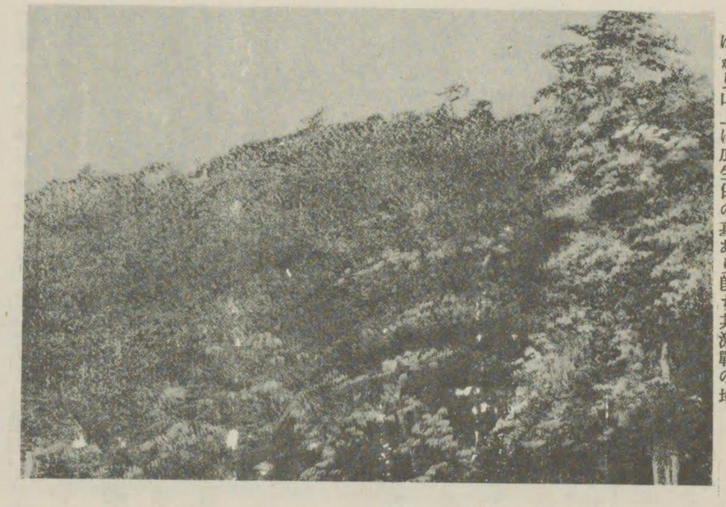
保、二たび戰うて、二たび捷つ、官軍の形勢、頗る振ふ。

平泉寺、豐原寺の衆徒を始め、國中の豪族、寢く心を傾け、日々に酒饌を、贈り來りて、軍を犒ふ。

將士、皆、欣べども、義治、悒々として、獨り樂しまず、義鑑、心に怪しみ、其前に出でて、

『これほど目出たき時に候へるを、何とて、其樣に沈ませ給へる』

と問へば、義治、袖搔き收めつゝ、



雄彦山
越前國敦賀郡東郷村大字樫曲に在り敦賀を距ること一里ばかり山上に瓜生保の墓あり即ち其激戰の地。

『味方、兩度の軍に、打ち捷てること、我れとても、何どか、悅ばざらん、但、春宮を始め奉つり、當家の人々、皆、金崎に取り籠められ、今は、戰にも疲れ、兵粮にも詰り給ふらんと思へば、酒宴に臨めばとて、更に、樂しき心も候はず』

と答へつゝ、愁然として、眉を顰むれば、義鑑、思はず、ハラ〳〵と涙を垂る、

『其儀ならば、御心安く、思し召され候へ、此間は、餘りに、吹雪烈しく、長途の歩行、難儀至極に候へば、天氣の少しく晴るゝを、相待つ所にこそ候へ』

と述べ、顏を掩うて、其儘、座を起つ。

泰藤、政貞の二人、障外に在り、此話を聞きて、亦、涙を呑む、

『扨も、年に似氣なき賴母しの御心や、此上は、金崎に後詰せでは、叶ふまじ』

兵を集め、楯を掃ひ、雪の晴るゝを待ちて、發せんとす。

五

風饗雪虐、二十餘日。

正月十一日に至りて、天、漸く晴る、

『さらば、今日こそ、打ち立つべけれ』

兵五千を分ちて、金崎に向ふ、里見伊賀守時成、之れが將たり、保兄弟、皆、從ふ、船橋泰景、留りて城を守る。

士卒、皆、蓑笠を着け、雪橇を穿ち、雪路を搔き分け搔き分け、進んで、葉原に到れば、日、全く昏る。

露營を、雪野に張り、天、明けて、又進む。

今川駿河守賴貞、兵二萬騎を率ゐ、險所を扼して、待つ。

紀清兩黨三百餘騎、第一陣に在り、進んで、賴貞の先鋒千餘騎と戰ひ、坂の中央より、捲くし立て、捲くし立てゝ、追ひ上り、更に、敵の第二陣を目蒐けて、突貫せんとす。

賊兵、左右の山上に在り、斯くと見るより、矢を放つこと、雨の如し。

紀清兩黨、皆、披靡す。

保兄弟、天野民部大輔政貞等、七百餘騎を以て、第二陣に在り、鋒を揃へて、猛然として、駈け登り、一呼して、敵の第二陣を破り、第三陣を破り、更に、第四陣を衝く、保、兵を行ること、臂の指を使ふが如し、敵兵、皆、敗れて、潰え走る。

高師泰、三千餘騎を以て、其後に控ゆ、賴貞の敗るゝを見て、奮然として、來り擊つ。

保兄弟、士卒を勵まして、奮鬪すること數刻、衆寡、勢ひ敵せず、終に敗れて退く。

時成、斯くと見るより、馬を驅つて、横さまに敵を衝く、

『素破や大將ぞ、討ち取つて、高名せよや』

賊軍、四方より、包み擊つ。

時成の勢、今や、危し、保、望み見て、

『我等、討死せでは、御味方、助かるまじ』

義鑑と共に、馬を駢べて、進まんとす。

二弟照、重、及び叔父林琳源の三人、亦、見て、取つて返せば、義鑑、二弟を顧みつゝ、

『我等兄弟、皆、討死しなば、誰か君の御爲に勤むるものぞ』

と叱し、其少しく躊躇する間に、保、義鑑の二人、サッと馬を驅つて、敵を衝き、時成を助けて、戰ふこと少時、後に續く兵なく、外に援くる勢なし、三人、終に力盡きて一所に討たる。

士卒、或は、討たれ、或は、自殺するもの大半。

六

敗報、杣山に達すれば、士卒、愕然として、皆、色を失ふ、保の母、獨り悲まず、徐かに、義治の前に出でて、ハラハラと、涙を流す、

『此度、敦賀へ向ひし者共が、不覺にてこそ、里見殿を討たせ參らせ候へ、御心の中も、さこそと推し量り參らせて候なれ、判官保兄弟、若し、恙もなくて、歸り來候はゞ、如何に、うたてくも候らん、二人は、死して、里見殿の御供に立ち、二人は、殘りて、大將の御爲めに、盡くし候こそ、嘆ぎの中の喜びに候なれ、斯かる大事を思ひ立ち候から、百人、千人のうから、やからを失へばとて、ナニ悲しくや候はん、イザ〳〵、一献、聞こし召され候へ』

自ら銚子を把りて、酒を侑むれば、

『扨も、母刀自の雄々しさよ』

士卒、是が爲めに、意氣、復た振ふ。

實にや、斯母ありて、斯子あり。

七

金崎の城中、食、漸く盡きんとす、將士、皆、首を伸ばして、日々に、杣山の援兵を待つ。

既にして、援兵、敗れ還り、士氣、復た振はず。

今は、外援、全く絶えて、食も、亦、盡く。

海濱に出でゝ、魚を漁り、藻草を採り來りて、食すれども、以て飢を凌ぐに足らず、諸將の愛馬、二頭づつを屠りて、朝夕の食料に充つ。

馬の數にも、限りあり、今や、僅かに十日を支ふるに過ぎず、將士、義貞に說く、

『最早、籠城の望みも候はず、此上は、兩大將、潛かに城を出でゝ、杣山に至り、後詰の兵を催して、挾擊の策を立てさせ給ふべし』

瓜生保の墓
墓は越前國敦賀郡東郷村大字樫曲なる雄彥山の上に在り是れ其戰死せし處。

萬策、既に盡きて、殘るは、唯、此一策、義貞、乃ち、其子義顯を、城中に留め置き、三月五日、義助以下七人と與に、夜に乘じて、城を出で、河島左近藏人維賴の嚮導に依りて、間道より、杣山に達す。

杣山の城兵、大に喜び、日々に、金崎を援はんことを議す、然れども、士卒、僅かに五百人、兵器、亦、備はらず、爭かで、十萬の大敵に當り得べきや、心ならずも、空しく、二十餘日を過ぐ。

八

金崎城中には、馬も終に盡く、士卒、食を絶つこと、十日ばかり、飢えに飢えて、肉は落ち、眼は窪み、今は、手足を動かさんとすることすら、難し。

賊將越後守高師泰、早くも、それと察して、急に城に迫る。

城兵、素破とて、木戸の邊まで、蹌めき出づ、義氣、胸に充つれども、飢に疲れて、刀を執るべき力もあらず。

敵は、早、塀を越え、門を破りて、外城を奪ひ、更に進んで、二の木戸に迫らんとす。

由良新左衞門具滋、長濱彈正顯寛、入りて、義顯に說く、

『事、茲に至りては、復た奈何ともすべきやうも候はず、此上は、太子を落し參らせて、潔よく、討死致し候はん、イデ〳〵、我等は、敵を防ぎ候べし、徐かに、御生害あらせ給へ』

兵士五十人を率ゐて出で、死屍を割きて、與に食し、專ら前門の敵を、支へ拒ぐ。

義顯、尊良親王の御前に出で、、

『臣は、武人に候へば、此處にて、命を捨て候べし、君は、臣等と異なり、賊とても、ヨモ、無禮を叶へ奉つり候まじ、必ず、御生害を急がせ給ふべからず』

と白せば、親王、莞爾として、笑ませ給ひ、

『卿の死するを、餘所に見て、何とて、我れ、獨り生くべきや、抑も自殺とは、如何になすべきものぞ』

と問はせ給ふ、義顯、

『さらば、臣の爲さん樣を、見給ふべし』

刀を拔きて、左の脇へ突き立て、右の脇腹へ、引き廻はし、刀を、親王に奉つりて、其儘、前に伏す。

親王、刀を取り給へば、血、滑かにして、握るべからず、乃ち御衣の袖を以て、之れを攫み、徐かに、御腹召されて、失せさせ給ふ。

藤原頭大夫行房、里見大炊助時義、武田與一、氣比彌三郎大夫氏治等、皆、後れじと、自刄す。

氏治の子太郎齊時、勇力あり、太子を扶けて、舟に載せ奉つれども、漕ぐべき櫓もなく、櫂もあらず、乃ち繩を舟に着け、其端を執りて、泅ぎて、蕪木浦に達し、太子を、土民に託し置き、金崎に還り來りて、亦、自殺す。

具滋、顯寬、さらばと、門を開きて、突出し、進んで、師泰に迫る、身羸れ、足よろめきて、働き得ず、終に敵の殪す所となる。

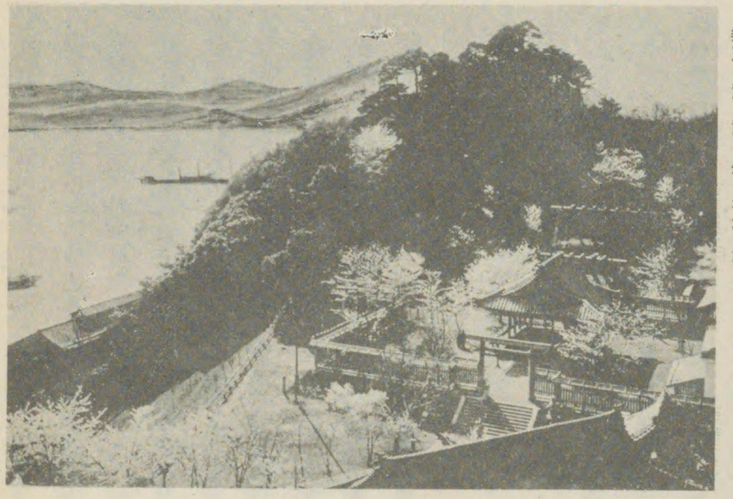
城兵、凡、八百、出で、降る者、只十二人。

九

漁人、心なし、太子の蕪木浦に在はす由を、密告しければ、御悶はしくも、忽ち賊手に落ちさせ給ふ。

賊將高經、金崎戰死者の首級を檢すること、百五十一、義顯の首はあり、里見義氏の首はあれども、目指す義貞、義助の首はあらず。

高經、不審、晴れやらず、太子の御前に出でて、



金崎宮
官幣中社金崎宮は越前國敦賀町金崎に在り尊良親王恒良親王を祀る祠は金崎城址に在り。

『義貞、義助の死體、何處にも、見當り候はず、何と致し候やらん』

と問ひ奉つる、太子、御年、幼しと雖も、御思慮深し、能と、事實を告げ給はず、

『昨日の暮程、自害したりけるを、火葬するとこそ、沙汰しつれ』

然り氣なく、宣はせば、高經、大に打ち喜ぶ、

『さればこそ、死體の見えざりしなれ、義貞、義助、死せしからは、杣山の如きは、頓て、降人にぞ出でずらん、討手を、差し向くるまでもなきぞ』

太子を、張輿に乘せ參らせて、京へ還へし奉つり、尊良親王の御首、并に義顯以下の首級をも、京師へ送る。

太子、京師へ着かせ給ひければ、御弟宮なる成良親王と、一つ所へ、押し籠め奉つる。

御運傾きて、何時開かん御望みとてもなく、御二人、互に慰め、慰められつ、、慵き月日をぞ、送らせ給ふ。

十

既にして、義貞兄弟、杣山城より、打つて出で、、連りに數城を拔く。

北國の官軍、復た振ふ。

警報、荐りに京師へ達す、尊氏兄弟、且、怖れ、且、怒る、

『扨ては、義貞兄弟は、尙、死せざりけり、太子の紿き給へるこそ、安からね』

粟飯原下總守氏光を召して、

『太子は、當家を失はんとこそ、思し召しつれ、唯、置き奉つりては、如何なる御企てあらんも、計られじ、密かに、鴆毒を進らせて、失ひ奉つれ』

と命ず、氏光は、心なき武士なり、尊氏兄弟の命を聽きて、敢て背かず、毒藥を携へて、兩親王の御前に出づ、

『永く一室にのみ、閉ぢ籠らせ給へば、嘸や、欝陶しく在はしまさん、御病氣の出でなば、大事に候なり、御藥進らせよと申され候、一七日が間、毎朝、聞し召され候べし』

と述べつゝ、一封の藥を、其處に差し置きて、立ち還る。

成良親王、早くも、其意を察し給ふ。

『未だ病みもせざるに、藥を進むるこそ、奇怪なれ、さほど、我等を思ふ心あらば、など、斯かる一室へ、押し籠むべき、必定、命を縮むる毒にこそあれ』

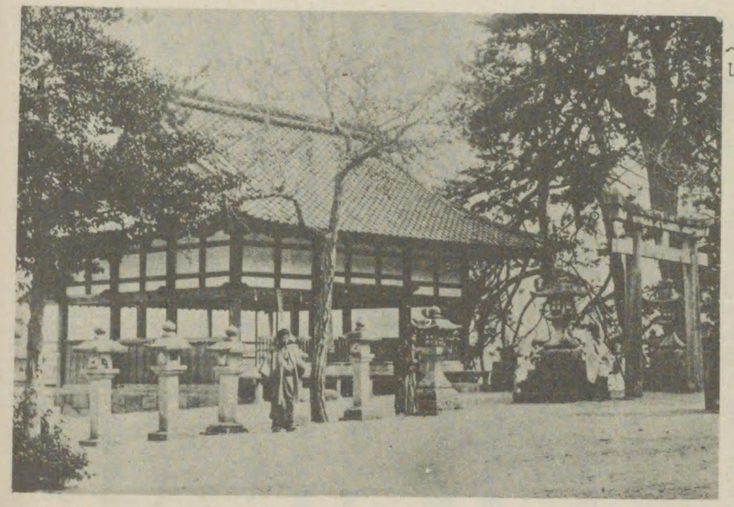
矢庭に、藥を取つて、庭に投げ棄て給はんとす、太子、御手を擧げて、制し給ひ、

『尊氏兄弟は、殘忍の性ぞかし、縱令、此藥を服まざればとて、爭かで、命を助かるべきや、一室に押し籠められて、永く憂目を見んよりは、早く死せんこそ、中々の身の幸ひなれ』

御手づから、藥を取り給へば、

『實にや、仰する通りに候なり』

成良親王、亦、御覺悟



金崎宮神殿
此れは金崎宮の神殿なり金崎城の在りしは此あたりなるべし。

をぞ、定め給ふ。

慘ましきかな、毒と知りつゝ、服し給ふこと一七日、御心、徐かに、經を誦じ、佛を念じて、死期を待たせ給ふ、御心の中ぞ、惻はしき。

四月十三日の夕間暮、太子、先づ薨くれさせ給ひ、二十日あまりを過ぎて、成良親王、亦、果敢なくあらせ給ひぬ。

燈明寺畷

新田義貞戰死の地

燈明寺は、越前國吉田郡中藤島村の大字なり、此地に、燈明寺と稱する寺院あり、故に、名づく、九頭龍川を隔てゝ、足羽郡河合村と相對す、延元三年閏七月、新田義貞、河合村に陣して、黑丸城を攻め、燈明寺前の畷に於て、流矢に中りて、死す、其墓、坂井郡高椋村大字長崎の往生院稱念寺に在り。

足羽城は、福井市に在りて、其城郭の過半は、藤島に跨がる、戰國時代には、北庄城と稱す、德川秀康、其城域を、擴張して、福井城と改む、其城址西南の濠邊に、足羽城本丸の址を存す。

黑丸城は、西藤島村大字黑丸に在り、足羽七城、又は黑丸五城とも稱するものゝ隨一にして、賊將足利高經の據りし處。

藤島城は、東藤島村大字藤島に在り、平泉寺衆徒の據りて、義貞に抗せし處。

勝虎城は、中藤島村大字舟橋に在り。

越前國府は、南條郡武生町字幸と稱する地にして、金剛院は、其址なりと云ふ、新善光寺城は、相生町正覺寺の在る處。

鯖江は、今立郡に屬す、日野川の東に在り、國府へ一里、足羽城へ四里。

藤島神社は、義貞の靈を祀る、元、中藤島村に在りしを、明治三十一年、足羽郡足羽山の東面、福井市の公園に移す。

一

金崎の城中、食、漸く盡く、城の運命、旦夕に迫る。

新田左中將義貞、脇屋右衞門左義助、援兵を募りて、來り救はんと欲し、密に、間道より、脱がれ出でて、杣山城に入る。

瓜生照兄弟以下、大に悅びて、兵を集む。

兵、未だ集まらず、金崎、先づ陷いる。

義貞兄弟、杣山に在ること數月、國中の義兵、聞き傳へ聞き傳へて、來り屬するもの三千騎、官軍の兵勢、漸く振ふ。

賊將足利尾張守高經、時に、京師に在り、其弟家兼と與に、六千餘騎を率ゐて、馳せ還り、國府に入りて、國中を鎭せんとす、干戈、是れより、絶えず。

義貞の士畑六郎左衞門時能、當國細呂木に、城を構へ、加賀の諸豪と與に、津葉五郎の大聖寺城を攻めて、之れを拔く、平泉寺の衆徒、亦、三峰に據り、一將を得て、推載せんことを請ふ、義助、乃ち五百餘騎を率ゐて、赴く。

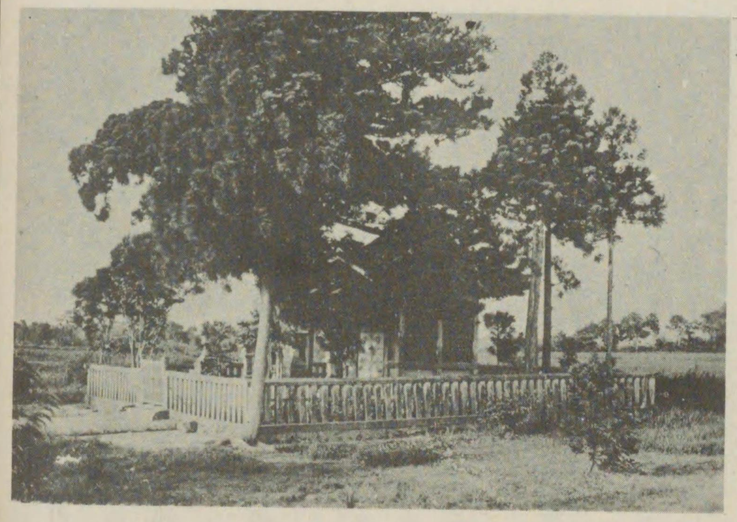
加賀の諸豪、亦、義貞の族細屋右馬助秀國を推して、將とし、三千騎を率ゐて、越前に入り、長崎、河合、川口の三城を築きて、國府に迫る。

高經、亦、防備の策を立つ、

『我れ、一所に立て籠り、敵に、國中を取られては、終に兵糧に苦しまん』

三千餘騎を、國府に留め、他の三千餘騎を分派して、各地に、城砦を構ふこと、三十餘ヶ所。

天、漸く寒く、雪、漸く深し、



燈明寺畷

燈明寺畷は越前國吉田郡中藤島村に在り新田左中將の流矢に中りて戰死したる處此れは其終焉の地に建てたる祠堂なり。

兩軍、乃ち兵を勒めて、戰はず。

二

延元三年二月中旬、東風、暖を送りて、殘雪、半ば消ゆ。

義助、要地々々に、城砦を構へて、國府の通路を杜がんと欲し、兵百五十騎を率ゐて、地形を相し、行く〳〵、鯖江の宿に到る。

鯖江は、國府を距ること、僅かに、一里、高經、早くも、諜して、之れを知り、細川出羽守孝基を召して、

『願うてもなき好き機會ぞ、疾く馳せ行きて、討ち取れや』

と命ずれば、孝基、蹶然として起ち、五百騎を率ゐて、馳せて、鯖江に到り、鬨を作つて、三方より、掩ひ擊つ、それと見たる義助、

『今は、遁れぬ所ぞ、一同、力を合せて、敵に當たれや』

高木の祠を、小楯に取りて、一齊に失を放つ、賊兵、矢庭に、馬より墜つるもの、若干人、

『素破や、敵は、怯みて見ゆるぞ、進め〳〵』

義助、麾を採つて、疾呼すれば、士卒、鋒を揃へて、猛然として進む。

孝基、勢ひ支へず、ドッと、崩れ走りて、日野川の彼岸に退く。

結城上野介親霽、河野七郎等の八騎、追うて、川を渡らんとす、義助、手を擧げて、制む、

『小勢を以て、大勢に捷てるは、不思議ぞ、難所に向うて、敵に掛らば、過ちあらん、止まれや、止まれ』

と呼はれば、八騎、乃ち止まる、義助、左右を顧みつゝ、

『今日の軍は、不意の事ぞ、在家に、火を掛けて、味方に知らせや』

と命ずれば、篠塚五郎左衞門等、駈け廻り〳〵て、高木、瓜生、眞柄、北村の諸村に、火を縱つ、炎焰、忽ち高く天に冲れば、

『素破や、鯖江あたりに、軍ありと覺ゆるぞ、馳せ向ひて、味方に力を合せや』

宇都宮美濃將監泰藤、天野民部大輔政貞は、鯖波より、瓜生照兄弟は、妙法寺城より、河島左近藏人維賴は、三峰より、義貞は、杣山より、各〻兵を率ゐて、馳せ來る。

高經兄弟、斯くと聞くより、亦、國府より、討つて出で、川を隔てゝ、相對す、時に、雪釋けて、流疾し、

『イデ〳〵、瀨踏み仕つらん』

船田長門守經政の從者葛新左衞門、白馬を驅つて、ザンブと、乘り入れ、太刀を振り被つて、サツと進む。

義貞の勢、斯くと見るより、一齊に、馬を乘り入れ〳〵、流を亂して、岸に躍り上がる、兩軍、俱に三千騎、名を惜んで、命を惜まず、進むを知つて、退くを知らず、刀を揮ひ、槍を捻つて、入れ亂り、立ち雜り、コヽを先途と、奮ひ鬪ふこと、半時あまり。

大鹽の衆徒、三峰の兵と與に、敵の虛を衝きて、火を國府に縱つ。

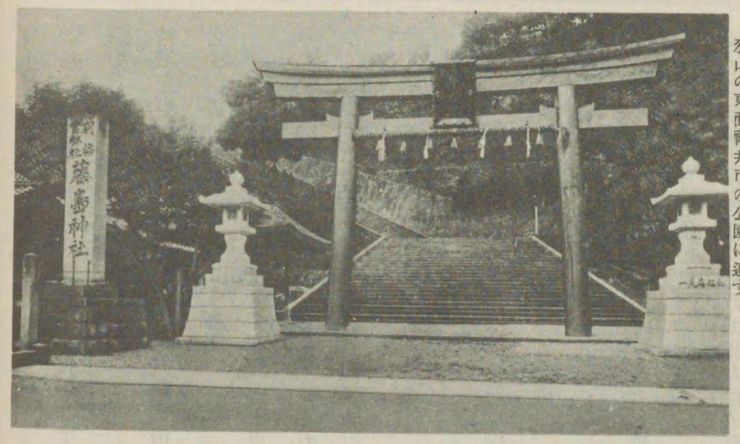
高經、顧みて、駭き走る。

義貞、兵を麾ねきて追ふこと急なり。

高經、城に入ること能はず、走りて黑丸城に入り、家兼は、若狹に走る。

義貞、乃ち國府に入る、國中の敵城、風を望んで、潰ゆるもの、三十餘ケ所。

官軍の形勢、復た振ふ。



藤島神社　別格官幣藤島神社は新田左中將を祀る初め越前國吉田郡中藤島村に在りしを明治三十一年足利郡足羽山の東面福井市の公園に遷す。

三

高經、黑丸城を保つ。

五月二日、義貞、自ら六千騎を率ゐて、國府を發し、兵を五隊に分ちて、進み攻む。

一條少將行實、五百騎を以て、江守より、押し寄せ、黑龍明神の前にて戰ふ。

賊兵、善く拒ぐ、行實、利あらずして、退く。

船田經政、七百餘騎を以て、安居の渡より、押し寄す、兵士、進んで、中流に到る。

賊將細川孝基、二百餘騎を以て、馳せ來り、岸上より、頻りに矢を放つ。

人馬、矢に中りて、溺るゝもの若干、經政、乃ち引き返へす。

細屋秀國、千餘騎を以て、勝虎城を攻めんと欲し、兵を河合より進めて、嚴しく迫り、堀を越え、塀を攀ぢ、躍つて、城中に入らんとす。

城兵、勇を振うて、拒ぎ戰ふ、賊將鹿草彥太郎公相、亦、三百餘騎を率ゐて、其背後を襲ふ。

秀國、終に敗れて、退く。

義貞、志を得ず、士氣、稍沮む。

越後の一族大井田式部大輔氏經等、二萬餘騎を率ゐて、來り合するに會ふ、義貞の兵勢、復た頗る振ふ。

四

義貞、七月二十一日を期して、復た黑丸城を攻めんと欲し、頻りに攻具を調ふ。

會〻宸筆の詔書、吉野より至る。

『今や義興、顯信、敗殘の兵を率ゐて、男山を保ち、賊徒、洛中の勢を悉くして、四方を圍む、城中、食、已に空しく、兵士、力、漸く疲る。運命、旦暮に迫れり、速やかに、兵を帥ゐて、來り援けよ、天下の安危、只、此一擧に在り』

義貞、押し戴き〳〵て、ハラ〳〵と、涙を灑ぐ、

『源平兩家、世々、武功を立つると雖も、未だ宸筆の勅書を下させ給へる例あるを聞かず、當家の面目、何物か、此れに若くべき、一死、天恩に報い奉つらんこと、今日にこそあるべけれ』

俄に、黑丸城の攻擊を止めて、急ぎ京師に進發せんと欲す。

兒島三郎高德、從うて、軍中に在り、此時、進み出でて、

『先年、官軍の山門を落され候へるもの、全く賊徒の爲めに、北國の糧道を絕たれたるに由り候なり、されば、加賀、越前の城々には、御勢を殘して、兵粮を運送せさせ、大將一兩人に、五六千人を副へて、山門に陣取り、日々、夜々、出でて、京師を攻めさせ給ふべし、是れぞ、

根を固め、蕃を堅うするの策にこそ候へ、先づ以て、山門に、牒狀を送らせ給はんこと、然るべきか』

と說けば、義貞、實にもと思ひて、此議に從ふ、高德、自ら筆を執つて、牒狀を認め、急使を發して、叡山に送れば、山徒、直に此れに應ず、義貞、喜ぶこと限りなし、

『されば、我れは、三千餘騎を以て、此地に留まり候はん、右衞門佐は二萬餘騎を以て、京師へ攻め上り候へ』

と命ず、義助、乃ち七月廿九日を以て、國府を發し、其翌日、敦賀に達すれば、男山の敗報、會〻至る、

『今は、京師に上るも、詮なし』

義助、兵を率ゐて、復た國府に還る。

五

是に於て、義貞、義助、復た兵を合して、黑丸城を攻めんとす、高經、聞いて、大に驚く、

『爭かで、此小勢を以て、大敵に當り得べきや、今は、遁れんにも、遁るべからず、命を捨てゝ、城を守らんこそ、好けれ』

溝を浚へ、橋を撤し、田には、水を湛へ、途には、穽を設け、七城を修めて、守備を嚴にし、更に、密使を遣はして、平泉寺の衆徒を誘ふ。

衆徒の向背、秋天の如し、乃ち使者に對して、

『藤島の庄は、多年、當山と、延曆寺と、所領を爭へる土地に候なり、若し、此庄を當山に屬け給はらば、若輩は、御城を守り、宿老は祈禱を修し候べし』

と答ふ、高經、大に悅びて、敎書を與ふれば、衆徒五百騎、山を下りて、藤島城を守り、宿老五十人、扉を閉ぢて、怨敵調伏の法を修す。

六

義貞、進んで、河合城に到る、翌曉、起き出でて、左右に向ひ、

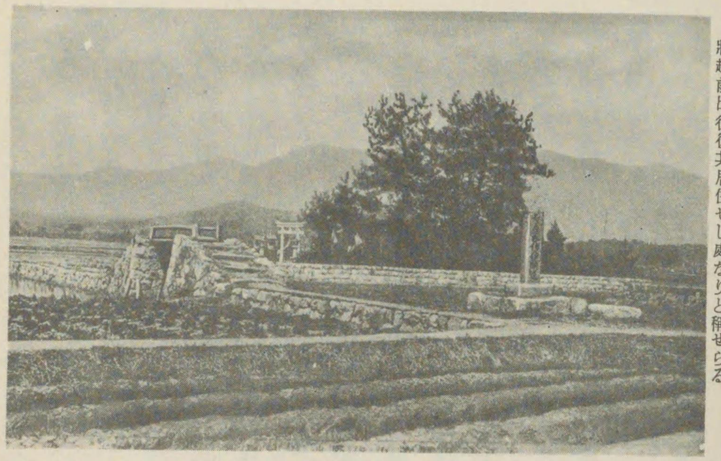
『我れ、奇しき夢をこそ、見つれ、足羽川の邊にて、高經と對陣せしが、我れ、俄かに、三千丈ばかりの龍となりて、地に臥せば、高經、忽ち楯を捨てゝ、駭き走ると見て、夢、覺めぬ、此事、吉か、凶か、如何に存ずるぞ』

と問へば、左右、皆、

『吉夢にこそ候べけれ、抑〻龍は、雲雨に乘りて、天地を動かすものと申して候、高經、雷霆の威に怖れて、遁れ候へること、疑もなく、御味方御利運の徵にこそ候へ』

と答ふ、義貞、聞いて、大に喜ぶ。

齋藤入道道獻、障を隔てゝ、此話を聞き、



野神神社
近江國滋賀郡堅田村に在り勾當內侍を祀る新田左中將越前出征後其居住せし處なりと稱せらる

密かに、眉を顰めつゝ、

『龍は、陽の物なるに、陰の地に伏せしこそ正しく、不吉の兆なるべけれ』

獨り心の中に危ぶむ。

七

閏七月七日、義貞、黑丸城を攻めんと欲し、遠侍に出でて、席に着く。

義助、左方の首座に着き、一族、諸將、次を逐うて、左右に居並ぶ、將士は、堂上に滿ち、諸兵は、庭中に溢る、頓て、諸將、各〻義貞に目禮しつゝ、次ぎ々々に起つ、禮容、自から恭し。

既にして、義貞、亦、起つて出づ、乘馬、俄かに、荒れて、馬丁二人を、蹴倒す。

旗手、進んで、足羽川を渡れば、馬、忽ち伏して、將旗、水に浸る。

義貞、意となさず、進んで、燈明寺前に到り、兵を七隊に分ちて、敵の七城を攻む。

藤島の城兵、最も亂れ騷ぐ、官軍、望み見て、

『素破や、城は落つるぞ、疾く、攻め寄せや』

大兵、犇々と、押し寄せ、塀を攀ぢ、門に迫る、勢ひ雲霞の如し。

平泉寺の衆徒、城中に在り、

『今は、遁れぬ所ぞ』

皆、死を決して、拒ぎ戰ふ。

官軍、塀を越えて、躍つて入れば、衆徒、刀を揮うて、斬つて倒す。

衆徒、門を開いて、打つて出づれば、官軍、鋒を揃へて、擊つて卻く。

寄せては返し、出でては退く、追ひつ、返へしつ、喚き叫んで、戰ふこと數刻。

日、既に沈まんとして、城、未だ落ちず、官軍、動もすれば、追ひ卻けられんとす。

義貞、望み見て、切齒し、畔を傳うて、馳せて、藤島城に向ふ、附き隨ふもの、僅かに五十餘騎。

俄頃にして、賊將細川孝基の三百餘騎を率ゐて、黑丸城より、馳せ來るに逢ふ、

『素破や敵ぞ』

義貞、屹と、目を注ぐ、

孝基、忽ち楯を突き立てゝ、一齊に射る。

義貞の從兵、皆、楯を持せず、其前に立ち塞がりて、矢を防ぐ、中野宗昌、馳せ寄りて、

『千金の弩は、鼷鼠の爲めに、發せずと申し候はずや、疾く〳〵、退かせ給へ』

と諫むれども、義貞、首を掉つて肯かず。

『多くの士を失ひながら、獨り免かれんこと、我れの本意にあらず』

一鞭、馬に策うちて、敵を衝かんとす。

乘馬、五矢を被むりて、撞と田中に斃る。

義貞、ガバと、躍り上がる途端、白羽の一箭、飛び來つて、グサと、眉間に立つ、義貞、眼、忽ち眩めく、

『今は叶ふまじ』

太刀を、サツと拔きて、自から首を泥中に搔き落し、其上に掩ひ重なりて、死す。

結城上野介親朞、中野藤內左衞門將宗昌、金持太郎左衞門尉重興等、見て駭き、我れも〳〵と、馬より飛び下り、義

貞の遺骸を取り圍んで、自殺す。

賊の士氏家中務丞重國、畔を傳うて、走り來り、義貞の首を取つて、太刀先に貫き、其鎧と、兩刀とを取つて、黑丸城に馳せ歸り、直に高經の前に出でて、

『重國こそ、新田殿の御一族かと覺しき敵を打つて、首を取りて候、誰とは、名乘り候はねど、馬、物具と曰ひ軍兵共の死骸の傍にて、腹を切りし容子と曰ひ、如何さま、好き大將と見受けられて候、御覽あらせ給へ、是れぞ、死人の肌に掛けたる守にて候なり』

と言ひつゝ、血に染みたる金襴の守袋を添へて、差し出だす、高經、ヂツと、首を打ち守る、

『あな不思議や、新田左中將の顏付に似たる所あるぞや、若し、其れならば、左の眉の上に、矢疵あるべし』

自から鬢櫛を取つて、髮を搔き上げ、血を洗ひ、泥を落せば、あり〳〵と見ゆる矢疵の痕、

『扨ては、其れか』

二口の太刀を取つて、見れば、何れも、金銀作の利刀、一口には、銀を以て、金纏纏の上に『鬼切』と記し、今一口には、金を以て、銀脛巾の上に『鬼丸』と記さる、是れぞ、源氏重代の寶刀として、新田家に傳はれるもの、

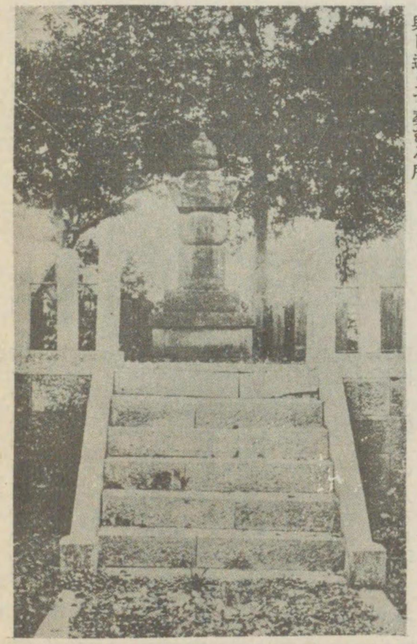
『扨ては、愈々其れぞ』

更に、金襴の守袋を披き見れば、中より出づる宸筆の勅書、

『今は、愈〻疑ふ所あらじ、拔群の武功ぞ、重國』

高經、欣然として、叫べば、重國、思はず、躍り上がりて喜ぶ、

『無禮を、な爲そ、敵ながらも、源家の大將なるぞ』



新田左中將の墓
墓は越前國坂井郡高椋村大字長崎の往生院稱念寺に在り當時寺僧白道和尙の輿し還りて葬むる所。

屍骸は高椋の往生院に送りて、厚く葬り、首は、朱塗の唐櫃の中に收め、重國、之れを護りて、京師に送る。

八

日、既に昏るれども、義貞の消息、杳として、知るべからず。

義助、諸所を索めて、其戰死せるを知り、忽ち惘然として、呆れ驚く、

『此上は、黑丸城を屠つて、兄の靈を弔はん』

痛恨の涙、迸つて鎧の袖に彈く。

士卒、一夜の中に、逃げ失せ、殘り留まるもの、僅かに二千人。

『斯くては、北國を抑へんこと叶ふまじ』

三峰城には、河島維頼、杣山城には、瓜生照兄弟、湊城には、畑時能を置き、兵を引きて、國府に還る。

九

義貞の首級、京都に達すれば、尊氏、歡喜措かず、

『多年の辛勞も、唯、此首一つを見んが爲めなりしぞ、疾く〳〵梟し候へ』

命じて、大路を渡して、獄門に梟す、洛中の男女、集まり觀るもの、堵の如し、

『武運盡き給ひては、是非もなし』

皆、袖を掩うて、サメ〳〵と泣く。

忽ち築地の陰に、ワッと泣き倒るゝものあり、人々、驚きて、馳せ寄り見れば、容貌、麗はしく、氣品、最と高き一人の上臈、身を悶え〳〵て、嘆き悲しむ、

『定めて、由緣の方にこそ、あな哀れや』

架上の首を見て、泣ける人々、更に、架下の人を見て、又泣く。

抑も此上臈は、何人ぞ、當時、艶名隱くれもなき勾當の內侍とは、卽ち斯人。

十

內侍は、大夫行房の妹、美くしき顏は、珠よりも輝きて、香あり、麗はしき姿は、花よりも芳ばしくして、光あり、此れぞ、月界の仙娥ならずば、正に、龍宮の名姝、二八の春より、宮中に召されて、君の御傍近う仕うまつる。

一夜、月淸く、風白きに、內侍、半ば珠簾を褰げて、靜かに瑤琴を彈ず、調は、秋よりも澄みて、聲は、水よりも凉し。

義貞、親衞の任を承はりて、禁中に直す、其調を聽きて、心あこがれ、其主を視てより、思、彌や增さる、

『あはれ、斯かる女房をこそ』

爾來、夜となく、晝となく、思ひ續け、思ひ亂れて、忘るる隙とてあらず、

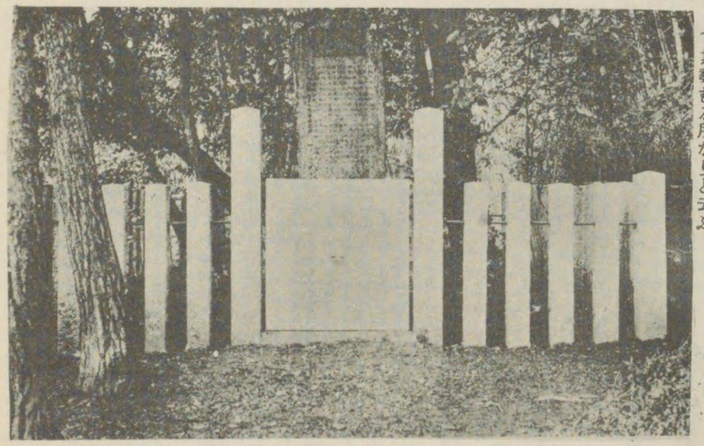
わが袖の涙にとまる影とだに
知らで雲井の月や澄むらん

哀れに詠みて、遣はしけれども、君の聞し召されんも、憚かりありとて、內侍、手にだも觸れず。

さしもに猛き武夫も、今は、思ひに堪へかねて、命も細らんばかり。

何人の奏しまつりけん、主上、世にも哀れに思し召され、義貞を召して、御酒を賜ひ、內侍を添へてぞ下し給ふ。

宮女晝蒲を賜はりし時の賴政が喜びは、如何ありけん、祇園女御を賜はりし折の忠盛が嬉しさも、爭かで、此れには、越ゆべき。



新田左中將の首塚
山城國愛宕郡鰐峨村妓王寺の前に新田左中將の首塚あり此處は勾當內侍の隱栖せる往生院の址にして其葬むる所なりと云ふ。

优儷の情、濃かにして、琴瑟の心、和す、双燕、畫棟の雨に語りて、聲々細々、双蝶、瑤臺の花に眠りて、夢々香はし。

賊首、西海に泛べども、暫時の別を惜みて、遠くも追はず、敵魁、京洛を退けども、一旦の愛に惹かれて、長くも尾せず。

坂本より、北國に向へる時は、流石に、陣中にも伴ひがたくして、內侍を

堅田の畔に留め置き、空しく、相思の情を雁魚に托すること、二年あまり、今は、道の程も、靜まりたればとて、義貞、人を遣りて、内侍を迎ふ。

父も失せ、母も失せて、天地の間に、賴むべきは、只斯人ばかり、内侍、心の嬉しさに、旅の慵きをも厭はず、湖を渡り、山を越えて、漸やう杣山に到れば、今は、河合にとて、此處には、人も在らず。

さらばとて、輿を急がせて、又も北に向ふ、行きて、淺津橋に到れば、百騎ばかりの一隊、彼方より來る、これぞ、瓜生照の河合より、杣山に還れるところ。

照、忽ち馬より飛び下り、輿の前にひれ伏しつゝ、

『これは、何處へとて、御渡り候はん、中將殿には、昨日の暮、足羽と申す所にて、討たれさせ給ひて候ぞや』と語る、内侍、聞きも敢へず、ハッと膽潰れ、胸塞がりて、涙さへも出でず、

『あはれ、其人の討たれさせ給へる所に連れ行けや、同じ野原の草の露とも、消えなまし』

身を悶え、身を悶えて、輿中に伏し沈む、

『今は、進ませ給はんこと、叶ひ候はじ、早、其輿返へし候へ』

照、命じて、杣山に舁き還さしむ。

内侍、夫の室に入れば、筆の跡、筐の品はあれども、人は在さず、見る物も〳〵、皆、涙の種。

責めて、中陰までではと思へど、早、此あたりも、物騷がしくて、足を留めがたし。

内侍、そこ〳〵に、京師に引き返へし由緣の人を索めて、陽明の傍に抵るに、人、數多、立ち騷ぐを、何事ぞと見れば、思ひ掛けなくも、是れぞ、亡き人の首級、内侍、目も眩れ、心も消え、ワッとばかりに、泣き倒れて、正體もなし。

人は、還れども、去りも遣らず、日は、暮るれども、起きも上がらず、止め度もなき左右の涙に、身も、浮き上がらんばかり。

餘りの悶はしさに、あたりに住める僧の、扶け還りて、樣樣に、慰め劬はる。

内侍、つく〳〵、浮世の無常を感じぬ、綠の髮を、切り捨て、墨の衣を、身に纏ひ、嵯峨の奥の往生院のあたりに住みて、行ひ澄ませしぞ、哀れにも、又殊勝なる。

義貞の北國に向ふ時、鬼切の劍は、日吉の祠に獻じたりと云ふに、其最期に、鬼切、鬼丸の二劍を佩びしと云ふは、不審なり、或は、日吉に納めしは他の寶刀にやあらん。

實城寺址

南朝五十餘年の皇居

吉水院は、大和國吉野郡吉野村大字吉野山に在り、舊、金峰堂、卽ち藏王堂の供僧坊にして、天武天皇の白鳳年間、役小角の大峰山修行の時に、創建せる所、延元元年十二月、後醍醐天皇の行宮となりしが、後、實城寺に還らせ給ふ。

實城寺は、金峰山寺の本坊にして、藏王堂の西一町ばかりの處に在り、後醍醐天皇、吉水院より、此處に還りて、皇居となし、名を改めて、金輪王寺と稱せしめ給ふ、久しく南朝の皇居となりしは、此處なり、明治八年、廢寺となる。

穴生は、吉野山の西南四里、卽ち今の賀名生村にして、大字和田に、賀名生宮址あり、後醍醐天皇、先づ、花山院より、此處に幸し、更に、吉野に還らせらる。

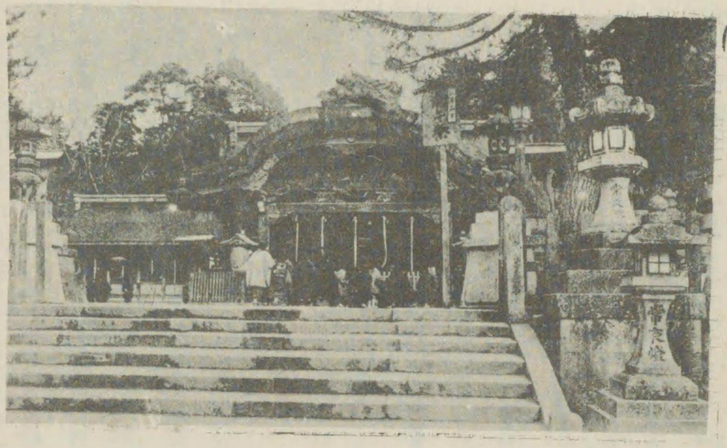
一

南朝の天子、吉野に、賀名生に、在はしますこと、五十八年、崇めてこそ、雲の上の御方と稱へ奉つれ、山高く、壑深きところ、眞の雲の上、霞の奥に在はしまさんこと、尊き御身の、爭でかは、堪へさせ給ふべき、あゝ、此れも、亦、逆臣の仕業ぞかし。

秋は、故宮に滿ちて、愁情、偏に多し、後醍醐天皇、京師に還幸あらせ給ふや、其儘、花山院に幽せられ給ひて、世の事、國の事、何一つ聞召されんやうもなく、最とゞ御心細くも、憂き月日を送らせ給ふ。

三千の宮女、如何にやしつる、御側に侍り奉つるは、新勾當内侍、唯一人、百司の諸臣、何處にか在る、御所に仕へ奉つるは、刑部大輔大江景繁、唯一人。

元弘の先蹤、遠からず、賊臣足利尊氏の邪智、北條高時に



稲荷神社
官幣大社稲荷神社は山城國紀伊郡深草村大字福稲に遷す後醍醐天皇の御拜ありしは稲荷山上三箇峰に在りし時なり。

軼ぐ、又も、遠國へ遷し奉つることもやと、日夜、御心の安まる時とてもあらず。

世情、如何にや動ける、時運、如何にや移れる、獨り、靜に思ひ煩はせ給ふ折りしも、景繁、密に、内侍を以て、

『義貞は、金崎に據りて、屢〻賊軍を破り、加賀の衆徒、聲援を致し候ひぬ、菊地武重は、肥後に還りて、俄に義兵を擧げ、西國の將士、味方に馳せ參じ候ひぬ、回天の時機、寢く兆し候、早く、大和の方へ、臨幸あらせ給ひ綸旨を、諸國に下して、義兵を天下に募らせ給へ、逆賊を滅ぼし給はんこと、何の難くや候はん』

と奏しまつれば、主上

『景繁の申すところ、神明の示現にこそ、あるべけれ、さらば、此處を遁れん』

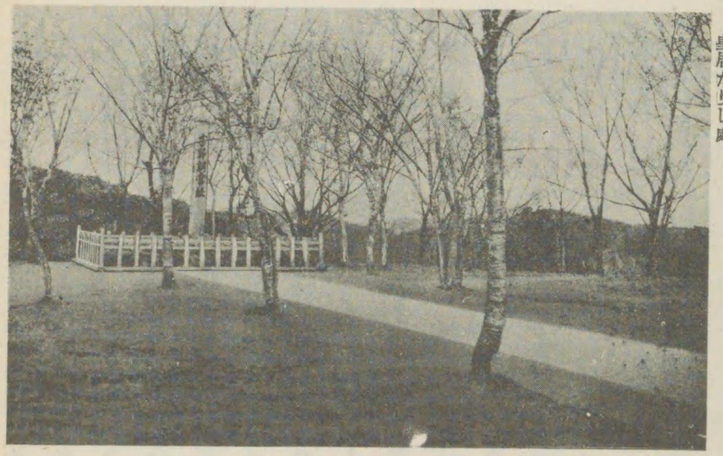
亦、内侍を以て、内旨を、景繁に、下し給ふ。

時は、延元元年十二月二十一日の夜。

主上、三種の神器を、内侍に持たせ、女房の御服を召させ給ひ、夜暗に紛れて、築地の崩より、忍び出でさせ給へば、此處に待ち受け居たる景繁、寮の御馬に、舁き乘せ奉つりて、大和路へと、途を急ぐ。

夜、暗うして、咫尺も、分かず、追手や來ると、御氣を揉ませ給ひ、稲荷の祠前に、立ち留まりて、默禱あらせ給ふこと、稍〻暫し、

うば玉の暗き夜道に迷ふなり
われに貸さなんみつの燈火



吉野行宮址
實城寺は大和國吉野郡吉野村大字吉野山に在り金峰山寺の本坊にして藏王堂の西に在り南朝五十餘年の皇居たりし處。

一首の和歌を、口吟ませ給へば、赤氣、俄に起りて、道を燭らす、明きこと、宛ら、炬火の如し。

主上、御喜、斜ならず、山を踰え、雲を分けて、大和の穴生へと、着かせ給ふ。

堀信增、聖駕を迎へ奉つりて、惶懼、措く所を知らず、居館を掃ひて、此に入れ奉つり、子信通、弟祐湛等と與に、守護し奉つる。

山奥、深うして、鳥の音さへも稀に、人烟、幽かにして、供御に具へ奉つらん物だにもなし。

誰か思はん、雲上の皇居を、此青山白雲の鄕に、仰ぎ見んとは。

二

穴生は駐輦の地にあらず。

景繁、急ぎ吉野に到り、吉水院の宗信法印に會うて、論すに、烟欝の聖託を以てすれば、勤王の志深き法印、爭でか、感激せざらん、急に、滿山の大衆を、藏王堂に會して、

『在昔、淨見原天皇、吉野より起りて、天下泰平の鴻業を樹てさせ給ふ、先蹤、此の如し、後代、亦、何ぞ然らざらん、今日、奮うて、聖駕を奉迎せんこと、誰かは、異議あるべき、況してや、昨夜、稀代の光物、臨幸の御道筋を照せしと申すも、畢竟、藏王權現、勝手明神の、三種の神器を擁護し、萬乘の聖主を守護し給ふ瑞光にこそあるべけれ、今更、何の躊躇することかあらん、疾く疾く、此れへ、迎へ奉つれ』

と說く、義に勇む大衆、何の異議かあるべき、血氣の僧徒

三百餘人、各〻甲冑を帶して、穴生に馳せ參じ、腰輿を奉じて、吉野に還り來れば、取敢へず、吉水院を掃うて、行宮に充て奉つる、尋いで、實城寺に還らせ給ふ。

是に於て、楠木帶刀正行、和田次郎、眞木定觀、三輪西阿等は、河內より、恩地、牲河、志貴、湯淺等は紀伊より、各〻馳せ來りて、勤王の義旗を飜へす。

吉野は、南に在り、故に、南朝と曰ひ、京師は、北に在り、故に、北朝と申す、南北兩朝、是れより、分かる。

後醍醐天皇の穴生に蒙塵あらせ給へる御道筋として、稻荷、梨間、內山を過ぎさせ給へることは、大平記に據りて、明かなり、今、此れに據りて、判斷するに、京都より、稻荷の前を過ぎ、向島、槇島より、奈良街道を經て、綴喜郡の奈島に到り、井手より、木津を過ぎ、南都より、山邊郡朝和村の內山を經て、磯城郡櫻井町に出でさせ給へるなり。

扨、此櫻井町より、一路、南下あらせ給へば、自から、吉野に到らせ給ふべきに、さはなくして、此處より、飛鳥を過ぎ、宇智郡五條町より、龍川を溯りて、穴生に入らせ給へるものと思はる。

實城寺の額面

されば、二十一日の夜、花山院を出でさせ給ひて、終夜程を急がせ給ひ、奈島の邊にて、天の明けしとするも、其日の中に、穴生に入らせ給はんことは、叶ふべからず、二十三日の朝、穴生に着かせ給ひ、其日、景繁を、吉野に遣はし給へるものなるべく、天皇の吉水院に入らせ給へるは、公卿補任の如く、二十日の事なるべし。

神光の御道筋を照せしは、二十一日の夜のみならず、二十二日の夜も、亦、同樣なりしなるべし、吉水院宗信法印の、大衆に告げたる、昨夜の光物と云へるは、二十二日の夜の事なるべく、決して、二十一日の夜の事を指すものにはあらざるべし、此點より推して、天皇の吉野に幸し給へるは、必ず、二十四日の事なりと考ふ。

利根川

北畠顯家戰捷の地

利根川は、上野國利根郡の文殊山より、源を發し、武藏の國境を過ぎて、東流し、常陸、下總の國境を過ぎ、銚子港に至りて、海に注ぐ、一名を坂東太郎と曰ふ。

延元二年、北畠中納言顯家の、鎌倉勢と戰うて、勝利を得たるは、何れの地點なるやを知るを得ずと雖も、下野を經て、上野に入り、利根川を渡りて後、武藏の薊山、安保原に於て戰へる事實あり、薊山は兒玉郡共和村の淺見にして、安保原は、同郡丹庄村に在るより推せば、顯家は、上野國新田郡太田町より、利根川を渡りて、武藏國大里郡妻沼町、熊谷町に向ひ、兵を分ちて、薊山、安保原の敵を討ちしものなるべし。

一

主上は、山門より、京師へ還幸あらせ給へば、新田佐中將は、東宮を奉じて、越前國の金崎に落ちぬ。

『扨ては、早、武家の世となりぬるか』

諸國の官軍は、頓に沮喪するに反して、賊軍の兵勢は、彌やが上に、強勢を加ふ。

既にして、主上は、京師より、吉野へ潛幸あらせ給へば、新田左中將は、金崎を出でゝ、杣山城に據りぬ、

『素破や、公家方の形勢は、盛り返さんずるぞ』

各地の賊軍は、形勢、忽ち動搖するに反して、官軍の士氣は、思ひの外に、緊張を加ふ。

『逆賊を誅滅して、朝威を恢復するは、今、此時ぞ』

とは、所在の官軍、期せずして、皆、一致するところ。

嚮に聖駕を守護して、山門より、京師に到りし大館左馬助氏明は、伊豫に脫して、土居、得能の一族を糾合し、江田兵部大輔行義は、丹波に脫して、高山寺城を據守すれば、金谷治部大輔經氏は、播磨の丹生に、城郭を構へて、此れに據り、井伊遠江介道政は、宗良親王を奉じて、遠江の井